埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第119集

比企郡嵐山町

# 蟹沢（かにさわ）・芳沼入（よしぬまいり）・芳沼入下（よしぬまいりした）・新田坊（しんでんぼう）
# 尺尻（しゃくじり）・尺尻北（しゃくじりきた）・大野田（おおのだ）

嵐山工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告

(財)埼玉県
埋蔵文化財調査事業団
'92.5.29
No. 10841
図書室

1992

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

蟹沢遺跡第16号住居跡の弥生土器

芳沼入遺跡の縄文土器

# 序

豊かな緑と清流に恵まれ、国蝶オオムラサキの里として知られる嵐山町は、武蔵武士の代表格、畠山重忠を育んだ地としても有名です。一帯には武蔵武士の活躍に関連する史跡をはじめ、縄文時代から中・近世に至るまでの多くの遺跡が残り、独特の歴史的景観を醸成しています。当地域はこのような歴史的環境に鑑みて設置された県立歴史資料館を中心に、本県の歴史研究の拠点的役割を担ってきた地域でもあります。

このたび、この自然と歴史の町にも、工業化の促進と調和のとれた開発を目途として、工業団地の造成が計画されるに至りました。

事業地内には蟹沢遺跡他、計７ヶ所の遺跡が確認されたため、関係機関の協議が重ねられた結果、埋蔵文化財の取り扱いについては当事業団が発掘調査を実施し、その記録を残すこととなりました。

発掘調査の結果、旧石器時代から中・近世にかけての遺構、遺物が多数検出されました。特に縄文時代前期、弥生時代後期、奈良・平安時代の資料は当地の歴史の理解に大きく寄与するものであります。

本書はこれら７遺跡の調査の成果をまとめたものであります。埋蔵文化財保護に関する資料として、また学術研究の基礎資料として資するところがあれば幸いに存じます。

なお、発掘調査に関する調整から本書の刊行に至るまで、埼玉県教育局文化財保護課、埼玉県企業局土地開発第二課、同北部土地開発事務所、嵐山町教育委員会、ならびに地元関係各位から多岐にわたるご指導、ご協力を賜りました。刊行にあたり厚く御礼申し上げます。

平成４年３月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長　　荒　井　修　二

# 例　　言

1　本書は下記の遺跡の発掘調査報告書である。総じて勝田遺跡群と仮称する。

| | | |
|---|---|---|
| 蟹沢遺跡 | 所在地 | 埼玉県比企郡嵐山町大字吉田字蟹沢1622他 |
| ＫＮＳＷ | 文化庁指示通知 | 平成３年６月７日付委保第５―0576 |
| 芳沼入遺跡 | 所在地 | 埼玉県比企郡嵐山町大字勝田字芳沼入681他 |
| ＹＮＩ | 文化庁指示通知 | 平成３年６月７日付委保第５―0575 |
| 芳沼入下遺跡 | 所在地 | 埼玉県比企郡嵐山町大字勝田字芳沼入702―2他 |
| ＹＮＩＳ | 文化庁指示通知 | 平成３年６月７日付委保第５―0574 |
| 新田坊遺跡 | 所在地 | 埼玉県比企郡嵐山町大字勝田字新田坊500―1他 |
| ＳＤＢ | 文化庁指示通知 | 平成３年６月７日付委保第５―0577 |
| 尺尻遺跡 | 所在地 | 埼玉県比企郡嵐山町大字勝田字尺尻440―1他 |
| ＳＫＪＲ | 文化庁指示通知 | 平成３年６月７日付委保第５―0573 |
| 尺尻北遺跡 | 所在地 | 埼玉県比企郡嵐山町大字勝田字尺尻426他 |
| ＳＫＪＲＫＴ | 文化庁指示通知 | 平成３年６月７日付委保第５―0571 |
| 大野田遺跡 | 所在地 | 埼玉県比企郡嵐山町大字勝田字大野田555―1他 |
| ＯＮＤ | 文化庁指示通知 | 平成３年６月７日付委保第５―0572 |

2　発掘調査は嵐山工業団地造成事業に伴うものであり、埼玉県教育局指導部文化財保護課が調整し、埼玉県企業局の依託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

3　発掘調査は秋山幸治、田中英司、金子直行、山川守男、川口潤が担当し、平成２年７月１日から同３年３月31日まで実施した。整理作業は川口が担当し、平成３年４月１日から同４年３月31日まで実施した。

なお、発掘調査・整理作業の組織は２ページに示した。

4　本書の執筆は、第Ⅰ章１を文化財保護課が、他は川口が行った。

5　図版作成、写真撮影は下記のものが行った。

| | |
|---|---|
| 図版作成 | 川口 |
| 発掘調査撮影 | 秋山、田中、金子、山川、川口、栗岡 |
| 遺物撮影 | 川口、植木智子 |
| Ｘ線写真撮影 | 野中　仁 |

6　本書の編集は、資料部資料整理第１課の川口が行った。

7　本書にかかる資料は、平成４年度以降埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。

8　本書の作成にあたり、下記の方々からご教示、ご協力を賜った。

植木弘、新井端、森田安彦、村松篤、木村利彦、奥野麦生、芹沢清八、塚本師也、浅野光洋、浅井英子、荒巻則子、井手百合子、斎藤富美子、鈴木章子、自在マサ子、原成美、宮崎実佐子、本橋悦子、太田知津子、吉田淑子、栗原恵子、高橋良子、藤野節子、吉田ちい子

# 凡　　例

1　X・Yによる座標指示は国家標準直角座標第Ⅸ系に基づく座標値を表し、方位は全て座標北を示す。

2　本文中に記した谷の名称は、その谷の谷頭にある溜池名をもとに、丘陵の名称は隣接する溜池名をもとにして仮称した。

3　縮尺はそれぞれの挿図中に示した。

4　挿図中のスクリーントーン等の凡例は以下のとおりである。

・断面黒塗りの遺物実測図は須恵器を、断面網かけの遺物実測図は灰釉陶器を表す。

・須恵器見込み部の網かけは摩滅部を表す。

・土師器表裏面の黒塗りは油煙の付着部を表す。

・羽口の網かけは還元部を表す。

・遺構実測図中の網かけは焼土の集中範囲を表す。

・上記以外のものについてはそれぞれの挿図中に凡例を付した。

5　グリッドは10m毎の大グリッドと２m毎の小グリッドを各遺跡毎に設定した。Ａ６―16のＡ６は大グリッドを、16は小グリッドを意味する。グリッドとＸ・Ｙ座標の関係等については各遺跡の全測図中に示した。

6　遺物観察表は実測図に表現できない項目を示した。凡例は以下のとおりである。

・器種名の前の［Ｓ］は須恵器を、［Ｋ］は灰釉陶器を表す。

・法量における（　）内の数値は推定値を、下線付きの数値は現存値を表す。

・胎土への混入物は、［w］白色粒子（white）、［b］黒色粒子（black）、［r］赤色粒子（red）、［u］雲母、［h］片岩、［s］砂粒、［針］白色針状物質を示す。透明粒子には［'］を付した。多いものから順に列挙した。

・色調は、［rb］5YR5／6明赤褐色（red brown）近似色、［o］5YR7／6橙色（orange）近似色、［do］7.5YR7／4 にぶい橙色（dull orange）近似色、［g］7.5Y5／1灰色（gray）近似色、［lg］7.5Y7／1灰白色（light gray）近似色、［gb］5YR6／2（grayish brown）近似色、［dg］N3／0暗灰色（dark gray）近似色を示す（農林省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』参照）。

・焼成は良好なものをA、不良なものをC、両者の間をBとした。

・残存率は実測図に示した部位に対する比率である。

# 目　次

序
例　言
凡　例

Ⅰ　調査の概要……1
　1　調査に至るまでの経過……1
　2　発掘調査と報告書刊行事業の組織……2
　3　調査の経過と方法……3

Ⅱ　遺跡の立地と環境……4
　1　遺跡の立地……4
　2　歴史的環境と周辺の遺跡……5

Ⅲ　遺跡群の概要……8

Ⅳ　蟹沢遺跡の調査……14
　1　遺跡の概観……14
　2　弥生時代の遺構と遺物……17
　3　奈良時代の遺構と遺物……42
　4　その他の遺物……62

Ⅴ　芳沼入遺跡の調査……64
　1　遺跡の概観……64
　2　縄文時代の遺構と遺物……64
　3　弥生時代の遺構と遺物……84
　4　奈良時代の遺構と遺物……86
　5　石室状遺構……99
　6　中・近世の遺物……100

Ⅵ　芳沼入下遺跡の調査……102
　1　遺跡の概観……102
　2　奈良時代の遺構と遺物……104

Ⅶ　新田坊遺跡の調査…… 106
1　遺跡の概観…… 106
2　縄文時代の遺構と遺物…… 106
3　平安時代の遺構と遺物…… 119

Ⅷ　尺尻遺跡の調査…… 146
1　遺跡の概観…… 146
2　旧石器時代の遺物…… 146
3　縄文時代の遺構と遺物…… 146
4　平安時代の遺構と遺物…… 157

Ⅸ　尺尻北遺跡の調査…… 162
1　遺跡の概観…… 162
2　縄文時代の遺構と遺物…… 162
3　平安時代の遺構と遺物…… 179

Ⅹ　大野田遺跡の調査…… 182
1　遺跡の概観…… 182
2　縄文時代の遺物…… 184
3　奈良・平安時代の遺構と遺物…… 188
4　中・近世の遺物…… 192

Ⅺ　結語…… 193
1　縄文時代…… 193
2　弥生時代…… 198
3　奈良・平安時代…… 200

# 挿図目次


第1図　遺跡の位置……4
第2図　周辺の遺跡……7
第3図　土層断面模式図……8
第4図　天神山古墳群第1号墳石室（原図　高柳1986）……10
第5図　天神山古墳群（原図　金井塚他1983）……10
第6図　遺跡の位置と地形……11
第7図　蟹沢遺跡全測図……15
第8図　弥生時代の遺構……17
第9図　第7号住居跡……18
第10図　第8号住居跡……19
第11図　第11号住居跡……20
第12図　第11号住居跡出土遺物……21
第13図　第12号住居跡……22
第14図　第12号住居跡出土遺物……23
第15図　第13号住居跡……24
第16図　第13号住居跡出土遺物……25
第17図　第14号住居跡……27
第18図　第14号住居跡出土遺物……28
第19図　第16号住居跡……29
第20図　第16号住居跡出土遺物(1)……29
第21図　第16号住居跡出土遺物(2)……30
第22図　F6グリッド出土遺物……32
第23図　F6グリッド出土石器……34
第24図　第17号住居跡・第1号土坑……34
第25図　第17号住居跡出土遺物……35
第26図　第19号住居跡……36
第27図　第19号住居跡出土遺物……36
第28図　第20号住居跡……37
第29図　第20号住居跡出土遺物……38
第30図　第1号土坑出土遺物……38
第31図　第5号住居跡出土遺物……39
第32図　第6号住居跡出土遺物……39
第33図　第18号住居跡・第21号住居跡出土遺物……40
第34図　第22号住居跡出土遺物……40
第35図　I6グリッド出土遺物……41
第36図　F8グリッド出土遺物……41
第37図　奈良時代の遺構……42
第38図　第1号住居跡……43
第39図　第1号住居跡出土遺物(1)……44
第40図　第1号住居跡出土遺物(2)……45
第41図　第2号住居跡……46
第42図　第2号住居跡出土遺物……47
第43図　第3号住居跡……48
第44図　第3号住居跡出土遺物……48
第45図　第4号住居跡……49
第46図　第4号住居跡出土遺物……50
第47図　第5号住居跡……51
第48図　第6号住居跡……52
第49図　第9号住居跡……53
第50図　第9号住居跡出土遺物……53
第51図　第10号住居跡……54
第52図　第10号住居跡出土遺物(1)……54
第53図　第10号住居跡出土遺物(2)……55
第54図　第15号住居跡……56
第55図　第15号住居跡出土遺物……56
第56図　第18号住居跡……57
第57図　第18号住居跡出土遺物……57
第58図　第21号住居跡……58
第59図　第23号住居跡……59
第60図　第1号溝跡……60
第61図　第1号溝跡出土遺物……61
第62図　縄文時代および近世の遺物……62
第63図　芳沼入遺跡全測図……65

第64図　第３号土坑……67
第65図　第３号土坑出土遺物……67
第66図　縄文土器の分布……68
第67図　縄文時代前期の土器の分布……69
第68図　グリッド出土土器(1)……71
第69図　グリッド出土土器(2)……72
第70図　グリッド出土土器(3)……73
第71図　グリッド出土土器(4)……75
第72図　グリッド出土土器(5)……76
第73図　グリッド出土土器(6)……78
第74図　グリッド出土土器(7)……79
第75図　グリッド出土石器(1)……82
第76図　グリッド出土石器(2)……83
第77図　弥生時代の土坑……84
第78図　土坑出土土器……85
第79図　第１号住居跡……86
第80図　第１号住居跡出土遺物……87
第81図　第２号住居跡・同住居跡出土遺物…88
第82図　第３号住居跡……89
第83図　第３号住居跡出土遺物……90
第84図　第４号住居跡……92
第85図　第４号住居跡出土遺物(1)……92
第86図　第４号住居跡出土遺物(2)……93
第87図　第５号住居跡……95
第88図　第５号住居跡出土遺物……95
第89図　第６号住居跡……96
第90図　第６号住居跡出土遺物……97
第91図　第４号土坑……99
第92図　第４号土坑出土遺物……99
第93図　石室状遺構……100
第94図　中・近世の遺物……100
第95図　芳沼入下遺跡全測図……103
第96図　第１号土坑……104
第97図　グリッド出土遺物……104
第98図　新田坊遺跡全測図……107
第99図　第１号集石土坑……109
第100図　第14号・第15号土坑……109
第101図　第14号土坑出土土器……110
第102図　第14号土坑出土石器……110
第103図　縄文土器の分布……111
第104図　グリッド出土土器(1)……112
第105図　グリッド出土土器(2)……113
第106図　グリッド出土土器(3)……114
第107図　グリッド出土石器(1)……117
第108図　グリッド出土石器(2)……118
第109図　第１号住居跡……119
第110図　第１号住居跡出土遺物……120
第111図　第２号住居跡……121
第112図　第２号住居跡カマド……122
第113図　第２号住居跡出土遺物(1)……123
第114図　第２号住居跡出土遺物(2)……124
第115図　第３号・第４号住居跡……126
第116図　第４号住居跡カマド……127
第117図　第４号住居跡出土遺物……128
第118図　第５号住居跡……130
第119図　第５号住居跡出土遺物……130
第120図　第６号住居跡……131
第121図　第７号住居跡……132
第122図　第７号住居跡出土遺物……133
第123図　第８号住居跡……133
第124図　第９号住居跡……134
第125図　第９号住居跡出土遺物……135
第126図　第10号住居跡……136
第127図　第10号住居跡出土遺物……136
第128図　第11号住居跡……137
第129図　第６号・第８号住居跡出土遺物…138
第130図　溝跡……138
第131図　第２号溝跡出土遺物……139
第132図　平安時代の土坑(1)……140
第133図　平安時代の土坑(2)……141
第134図　平安時代の土坑出土遺物……142
第135図　採集資料……144

第136図　旧石器時代の遺物…… 146
第137図　尺尻遺跡全測図…… 147
第138図　第２号住居跡…… 150
第139図　第２号住居跡出土遺物…… 151
第140図　集石土坑…… 152
第141図　縄文土器の分布…… 153
第142図　グリッド出土土器…… 154
第143図　グリッド出土石器…… 156
第144図　第１号住居跡…… 157
第145図　第１号住居跡出土遺物…… 158
第146図　第３号・第４号住居跡…… 159
第147図　第３号住居跡出土遺物…… 160
第148図　平安時代の土坑…… 160
第149図　尺尻北遺跡全測図…… 163
第150図　第１号住居跡…… 165
第151図　第１号住居跡接合図…… 166
第152図　第１号住居跡出土土器(1)…… 167
第153図　第１号住居跡出土土器(2)…… 168
第154図　第１号住居跡出土土器(3)…… 169
第155図　第１号住居跡出土石器(1)…… 170
第156図　第１号住居跡出土石器(2)…… 171
第157図　縄文時代の土坑…… 172
第158図　土坑出土土器…… 173
第159図　縄文土器の分布…… 174
第160図　グリッド出土土器…… 175
第161図　グリッド出土石器(1)…… 177
第162図　グリッド出土石器(2)…… 178
第163図　第２号住居跡出土遺物…… 179
第164図　第２号住居跡…… 180
第165図　大野田遺跡全測図…… 182
第166図　大野田遺跡遺構分布図…… 183
第167図　縄文土器の分布…… 184
第168図　グリッド出土土器…… 185
第169図　グリッド出土石器…… 187
第170図　第１号溝跡…… 189
第171図　第１号溝跡出土遺物…… 190
第172図　土坑…… 191
第173図　奈良・平安時代の遺物…… 191
第174図　中・近世の遺物…… 192

# 表　目　次

第１表　第11号住居跡出土遺物……21
第２表　第12号住居跡出土遺物……23
第３表　第13号住居跡出土遺物……26
第４表　第14号住居跡出土遺物……28
第５表　第16号住居跡出土遺物……31
第６表　Ｆ６グリッド出土遺物……33
第７表　第17号住居跡出土遺物……35
第８表　第19号住居跡出土遺物……37
第９表　第20号住居跡出土遺物……38
第10表　第１号土坑出土遺物……38
第11表　第５号住居跡出土遺物……39
第12表　第６号住居跡出土遺物……39
第13表　第18号住居跡出土遺物……40
第14表　第21号住居跡出土遺物……40
第15表　第22号住居跡出土遺物……40
第16表　グリッド出土遺物……41
第17表　第１号住居跡出土遺物(1)……45
第18表　第１号住居跡出土遺物(2)……46
第19表　第２号住居跡出土遺物……47
第20表　第３号住居跡出土遺物……48
第21表　第４号住居跡出土遺物……50
第22表　第９号住居跡出土遺物……53
第23表　第10号住居跡出土遺物……55
第24表　第15号住居跡出土遺物……56
第25表　第18号住居跡出土遺物……58
第26表　第１号溝跡出土遺物……61

第27表　第１号・第２号土坑出土遺物……85
第28表　第１号住居跡出土遺物……87
第29表　第２号住居跡出土遺物……88
第30表　第３号住居跡出土遺物……91
第31表　第４号住居跡出土遺物……94
第32表　第５号住居跡出土遺物……96
第33表　第６号住居跡出土遺物……98
第34表　第４号土坑出土遺物……99
第35表　グリッド出土遺物…… 104
第36表　第１号住居跡出土遺物…… 120
第37表　第２号住居跡出土遺物…… 125
第38表　第４号住居跡出土遺物…… 129
第39表　第５号住居跡出土遺物…… 129
第40表　第７号住居跡出土遺物…… 133
第41表　第９号住居跡出土遺物…… 135
第42表　第10号住居跡出土遺物…… 137
第43表　第６号・第８号住居跡出土遺物… 138
第44表　第２号溝跡出土遺物…… 139
第45表　平安時代の土坑出土遺物…… 143
第46表　第１号住居跡出土遺物…… 158
第47表　第３号住居跡出土遺物…… 160
第48表　第２号住居跡出土遺物…… 179
第49表　奈良・平安時代の遺物…… 192

# 図版目次

図版１　周辺の地形
図版２　遺跡群全景
蟹沢遺跡
図版３　遺跡全景
図版４　第１号住居跡～第５号住居跡
図版５　第６号住居跡～第11号住居跡
図版６　第12号住居跡～第16号住居跡
図版７　第17号住居跡～第23号住居跡・第１号溝跡・第１号土坑
図版８　第11号住居跡～第13号住居跡出土遺物
図版９　第14号住居跡～第16号住居跡出土遺物
図版10　Ｆ６グリッド・第17号住居跡・第19号住居跡・第１号土坑出土遺物
図版11　Ｆ８グリッド・第５号住居跡・第６号住居跡・第１号住居跡出土遺物
図版12　第１号住居跡出土遺物・鉄製品
芳沼入遺跡
図版13　遺跡全景
図版14　芳沼入遺跡近景・第１号住居跡・第２号住居跡
図版15　第３号住居跡・第６号住居跡
図版16　第６号住居跡・第１号土坑～第４号土坑
図版17　石室状遺構
図版18　第３号土坑・グリッド出土遺物
図版19　グリッド出土遺物(1)
図版20　グリッド出土遺物(2)
図版21　第１号土坑・第２号土坑・第１号住居跡出土遺物
図版22　第３号住居跡・第４号住居跡出土遺物
図版23　第４号住居跡・第５号住居跡出土遺物
図版24　第６号住居跡出土遺物・鉄製品
芳沼入下遺跡
図版25　遺跡全景・第１号土坑
新田坊遺跡
図版26　遺跡全景
図版27　第１号住居跡～第４号住居跡
図版28　第５号住居跡～第９号住居跡
図版29　第９号住居跡～第11号住居跡・第２号溝跡・第１号集石
図版30　第２号土坑～第15号土坑
図版31　第14号土坑・グリッド出土遺物

図版32　第2号住居跡～第7号住居跡出土遺物
図版33　第9号住居跡・第7号土坑出土遺物・鉄製品

尺尻遺跡

図版34　遺跡全景
図版35　第1号住居跡～第3号住居跡
図版36　第1号集石土坑～第2号集石土坑・第1号土坑～第2号土坑
図版37　第2号住居跡・第3号住居跡・グリッド出土遺物

尺尻北遺跡

図版38　遺跡全景
図版39　第1号住居跡～第2号住居跡・第1号土坑～第2号土坑
図版40　第1号住居跡出土遺物
図版41　グリッド出土遺物

大野田遺跡

図版42　遺跡全景・第1号溝跡・第1号土坑～第3号土坑
図版43　グリッド出土遺物

# Ⅰ　調査の概要

## 1　調査に至るまでの経過

埼玉県では、地域の産業振興と活性化を促進するため、工業団地の適正配置を計画的に進めているが、嵐山工業団地の造成事業は、地域の産業振興を目的として埼玉県企業局によって計画された。こうした開発事業に対応するために、県教育局指導部文化財保護課では、開発関係部局と各種の事前協議を行い、文化財保護と開発事業との円滑な調整を進めているところである。

平成元年６月21日付け企局土二第76号で、土地開発第二課長から文化財保護課長あて「嵐山工業団地造成事業における埋蔵文化財の所在及び取扱いについて」照会があった。

これに対し文化財保護課では、埋蔵文化財所在確認調査を実施し、その結果に基づき、平成元年11月13日付け教文第1182号及び平成２年３月27日付け教文第1426－2号により次のとおり回答した。

### 1　埋蔵文化財の所在

| 名　　称 | 種　　別 | 時　　代 | 所　在　地 |
|---|---|---|---|
| 蟹沢遺跡<br>（36—142） | 集　落　跡 | 平安時代 | 嵐山町吉田字蟹沢 |
| 芳沼入遺跡<br>（36—143） | 集　落　跡 | 縄文時代 | 〃　勝田字芳沼入 |
| 芳沼入下遺跡<br>（36—144） | 集　落　跡 | 平安時代 | 〃　勝田字芳沼入 |
| 新田坊遺跡<br>（36—145） | 集　落　跡 | 縄文時代 | 〃　勝田字新田坊 |
| 尺尻遺跡<br>（36—139） | 集　落　跡 | 縄文時代 | 〃　勝田字尺尻 |
| 尺尻北遺跡<br>（36—146） | 集　落　跡 | 平安時代 | 〃　勝田字尺尻 |
| 大野田遺跡<br>（36—147） | 集　落　跡 | 包蔵地 | 〃　勝田字大野田 |

### 2　取扱い

上記埋蔵文化財は現状保存することが望ましい。計画上やむを得ず現状変更する場合には文化財保護法第57条の３の規定により、事前に文化庁長官へ埋蔵文化財発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

なお、発掘調査を実施する場合は当課と協議すること。

この確認調査の成果に基づいて、企業局と文化財保護課は上記埋蔵文化財包蔵地の保存策について協議を重ねたが、工業団地の整備を図る造成計画でもあり、計画の変更は不可能と判断されたため、やむを得ず記録保存の措置を講ずることになった。

発掘調査の実施については、企業局、文化財保護課並びに財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の三者で事前協議を行い、協議が整ったため、その旨を文化財保護課から平成2年3月1日付け教文第1531号により企業局並びに財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長あて通知し、これより両者は、発掘調査に係る委託契約を締結した。

発掘調査の実施に先立って、埼玉県公営企業管理者から文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘通知が、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から同法第57条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査届が提出され、発掘調査は平成2年7月より開始された。

なお、発掘調査届に対する文化庁長官からの指示通知番号は、平成3年6月7日委保第5の576号他である。

（文化財保護課）

## 2　発掘調査と報告書刊行事業の組織

a　発掘調査（平成2年度）

理事長　荒井　修二
副理事長　早川　智明
常務理事兼
管理部長　古市　芳之

庶務経理

庶務課長　高田　弘義
主査　松本　晋
主事　長滝美智子
経理課長　関野　栄一
主任　江田　和美
主事　本庄　朗人
主事　菊池　久
主事　斎藤　勝秀

発掘調査

理事兼
調査部長　吉川　國男
調査部副部長　塩野　博
調査第4課長　鈴木　敏昭
主任調査員　秋山　幸治
主任調査員　田中　英司
主任調査員　金子　直行
主任調査員　山川　守男
調査員　川口　潤

調査員補　栗岡　潤
調査員補　中島　淳子

b　報告書作成事業（平成３年度）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 理事長 | 荒井　修二 | 主任 | 江田　和美 |
| 副理事長 | 早川　智明 | 主事 | 福田　昭美 |
| 常務理事兼 | | 主事 | 腰塚　雄二 |
| 管理部長 | 倉持　悦夫 | 主事 | 菊池　久 |

庶務経理

| | |
|---|---|
| 庶務課長 | 高田　弘義 |
| 主査 | 松本　晋 |
| 主事 | 長滝美智子 |
| 経理課長 | 関野　栄一 |

整理

| | |
|---|---|
| 資料部長 | 中島　利治 |
| 資料部副部長兼 | |
| 資料整理第１課長 | 増田　逸朗 |
| 調査員 | 川口　潤 |

## 3　調査の経過と方法

蟹沢遺跡他６遺跡の発掘調査は、平成元年度に実施された文化財保護課による試掘調査の結果を受けて、平成２年７月１日から開始された。

発掘調査開始時点において、遺跡範囲外の部分については既に工業団地の造成工事が始っていたため、７遺跡の発掘調査は工事計画との調整を図りながら実施されるところとなった。

調整の結果、芳沼入下遺跡、芳沼入遺跡、蟹沢遺跡、大野田遺跡、尺尻北遺跡、尺尻遺跡、新田坊遺跡の順で調査を終了させることと決した。

調査は単独、あるいは複数の遺跡の表土剝ぎ、測量、遺構精査等を並行裏に進め、平成３年３月末日までに全工程が終了した。

各遺跡の発掘調査面積および担当者は下記の通りである。仮番号は遺跡名決定以前の遺跡の仮称である。

| 仮番号 | 遺跡名 | 調査面積 | 調査担当者 | 仮番号 | 遺跡名 | 調査面積 | 調査担当者 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| １号 | 蟹沢 | 6,400㎡ | 秋山・田中 | ５号 | 尺尻 | 19,000㎡ | 金子・川口 |
| ２号 | 芳沼入 | 7,400㎡ | 秋山・田中 | ６号 | 尺尻北 | 2,600㎡ | 金子・川口 |
| ３号 | 芳沼入下 | 2,500㎡ | 秋山・田中 | ７号 | 大野田 | 14,500㎡ | 金子・川口 |
| ４号 | 新田坊 | 3,500㎡ | 山川・栗岡 | | | | |

調査区には国土方眼座標第Ⅸ系に基づいて10m毎の大グリッドと、２m毎の小グリッドを設定したが、グリッド番号は各遺跡個別に付した。それぞれの遺跡のグリッドの呼称は各遺跡の全測図に示した。

# Ⅱ　遺跡の立地と環境

## 1　遺跡の立地

嵐山町は県のほぼ中央部に位置する。

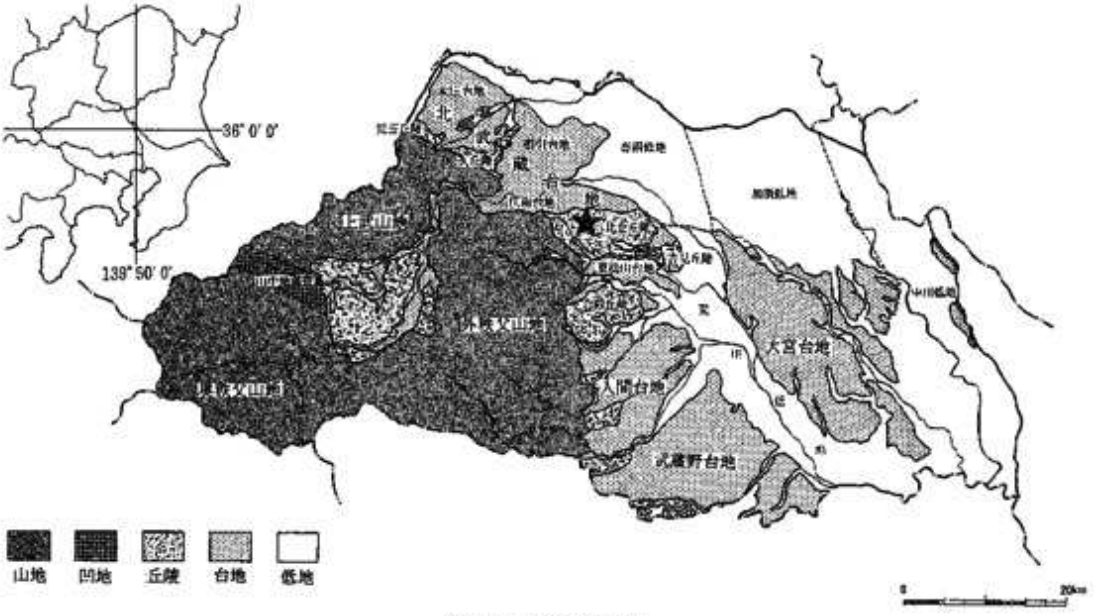
本遺跡群が所在する嵐山町北部域は地形区分上では比企丘陵にあたる。比企丘陵は外秩父山地から東方に半島状に突きだした丘陵であり、北部は下末吉面相当の江南台地、南部は武蔵野面相当の東松山台地、東部は吉見丘陵に接している。

比企丘陵は地質的には新生代新第３紀層に相当し、礫岩、砂岩、泥岩、凝灰岩等の互層で構成されている。滑川町福田周辺から産出する「福田石」と呼ばれる斜長流紋岩質凝灰岩は周辺に分布する多くの古墳群に石室構築材として供給されている。

丘陵は北東縁の和田吉野川、南西縁の市野川によって秩父山地や、各台地と画され、中央部には滑川が流れる、市野川にはさらに粕川、蟹田川、滑川には中堀川、月中川、角川といった小河川が合流し、丘陵一帯はそれらの河川が開析した谷（ヤツ）が樹枝状に発達し、第３紀層の地層とも相俟って変化に富んだ地形を醸成している。これらの河川は徐々に収斂してやがて荒川に注ぐ。

蟹沢遺跡他６遺跡が立地するのは、滑川と粕川に挟まれた比企丘陵西部の標高100m前後の尾根が密集する地域である。周辺で最も高い丘陵は本遺跡群東方にそびえる標高131.8mの滑川町二ノ宮山であるが、二ノ宮山から西方に延びる尾根線はそのまま尺尻遺跡、尺尻北遺跡を載せる丘陵の尾根線に連続している。

滑川右岸から粕川両岸にかけては比企丘陵の中でも最も支谷が発達している地域でもある。ほとんどの支谷の谷頭には丘陵からの水を集める灌漑用の溜池が作られ、比企丘陵特有の谷田の水源となっている。




第１図　遺跡の位置

## 2　歴史的環境と周辺の遺跡

**旧石器時代**

嵐山町ではまだ旧石器時代の良好な遺跡は確認されていない。行司免遺跡の後世の遺構の覆土中から8点の遺物が確認されている他は、本遺跡群南方の志賀向原地区から採集された黒曜石製の尖頭器が把握されている程度である。周辺地域も同様であるが、江南町塩西遺跡（新井　1989）からはナイフ形石器文化期、川本町白草遺跡（埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1990）からは細石刃文化期の良好な資料が得られ、資料は徐々に増加しつつある。

**縄文時代**

嵐山町においては行司免遺跡（植木　1988）をはじめとする中期の遺跡が多いが、寺山遺跡、越畑城遺跡、花見堂遺跡、金平遺跡、細原遺跡からは早期、前期の資料も検出されている。隣接地域における前期の遺跡は川本町舟山遺跡（谷井他　1980）、山ノ腰遺跡（村松　1991）、小川町平松台遺跡、江南町上前原遺跡（新井　1988）、寄居町南大塚遺跡、塚屋遺跡（市川他　1983）、上郷西遺跡等が知られている。山ノ腰遺跡、南大塚遺跡、上郷西遺跡からは諸磯ｃ式の土器が住居跡に伴って出土しており、塚屋遺跡からは諸磯ｂ式、上前原遺跡からは十三菩提式の良好な資料が検出されている。嵐山町花見堂遺跡（金井塚　1976）からは縄文時代終末の千網式土器の良好な資料が出土している。

**弥生時代**

嵐山町史刊行時点では町内における弥生時代の遺跡は確認されておらず、比較的大きな遺跡は本書において報告する蟹沢遺跡、芳沼入遺跡の調査まで待たなければならなかった。隣接する東松山市や滑川町においては、弥生時代後期の標識遺跡ともなった吉ケ谷遺跡（金井塚　1965）、岩鼻遺跡をはじめ屋田遺跡（今井　1984）、大谷遺跡（金井塚　1973）、船川遺跡（金井塚他　1987）、新井遺跡（木村　1986）等比較的多くの遺跡が分布しているが、嵐山町から江南町、川本町にかけての一帯は、弥生時代の遺跡が極めて希薄な地域であるとされていた。しかしながら近年の調査で川本町においては万願寺遺跡（柿沼他　1989）に加えて焼谷遺跡（村松　1991）、円阿弥遺跡（利根川　1991）、白草遺跡（埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1990）、四反歩南遺跡（埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1991）が調査され、江南町においても周知の姥ケ沢遺跡（新井　1983）の他に千代遺跡群内において良好な遺跡が検出されている（新井、森田　1991）。以上は全て吉ケ谷期のものであるが、これらの遺跡が所在する吉野川右岸周辺はここ数年で一転して遺跡が濃密な地域となった。今回報告する遺跡群の所在する滑川と柏川に挟まれた丘陵上も、丘陵南部の大谷遺跡、屋田遺跡以外に若干の散布地が知られるのみであったが、蟹沢遺跡、芳沼入遺跡が追加されることとなり、当地域も吉野川右岸周辺同様、吉ケ谷期の遺跡がさらに検出される可能性を秘めている。

**古墳時代**

本遺跡群に隣接して、終末期の古墳と思われる天神山古墳群が所在するが、滑川対岸に比べると古墳群の分布は希薄である。第2図上では割愛したが（川口　1989参照）、滑川左岸流域は右岸と対照的に最奥部の江南町塩古墳群、嵐山町古里古墳群を頂点に滑川町福田に至るまでほとんどの尾

根に連綿と古墳群が連なっている。多くは群集墳であるが、滑川右岸域の滑川町寺ノ台遺跡（今井　1984）では終末期の単独墳が確認されている。滑川左岸地域は古墳群の数に比して集落の確認例は少なく、塩前遺跡（新井　1982）、本田東台遺跡（新井　1988）等が知られる程度である。

**奈良・平安時代**

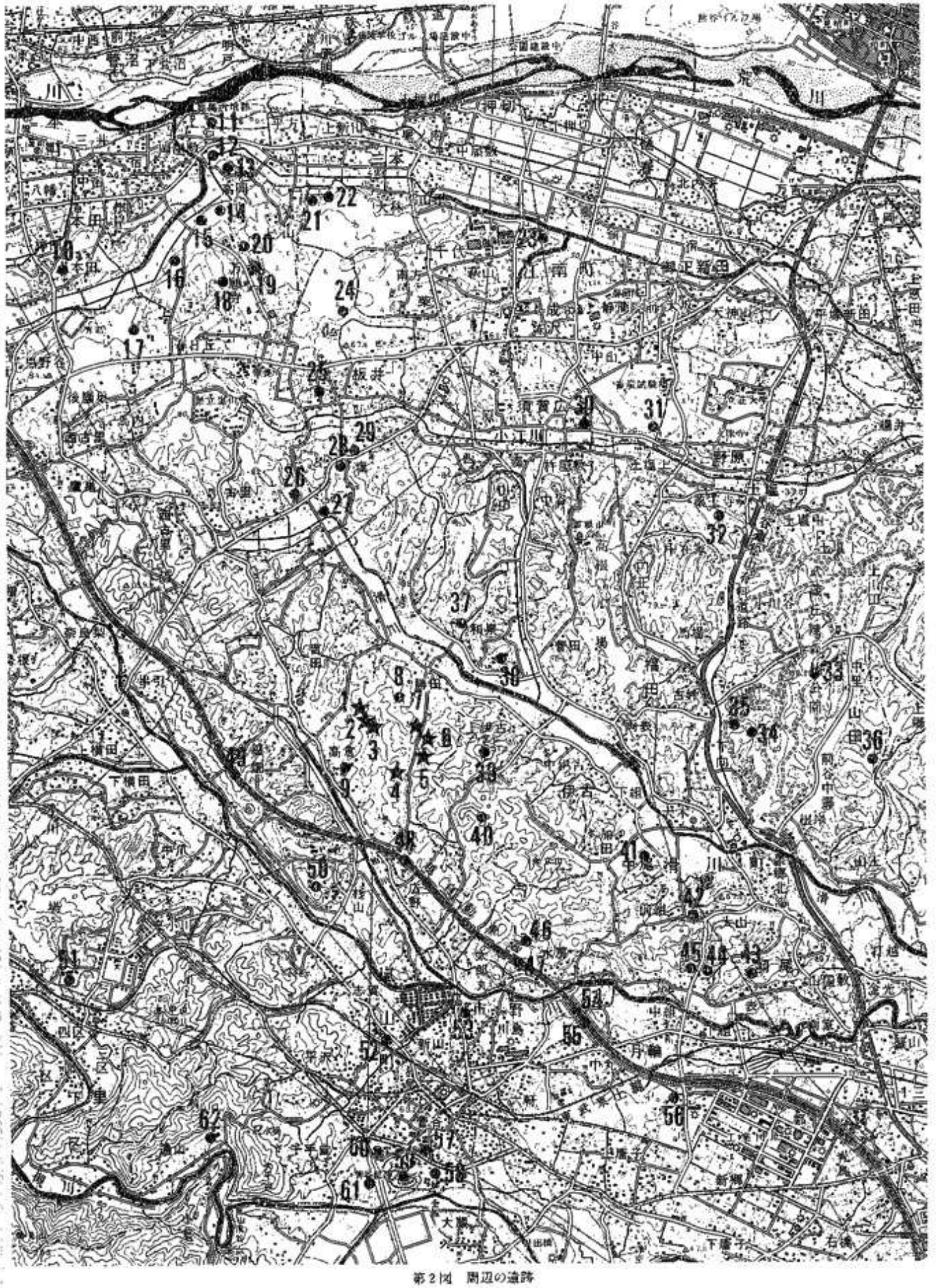
嵐山町内では金平遺跡（植木　1980）から該期の良好な集落が検出されている。都幾川右岸の丘陵には将軍沢窯跡群が所在し、両者の密接な関係が想定されている。蟹沢遺跡他と連続する丘陵上には羽尾窯跡、平谷窯跡も所在し、それらは出土瓦（７世紀第２四半期）から武蔵国最古の創建と推定される滑川町寺谷廃寺に関連する窯跡であろうと推定されている。金銅仏の出土が伝えられる川本町諦光寺跡比定地、良好な遺存状態を示すとされる江南町寺内廃寺等も本遺跡群の周辺に分布するものである。諦光寺付近には「百済木」、寺谷廃寺付近には「韓子」からの転化と推定されている「唐子」という地名が残っているのも興味深い。比企郡において唯一延喜式神名帳に名を残す伊古乃速御五比売神社も本遺跡南方に所在する。社伝や『新編武蔵風土記稿』によると、同社は中世に現在の中伊古に遷座される以前は、尺尻遺跡東方の二ノ宮山上に鎮座していたと伝えられている。二宮山については、「往時は比企郡と男衾郡を境する名峯であった。」との記述が『滑川村史』にみられ、その観点に立脚すると本遺跡群周辺が男衾群に属していた可能性が考えられる。『吾妻鏡』や『大日本地名辞書』にも本遺蹟群周辺が男衾群であった可能性を示唆する文面がみられるが、両郡界については諸説あり即断できるものではない。第Ⅱ章で触れた溜池についてはその築造年代が興味深いところであるが、羽尾窯跡の報告（高橋　1980）の中で、隣接する五輪沼は窯の創業以前に既に存在していたとの見解が示されている。

**中世**

嵐山町には畠山重忠の居館とされる菅谷館跡をはじめ、武蔵武士の活躍を反映した館跡、古戦場等が多数残されている。本遺跡群西方には越畑城、南方には杉山城、北方には三門館の所在が確認されている。板碑も非常に多く、県内有数の密集地帯となっている。隣接する江南町からは日本最古の記年銘のある「嘉禄の板碑」が確認されている。

＊　引用文献は巻末参照

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 蟹沢遺跡 | 2 | 芳沼入遺跡 | 3 | 芳沼入下遺跡 | 4 | 新田坊遺跡 | 5 | 尺尻遺跡 |
| 6 | 尺尻北遺跡 | 7 | 大野田遺跡 | 8 | 天神山古墳群 | 9 | 花見台遺跡 | 10 | 上本田遺跡 |
| 11 | 鹿島古墳群 | 12 | 山ノ腰遺跡 | 13 | 舟山遺跡 | 14 | 竹之花遺跡 | 15 | 白草遺跡 |
| 16 | 円阿弥遺跡 | 17 | 焼谷遺跡 | 18 | 四反歩南遺跡 | 19 | 諦光寺跡 | 20 | 万願寺遺跡 |
| 21 | 姥ケ沢遺跡 | 22 | 富士山遺跡 | 23 | 上前原遺跡 | 24 | 寺内廃寺 | 25 | 岩比田遺跡 |
| 26 | 西原遺跡 | 27 | 塩前遺跡 | 28 | 塩古墳群 | 29 | 塩西遺跡 | 30 | 本田東台遺跡 |
| 31 | 野原古墳群 | 32 | 天神山横穴群 | 33 | 後谷遺跡 | 34 | 栗谷東遺跡 | 35 | 栗谷遺跡 |
| 36 | 新井遺跡 | 37 | 三門館跡 | 38 | 船川遺跡 | 39 | 旧伊古神社 | | |
| 40 | 滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群 | | | 41 | 内郷遺跡 | 42 | 大谷遺跡 | 43 | 羽尾窯跡 |
| 44 | 寺谷廃寺 | 45 | 平谷遺跡 | 46 | 水房遺跡 | 47 | 寺ノ台遺跡 | 48 | 中郷遺跡 |
| 49 | 越畑城跡 | 50 | 杉山城跡 | 51 | 平松台遺跡 | 52 | 金平遺跡 | 53 | 花見堂遺跡 |
| 54 | 屋田遺跡 | 55 | 月の輪古墳群 | 56 | 大堀遺跡 | 57 | 稲荷塚古墳群 | 58 | 寺山遺跡 |
| 59 | 菅谷館跡 | 60 | 向原遺跡 | 61 | 山王遺跡 | 62 | 山根遺跡 | | |



第2図　周辺の遺跡

# Ⅲ　遺跡群の概要

第Ⅱ章でみてきたように蟹沢遺跡他６遺跡は、樹枝状の支谷の発達が著しい比企丘陵に立地している。

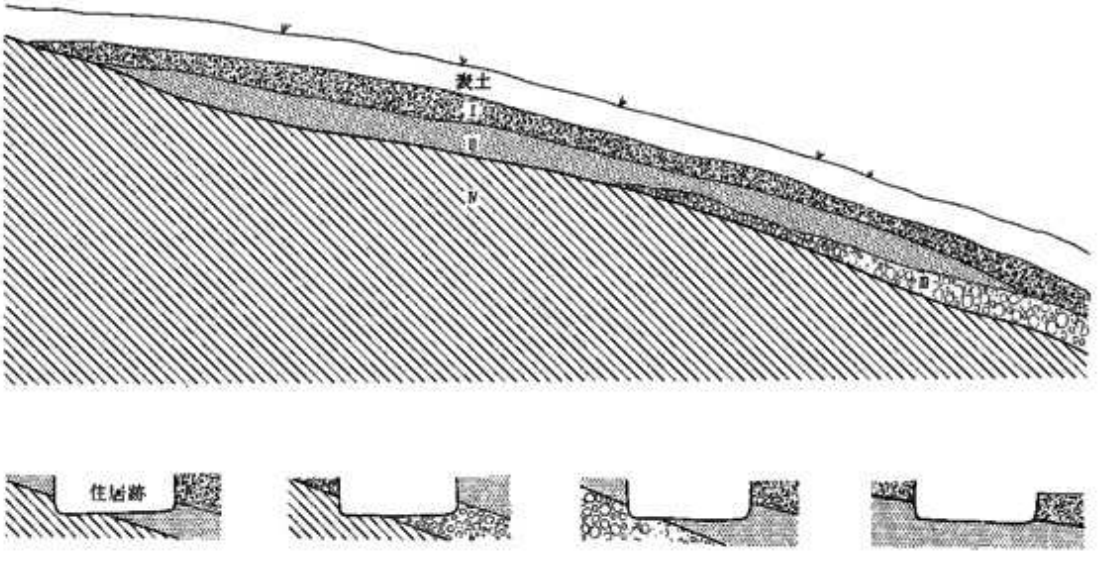
蟹沢、芳沼入、新田坊の３遺跡は支谷で隔てられた尾根の頂部付近を中心に形成された遺跡、尺尻、尺尻北の２遺跡は同様の尾根の頂部付近、および山腹に形成された遺跡、芳沼入下遺跡は谷に臨む山裾に形成された遺跡、大野田遺跡は山裾のテラス状の平坦部および谷底低地に形成された遺跡である。

遺跡の立地の項目に記したように比企丘陵は変化に富んだ地形を呈しており、単独の遺跡内においても平坦部と斜面では地山の様相が異なっている。また斜面の傾斜方向の違いによっても地山の堆積状況が異なる場合がある。従って、単一遺跡内にあっても、遺構が構築された場所によって、掘り込みのおよぶ範囲がローム層、黒色土、岩盤（凝灰岩・礫岩等）と変化する。斜面部に構築された遺構の場合は同一遺構内でさえも部位によって地山が変化する例も散見される。第３図は新田坊遺跡をもとに各遺跡を総合的に判断した地山の堆積状況および遺構との関係を示した模式図である。

この様な状況下で調査が進められたため、各遺跡とも覆土と地山の関係が把握しづらい遺構が少なくなかった。

また、遺跡、時代を問わず脆弱化している遺物が多く存在するのは埋没環境によるものであろうか。

これらの遺跡からは旧石器時代から中・近世に至るまでの遺構、遺物が確認されているので、遺跡各説に先立って遺跡毎の概略を以下に記す。




第３図　土層断面模式図

**蟹沢遺跡**

住居跡23軒、土坑１基、溝跡１条が確認されている。時期的な内訳は弥生時代後期の住居跡11軒、土坑１基、奈良時代の住居跡12軒、溝跡１条である。弥生時代の遺構、遺物はいずれも吉ケ谷期のものであるが、東海系のものと思われるものも含まれている点が興味深い。住居外からも比較的多くの吉ケ谷式土器が出土している。同期の遺跡としては比較的まとまった量の遺構、遺物が検出されている。縄文時代の遺物は前期のものが僅かに確認されているだけである。

**芳沼入遺跡**

住居跡６軒、土坑４基、石室状遺構１基が検出された。住居跡はいずれも奈良時代のもので、土坑は縄文時代前期終末のもの１基、弥生時代吉ケ谷期のもの２基、奈良時代のもの１基である。奈良時代の住居跡は５軒は近接して確認されているが、１軒は尾根を違えて孤立している。住居内からは水瓶、転用硯、灯明具、鉄鉢形土器、鉄製品等が出土している。縄文時代の遺物は、前期諸磯ｂ式期を中心に十三菩提式、阿玉台式が検出されている。十三菩提式や第３号土坑から出土した縄文原体の側面圧痕文を有する土器は器形復元がある程度可能なもので、県内の前期終末期の様相を知る上での好資料となりうるものである。

**芳沼入下遺跡**

土坑１基が確認されただけである。土坑内からは遺物が出土していないため、時期を特定することはできないが、周辺に奈良時代のものと思われる土師器片、須恵器片が散布していることや、本遺跡と同じ丘陵上に所在する芳沼入遺跡からは奈良時代の遺構が検出されているので、ほぼそれらと同時期の土坑であろうと思われる。

**新田坊遺跡**

住居跡11軒、溝跡２条、土坑15基、集石土坑１基を検出した。住居跡、溝跡は全て平安時代のものである。遺構内からは羽釜や鉄器等が出土している。土坑は縄文時代前期諸磯ｃ式期のものが２基、平安時代のものが13基である。集石土坑は縄文時代前期のものと思われる。遺構外の遺物は縄文時代早期条痕文系、前期諸磯ｂ式、ｃ式のものがみられる。

**尺尻遺跡**

住居跡４軒、土坑３基、集石土坑２基が確認されている。住居跡は縄文時代前期諸磯ｂ式期のものが１軒であり、残りの住居跡３軒と３基の土坑は平安時代のものである。集石土坑は縄文時代前期のものであろう。遺構外からは諸磯ｂ式期の土器の他に、縄文時代中期の土器、旧石器時代のナイフ形石器等が検出されている。

**尺尻北遺跡**

住居跡２軒、土坑２基が確認されている。住居跡は縄文時代前期諸磯ｃ式期のもの１軒、平安時

代のもの1軒である。2基の土坑は縄文時代前期のものと思われる。遺構外からは諸磯c式の土器を中心に、諸磯b式、勝坂式の土器が若干検出されている。諸磯c式期の住居跡は県内においては極めて類例が少ないものである。

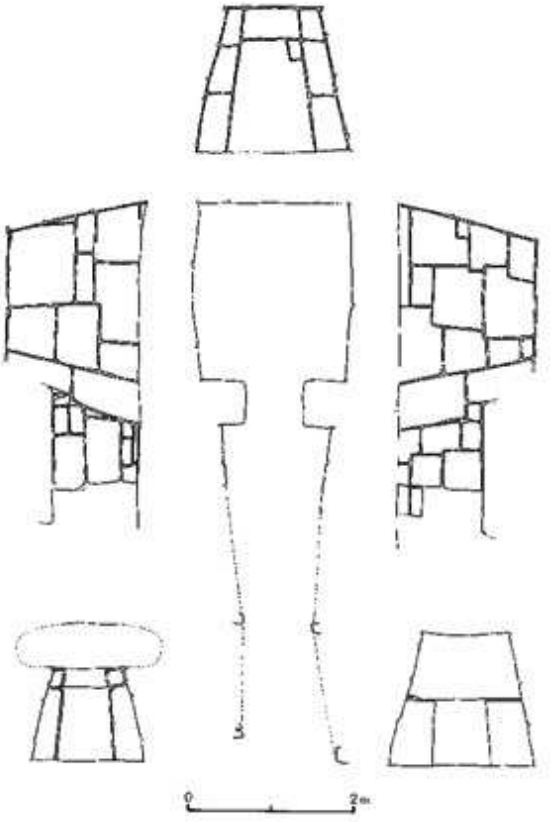
### 大野田遺跡

溝跡1条、土坑4基が確認されている。いずれの遺構からも時期を特定できるほどの遺物は検出されていないが平安時代のものであろうと思われる。遺構外からは縄文時代早期条痕文系のものを中心に前期、後期の土器、中・近世陶器、古銭等が検出されている。

### 天神山古墳群（参考）

今回の一連の発掘調査の対称にはなっていないが、本遺跡群に隣接して嵐山町天神山古墳群の所在が知られている。10基前後の円墳が確認されており、中でも最大級の1号墳は長径約15mの墳丘をもち、遺存状態が良好な凝灰岩截石切組積の横穴式石室が開口している。

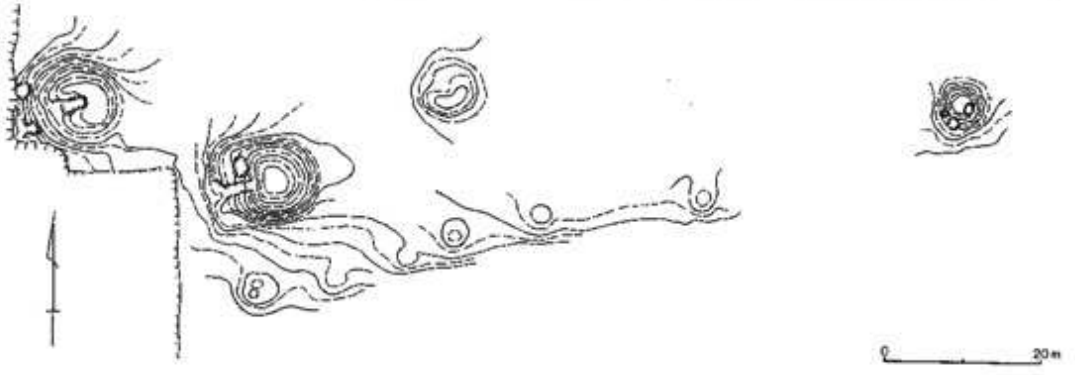
編年的位置付けは確定的ではないが、金井塚氏により7世紀後半、高柳氏により7世紀前半以前との年代観が提示されている。



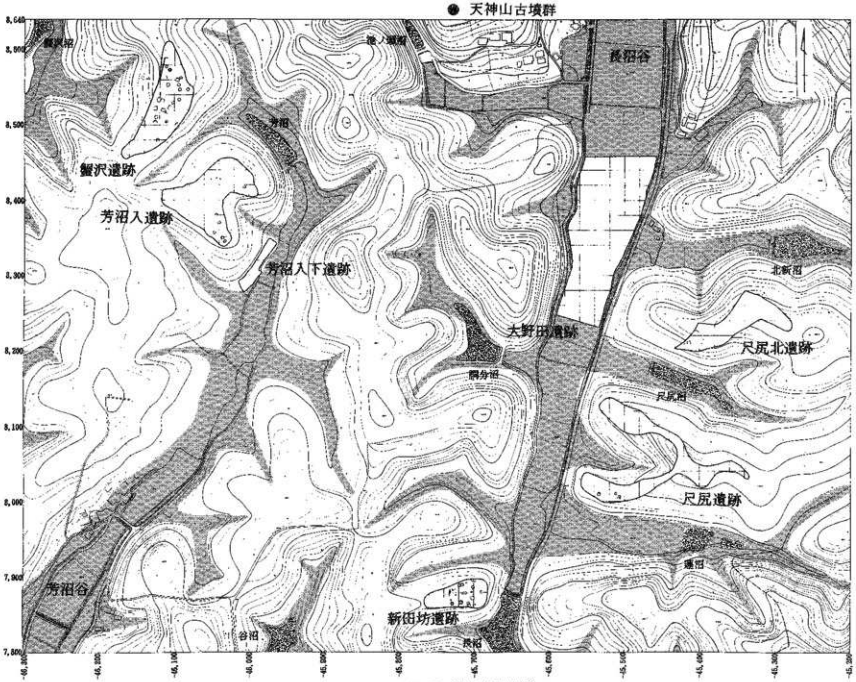

第4図　天神山古墳群第1号墳石室（原図　高柳1986）

### 引用文献

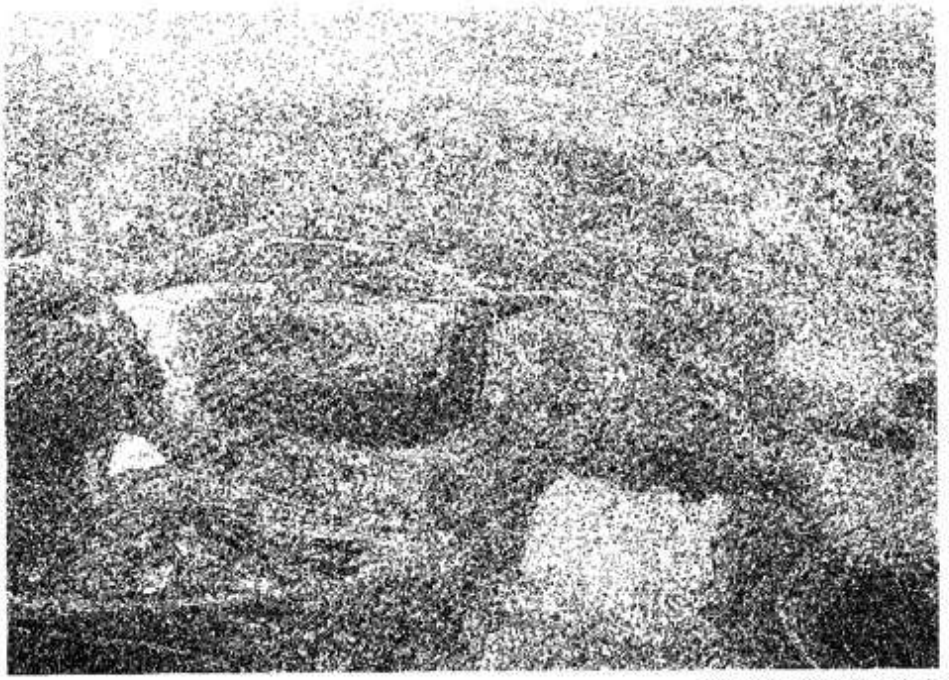
金井塚良一他　1983　『嵐山町史』
高柳　茂　1986　「嵐山町天神山1号墳の横穴式石室について」『埼玉県立桶川高等学校　研究紀要』2




第5図　天神山古墳群（原図　金井塚他　1983）




第6図　遺跡の位置と地形



蟹沢遺跡と芳沼入遺跡

蟹沢遺跡

# Ⅳ　蟹沢遺跡の調査

## 1　遺跡の概観

本遺跡の東南から北東にかけては、Y字状に分岐した吉沼谷の谷頭部がとりまき、西方には蟹沢谷の支谷が接している。また、北方には新沼谷と上沼谷が迫っている。吉沼谷と蟹沢谷は粕川に、新沼谷と上沼谷は滑川に開口する谷であるため、本遺跡をのせる丘陵の尾根線は、ちょうど粕川水系と滑川水系を隔てる分水嶺にあたることになる。

遺跡内は南部から北部にかけて徐々に標高が高くなり、最高点は約93mを測る。連続する尾根線をさらに北に80m程たどると、本遺跡をのせる丘陵の最高点に到達する。標高は約95mで周辺では最も高いピークとなる。遺跡南西の谷を介して芳沼入遺跡と隔てられる。

検出された遺構は、住居跡23軒、溝跡２条、土坑１基である。時期別の内訳は、弥生時代後期の住居跡11軒、土坑１基、奈良時代の住居跡12軒、溝跡２条である。縄文時代の遺物や近世の遺物も僅かに散布するが、それらに伴う遺構は確認されていない。

弥生時代、奈良時代については一つの単位集落をほぼ全面的に調査することができたものと思われる。

比企丘陵には弥生時代後期の標識遺跡、吉ケ谷遺跡、岩鼻遺跡が所在し、その他にも大谷遺跡、屋田遺跡等、同期の遺跡が点在しているが、それらの分布はどちらかというと比企丘陵東部に偏在する傾向を見せていた。西部域では弥生時代遺跡の検出例はほとんどなく、嵐山町においては本遺跡北方、吉田地区の№116遺跡から岩鼻式と思われる土器片が僅かに採集されている程度であり、集落遺跡はこれまで確認されていなかった。本遺跡で弥生時代の集落が確認できたことは、従来空白だった比企丘陵北西部における弥生時代集落の在り方や吉ケ谷式期の遺跡の展開を考える上でも意義深いものである。

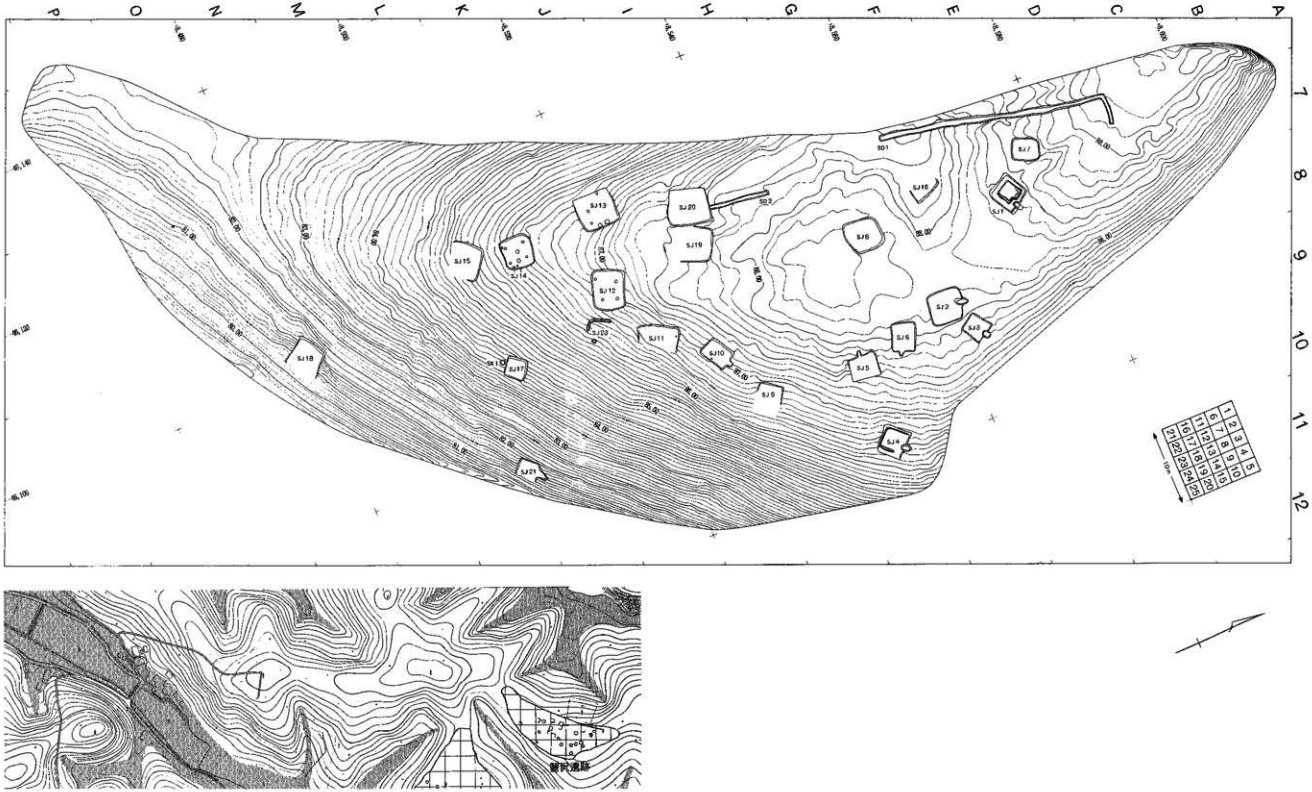
本遺跡に近接する弥生時代の遺跡としては、次章で報告する芳沼入遺跡と、滑川対岸に所在する滑川町船川遺跡が挙げられる。

芳沼入遺跡からは土坑２基とそれぞれの土坑内から甕、高坏３個体が検出されただけで住居跡は検出されていない。本遺跡と芳沼入遺跡は時期的にほとんど変らないようであるが、互いに性格を異にする遺跡であろうと思われる。

船川遺跡からは吉ケ谷期の住居跡３軒と古墳時代前期五領期の住居跡１軒が確認されている。現在把握されている弥生時代集落としては本遺跡に最も近接した遺跡ではあるが、吉ケ谷式と共に岩鼻式とされる櫛描きの波状文、簾状文の土器も出土している点が興味深い。

本遺跡の奈良時代の住居跡は、いずれも８世紀後半段階の住居跡であろうと推定される。南東に隣接する芳沼入遺跡からもほぼ同時期の住居跡が６軒確認されているが、全て同時に存在したものではなく、両遺跡にまたがって数段階の変遷が考えられる。

銅製品を模倣したものと思われる須恵器が出土するのも両遺跡に共通する特徴の一つである。


P O N M L K J I H G F E D C B A
7 8 9 10 11 12
SJ1
SJ2
SJ3
SJ4
SJ5
SJ6
SJ7
SJ8
SJ9
SJ10
SJ11
SJ12
SJ13
SJ14
SJ15
SJ16
SJ17
SJ18
SJ19
SJ20
SJ21
SJ22
SJ23
SD1
SD2
SD3
SD4
SD5
SD6
SD7
SD8
SD9
SD10
SD11
SD12
SD13
SD14
SD15
SD16
SD17
SD18
SD19
SD20
SD21
SD22
SD23
SD24
SD25
SD26
SD27
SD28
SD29
SD30
SD31
SD32
SD33
SD34
SD35
SD36
SD37
SD38
SD39
SD40

## 2　弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は住居跡11軒、土坑１基である。これらの遺構のほとんどは、遺跡をのせる丘陵の尾根線伝いに分布しているが、第17号住居跡と第１号土坑は尾根線からやや下った南東向き斜面から互いに隣接して確認されている。

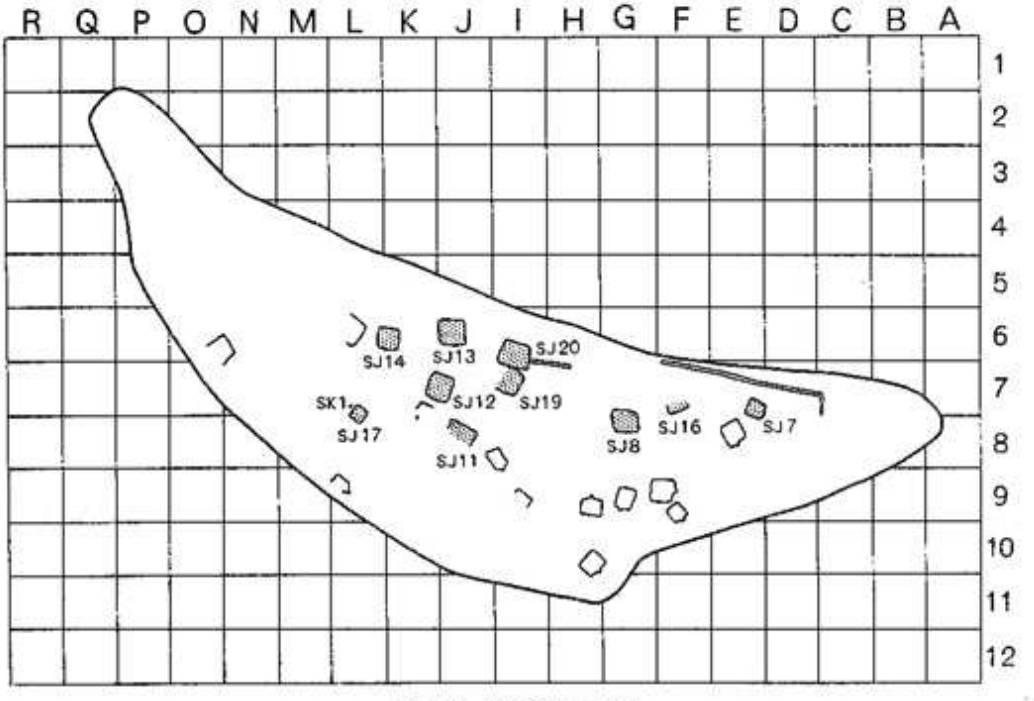
柱穴等が確認できた住居跡は第12号、第13号、第14号の隣接する３軒のみで、他の住居では明瞭に識別することはできなかった。他の住居跡でそれらの施設が確認されなかったのは第Ⅲ章で述べたように地山の性質に起因するものであろうか。

出土遺物はいずれも吉ケ谷式期のものであるが、第12号住居跡、第16号住居跡からはハケ目を有する台付き甕やそのミニチュアが出土している。第16号住居跡からは他に東海系の影響を受けたものと思われる壺も出土しており、本遺跡の編年的位置付けを採る上で興味深いものがある。

第13号住居跡内部において確認された土坑内からは壺の上半部と共に手捏のミニチュア土器と土製勾玉が各２点出土している。祭祀的な意味合いを持つ遺構だと言えそうである。

第17号住居跡は、土坑が付随することや、立地、法量の点で本遺跡においては特異な住居跡だと言える。住居内と土坑内から出土した遺物は接合しており、両者の密接な関係が想起される。接合した甕に施文された縄文の原体は付加条第１種２本巻によるものと推定されるが、このような単節斜縄文以外の原体によって施文された土器は、他の住居等においても散見される。

遺構外からも相当量の遺物が出土している。Ｆ６グリッドの遺物は後述のように本来的には第16号住居跡に帰属する遺物である可能性が高いものと思われる。Ｆ８グリッドの遺物に伴う遺構は不明であるが、第16号住居跡やＦ６グリッドの遺物と接合関係を有するものを含んでおり、三者の関




第８図　弥生時代の遺構

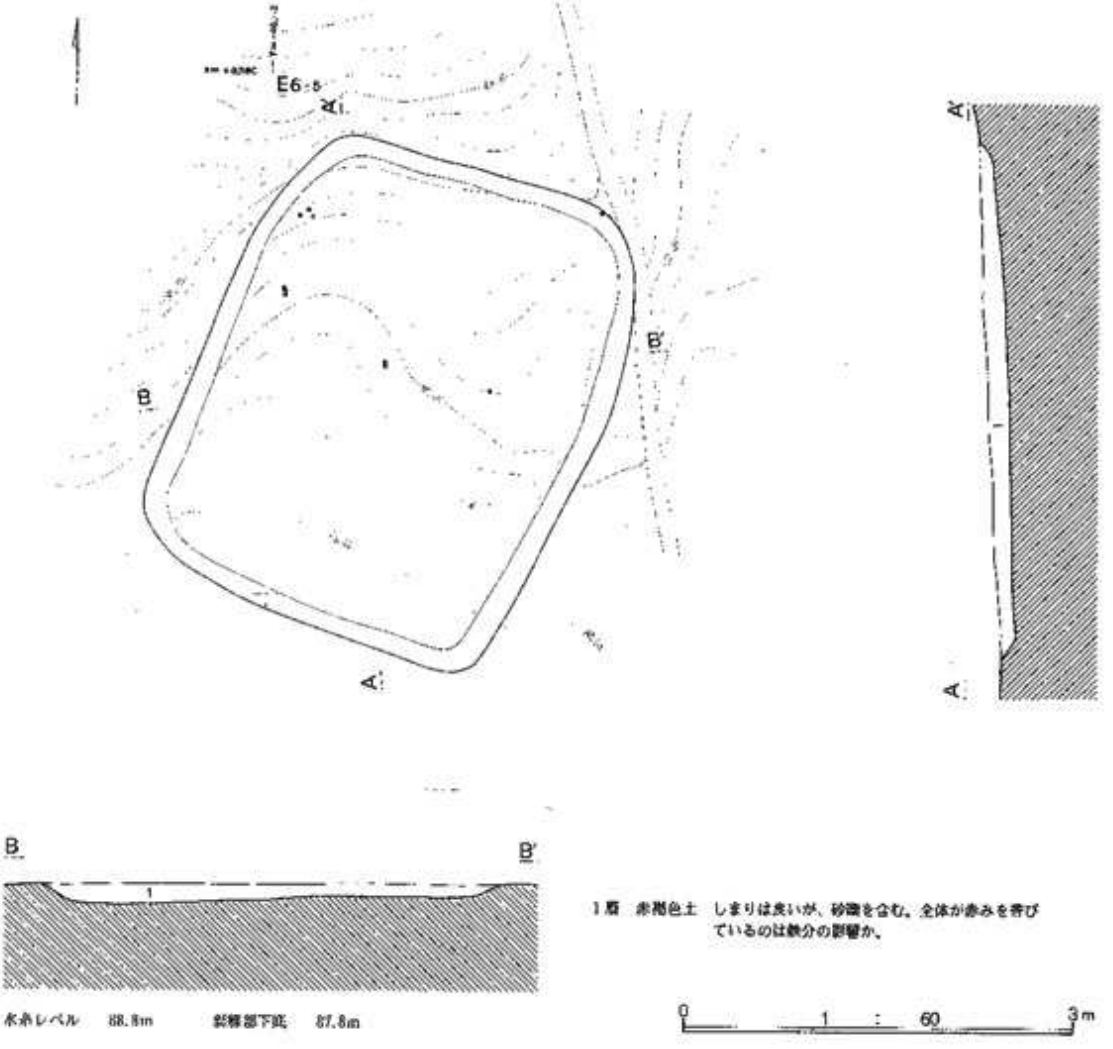
連が予想される。

また、数軒の奈良時代の住居跡からも量的にまとまった弥生時代の遺物が確認されている。単なる混入と考えることもできるが、両時期の住居跡の重複等、他の要因も考えられる。特定のグリッドから集中して遺物が検出されることや、重複を示唆する住居の存在は、本遺跡には確認された11軒の住居跡に加えてさらに数軒の住居跡が存在した可能性を予想させるものである。

両住居跡の密接な関係を想起させるものがある。

### 第7号住居跡

遺跡の北部の尾根頂部付近、E6、E7グリッドにおいて確認されている。本遺跡内においては最も北に位置する住居であり、確認面の標高も最も高い住居跡である。規模は3.8×3.1mを測り、形態は南北にやや長い長方形となる。残存壁高は約14cm、確認面の標高は約88.7m、床面の対水平角は約2度、長軸方向はN—21度—Eである。




第9図　第7号住居跡

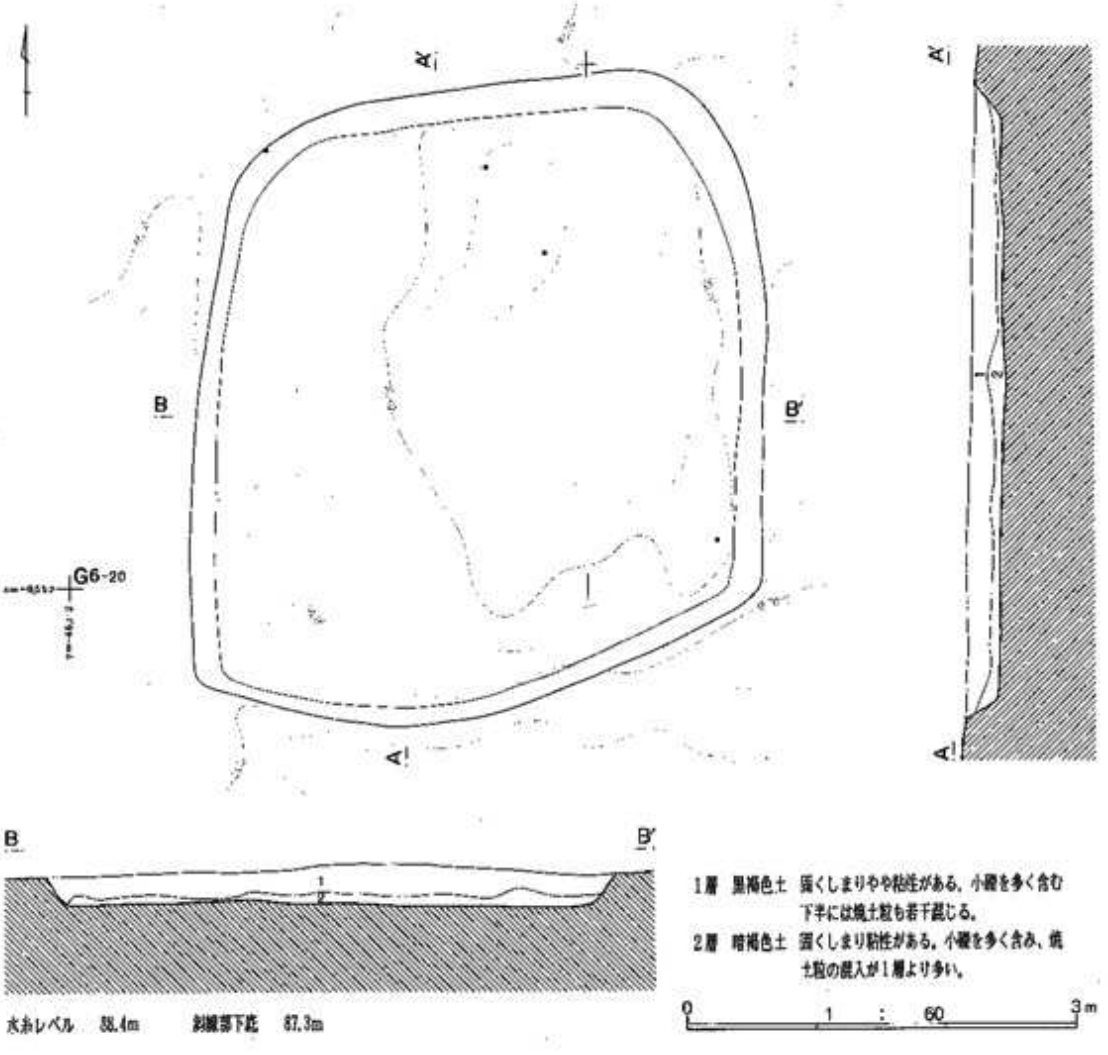
遺物は非常に少なく図示できるようなものはないが、吉ケ谷期と思われる土器片が含まれている。柱穴等の掘り込みや住居に付随する施設は確認されていない。

### 第８号住居跡

尾根頂部付近の比較的平坦な部分、Ｇ７、Ｇ６グリッドにおいて確認されている。第16号住居跡の南側に入り込んだ浅い谷の南側に位置する。規模は4.8×4.4mを測り、形態はややいびつな方形となる。残存壁高は約34cm、確認面の標高は約88.3m、床面の対水平角はほぼ０度である。長軸方向はN―0.5度―Wである。

遺物は第７号住居跡よりもさらに少なく、時期を特定するための決め手を欠くが、吉ケ谷期と思われる土器片が若干含まれており、他の時期の遺物の混入は少ないためさしあたり吉ヶ谷期の住居跡として認識しておく。

柱穴その他の施設は確認されていない。



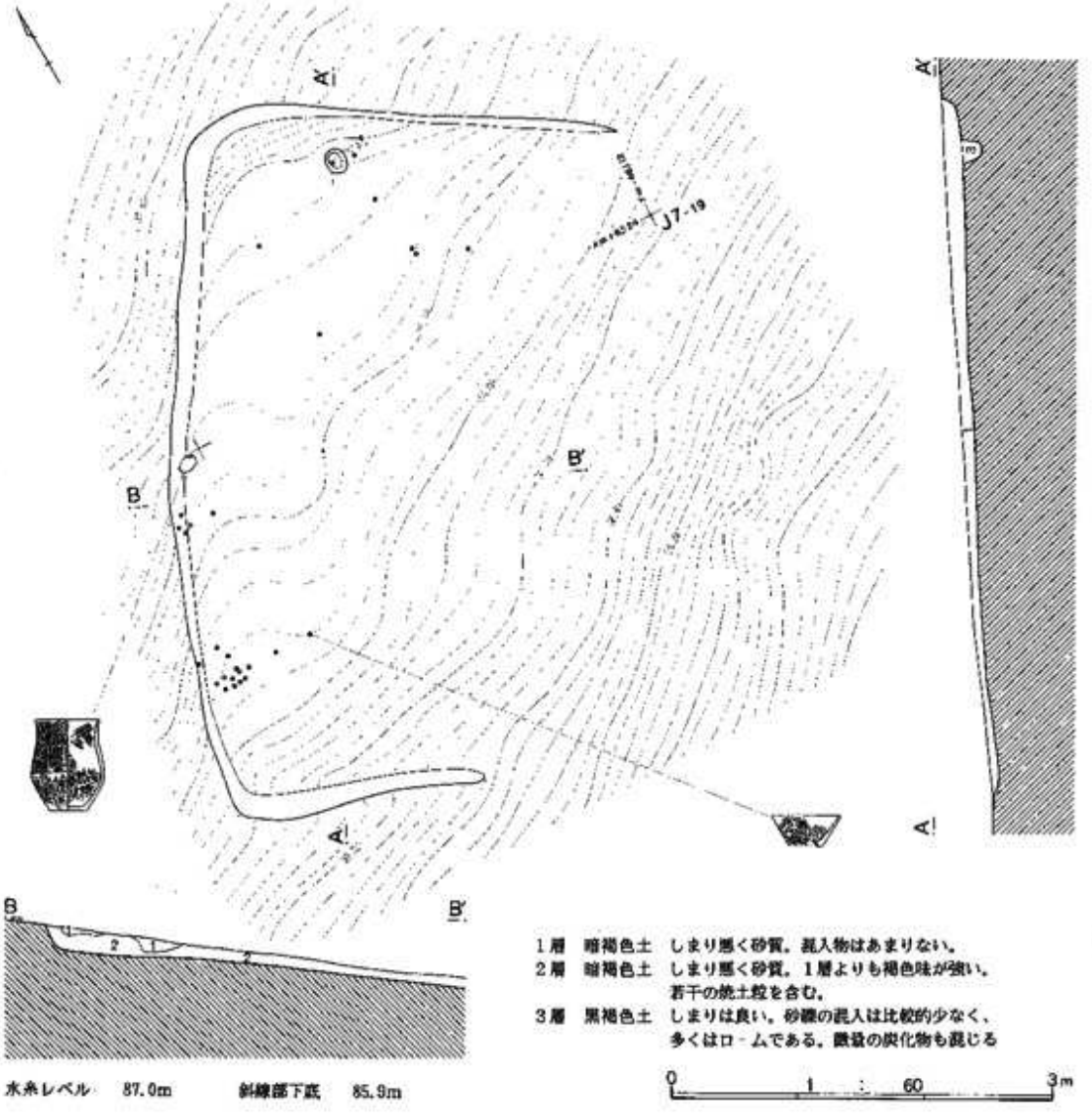

第10図　第８号住居跡

**第11号住居跡**

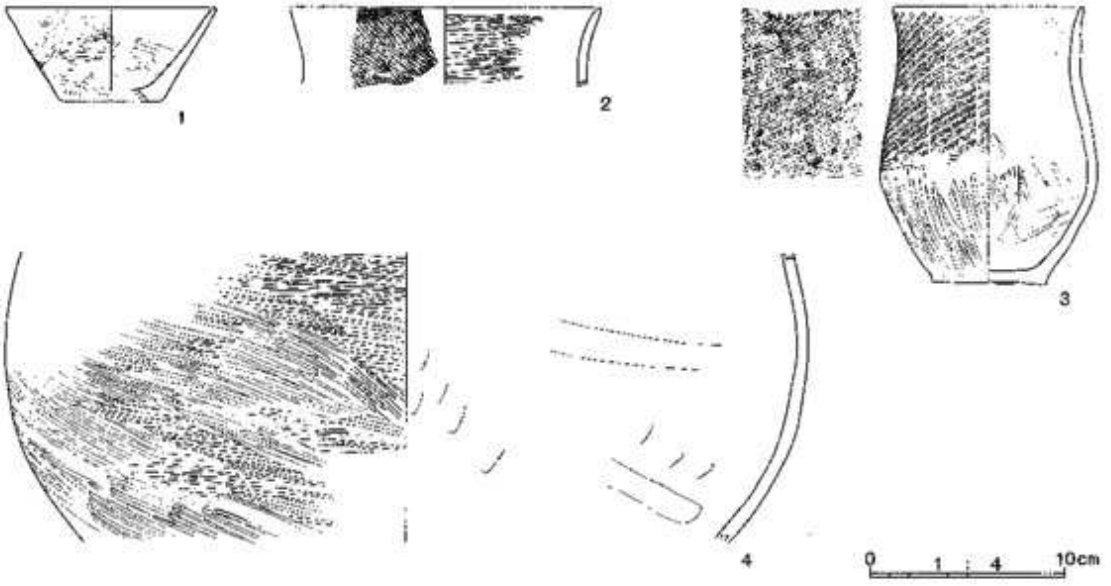
尾根頂部から南東向きに傾斜が始まる付近、Ｊ７グリッドにおいて確認されている。住居の南東半分は失われており、規模、形態等を正確に把握することはできないが、本来的には長辺約5.3m程度の南北にやや長い長方形の形態を呈するものと思われる。残存壁高は約18cm、確認面の標高は約87.1m、床面の対水平角は約４度である。住居の長軸方向はN―32度―Eである。

柱穴状のピットが住居北西角付近で１ヶ所確認されているが、他の柱穴、施設等は確認されていない。

鉢、甕等の遺物が出土している。３の甕はほぼ完形であるが、付加条第１種２本巻の原体か、同等の施文効果を描出する原体で文様が施されている。




第11図　第11号住居跡




第12図　第11号住居跡出土遺物

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 鉢 | (10.8) | 4.8 | (5.2) | bws | do | B | 40 | |
| 2 | 甕 | (16.0) | 3.9 | — | wsb | do | A | 30 | 0段多条単節ＲＬ。口唇下なで。 |
| 3 | 甕 | 9.8 | 14.1 | 5.9 | wsb | gb | B | 95 | 付加条第１種２本巻ＬＲ＋２ｒ。 |
| 4 | 壺 | … | 14.8 | — | s | o | B | 40 | 外面赤彩？。 |

第１表　第11号住居跡出土遺物

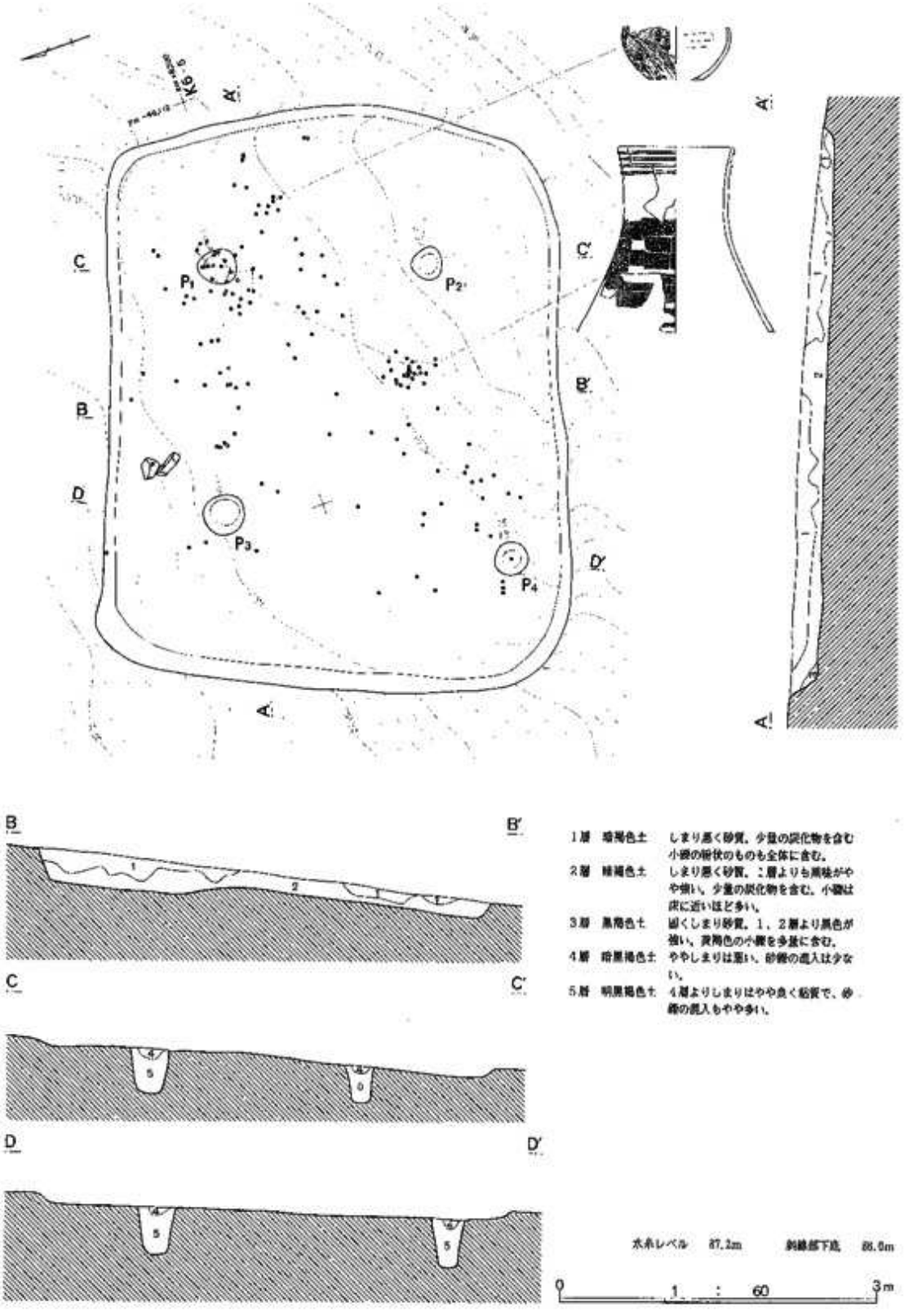
**第12号住居跡**

尾根頂部から南向きに傾斜が始る付近、Ｊ６、Ｋ６グリッドにおいて確認されている。規模は5.5×4.3mを測り、形態は東西にやや長い長方形となる。残存壁高は約30cm、確認面の標高は約87.2m、床面の対水平角は約７度である。住居の長軸方向はＮ―109度―Ｅである。

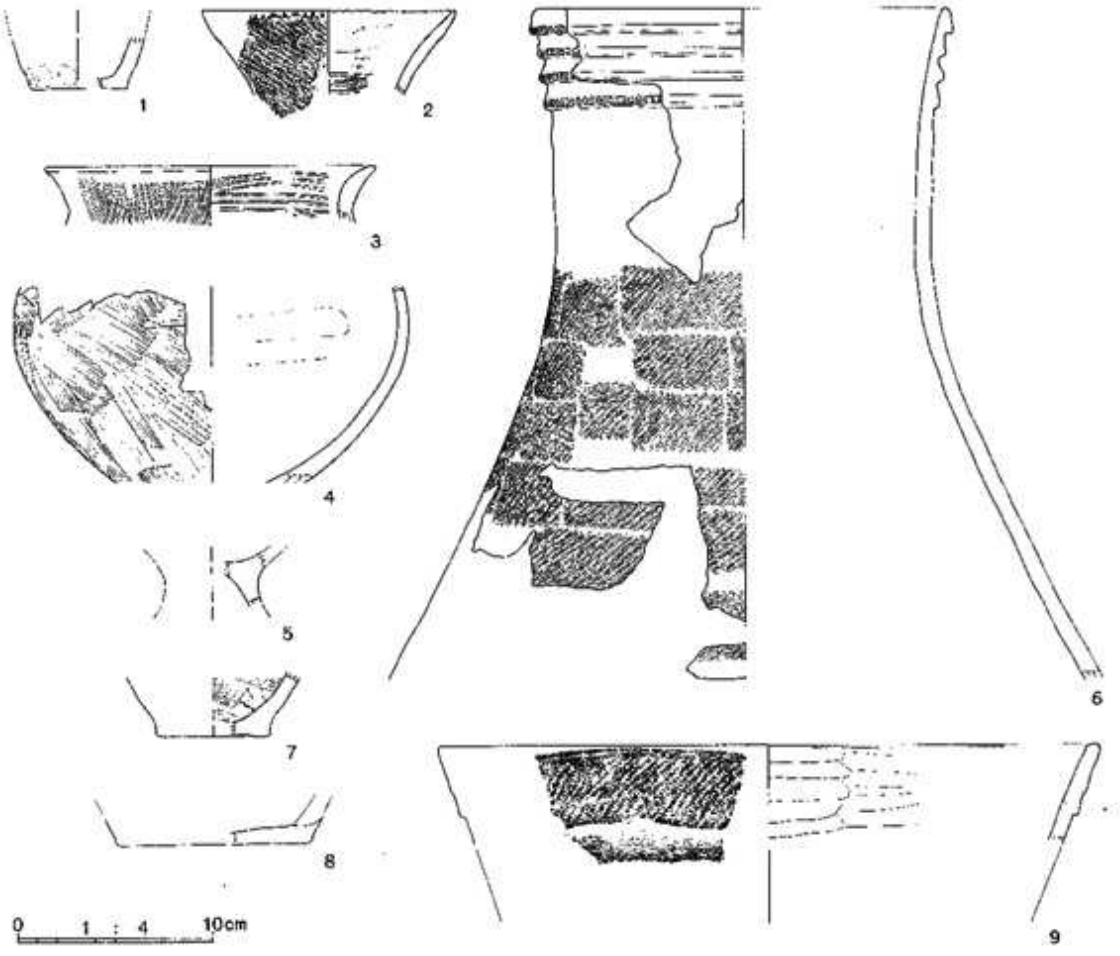
住居の遺存状態は比較的良好で、４本の柱穴が確認されている。Ｐ１、Ｐ２列は約２m、Ｐ１、Ｐ３列は約2.3mを測り、ともに住居の壁と平行に位置するが、Ｐ４が軸からはずれているため、Ｐ２、Ｐ４列、Ｐ３、Ｐ４列は住居の壁とは平行しない。

ハケ目を有する台付き甕の口縁部片、胴部片、脚部片、凸帯を有する大形の壺、ミニチュア土器等が出土している。ハケ目を有する台付き甕の口縁部と胴部とでは、色調やハケ目の粗さが異なっているため、別個体である可能性が高いものと思われる。ハケ目を有する台付き甕は他に第16号住居跡からも出土している。

凸帯を有する大形の壺は、Ｐ１周辺とＰ２の西方から出土している。




第13図　第12号住居跡




第14図　第12号住居跡出土遺物

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 一底部 | — | 2.6 | (4.8) | ws | do | B | 30 | |
| 2 | 壺 | (13.1) | 4.3 | — | ws | do | B | 30 | 0段多条単節RL。口唇部に刻み。 |
| 3 | 台付甕 | (16.9) | 3.0 | — | bw | o | B | 30 | 内外面に比較的目の粗いハケ目。 |
| 4 | 台付甕 | — | 10.0 | — | bw | o | B | 50 | 外面に3と同様のハケ目。3と同一個体か。 |
| 5 | 台付甕 | — | 1.8 | — | bw | o | B | 40 | 3、4と同一個体か。 |
| 6 | 壺 | (21.0) | 34.1 | — | s | do | C | 40 | 0段多条単節LR。凸帯上に刻み。 |
| 7 | 一底部 | — | 3.0 | (5.2) | sb | o | B | 40 | 内面ハケ目顕著。 |
| 8 | 一底部 | — | 1.4 | (9.8) | s | do | B | 40 | |
| 9 | 壺 | (33.9) | 4.9 | — | ws | do | B | 30 | 0段多条単節LR。 |

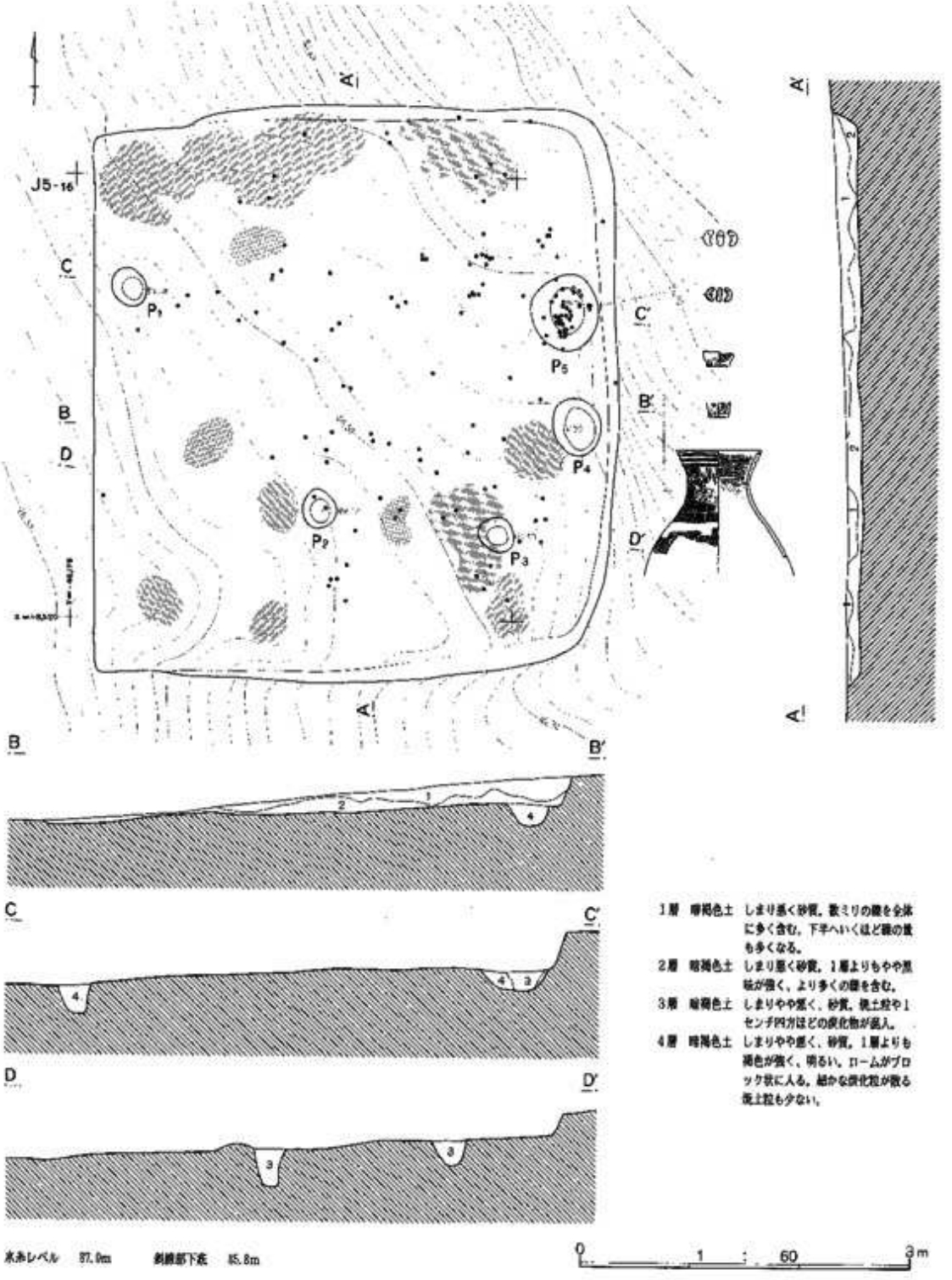
第2表　第12号住居跡出土遺物

### 第13号住居跡

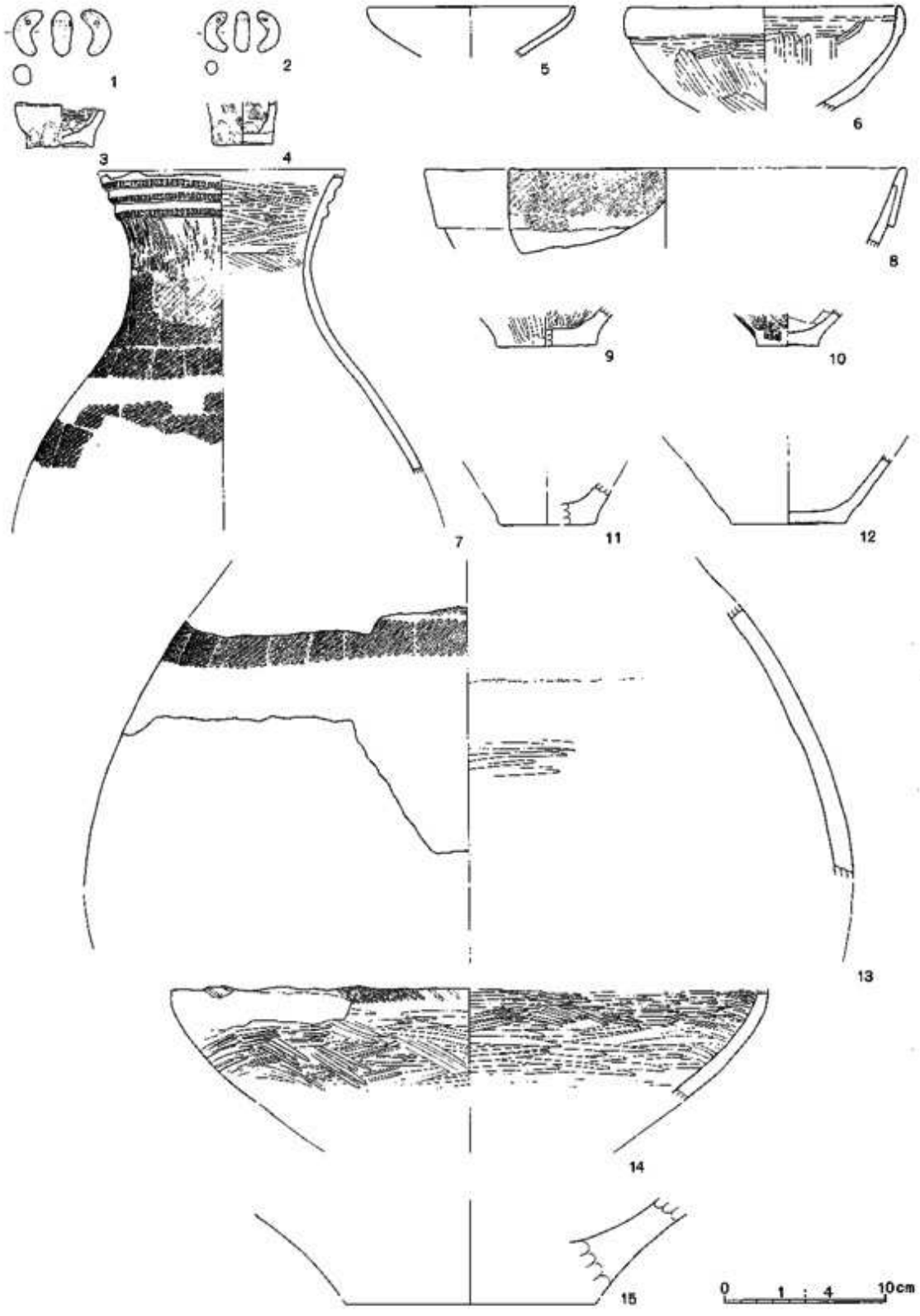
尾根線から南西にむけて傾斜が始る付近のＪ５グリッドにおいて確認されている。西壁は失われているが規模は5.3×4.8m程度になるものと思われる。形態はほぼ方形となる。残存壁高は約26cm、

確認面の標高は約87.0m、床面の対水平角は約4度である。住居の軸方向はN－0度である。

住居内には5ヵ所のピットが確認されているがP1～P3の3ヵ所は柱穴状のピットである。東




第15図　第13号住居跡




第16図　第13号住居跡出土遺物

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土製勾玉 | 長さ2.9、厚さ1.2 | | | wb | do | B | 100 | P5内出土。 |
| 2 | 土製勾玉 | 長さ2.3、厚さ1.0 | | | wb | o | B | 100 | P5内出土。 |
| 3 | 手捏土器 | (5.6) | 2.6 | 4.1 | wb | do | B | 100 | P5内出土。 |
| 4 | 手捏土器 | — | 2.7 | 3.6 | wb | do | B | 60 | P5内出土。 |
| 5 | 高坏? | (12.9) | 3.1 | — | sw | o | C | 30 | |
| 6 | 高坏 | (16.8) | 6.5 | — | ws | do | B | 40 | |
| 7 | 壺 | 15.4 | 18.3 | — | sb | o | B | 80 | 0段多条単節LR。P5内出土。 |
| 8 | 壺 | (30.0) | 4.9 | — | sw | o | C | 30 | 単節RL。風化顕著。 |
| 9 | 一底部 | — | 1.8 | 6.1 | sw | o | B | 50 | |
| 10 | 一底部 | — | 2.0 | 3.7 | b | o | B | 70 | |
| 11 | 一底部 | — | 2.1 | 5.6 | s | do | B | 50 | |
| 12 | 一底部 | — | 4.0 | 7.0 | wb | o | B | 40 | |
| 13 | 壺 | — | 17.0 | — | ws | o | B | 40 | 0段多条単節LR。 |
| 14 | 壺 | — | 6.9 | — | bs | do | B | 30 | 単節LR。風化顕著。 |
| 15 | 壺 | — | 6.8 | — | ws | o | B | 30 | |

第3表　第13号住居跡出土遺物

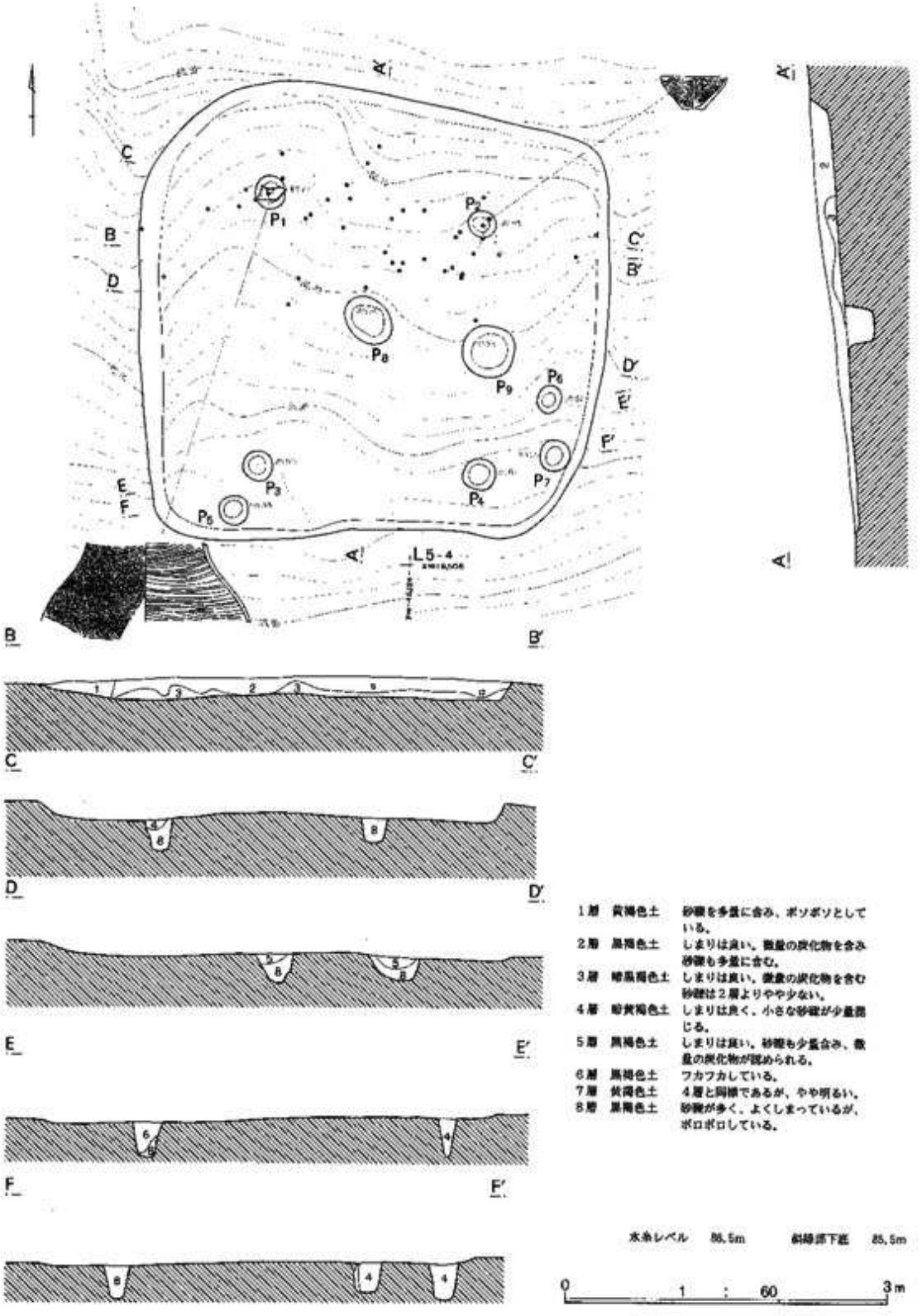
壁中央やや南よりのP4は出入口のための施設であろうか。その北側のP5は径70cm前後のほぼ円形のプランを呈し、床面からの深さは約18cmを測る。覆土には焼土、炭化物が含まれ、内部から壺の上半部と共に、手捏ねのミニチュア土器、土製勾玉がそれぞれ2個体ずつ出土している。ミニチュア土器は第16号住居跡等からも検出されているが、壺や土製勾玉を伴って住居内の土坑から確認された例は他の住居には見られない。

住居床面には焼土化している部分が認められ、炭化物も散見されることから焼失家屋の可能性が考えられる。

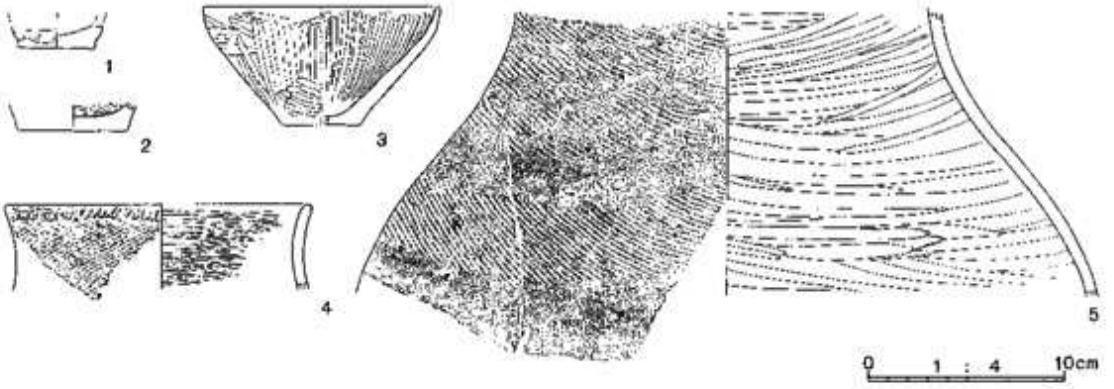
**第14号住居跡**

南向きに傾斜する尾根線上のK5、L5グリッドにおいて確認されている。規模は4.4×4.3mを測り、形態はややいびつな方形となる。残存壁高は約20cm、確認面の標高は約86.3m、床面の対水平角は約5度である。住居の軸は磁北に対して偏角をもたず、4つの壁はそれぞれ東西、南北に平走する。

9ヵ所のピットが確認されているが、P1～P4の柱穴は本住居の主柱穴であったと思われる。P5～P7も柱穴であろうが出入口にかかわる施設の可能性も考えられる。P8、P9は柱穴と思われる他のピットより径が大きい割には浅く、炭化物等も含まれることから、炉として使用されたものと思われる。




第17図　第14号住居跡




第18図　第14号住居跡出土遺物

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 一底部 | 4.7 | 1.1 | 3.7 | s | o | B | 90 | |
| 2 | 一底部 | 6.5 | 1.3 | 5.3 | s | o | B | 40 | |
| 3 | 鉢 | 12.2 | 6.1 | 3.8 | bs | o | A | 80 | |
| 4 | 甕 | 15.8 | 4.4 | — | s | do | A | 30 | 付加条第1種2本巻LR+2r。口唇縄圧痕？ |
| 5 | 壺 | 21.8 | 38.0 | — | ws | do | A | 40 | 0段多条単節RL施文後磨き。 |

第4表　第14号住居跡出土遺物

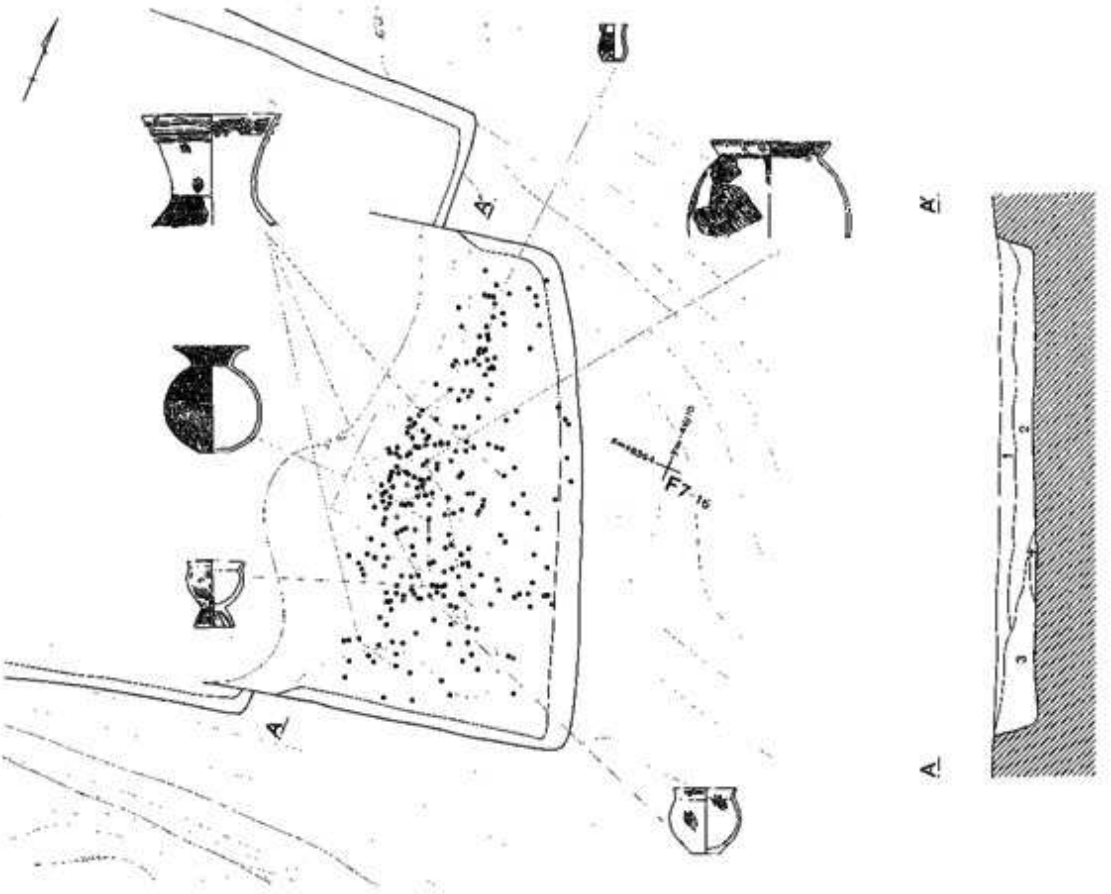
### 第16号住居跡

遺跡西縁から尾根線にむけてほぼ東西に走る浅い谷のほぼ中央部、F6グリッドにおいて確認されている。谷には黒色土が堆積しており、住居はその黒色土を穿って構築されている。住居内の覆土は谷の堆積土に極めて近似しており、遺構確認は困難を極めたが、谷が浅くなっていく方向の住居東壁の立ち上がりは識別できた。北壁、南壁の一部も確認されているが、谷が深くなっていく方向の西壁は確認することができなかった。東壁の長さは約3.8mを測る。形態は方形あるいは長方形になるものと思われる。残存壁高は約38cm、確認面の標高は約87.9mである。

遺物は本遺跡内では最も多く出土している。甕や台付き甕のミニチュア土器、吉ケ谷式の壺、甕類と共に、口唇直下に刻みを有し胴部をハケで調整する台付き甕、東海系の影響が予想される波状の櫛描文が施文されたほぼ完形の壺、赤彩を施した棒状浮文の壺の口縁部等の出土が注目される。ミニチュア土器にはいずれも縄文、ハケ目等が観察され、模倣した土器の施文効果がそのまま描出されている。

プランが確認できなかった住居西側からも多量の土器が出土しており、F6グリッド出土遺物として第22図に図示したが、本住居内から検出された遺物と接合するものも多く、同グリッドの遺物も基本的には本住居内の遺物として扱える可能性が極めて高い。本来的には本住居跡の西半部に帰属していたものであろう。

また、本住居から東に約16m離れたF8グリッド内から出土した遺物の中にも、本住居内の遺物やF6グリッドの遺物と接合するものが含まれている。

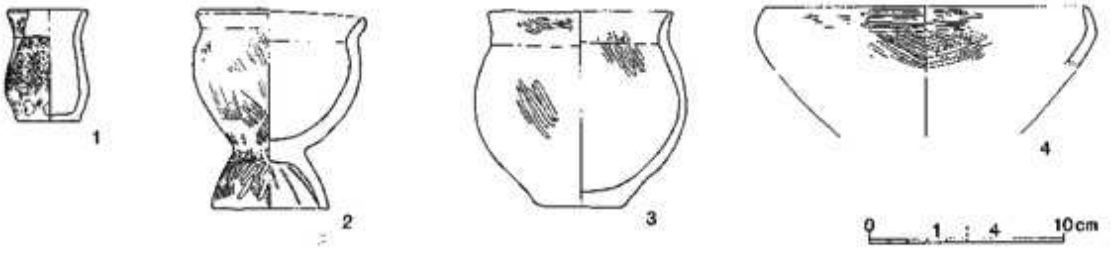



1層　暗褐色土　しまり悪く、砂質。微量の炭化物が混入。
2層　黒褐色土　しまり悪く、砂質。1層に比してはるかに色調が黒い。炭化物が多く混入する。
3層　暗褐色土　しまり悪く、砂質。1層よりも黒味が若干強い。5ミリ程度の炭化物粒が混入する。
4層　黒色土　しまり悪く、砂質。炭化材、炭化物が多量に入る。

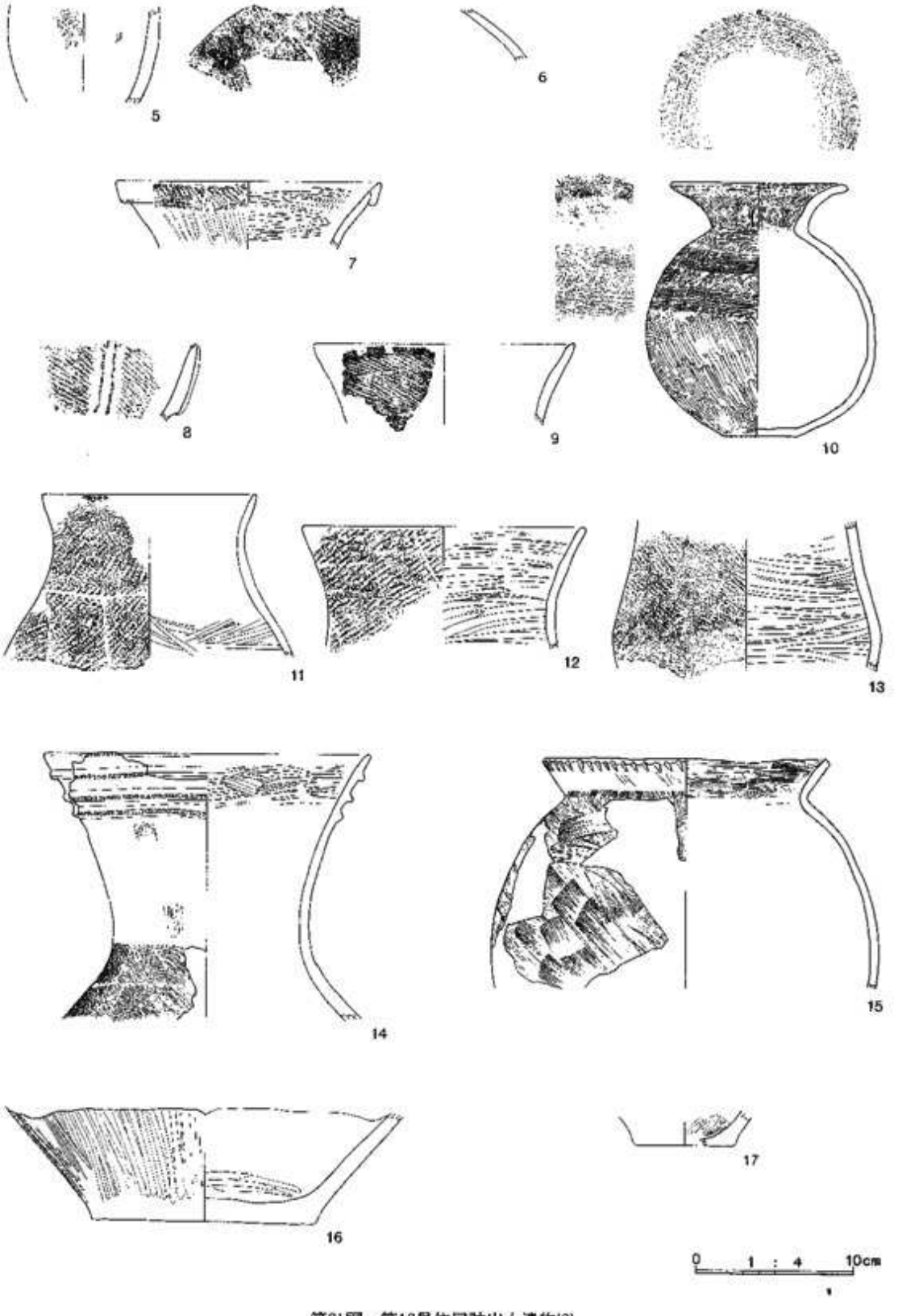
水糸レベル　88.3m　斜線部下底　87.0m

0　1 : 60　3m

第19図　第16号住居跡




第20図　第16号住居跡出土遺物(1)




第21図　第16号住居跡出土遺物(2)

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | ミニ甕 | (4.2) | 5.7 | 3.1 | ws | do | B | 60 | 単節ＲＬ。 |
| 2 | ミニ台付甕 | (8.7) | 10.2 | 6.0 | bs | o | B | 80 | 外面胴部、脚部にハケ目。 |
| 3 | 鉢 | 9.5 | 9.9 | 3.8 | wb | do | C | 70 | |
| 4 | 高坏？ | (16.3) | 3.3 | — | bw | o | B | 40 | 内外面赤彩。 |
| 5 | 壺？ | — | 6.2 | — | s | do | B | 40 | |
| 6 | 壺 | — | 3.2 | — | s | o | B | 30 | 0段多条単節ＲＬ施文後磨き。磨き部に赤彩。 |
| 7 | 壺 | (17.0) | 4.3 | — | ws | do | B | 30 | 単節ＲＬ。 |
| 8 | 壺 | — | 5.0 | — | bs | lg | B | 30 | 0段多条単節ＲＬ後棒状浮文。外面赤彩痕。 |
| 9 | 甕 | (16.6) | 5.1 | — | s | o | B | 30 | 単節ＲＬ。口唇下なで。風化顕著。 |
| 10 | 壺 | 11.4 | 16.0 | 4.7 | sb | o | B | 90 | 胴部櫛描き平行線文間に波状文。口縁内外面に押し引き平行線文。全て同一工具。 |
| 11 | 甕 | (13.5) | 10.2 | — | ws | do | B | 40 | 0段多条単節ＬＲ。口唇下なで。 |
| 12 | 甕 | (18.1) | 7.7 | — | ws | o | B | 40 | 0段多条単節ＬＲ。輪積痕顕著。口唇に縄文。 |
| 13 | 甕 | — | 9.5 | — | ws | o | B | 50 | 0段多条単節ＲＬ。 |
| 14 | 壺 | (20.8) | 16.6 | — | s | o | B | 80 | 0段多条単節ＲＬ。凸帯上に刻み。 |
| 15 | 台付甕 | 17.7 | 14.5 | — | bs | do | A | 40 | 口唇下に刻み。 |
| 16 | 壺 | — | 6.8 | 14.2 | ws | o | B | 90 | |
| 17 | 一底部 | — | 1.8 | 6.1 | w | do | B | 50 | |

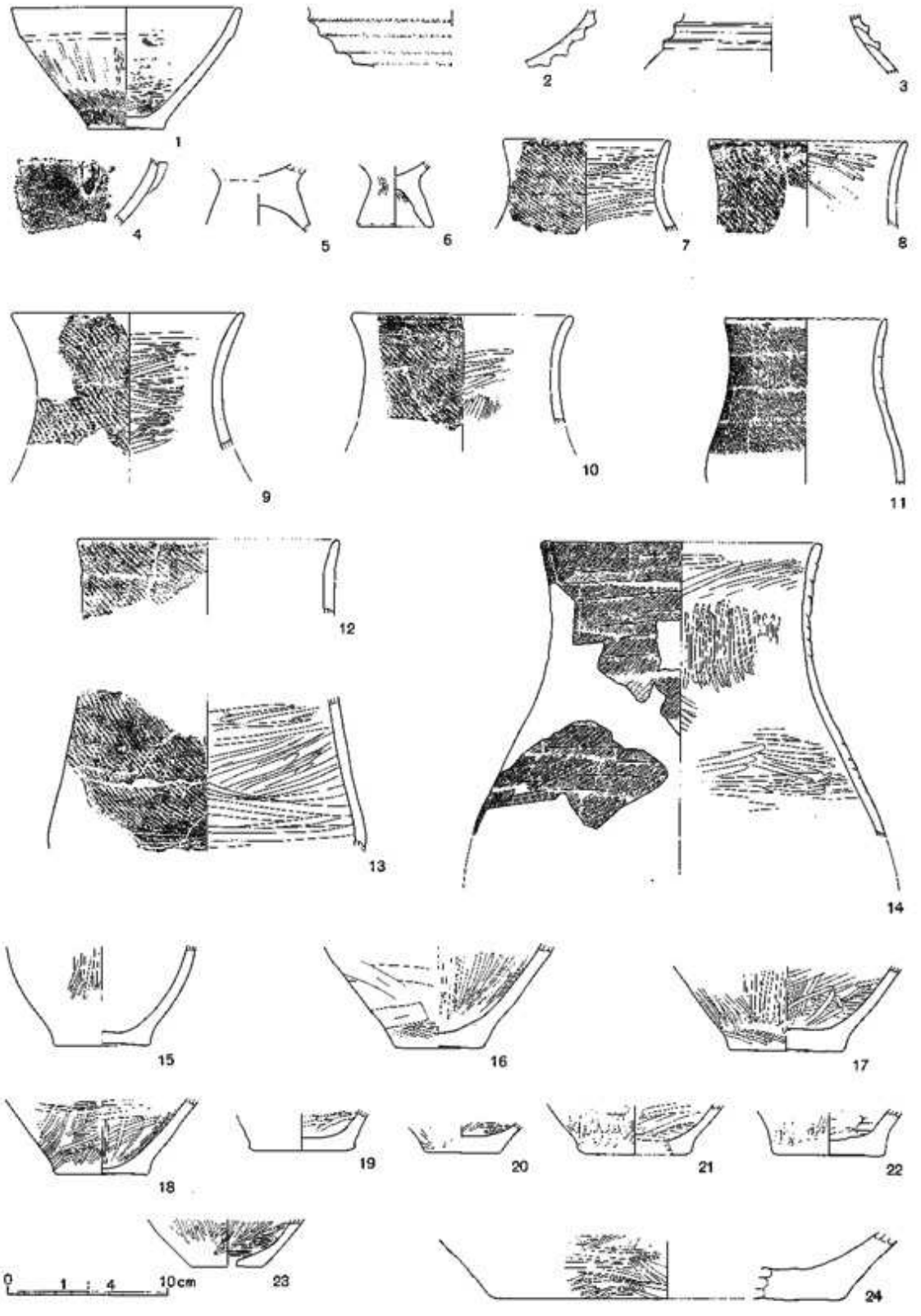
第５表　第16号住居跡出土遺物

### Ｆ６グリッド出土土器

Ｆ６グリッドは尾根線から西方向に延びる浅い谷に位置する。この谷の谷頭部に第16号住居跡が作られ、住居東半部は谷の外の地山を穿ち、住居西半部は谷部に堆積した黒色土を穿っている。住居内に堆積した覆土は谷部同様の黒色土であるため、住居西半は平面形、壁の立ち上がり等を識別することができなかった。本グリッド出土の遺物は、確認することができなかった第16号住居跡西半部に想定される部分から出土している。先述のように本来第16号住居跡に帰属するものである可能性が極めて高いものである。

鉢、甕類を中心とした遺物が検出されているが、高坏等も含まれる。第22図４は小破片であるが豆粒状の貼付文を有する高坏であろうと思われる。芳沼入遺跡の第２号土坑から出土した高坏に類似し、口縁部の段の直下に施された貼付文であろうと思われる（第78図参照）。

第22図10に施文された横位の斜縄文は復節の原体によるものである可能性が考えられる。本遺跡内では他に復節の原体は認められないが、芳沼入遺跡の第１号土坑から出土した土器は本例よりさらに細かい復節の原体によって施文された可能性がある（第78図参照）。




第22図　F 6 グリッド出土遺物

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 鉢 | 14.4 | 7.6 | (4.7) | bs | do | B | 30 | 外面赤彩。内面も赤彩？。 |
| 2 | 壺 | — | 3.5 | — | s | o | C | 30 | 凸帯上に刻み。 |
| 3 | 壺 | — | 3.6 | — | s | do | B | 30 | 外面赤彩？ |
| 4 | 高坏 | — | 4.4 | — | s | o | B | 30 | 外面赤彩。豆粒状の粘土紐を貼付。 |
| 5 | 台付甕 | — | 3.5 | — | s | do | C | 80 | |
| 6 | 台付甕 | — | 3.8 | 4.5 | s | o | B | 80 | |
| 7 | 甕 | (10.3) | 5.7 | — | s | o | B | 30 | 0段多条単節RL。輪積み痕。口唇下なで。 |
| 8 | 甕 | (12.3) | 5.4 | — | s | o | B | 30 | 0段多条単節RL。口唇部刻み。口唇下なで |
| 9 | 甕 | (14.4) | 8.2 | — | s | o | B | 30 | 0段多条単節RL。口唇部刻み？。口唇下なで |
| 10 | 甕 | (13.6) | 6.5 | — | ws | do | B | 30 | 0段多条単節RL。口唇下なで |
| 11 | 甕 | (10.1) | 10.2 | — | bs | o | C | 50 | 単節RL。輪積み痕。口唇部刻み。口唇下なで |
| 12 | 甕 | (16.4) | 4.7 | — | ws | o | B | 40 | 0段多条単節RL。口唇縄文施文。輪積顕著 |
| 13 | 甕 | — | 9.7 | — | bs | do | B | 40 | 0段多条単節RL。輪積痕顕著。 |
| 14 | 甕 | 17.6 | 18.2 | — | b | o | A | 50 | 0段多条単節RL。口唇上縄文施文。輪積顕著 |
| 15 | 甕 | — | 6.1 | 5.8 | bs | o | C | 40 | 11と同一個体か？ |
| 16 | 一底部 | — | 6.3 | (5.7) | ws | o | B | 30 | |
| 17 | 一底部 | — | 5.2 | 6.8 | ws | do | B | 70 | |
| 18 | 鉢？ | — | 4.6 | (5.6) | bs | o | B | 30 | 内外面赤彩。 |
| 19 | 一底部 | — | 2.3 | 5.7 | ws | o | B | 70 | |
| 20 | 一底部 | — | 1.7 | 4.5 | bs | do | B | 90 | |
| 21 | 一底部 | — | 3.1 | (6.2) | bws | do | B | 40 | |
| 22 | 一底部 | — | 2.7 | 6.5 | bws | do | B | 70 | |
| 23 | 甑？ | — | 3.0 | 4.4 | ws | do | B | 70 | 底部焼成前穿孔（単孔）。 |
| 24 | 一底部 | — | 3.6 | (21.5) | bs | do | B | 40 | |

第6表　F6グリッド出土遺物

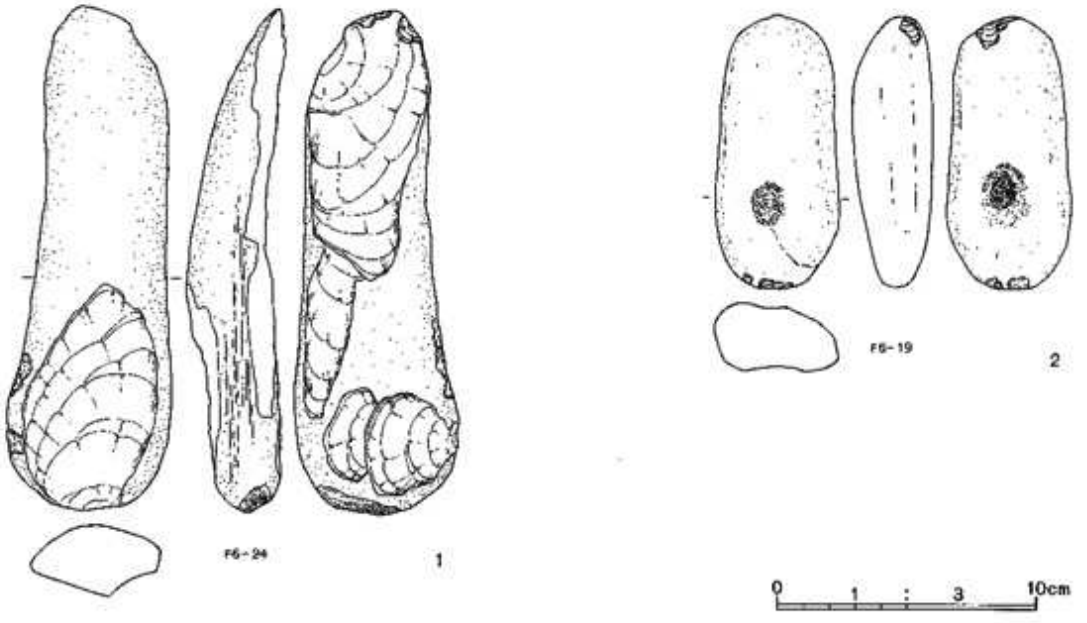
### F6グリッド出土石器

F6グリッドにおいて2点の石器が出土している。F6グリッド出土の遺物は先述のように本来的には第16号住居跡に帰属するものとして捉えられる可能性をもつものである。従ってこの2点の石器も第16号住居跡に伴う弥生時代の石器であろうと推定される。

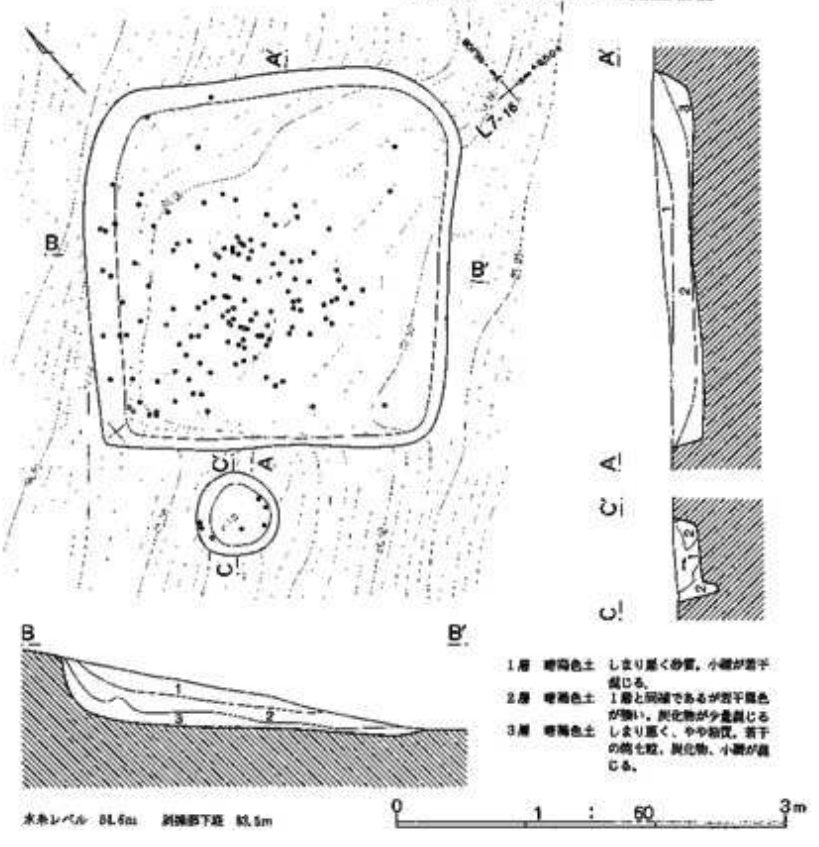
第23図1の石器は砂岩製の敲き石である。全面に自然面を残す若干湾曲した棒状の自然礫を用いている。表裏面には礫下端からと上端からの垂直方向の剥離と、礫下端上位の最大幅付近の水平方向の剥離面が観察される。それぞれの剥離面は敲打による剥落によって形成されたものと考えられる。末端部及び側縁の一部には剥離にまでは至らない敲打による潰れも看取される。長さ105、幅49、厚さ31mm。270g

第23図2も砂岩製の敲き石である。全面に自然面を残す柱状の礫を素材とし、上下両端に敲打に

よる潰れが看取される。表面中央やや下よりと、裏面中央やや下よりにも潰れが観察される。裏面側の方の潰れがより顕著であり、やや凹んでいる。長さ194、幅64、厚さ38㎜。489ｇ。




第23図　Ｆ６グリッド出土石器




第24図　第17号住居跡・第１号土坑

**第17号住居跡**

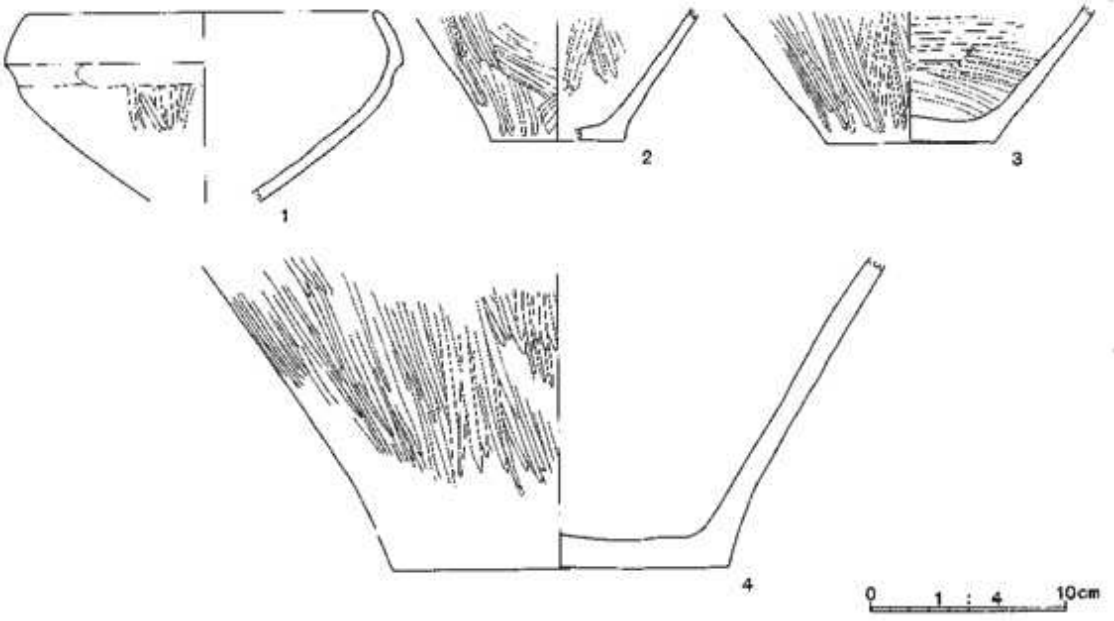
尾根線からやや東よりの南東向き斜面部、Ｌ６、Ｌ７グリッドにおいて確認されている。規模は2.9×2.8ｍを測り、形態はほぼ方形となる。残存壁高は約42㎝、確認面の標高は約84.6ｍ、床面の対水平角は約４度である。かなりの斜面地に構築された住居であるが、床面は水平を意識しているものと思われる。軸方向はＮ―40度―Ｅである。

器形が復元できるものは少ないが遺物点数は比較的多く、鉢や甕が出土

している。

本住居内において検出された甕の口縁部片の中には付加条第１種２本巻の原体を用いて施文されたと思われるものが含まれていた。同様の原体によって施文された甕の破片は、本住居南西壁に隣接する第１号土坑からも検出されており、両者には接合関係が認められる。第30図に実測図を示したが口縁部片のほとんどは本住居内、口縁部片の一部と胴部片は第１号土坑からの出土である。本土器の底部は検出されていない。

両者の接合関係および本住居跡と第１号土坑の位置関係から、両遺構は密接な関係を有するものと推定される。



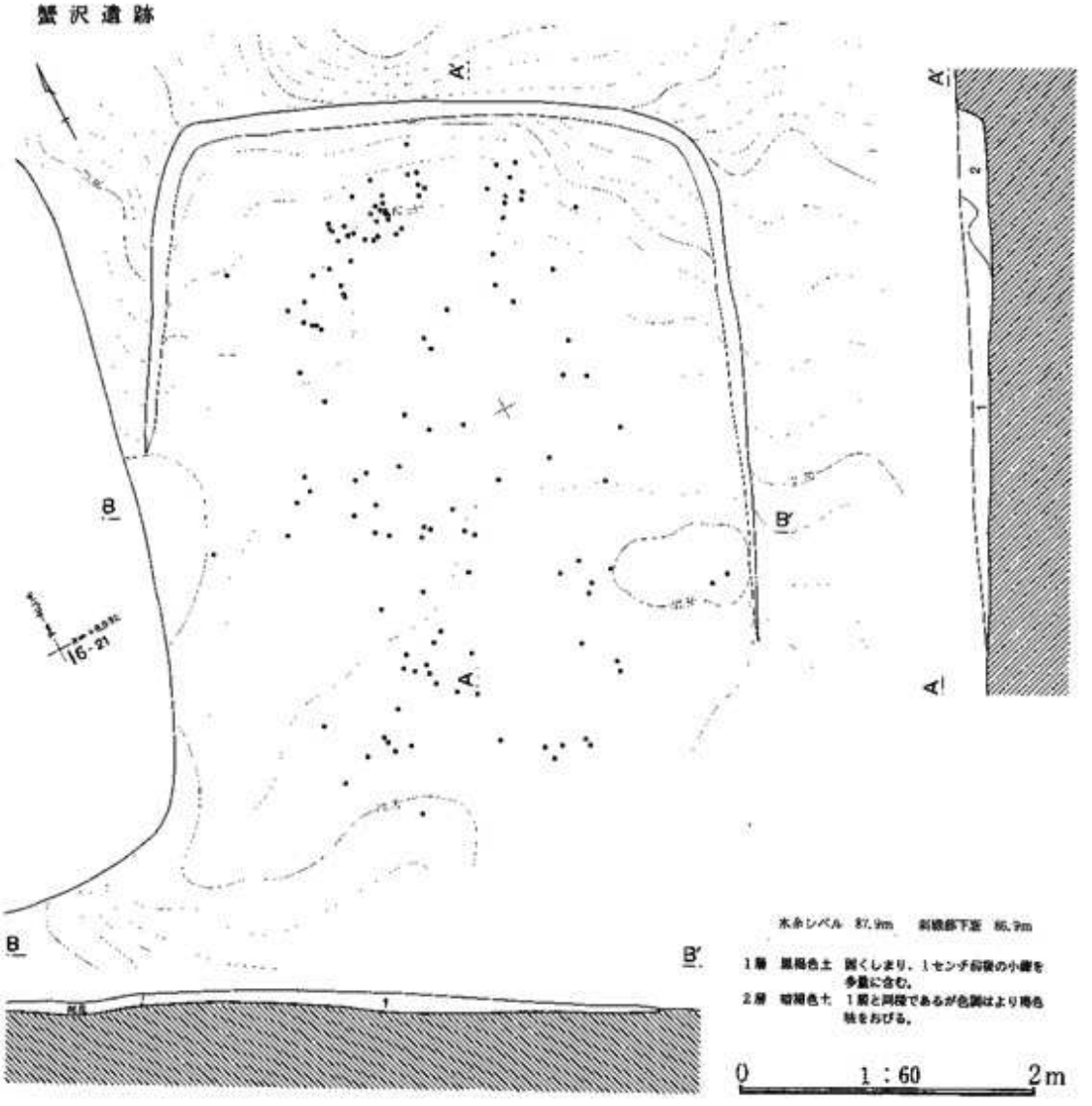

第25図　第17号住居跡出土遺物

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 高坏 | 17.8 | 9.7 | — | s | rb | B | 80 | 内外面に赤彩痕。 |
| 2 | 一底部 | — | 6.3 | 6.8 | s | do | B | 40 | |
| 3 | 一底部 | — | 6.7 | 8.5 | bs | do | B | 30 | |
| 4 | 一底部 | — | 15.6 | 17.2 | ws | do | B | 40 | |

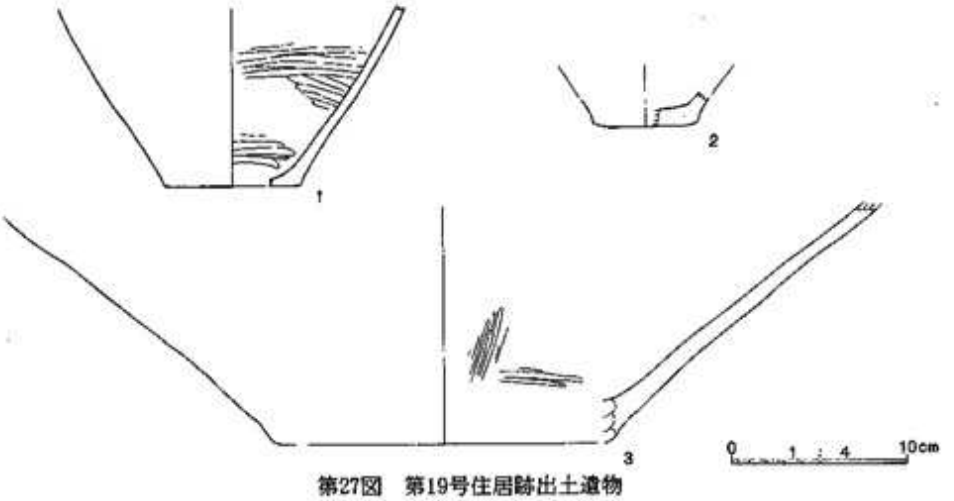
第７表　第17号住居跡出土遺物

**第19号住居跡**

南向きの尾根線上、Ｉ６グリッドにおいて確認されている。第20号住居跡と重複し、同住居跡より先行するものであるようだが、本住居南西部壁の立ち上がりを検出することができなかったため切り合い関係は不明瞭である。検出できた壁は長さ4.7m、最深部の残存壁高は約22cmである。形態は東西方向にやや長い長方形になるものと思われる。確認面の標高は約87.8m、床面の対水平角は約２度である。




第26図　第19号住居跡




第27図　第19号住居跡出土遺物

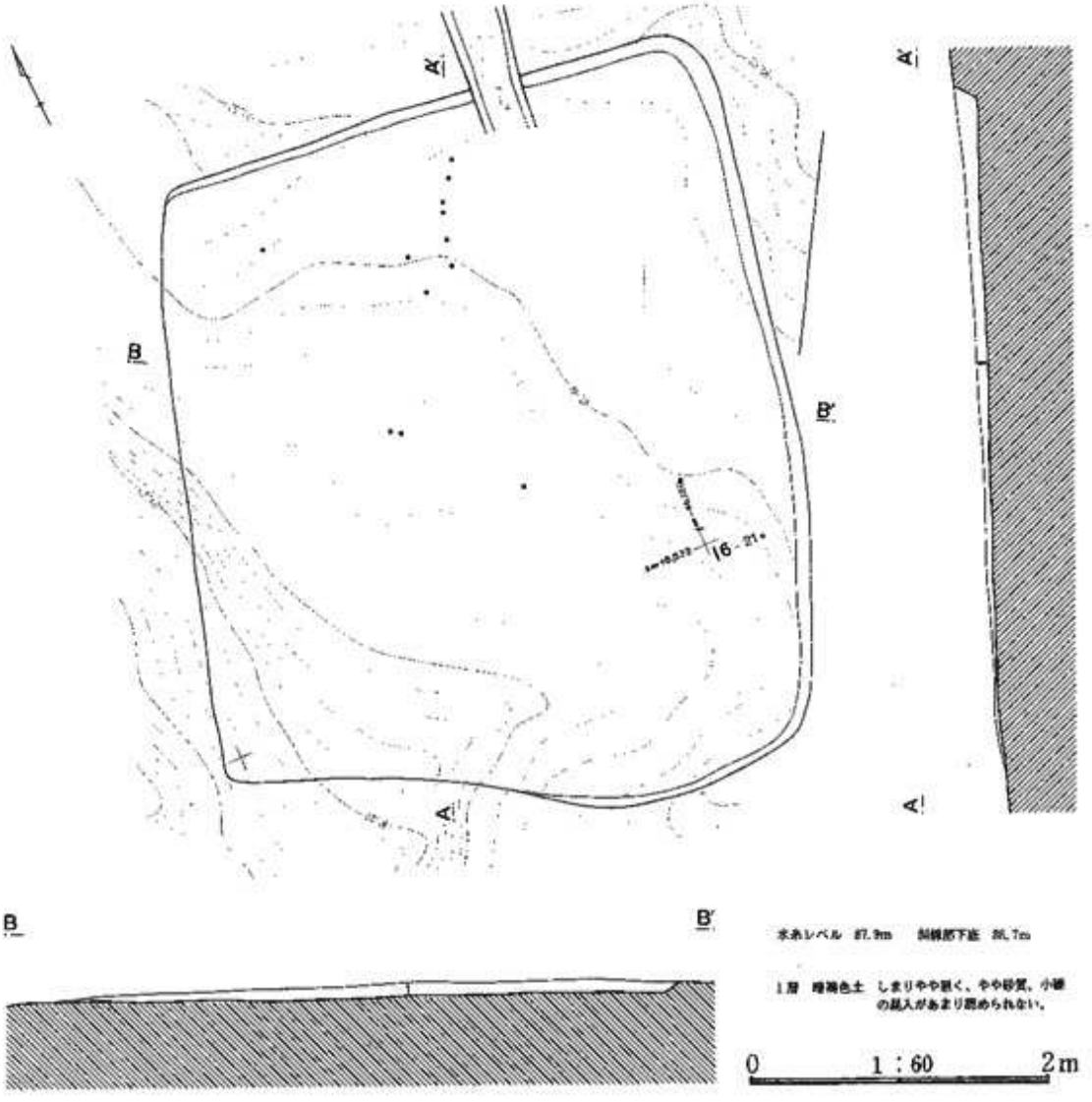
| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 一底部 | — | 10.0 | (7.6) | ws | o | B | 30 | |
| 2 | 一底部 | — | 1.6 | (6.0) | ws | o | B | 30 | |
| 3 | 一底部 | — | 13.4 | (18.3) | ws | do | B | 30 | |

第8表　第19号住居跡出土遺物

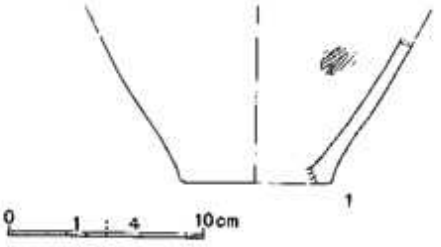
**第20号住居跡**

尾根線から南西向きに傾斜が始まる付近のＩ５、Ｉ６グリッドにまたがって確認されている。住居南西側は不明瞭であるが、規模は5.6×4.9m程度で、形態はややいびつな長方形となるものと思われる。残存壁高は約12cm、確認面の標高は約87.6m、床面の対水平角は約１度である。

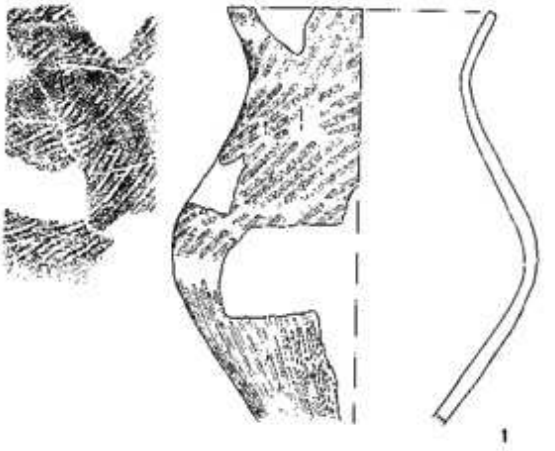
第19号住居跡、第１号溝跡と切り合っているが、本住居は両者より古期に位置づくものと思われる。




第28図　第20号住居跡




第29図　第20号住居跡出土遺物




第30図　第１号土坑出土遺物

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器　高 | 底　径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 一底部 | — | 7.4 | (7.5) | ws | o | B | 30 | |

第９表　第20号住居跡出土遺物

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器　高 | 底　径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | (13.7) | 21.2 | — | bw | do | B | 50 | 付加条第１種２本巻（０段多条単節ＬＲ＋２ｒ）。口唇上縄文施文。 |

第10表　第１号土坑出土遺物

**第１号土坑**

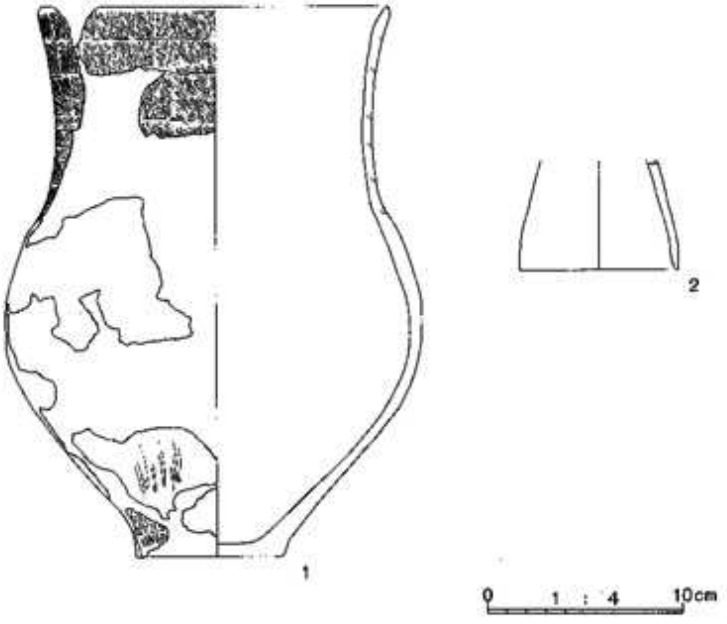
Ｌ６グリッドにおいて第17号住居跡に隣接して確認されている。規模は0.7×0.6mを測り、形態はほぼ円形となる。残存壁高は約30cm、確認面の標高は約84.2mを測る（土坑の平面図、断面図は第24図参照）。

土坑内から出土した土器は、付加条第１種２本巻の原体によるものと思われる特徴的な縄文が施文され、第17号住居跡から出土した土器片と接合している。第17号住居跡に付随する土坑である可能性が高い（第17号住居跡参照）。

**その他の遺構出土遺物**

以下に示す遺物は、弥生時代以外の遺構から検出された弥生時代の遺物である。ほとんどは奈良時代の住居跡から確認されたものであるが、それぞれの遺構に本来的に伴うと思われる遺物よりも弥生時代の遺物の方が数量的に多く確認されている遺構も少なくない。弥生時代の遺構に奈良時代の遺構が重複し、新期の遺構は確認することができても、結果的に弥生時代の遺構を識別することはできなかったという例も含まれている可能性が考えられる。

それぞれの遺構の実測図は後節に譲ることとし、ここでは遺物実測図のみを図示したい。




第31図　第５号住居跡出土遺物

### 第５号住居跡

カマドをもつ奈良時代の住居跡であろうと思われるが（第47図参照）、奈良時代の遺物は少なく図示できるものはない。器形が復元できる吉ケ谷期の甕等が出土しているので吉ケ谷期の遺構と重複している可能性も考えられるが、調査で確認することはできなかった。第31図の甕の出土位置は第47図中に示してある。

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | 17.8 | 28.0 | — | s | do | C | 70 | 0段多条単節ＲＬ。輪積痕跡顕著。風化顕著。 |
| 2 | 高坏？ | — | 5.5 | 8.0 | s | o | B | 30 | |

第11表　第５号住居跡出土遺物

### 第６号住居跡

カマドをもつ奈良時代の住居跡であろうと思われるが（第48図参照）、同期の遺物は第５号住居跡同様少なく、図示できるものはない。第48図中にドットで示した遺物はほとんどが吉ケ谷期のものである。吉ケ谷期の遺構と重複していた可能性も考えられるが調査で確認することはできなかった。

器形が復元できる鉢等が出土している。

第32図　第６号住居跡出土遺物

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 鉢 | (14.2) | 7.8 | 4.9 | ws | do | B | 40 | |
| 2 | 鉢 | (21.6) | 2.4 | — | ds | do | B | 20 | |
| 3 | 一底部 | — | 1.1 | 4.4 | rb | do | B | 30 | |

第12表　第６号住居跡出土遺物

### 第18号住居跡

住居の１辺が失われておりカマドも確認されていないが、須恵器の坏、蓋等が検出されているため奈良時代の住居跡と思われる。僅かに弥生時代の遺物も検出されているので第33図に示す。

### 第21号住居跡

カマドが確認されており、奈良時代の住居跡であろうと思われるが同期の遺物は少なく、図示できるものはない。第58図にドットで示した遺物はほとんどが吉ケ谷期のものである。

第33図　第18号住居跡・第21号住居跡出土遺物

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 壺 | — | 4.8 | — | ws | do | B | 30 | 凸帯上に縄の圧痕。外面凸帯下及び内面赤彩 |

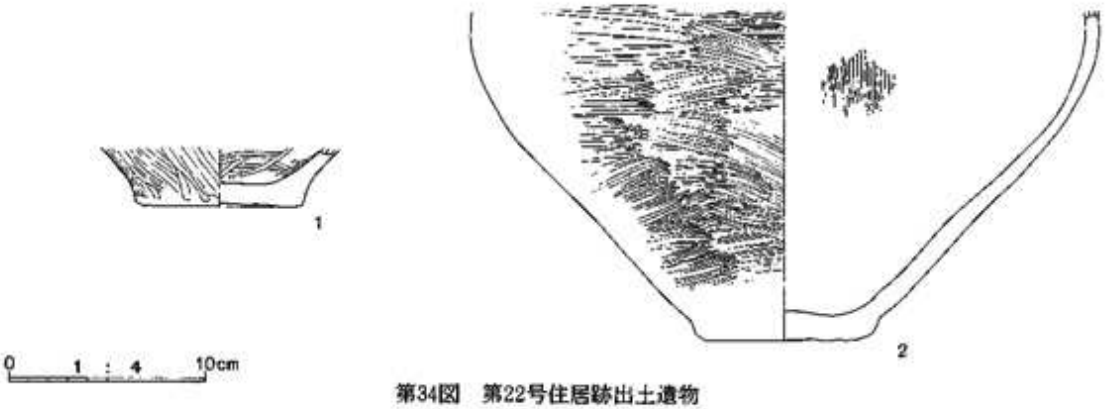
第13表　第18号住居跡出土遺物

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 壺 | (17.1) | 3.9 | — | ws | dg | B | 30 | |
| 2 | 壺 | (21.0) | 6.7 | — | s | o | B | 40 | |

第14表　第21号住居跡出土遺物

### 第22号住居跡

Ｆ６グリッドの南西部で確認された住居跡であるが谷に堆積した黒色土中に構築されており、プラン、壁の立ち上がりを把握することができなかったので遺物のみ第34図に示す。




第34図　第22号住居跡出土遺物

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 一底部 | — | 2.9 | 7.7 | ws | do | B | 70 | |
| 2 | 壺 | — | 16.8 | 8.0 | bs | o | B | 40 | |

第15表　第22号住居跡出土遺物

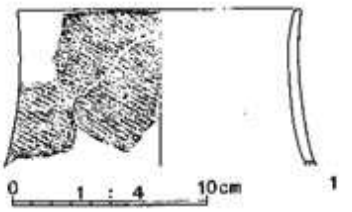
グリッド出土遺物

遺構内からの出土遺物の他に、ある程度量的にまとまって特定のグリッドから検出された遺物がある。本遺跡は、地山の性質上遺構確認が困難である場合も少なくないため、以下に図示する各グリッド出土の遺物も本来は住居等の遺構に伴うものであった可能性が考えられる。なお、F６グリッド出土遺物は本来第16号住居跡に帰属するものと思われるため、第22図に示した。

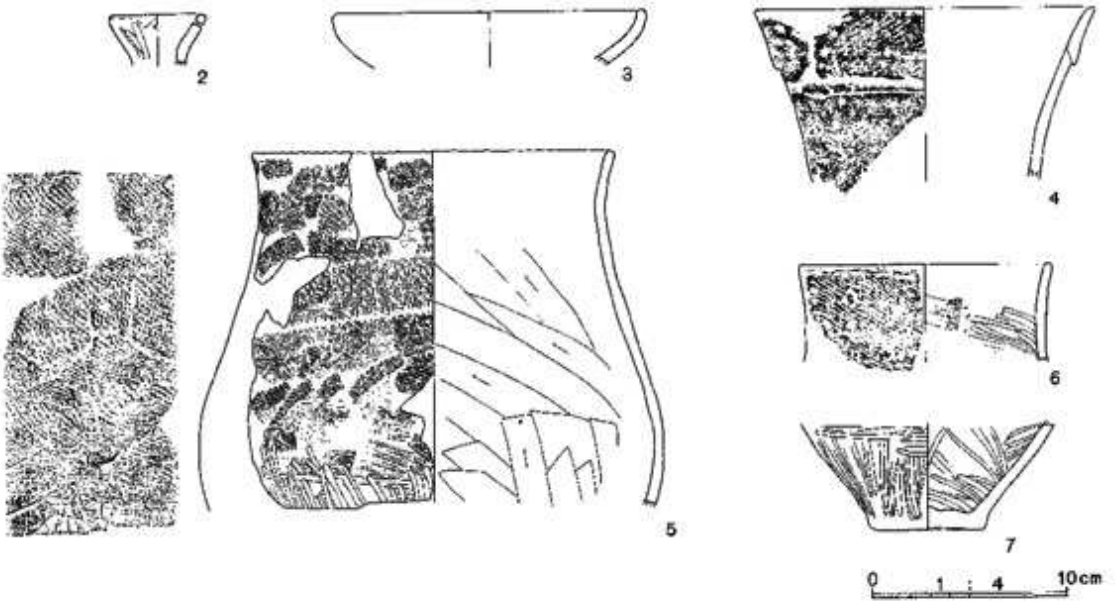
F８グリッド

本グリッドからは比較的まとまった数の遺物が検出されている。

本グリッドから出土した土器片の中には第16号住居跡、F６グリッドから出土した土器片と接合するものもある。第21図12、14はそうした例のものである。第36図５にも第16号住居跡の破片が接合している。




第35図　Ｉ６グリッド出土遺物




第36図　Ｆ８グリッド出土遺物

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | (14.6) | 8.0 | — | wb | do | B | 40 | Ｉ６グリッド。０段多条単節ＲＬ。口唇上縄文施文。口唇下なで。輪海痕顕著。 |
| 2 | ミニ壺 | 5.0 | 2.6 | — | ws | o | B | 90 | 以下Ｆ８グリッド。２ヶ所に焼成前穿孔（径２㎜）。 |
| 3 | 高坏？ | (16.1) | 2.8 | — | s | o | B | 20 | 内外面赤彩。 |
| 4 | 壺 | (18.2) | 18.2 | — | ws | o | C | 30 | ０段多条単節ＬＲ（複合口縁部のみ）。 |
| 5 | 甕 | (17.5) | 8.9 | — | wb | o | B | 70 | ０段多条単節ＲＬ複数原体使用（有結節含む）。口唇上縄文施文。内面削り。 |
| 6 | 甕 | (13.0) | 5.0 | — | ws | do | B | 40 | ０段多条単節ＲＬ。口唇上縄文施文。口唇下なで。輪積痕顕著。 |
| 7 | 一底部 | — | 5.4 | — | bw | do | B | 40 | |

第16表　グリッド出土遺物

## 3　奈良時代の遺構と遺物

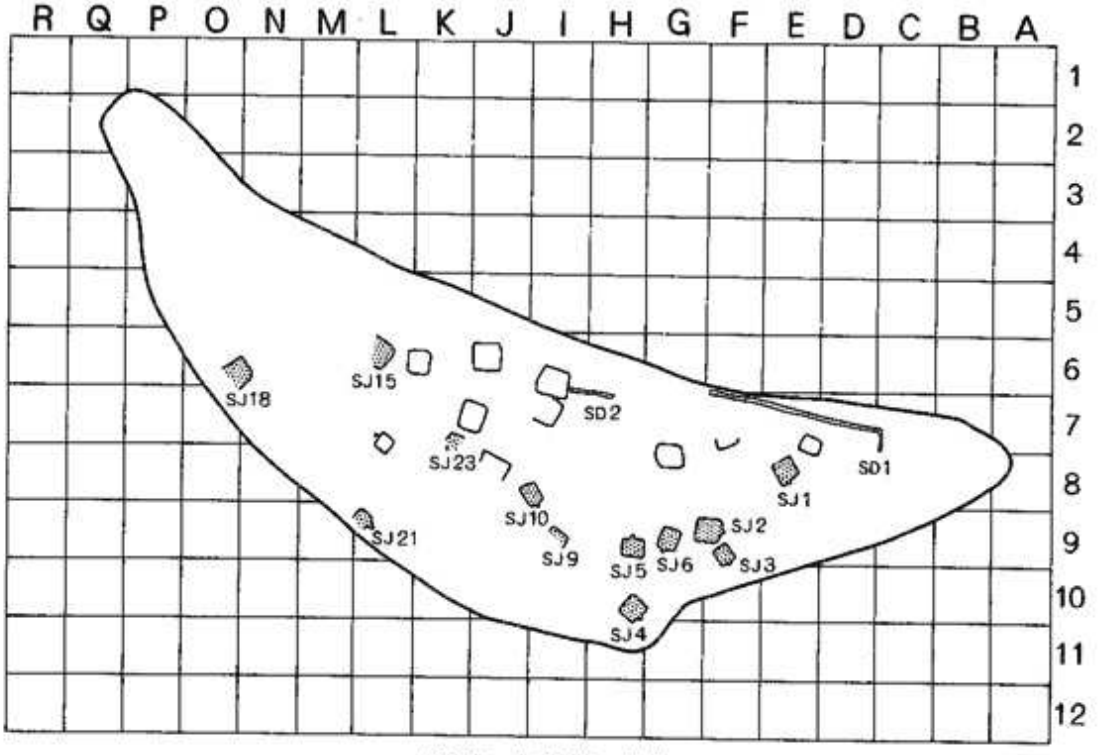
確認された奈良時代の遺構は住居跡12軒と、溝跡２条である。弥生時代の住居跡は主として尾根線伝いに分布していたのに対し、奈良時代の住居跡は尾根線上から東、或いは南東向きの斜面部にかけてで確認されている。

斜面に作られた住居が多いため遺存状態は必ずしも良好とは言い難く、標高の低い側の壁が流失している住居も多い。そのため４軒の住居跡はカマドを検出することができなかったが、他の８軒の住居跡はカマドが遺存している。柱穴が明瞭に識別された住居跡はほとんどなく、周溝が確認された住居跡は第４号住居跡と第23号住居跡の２軒だけである。

住居内におけるカマドの位置および主軸方向は方位よりもむしろ斜面の傾斜方向や等高線の走行に規制されているような印象を受ける。煙り出しという性格上、斜面地に作られた住居の煙道部は、住居内において標高が最も高い場所に位置しそうなものであるが、そうした例は第５号住居跡の１例のみである。他の住居跡は等高線と平行する方向にカマドを持つ場合が多く、第６号住居跡のように住居内の標高が最も低い場所にカマドを構築するものもある。斜面地に形成された住居跡のカマドの位置を考える上での一つの例として興味深い。

### 第１号住居跡

遺跡北部の南に傾斜する尾根線上、Ｅ７グリッドにおいて確認されている。規模は3.9×3.8mを測り、形態はほぼ方形となる。中央部にほぼ方形の掘り込みが確認されており、段をもつ構造と

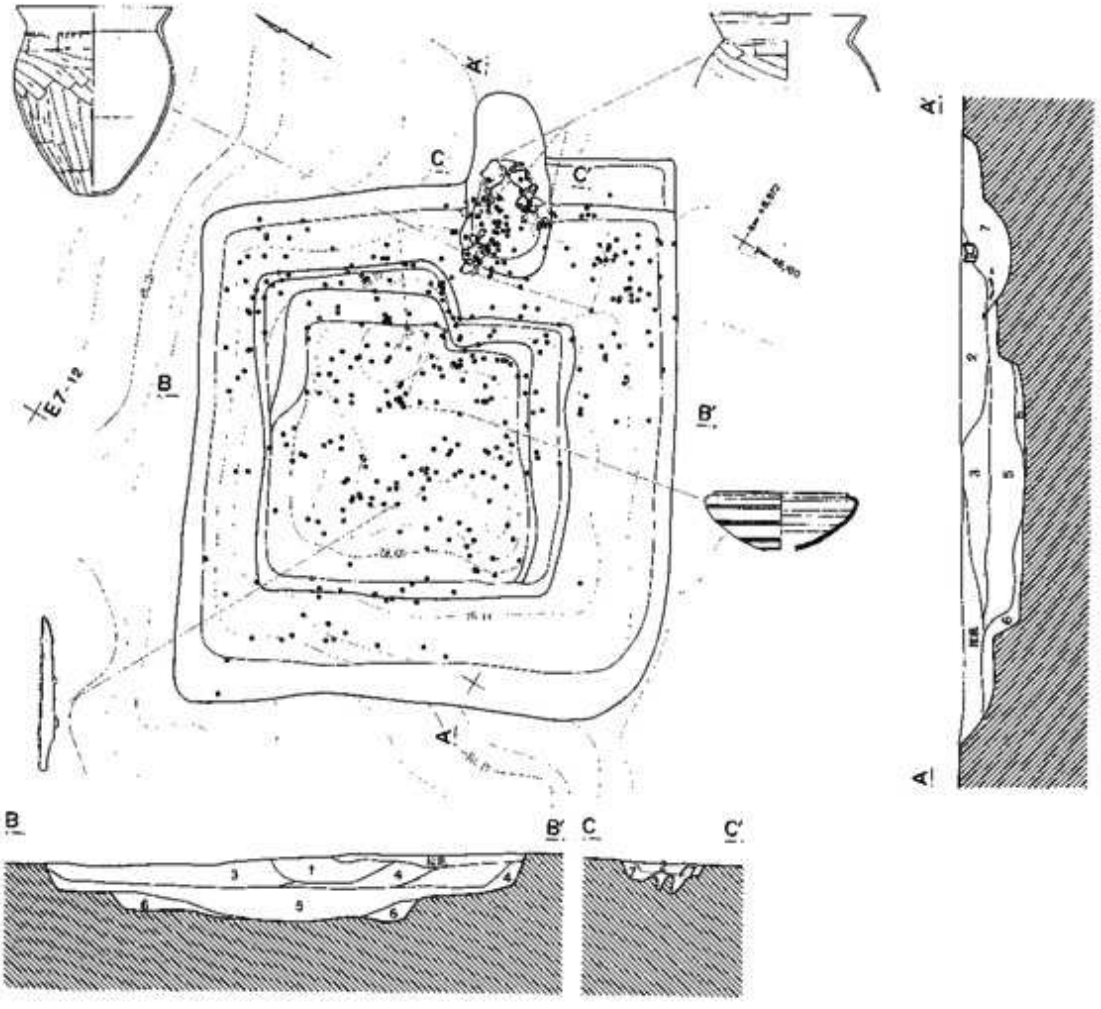



第37図　奈良時代の遺構

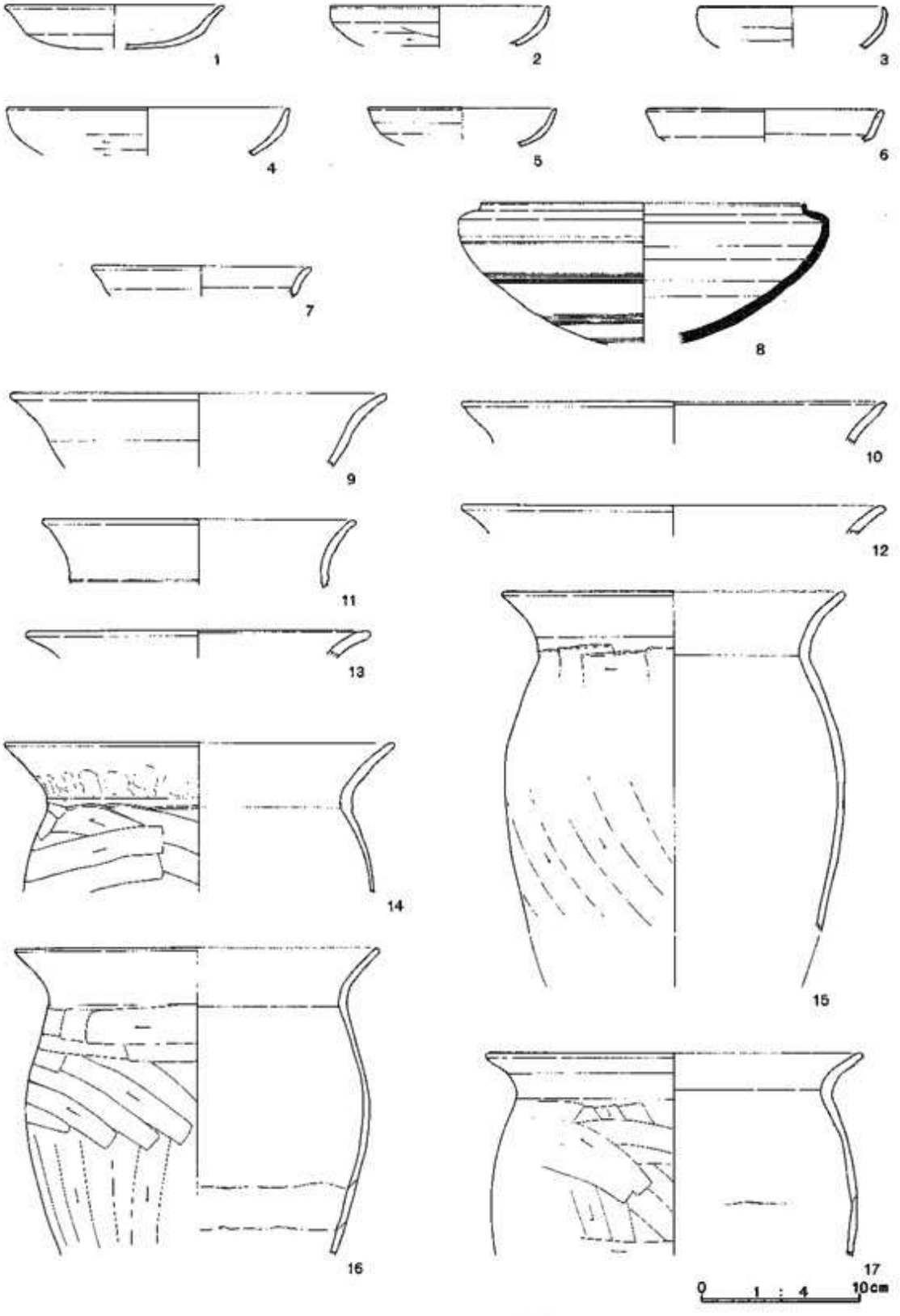
なっている。カマドを意識して掘り込んだものと思われ、カマドに近いへりは屈曲している。土層断面を見る限りにおいて、住居使用時に段構造を有していたようである。最深部の残存壁高は約52cmである。確認面の標高は約88.5m、床面の対水平角は約5度である。本遺跡内の奈良時代の住居跡としては最も標高の高い部分に位置する。

カマドは住居東壁やや南よりに作られ、主軸方向はN—62度—Eである。主軸方向は等高線の走行とほぼ一致する。

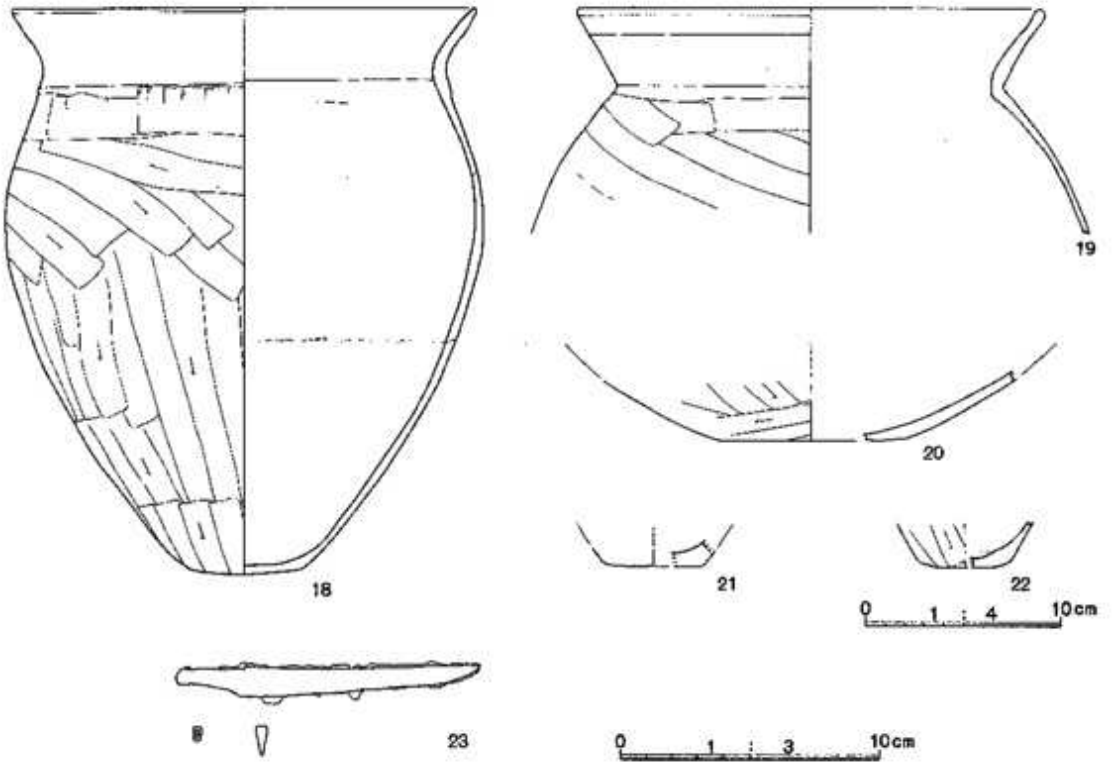
出土遺物は本遺跡内の奈良時代の住居跡としては最も多く、カマド内およびその周辺から土師器甕、中央の掘り込み部内から須恵器の鉢等が検出されている。




第38図　第1号住居跡




第39図　第1号住居跡出土遺物(1)



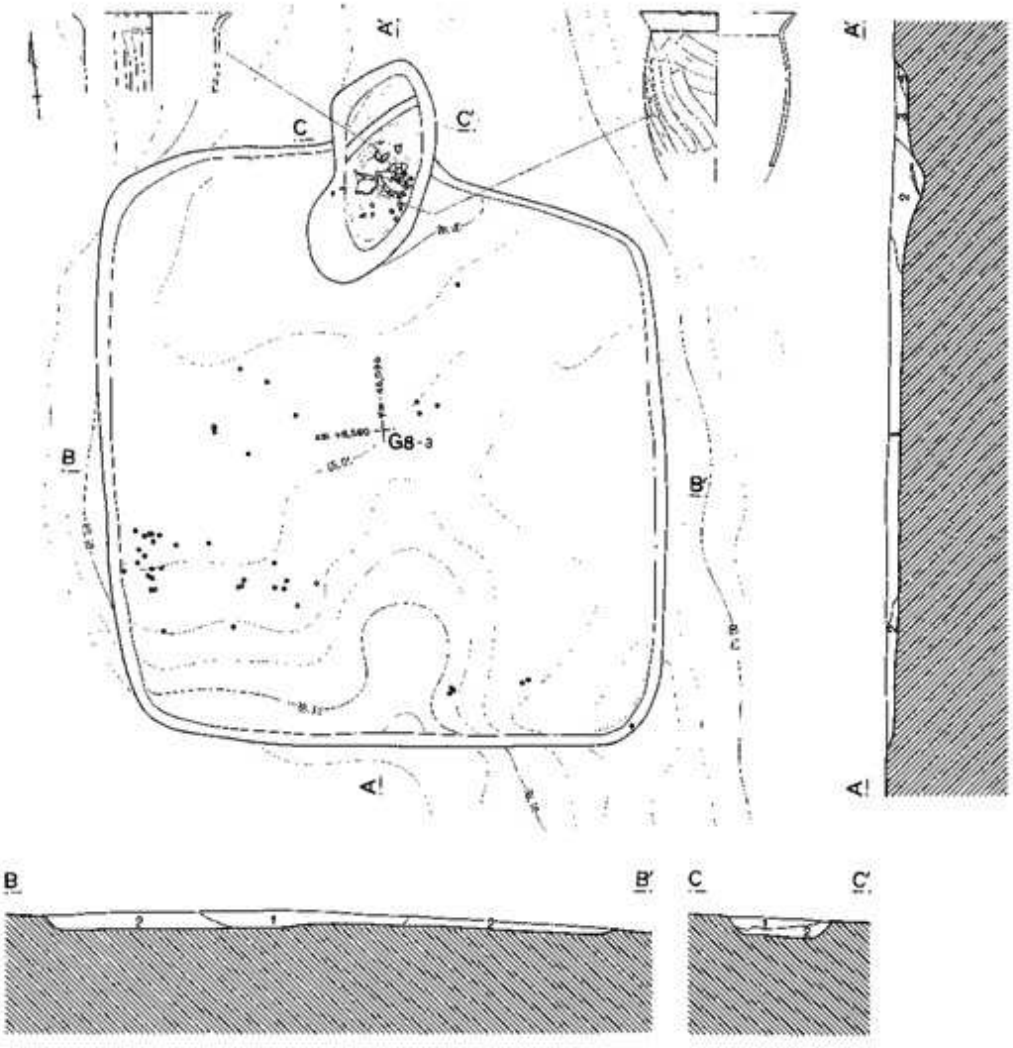

第40図　第1号住居跡出土遺物(2)

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | (14.0) | 2.8 | — | bw | o | B | 30 | |
| 2 | 坏 | (13.9) | 2.7 | — | bw | o | B | 20 | |
| 3 | 坏 | (11.8) | 2.6 | — | b | do | B | 20 | |
| 4 | 坏 | (17.8) | 3.1 | — | b | o | B | 20 | |
| 5 | 坏 | (12.0) | 2.4 | — | b | do | B | 20 | |
| 6 | 坏 | (14.8) | 2.1 | — | bw | do | B | 20 | |
| 7 | 坏 | (14.0) | 1.9 | — | bw | do | B | 20 | |
| 8 | S鉢？ | (20.6) | 8.8 | — | w | g | A | 40 | 短頸壺状の頸部。体部に沈線。銅器の模倣？ |
| 9 | 鉢 | (23.9) | 4.7 | — | w | o | C | 20 | |
| 10 | 甕 | (27.0) | 2.7 | — | wb | o | A | 30 | |
| 11 | 甕 | (19.9) | 4.1 | — | w | o | B | 20 | |
| 12 | 甕 | (26.9) | 1.9 | — | wb | rb | A | 40 | |
| 13 | 甕 | (22.0) | 1.8 | — | bw | do | A | 20 | |
| 14 | 甕 | (24.8) | 9.4 | — | bw | rb | A | 30 | |
| 15 | 甕 | 21.8 | 21.5 | — | bw | o | B | 80 | |
| 16 | 甕 | (23.2) | 19.3 | — | bw | o | A | 30 | |
| 17 | 甕 | (23.9) | 12.8 | — | b | o | A | 30 | |

第17表　第1号住居跡出土遺物(1)

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 18 | 甕 | (23.6) | 28.9 | 5.6 | bw | o | B | 50 | |
| 19 | 甕 | (24.0) | 11.5 | — | w | rb | B | 30 | |
| 20 | 甕 | — | 3.1 | 9.0 | wb | do | B | 30 | |
| 21 | 甕 | — | 0.8 | 4.3 | b | o | B | 10 | |
| 22 | 甕 | — | 2.3 | 3.0 | b | rb | A | 10 | |
| 23 | 刀子 | 長さ11.8、幅1.2、棟幅0.5cm。両関？ | | | | | | | |

第18表　第１号住居跡出土遺物(2)




1層　黒褐色土　しまり悪く砂質。粘性は弱い。数ミリの小礫を多く含む。

2層　暗褐色土　しまり悪く砂質であるが、1層よりもやや粘性がある。小礫の混入は1層よりも少ない。ロームがブロック状に入り込む。

以下カマド（3層～4層）

3層　赤褐色土　しまりは1、2層よりも良く、砂質。小礫はあまり含まない。多量の焼土粒と若干の炭化物を含む

4層　暗褐色土　しまりやや良く、粘質。1～3層よりも褐色が強い。小礫をやや多く含む。ロームが全体に斑状に混じる

水糸レベル　88.3m　　斜線部下底　87.2m

0　1 : 60　3m

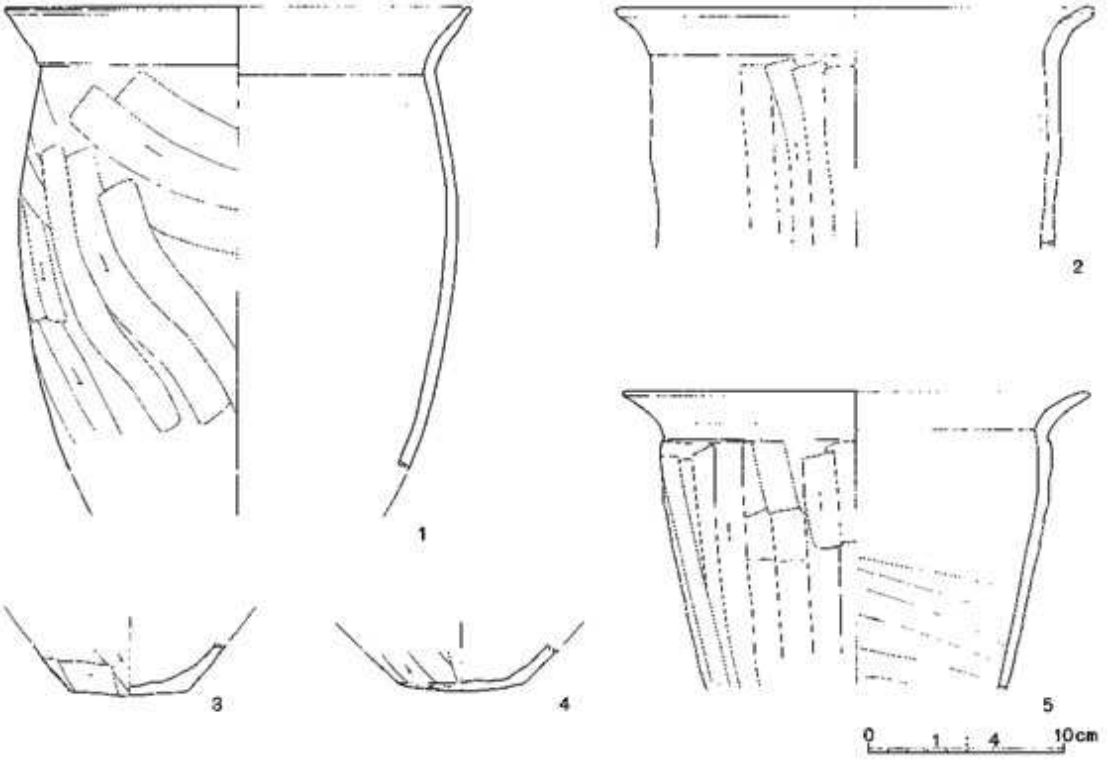
第41図　第２号住居跡

**第2号住居跡**

尾根頂部の平坦部から東向きに傾斜が始まる付近、F8、G8グリッドにおいて第3号住居跡に隣接して確認されている。規模は4.5×4.4mを測り、形態はほぼ方形となる。残存壁高は約20cm、確認面の標高は約88.1m、床面の対水平角は約3度である。

カマドは住居北壁ほぼ中央に作られ、主軸方向はN—15度—Eである。主軸方向は等高線の走行にほぼ一致する。

器形が復元できる遺物のほとんどはカマド内のもので、土師器の甕等が検出されている。



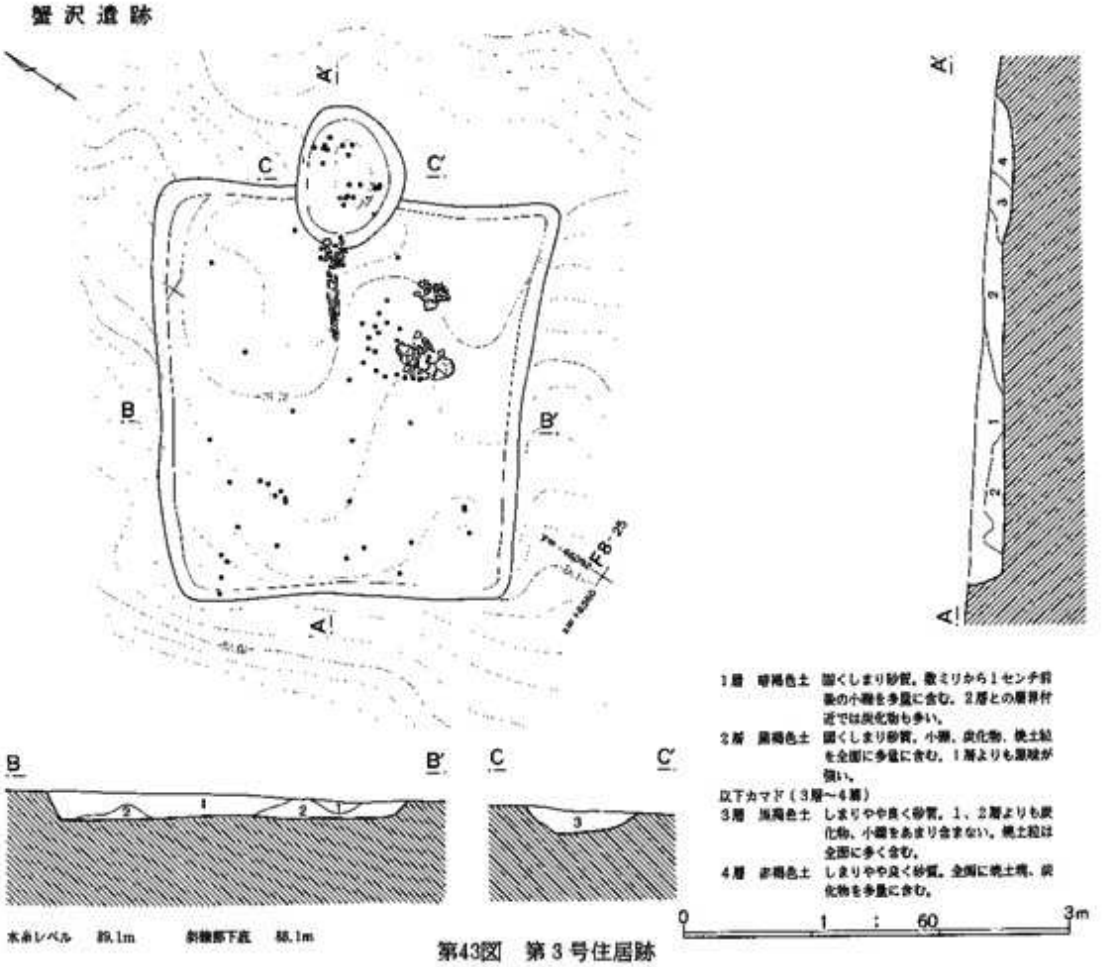

第42図　第2号住居跡出土遺物

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | (24.0) | 23.5 | — | b | o | B | 50 | |
| 2 | 甕 | (24.5) | 12.2 | — | wb | do | B | 20 | |
| 3 | 甕 | — | 2.6 | 5.7 | bw | o | B | 70 | |
| 4 | 甕 | — | 2.0 | 6.0 | w | o | B | 40 | |
| 5 | 甕 | (23.9) | 15.3 | — | SWB | o | B | 40 | |

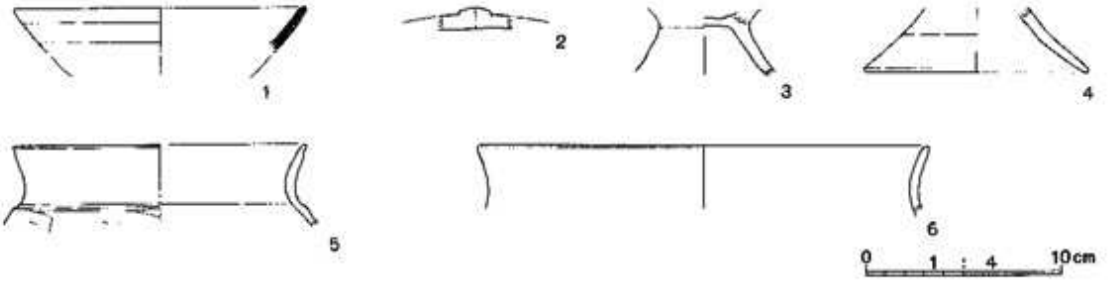
第19表　第2号住居跡出土遺物

**第3号住居跡**

東向き斜面部F8グリッドにおいて確認されている。規模は3.3×3.1mを測り、形態はほぼ方形となる。残存壁高は約22cm、確認面の標高は約88.9m、床面の対水平角は約1度である。




第43図　第3号住居跡




第44図　第3号住居跡出土遺物

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | S椀 | (15.0) | 2.2 | — | w | gb | C | 10 | |
| 2 | 蓋 | — | — | — | w | o | B | 10 | |
| 3 | 台付甕 | — | 3.0 | — | bw | o | B | 70 | |
| 4 | 台付甕 | — | 3.3 | 11.5 | bw | o | B | 40 | |
| 5 | 台付甕 | (15.0) | 4.1 | — | bw | o | A | 40 | |
| 6 | 甕 | (23.2) | 3.2 | — | wb | o | C | 20 | |

第20表　第3号住居跡出土遺物

カマドは住居東壁のほぼ中央部に作られ、主軸方向はN－60度－Eである。住居内で最も標高が低い部分にカマドが作られている。須恵器の椀、土師器の台付き甕等が検出されている。

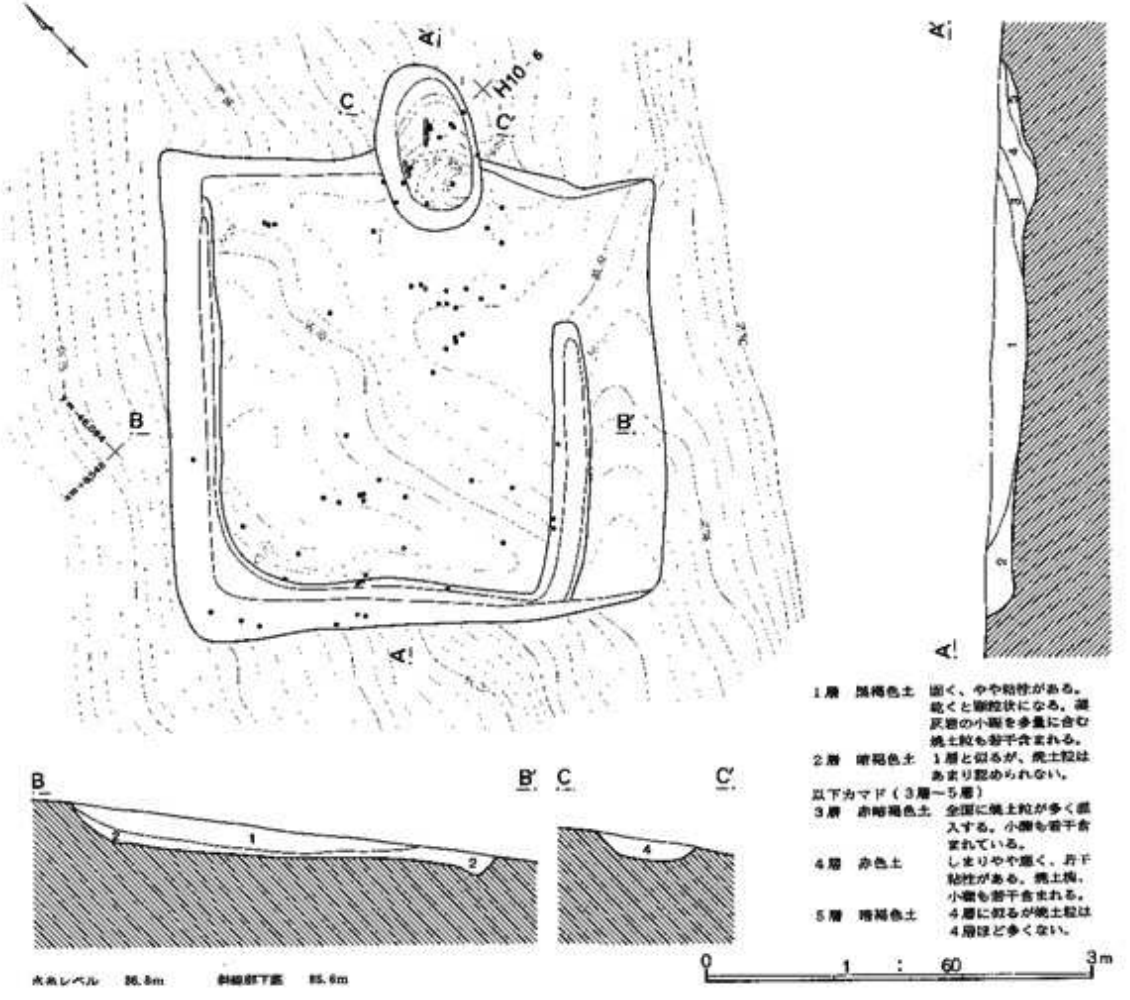
炭化材が確認されており、焼失家屋の可能性も考えられる。

### 第4号住居跡

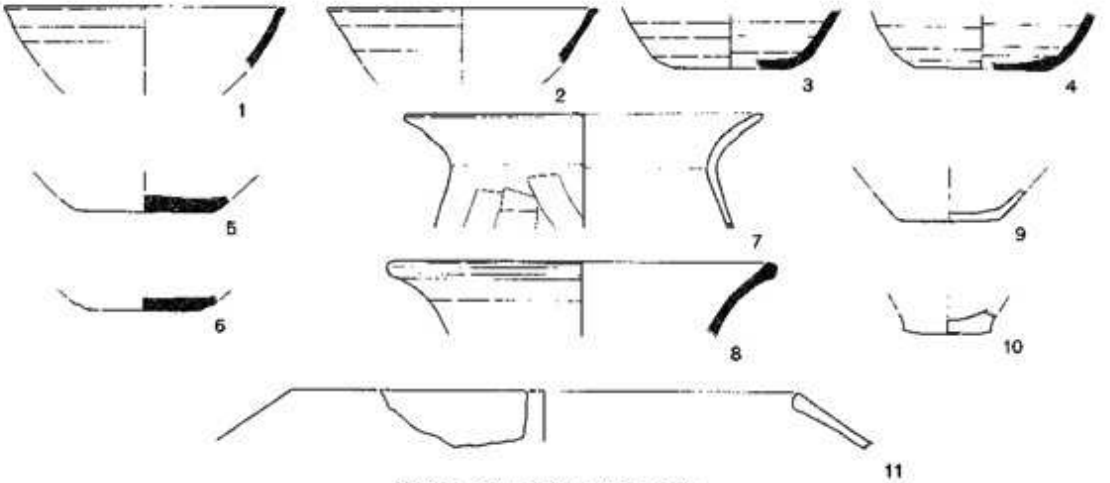
東向き斜面部H9グリッドにおいて確認されている。規模は3.4×3.7mを測り、形態は長方形となる。残存壁高は約24cm、確認面の標高は約86.7m、床面の対水平角は約5度である。

カマドは住居北東壁中央やや南よりに作られ、主軸方向はN－42度－Eである。住居内においても最も標高が低い部分にカマドは位置する。

住居北東壁および東角を除いて周溝が巡っている。北東壁および南西壁の立ち上がりは周溝の外まで確認されていることから、南東側の周溝は壁沿いではなく、壁のやや内側を巡っていたようである。須恵器の坏、椀等の他に鉄片が確認されている。鉄片は内傾する器の口縁部と思われる。鉄釜の口縁部の可能性が考えられる。




第45図　第4号住居跡




第46図　第４号住居跡出土遺物

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | S椀 | (14.4) | 3.1 | — | w針 | lg | A | 20 | |
| 2 | S椀 | (13.9) | 2.8 | — | w針 | g | A | 10 | |
| 3 | S坏 | — | 3.0 | (5.9) | w針 | o | A | 20 | 底部回転糸切り後回転ヘラ削り。 |
| 4 | S坏 | — | 2.9 | (7.0) | w針 | gb | A | 20 | 底部回転糸切り後回転ヘラ削り。火襷痕有。 |
| 5 | S坏 | — | 0.9 | 6.9 | w針 | rb | B | 80 | 底部回転糸切り後回転ヘラ削り。 |
| 6 | S坏 | — | 0.8 | (5.8) | w針 | g | A | 80 | 底部全面回転ヘラ削り。 |
| 7 | 甕 | (18.4) | 5.8 | — | w | o | B | 30 | |
| 8 | S甕 | (19.2) | 3.7 | — | w | dg | B | 20 | |
| 9 | 甕 | — | 1.5 | 5.1 | wb | o | B | 70 | |
| 10 | 甕 | — | 1.1 | 4.6 | bw' | o | B | 100 | |
| 11 | 鉄釜？ | (26.0) | 2.9 | — | — | — | — | 10 | 断定できないが鉄釜の口縁部と思われる。 |

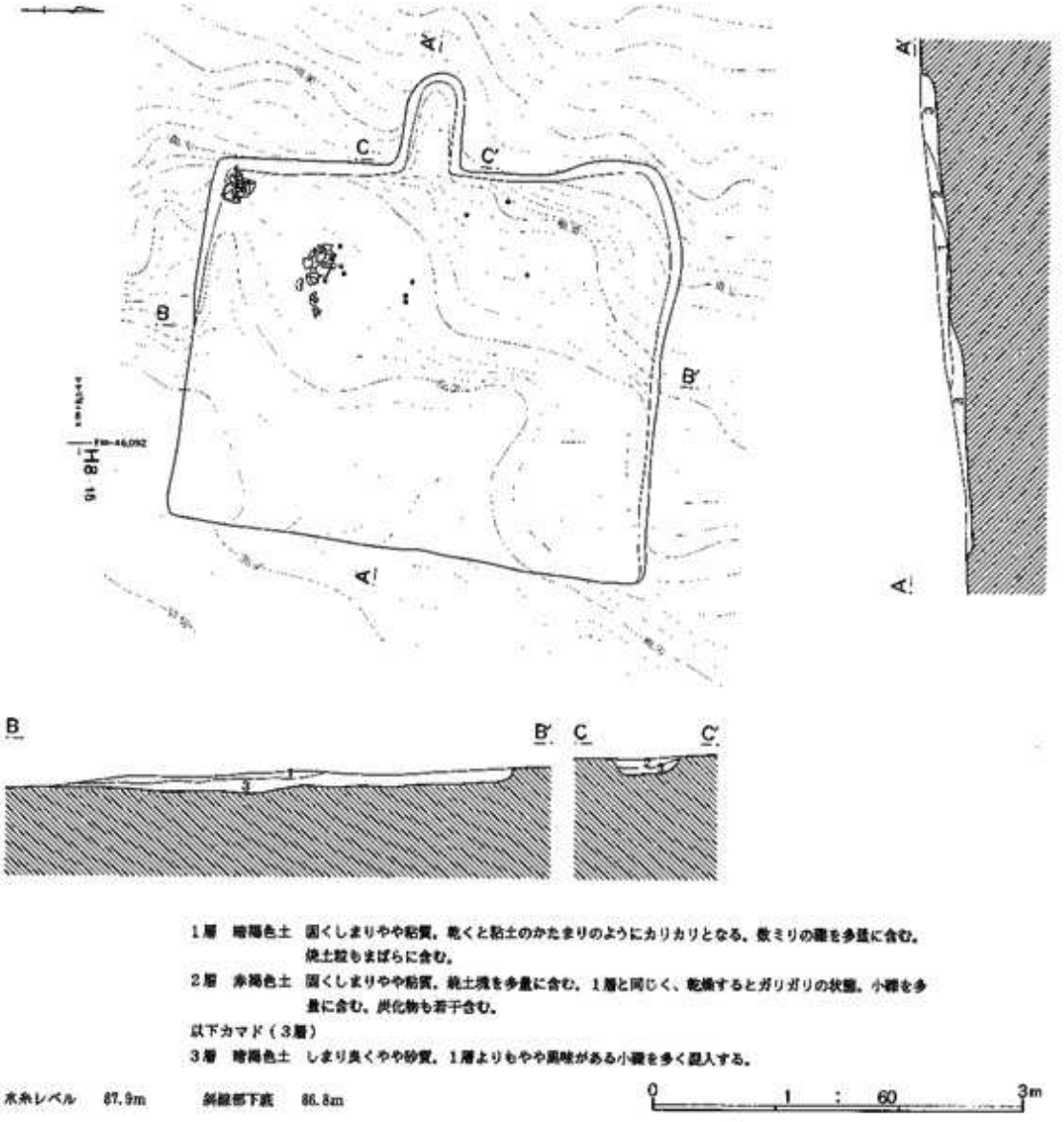
第21表　第４号住居跡出土遺物

### 第５号住居跡

尾根頂部の平坦部から東向きに傾斜が始まる付近、Ｈ８グリッドにおいて確認されている。規模は3.9×3.4mを測り、形態は南北にやや長い長方形となるようだが、東壁側は斜面のため流失しており、規模および形態は確定的ではない。残存壁高は約16cm、確認面の標高は約80.8m、床面の対水平角は約５度である。

カマドは住居西壁ほぼ中央に作られ、主軸方向はN－96度－Eである。

奈良時代の遺物は土師器の小片が少量出土しただけで、器形が復元できるものは含まれていないが、弥生時代の甕等が検出されている（第31図参照）。弥生時代の遺物も安定した状態で確認され、器形復元もある程度可能なものであるため、識別することはできなかったが、本住居は弥生時代の住居跡に奈良時代の住居が重複していた可能性が考えられる。第47図中の遺物の出土状態は弥生時代のものを参考までに示したものである。



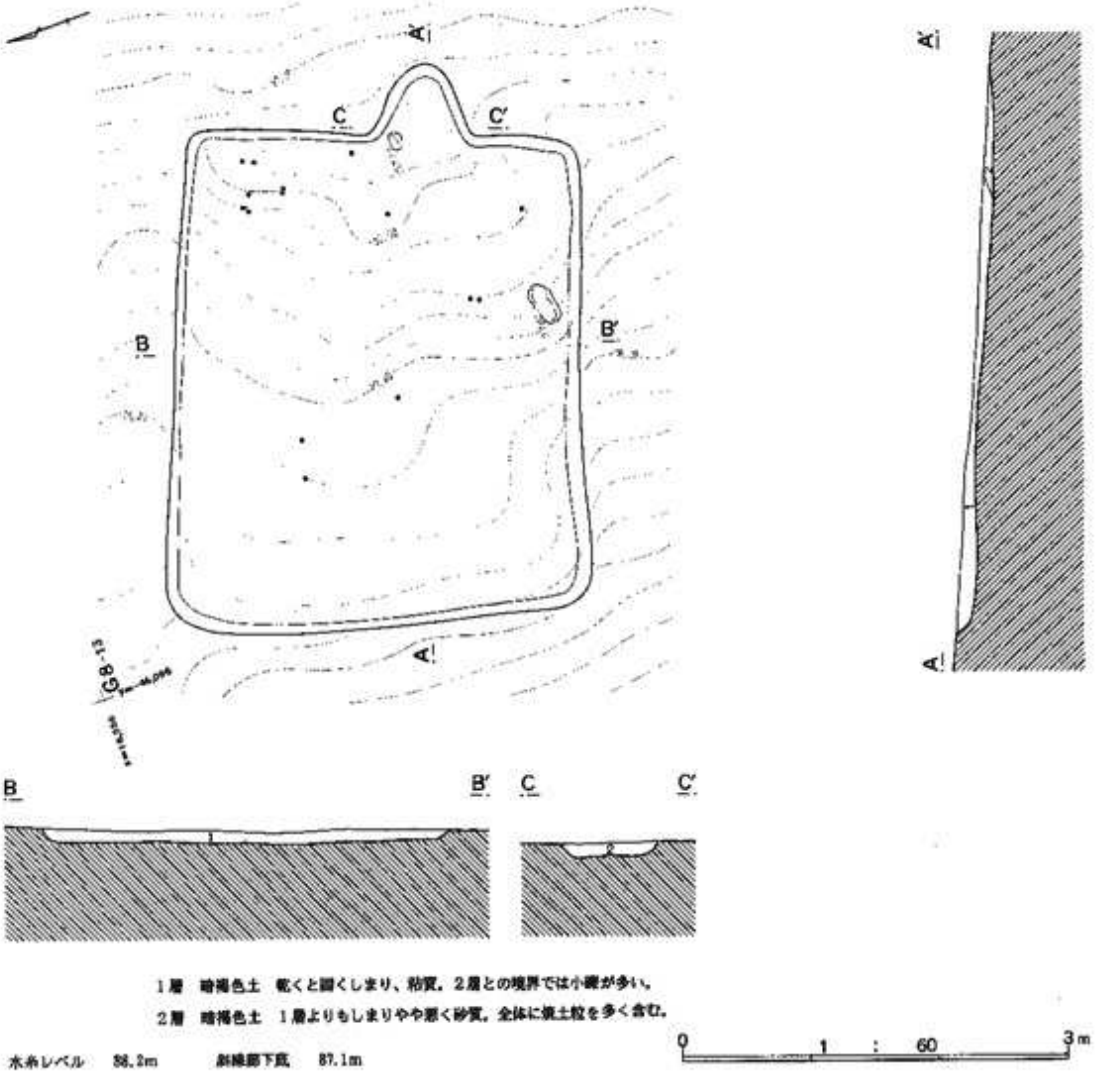

第47図　第５号住居跡

## 第６号住居跡

尾根頂部の平坦部から東向きに傾斜が始まる付近、Ｇ８グリッドにおいて第５号住居跡に隣接して確認されている。規模は3.9×3.3mを測り、形態は東西にやや長い長方形となる。残存壁高は約12cm、確認面の標高は約88.1m、床面の対水平角は約４度である。

カマドは住居東壁中央やや南よりに作られ、主軸方向はN―119度―Eである。

奈良時代の遺物は土師器の小片が少量出土しただけで、器形が復元できるものは含まれていない。出土した遺物はむしろ弥生時代のものの方が多く、鉢等が検出されている（第32図参照）。識別することはできなかったが、第５号住居跡同様弥生時代の住居跡に奈良時代の住居跡が重複していた可能性も考えられる。



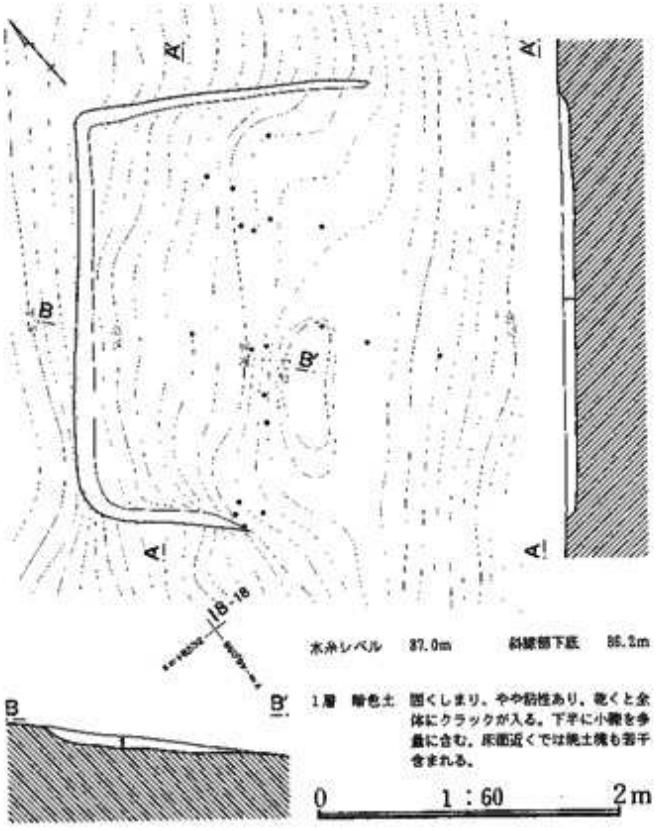

第48図　第６号住居跡

**第９号住居跡**

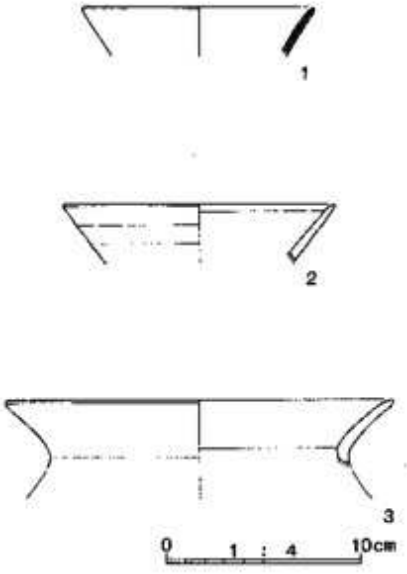
尾根頂部の平坦部からやや下った南東向き斜面、Ｉ８グリッドにおいて確認されている。住居の半分は斜面のため流失しており全体像は把握できないが、残存する壁長は3.4mを測る。形態は方形あるいは長方形になるものと思われる。残存壁高は約12cm、確認面の標高は約87.0m、床面の対水平角は約５度である。確認できた壁の方向は等高線の走向とほぼ一致する。

カマドは確認されていないが、隣接する第４号住居跡、第10号住居跡同様、北東壁の中央やや東よりになる可能性が高いものと思われる。その場合、主軸方向はN―45度―E程度になるものと思われる。

須恵器椀、土師器甕等が出土している。




第49図　第９号住居跡




第50図　第９号住居跡出土遺物

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器　高 | 底　径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | S椀 | (11.9) | 2.5 | — | bw | lg | C | 10 | |
| 2 | 椀 | (14.0) | 3.0 | — | w | do | C | 10 | |
| 3 | 甕 | (19.8) | 3.4 | — | w | o | B | 10 | |

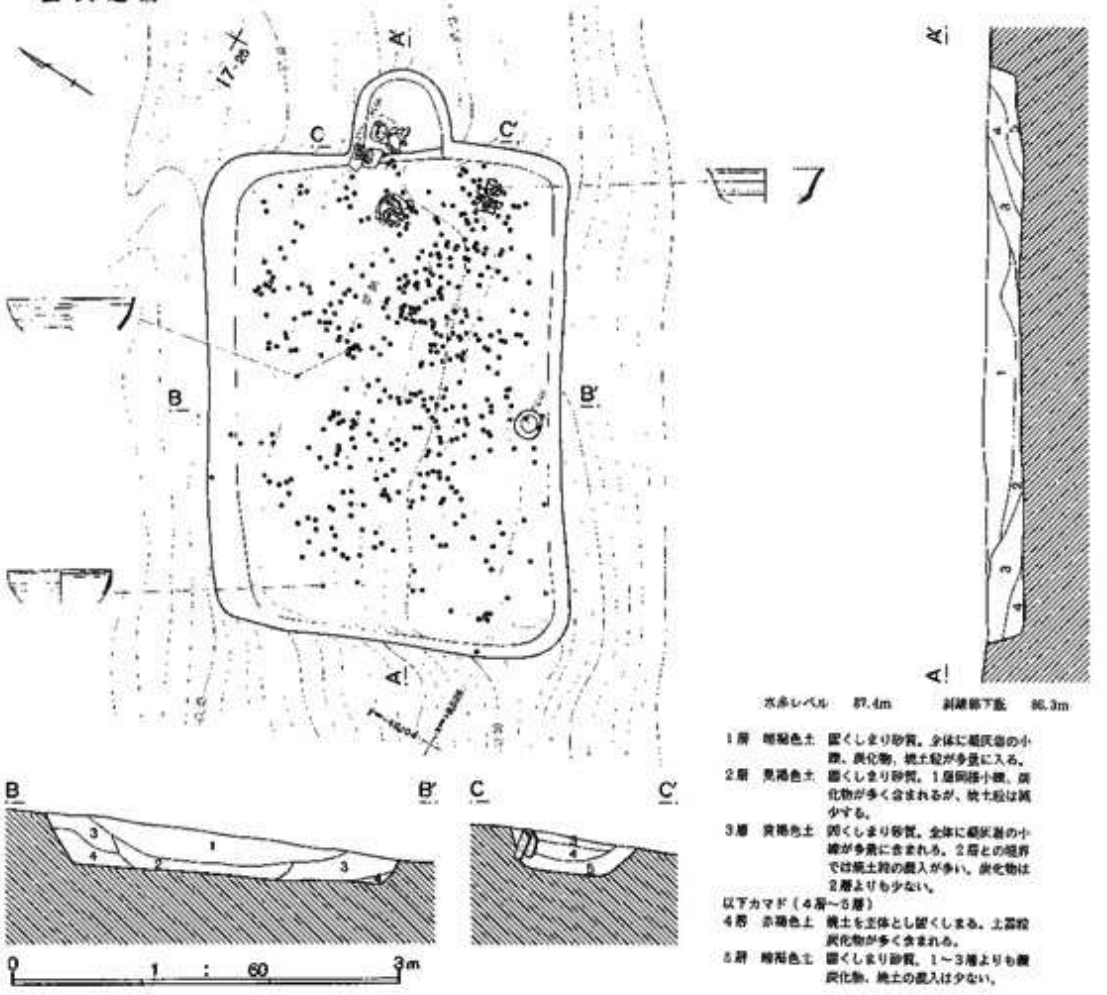
第22表　第９号住居跡出土遺物

## 第10号住居跡

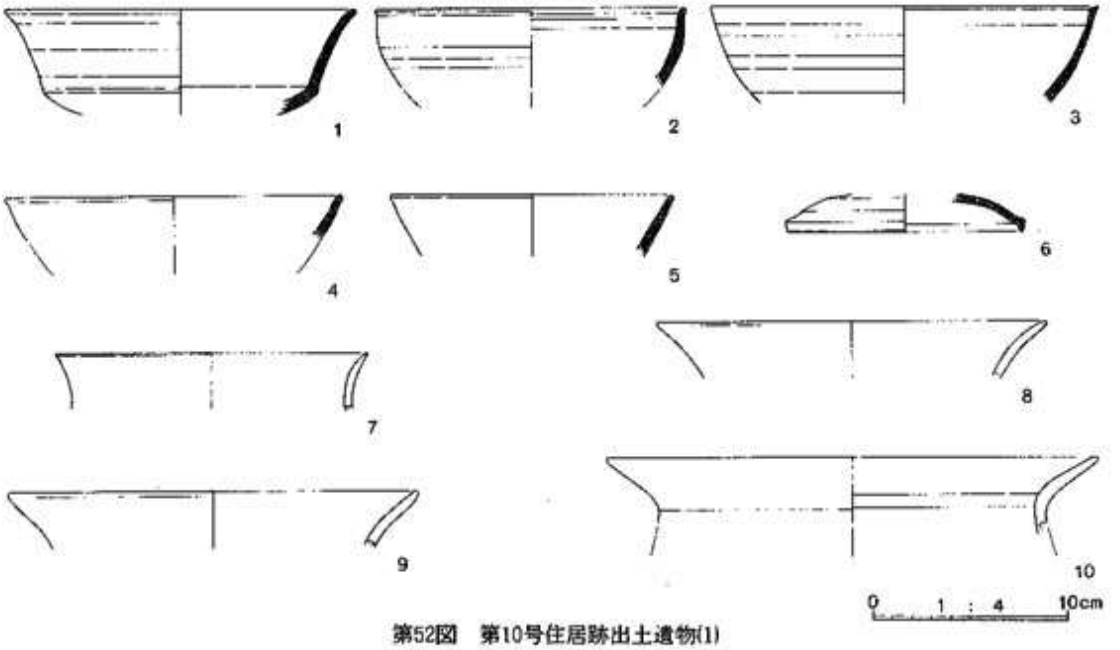
尾根頂部の平坦部から南東向きに傾斜が始まる付近、Ｉ７、Ｊ７グリッドにまたがって確認されている。遺跡のほぼ中央部に位置する。規模は3.9×2.9mを測り、形態は長方形となる。残存壁高は約40cm、確認面の標高は約87.3m、床面の対水平角は約４度である。

カマドは住居北東壁のほぼ中央で検出され、主軸方向はN―61度―Eである。主軸方向は等高線の走行とほぼ一致する。

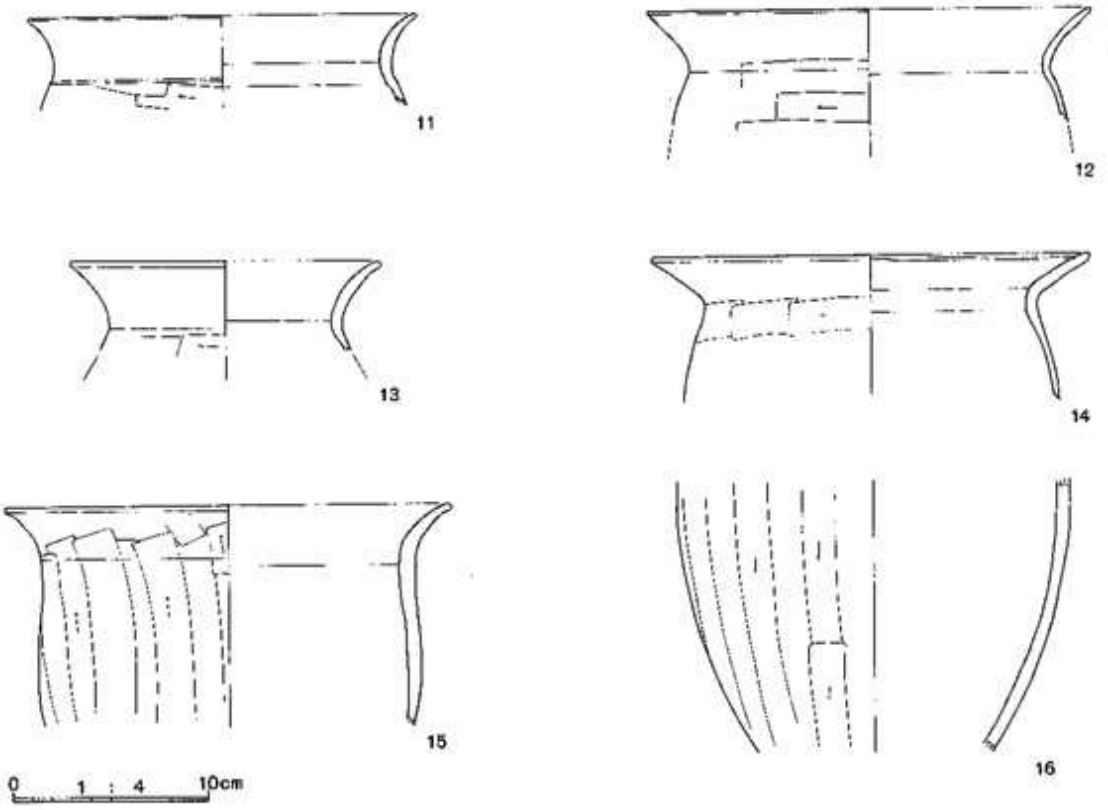
出土遺物は第１号住居跡と並び本遺跡内では最も多く、鋼椀を模倣したものと思われる須恵器や土師器の甕等が出土している。




第51図　第10号住居跡




第52図　第10号住居跡出土遺物(1)




第53図　第10号住居跡出土遺物(2)

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | S椀 | (18.0) | 5.4 | — | w | g | B | 30 | 銅椀模倣 |
| 2 | S椀 | (15.9) | 4.0 | — | w | g | B | 10 | 銅椀模倣 |
| 3 | S椀 | (19.8) | 5.0 | — | w | g | A | 30 | 銅椀模倣 |
| 4 | S椀 | (17.2) | 2.2 | — | w針 | dg | A | 20 | |
| 5 | S椀 | (14.5) | 3.1 | — | w針 | g | B | 20 | |
| 6 | S蓋 | (12.0) | 1.9 | — | wb | gb | C | 20 | |
| 7 | 甕 | (16.1) | 2.8 | — | wb | o | B | 20 | |
| 8 | 甕 | (20.0) | 2.9 | — | wb | o | B | 20 | |
| 9 | 甕 | (21.1) | 2.9 | — | ww'b | o | B | 20 | |
| 10 | 甕 | (25.2) | 3.3 | — | ww'b | o | B | 20 | |
| 11 | 甕 | (20.0) | 4.7 | — | wb | o | B | 30 | |
| 12 | 甕 | (22.7) | 5.9 | — | w | o | B | 30 | |
| 13 | 甕 | (16.0) | 4.5 | — | wb | o | B | 20 | |
| 14 | 甕 | 22.4 | 7.5 | — | wb | o | B | 80 | |
| 15 | 甕 | 23.0 | 11.3 | — | bw | o | B | 40 | |
| 16 | 甕 | — | 13.9 | — | bw | o | B | 40 | |

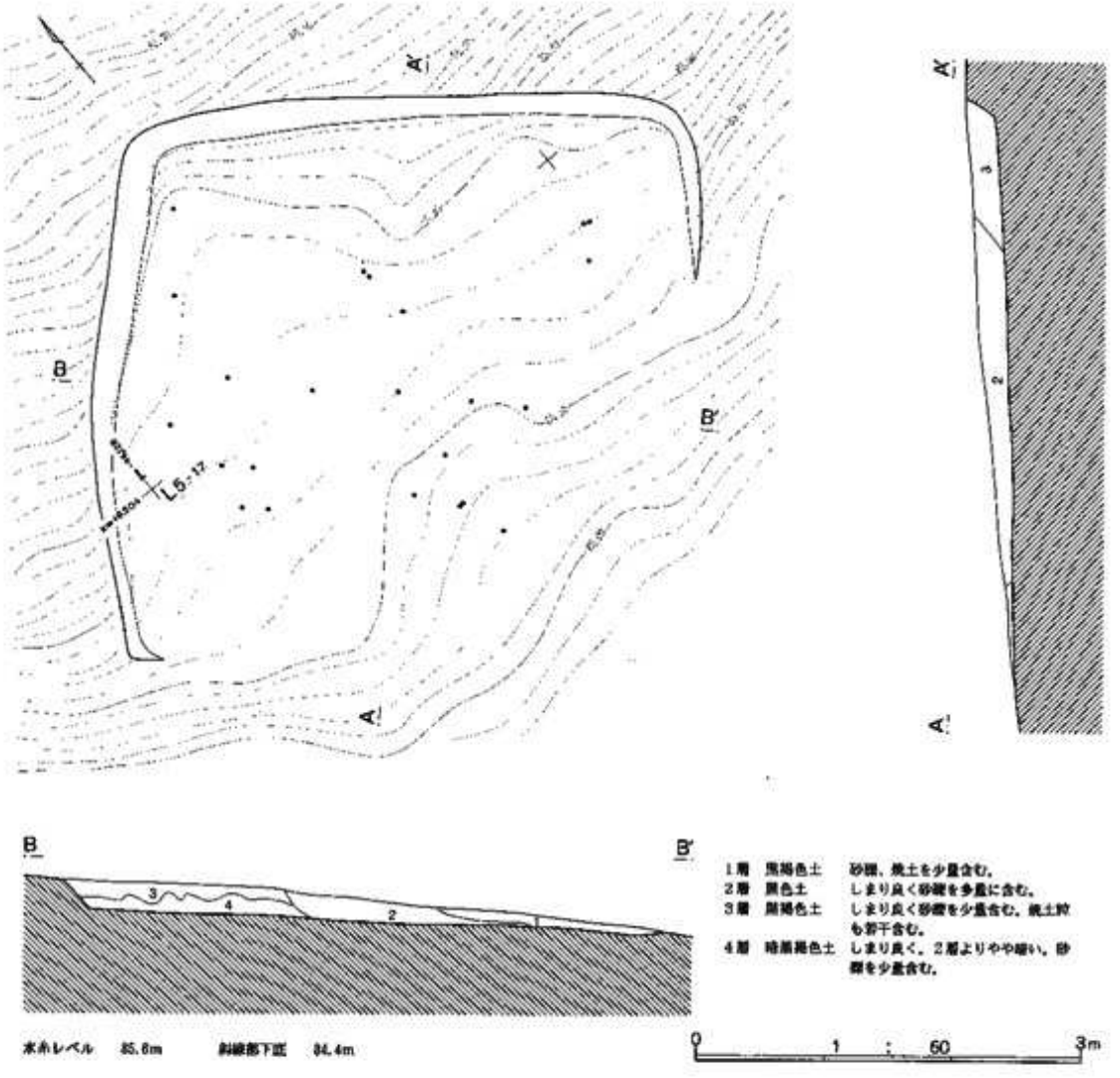
第23表　第10号住居跡出土遺物

## 第15号住居跡

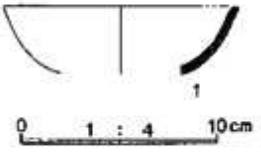
南西に傾斜する尾根線上、Ｌ５グリッドにおいて確認されている。住居南半は傾斜のため流失しており、全体像は把握できないが、規模は4.6×4.2m程度になるものと思われる。残存壁高は約28cm、確認面の標高は約85.6m、床面の対水平角は約２度である。

カマドは確認されていないが、住居南東壁に、主軸方向はN―55度―Wで存在したものと思われる。

土師器片、須恵器片等が出土しているが、実測に耐えるのは図示した椀１点のみである。




第54図　第15号住居跡




第55図　第15号住居跡出土遺物

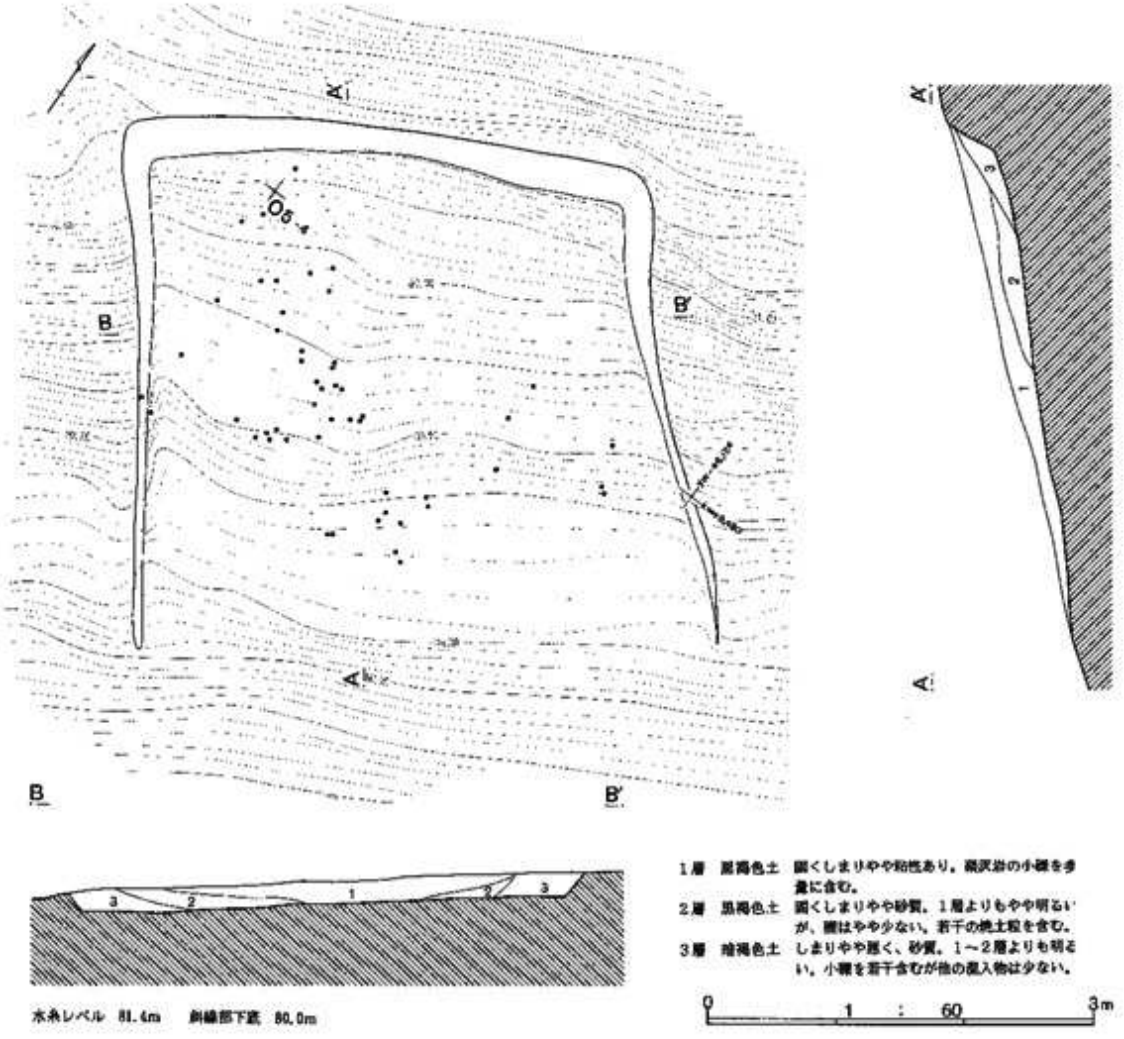
| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | S椀 | (12.1) | 3.4 | — | bw | do | C | 20 |

第24表　第15号住居跡出土遺物

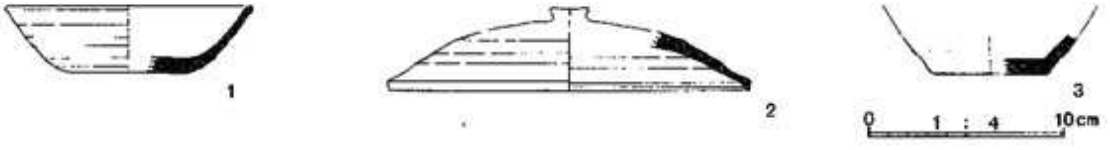
**第18号住居跡**

遺跡の南端付近、南東向き斜面のＮ５、Ｏ５グリッドにまたがって確認されている。かなり傾斜のきつい斜面部である。住居の半分は斜面のため流出しており、全体像は把握できないが、完存する壁は4.0mを測る。形態は方形あるいは長方形となるものと思われる。残存壁高は約30cm、確認面の標高は約81.3m、床面の対水平角は約７度である。斜面地に作られたためか床面の傾斜も他の住居よりきついものとなっている。

須恵器の坏、蓋等が出土している。




第56図　第18号住居跡




第57図　第18号住居跡出土遺物

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | S坏 | (12.7) | 3.4 | 6.0 | w針 | lg | B | 40 | 底部回転糸切り |
| 2 | S蓋 | (18.4) | 3.0 | — | w針 | g | A | 30 | |
| 3 | S壺 | — | 1.9 | 5.8 | s針 | g | A | 20 | |

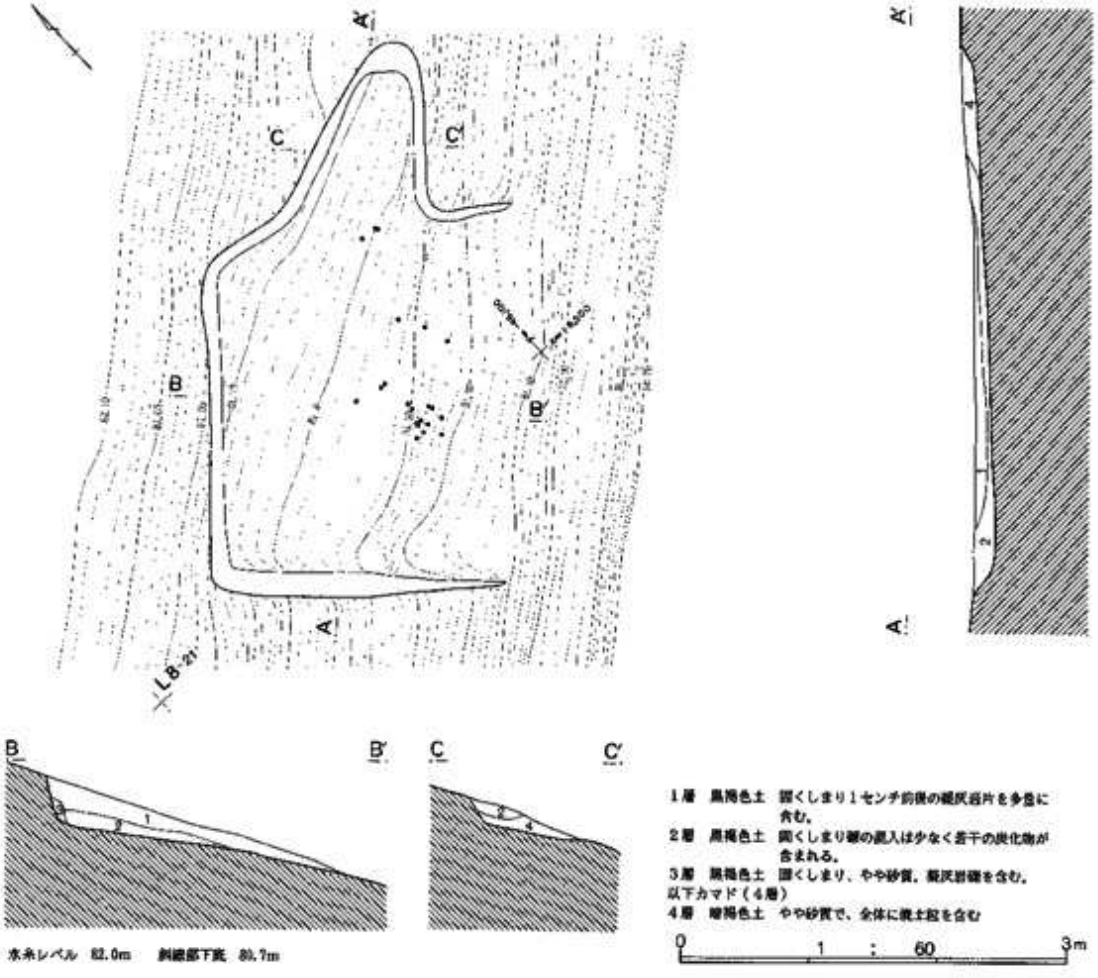
第25表　第18号住居跡出土遺物

## 第21号住居跡

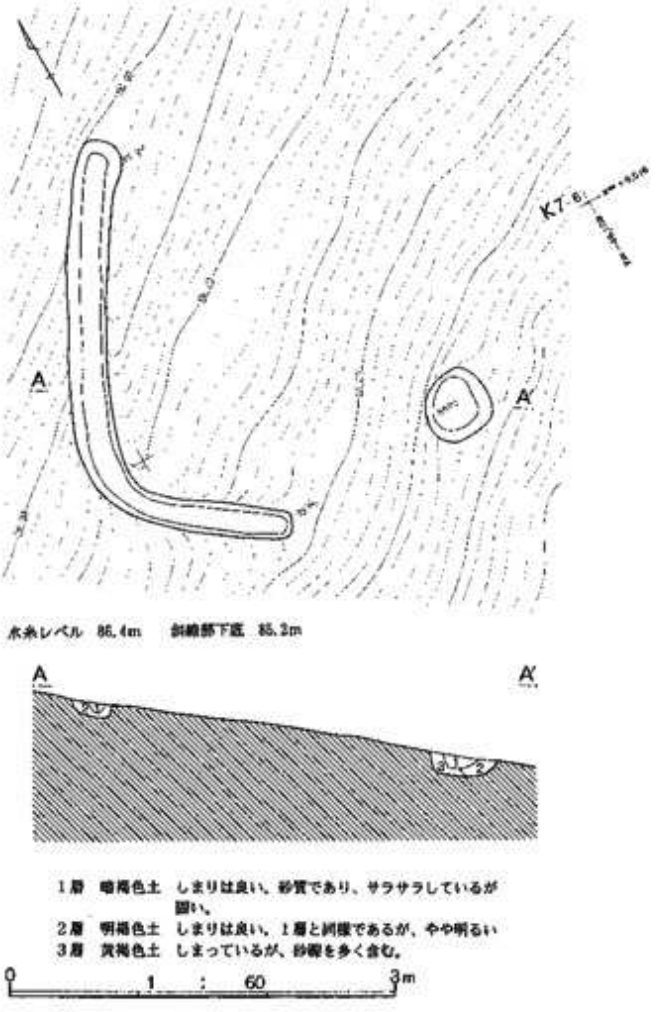
遺跡東縁の南東向きの斜面部、Ｌ８、Ｍ８グリッドにまたがって確認されている。規模は2.9×2.5mを測り、形態は長方形となる。残存壁高は約38cm、確認面の標高は約81.9m、床面の対水平角は約８度である。第18号住居跡同様急傾斜の斜面地に作られているため、床面の傾斜も本遺跡内で最もきついものとなっている。

カマドは住居北東壁に作られ、主軸方向はN－46度－Eである。主軸方向は等高線の走行とほぼ一致する。

図示できる奈良時代の遺物はない。混入した弥生時代の遺物は第33図に示した。




第58図　第21号住居跡




第59図 第23号住居跡

### 第23号住居跡

南東向き斜面の付け根付近、K6グリッドにおいて第12号住居跡に隣接して確認されている。確認面の標高は約86.4mである。

住居の壁やカマドは確認されておらず、屈曲を有する溝と土坑が確認されただけであるが、調査時点の所見により住居内の周溝と貯蔵穴であろうと判断した。差し当たり住居跡として扱ったが、単なる溝跡と土坑である可能性も残される。

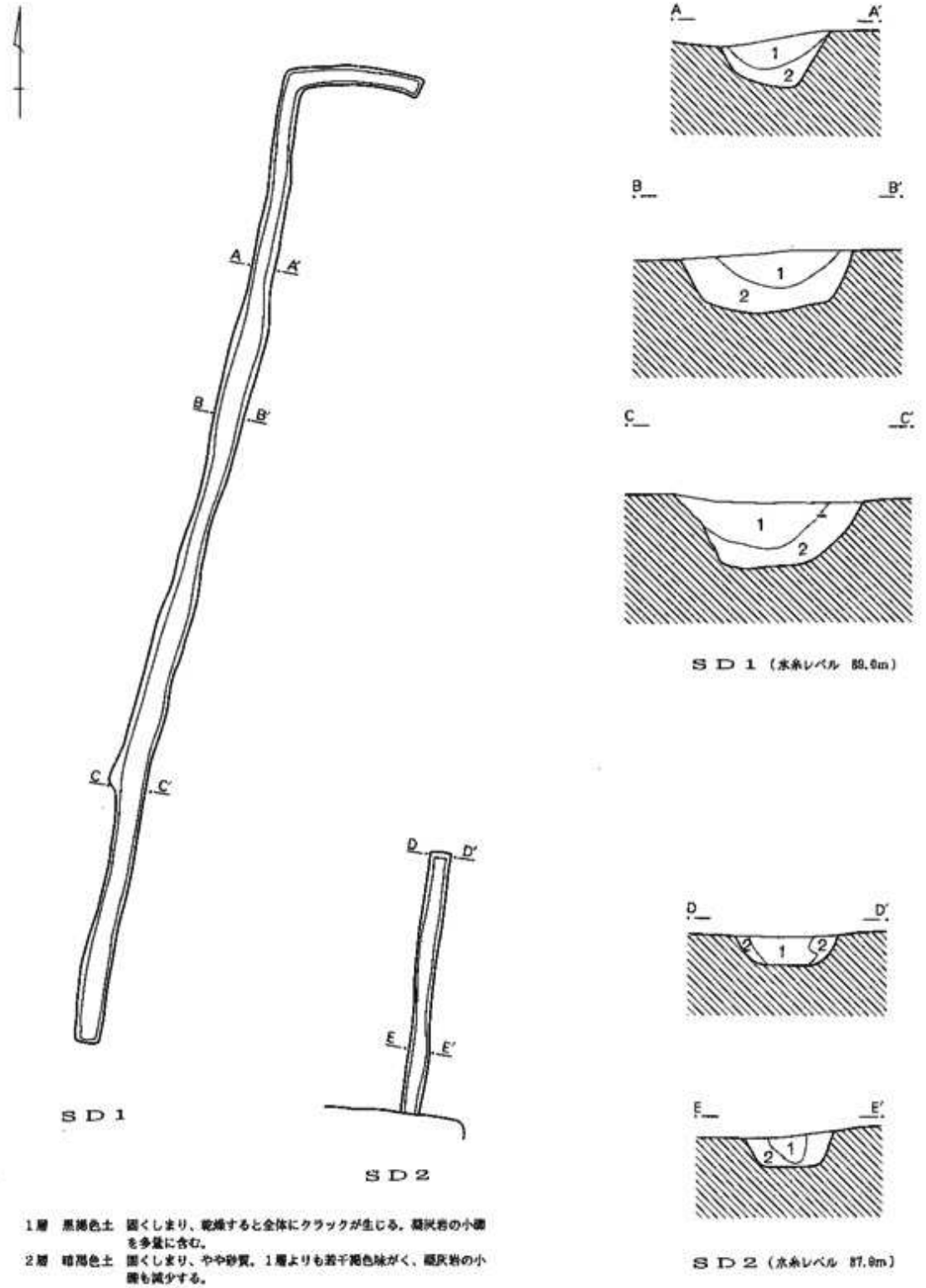
遺物は出土していない。

### 第1号溝跡、第2号溝跡

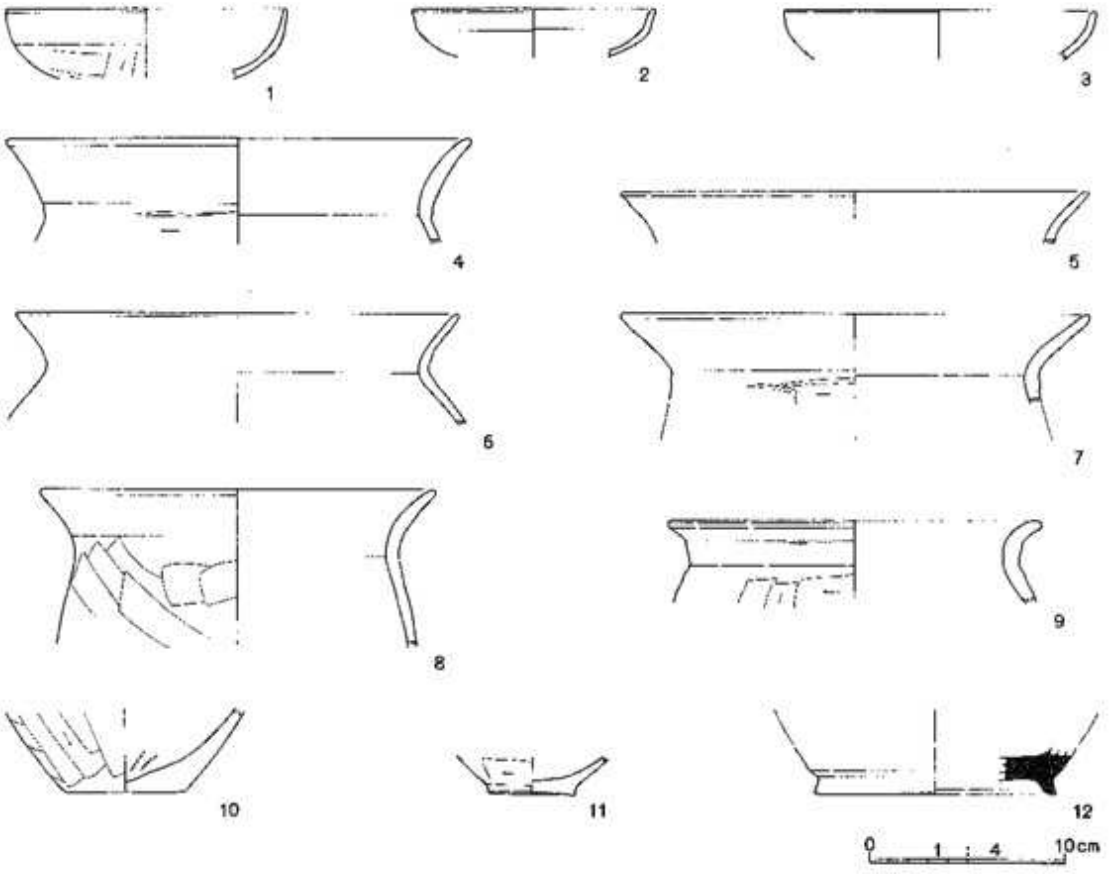
第1号溝跡はD6、E6、F6グリッドにまたがって遺跡の西縁に沿うように確認されている。N—13度—Eの走行でほぼ直線的に縦走するが、北端においてほぼ直角に屈曲している。確認面からの深さは最深部で約40cmを測る。

第2号溝跡はH6、I6グリッドにまたがって確認されており、N—8度—Eの走行でほぼ直線的に縦走する。南端は第20号住居跡と重複している。出土遺物の差異から、本溝跡の方が第20号住居跡より新しいのは明らかであるが、住居内において切り合いを識別することはできなかった。

両溝跡からは小片まで含めるとあわせて400点あまりの遺物が検出されている。土師器が多く、坏、甕等が含まれている。


A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
1
2
SD1
SD2
SD1（水糸レベル 89.0m）
SD2（水糸レベル 87.0m）
1層　黒褐色土　固くしまり、乾燥すると全体にクラックが生じる。凝灰岩の小礫を多量に含む。
2層　暗褐色土　固くしまり、やや砂質。1層よりも若干褐色味がく、凝灰岩の小礫も減少する。
0
1 : 200
10m
0
1 : 40
2m

第60図　第1号溝跡




第61図　第1号溝跡出土遺物

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | (14.2) | 3.6 | — | bw | o | B | 40 | |
| 2 | 坏 | (12.5) | 2.5 | — | bw | o | B | 30 | |
| 3 | 坏 | (16.0) | 2.5 | — | b | o | C | 30 | |
| 4 | 甕 | (23.9) | 5.4 | — | bw | o | B | 30 | |
| 5 | 甕 | (24.0) | 2.7 | — | bw | o | C | 30 | |
| 6 | 甕 | (22.8) | 5.5 | — | wb | o | B | 30 | |
| 7 | 甕 | (24.0) | 4.4 | — | bw | o | B | 40 | |
| 8 | 甕 | (20.4) | 8.0 | — | wb | do | B | 40 | |
| 9 | 甕 | (19.2) | 4.2 | — | w | rb | B | 40 | |
| 10 | 甕 | — | 4.2 | (6.0) | w | o | B | 40 | |
| 11 | 甕 | — | 1.9 | 4.2 | ws | do | C | 70 | |
| 12 | 甕 | — | 2.4 | (12.4) | wb | g | A | 40 | |

第26表　第1号溝跡出土遺物

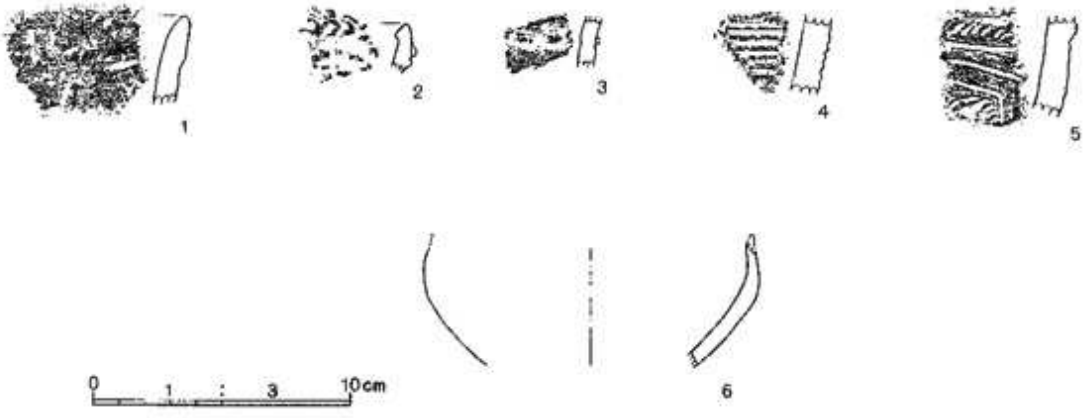
# 4　その他の遺物

### 縄文時代

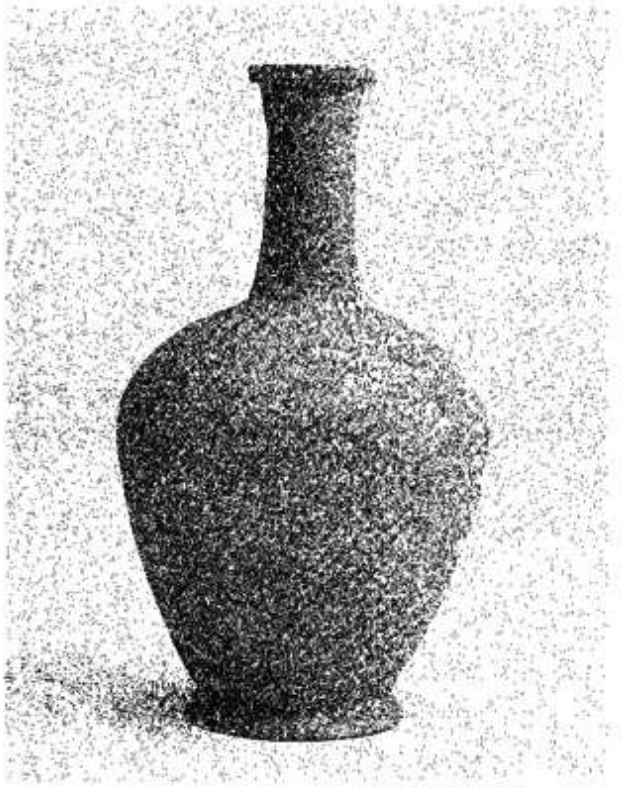
本遺跡において検出された縄文時代の遺物は極めて少なく、ある程度時期の特定できる遺物は第62図に示した程度である。1は細別不詳であるが無文の口縁部片、2、3は前期末葉の土器、4、5は中期前半から中葉にかけての土器であろうと思われる。

### 近世の遺物

第62図に図示したものは鉄釉の天目茶碗であるが、他に茶碗、徳利等の小片が採集されている。いずれも18世紀頃の瀬戸美濃系の陶磁器であろうと思われる。




第62図　縄文時代および近世の遺物



第６号住居跡出土の水瓶

# 芳沼入遺跡

# V　芳沼入遺跡の調査

## 1　遺跡の概観

粕川が開析した谷の中でも最大級の谷の一つ、吉沼谷の谷頭付近の西側の丘陵上に位置する。吉沼谷は途中に多くの支谷を形成しているが、本遺跡もほぼ全周がそれらの支谷に囲まれている。吉沼谷は最奥部において二股に分岐し、その一方は本遺跡の北西を深く浸食し、本遺跡と蟹沢遺跡を隔てている。本遺跡のほぼ中央部にも南東に開口する支谷が開析され、遺跡内に複数の尾根が形成される要因となっている。以下、南東に開口するその谷を「中央谷」、中央谷の北側の尾根を「北尾根」、南側の尾根を「南尾根」、蟹沢遺跡との間に横たわる谷に平走する尾根を「西尾根」と仮称する。

検出された遺構は住居跡6軒、土坑4基、石室状遺構1基である。住居跡は全て奈良時代、土坑は縄文時代のもの1基、弥生時代のもの2基、奈良時代のもの1基である。石室状遺構は古墳時代終末期以降のものであろうと思われる。

縄文時代の遺構は西尾根の頂部付近から確認された第3号土坑1基のみであるが、西尾根から北尾根にかけての一帯に早期、前期、中期、後期の土器が多数分布している。最も出土量が多いのは諸磯b式期のものであるが、器形が復元できるものは前期終末のものである。第3号土坑から出土した縄文原体の側面圧痕文を有する土器や、十三菩提式の土器が注目される。

弥生時代の遺構は西尾根頂部付近から確認された土坑2基だけで住居跡は確認されていない。谷をはさんだ対岸の蟹沢遺跡の同期の遺構は住居跡を中心としており、土坑は住居跡と密接な関係を有する例が1基確認されただけである。遺構の内容が対称的であり、遺跡の性格等の検討が必要になるものと思われる。

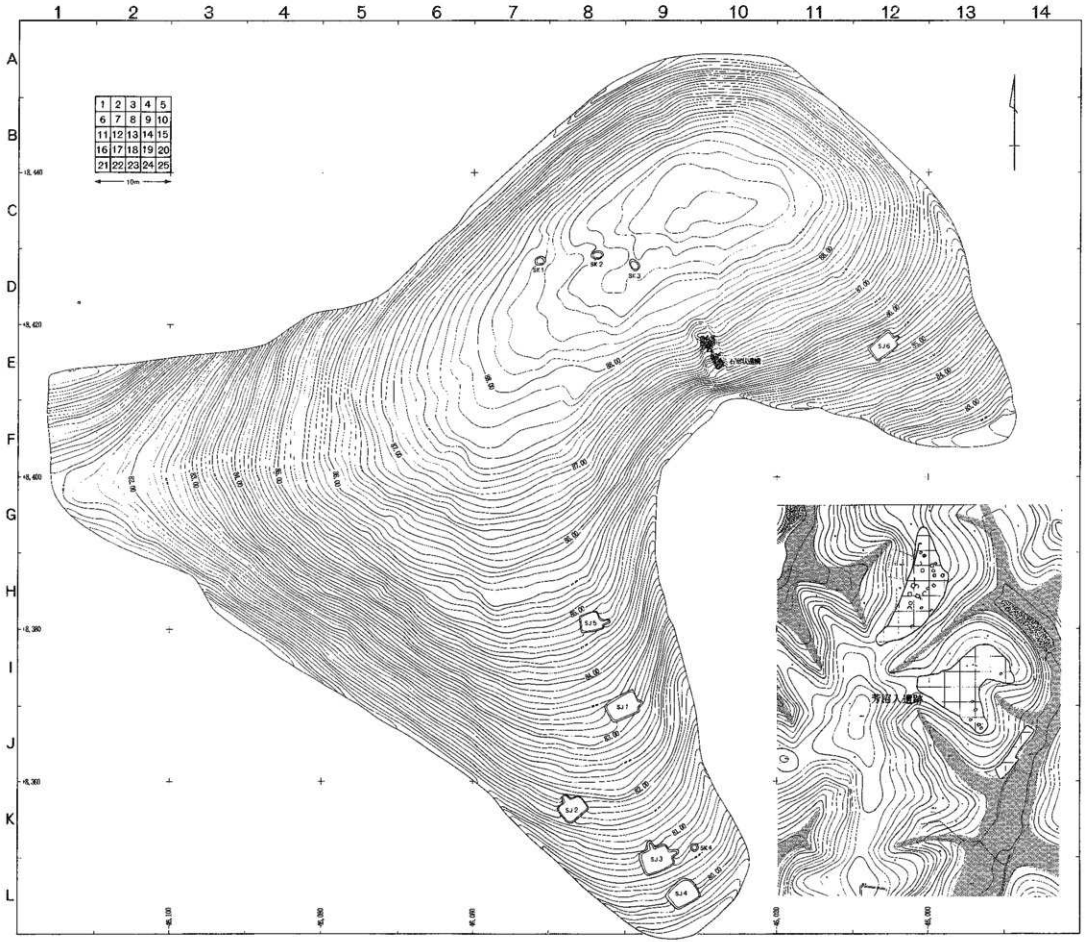
奈良時代の住居跡は南尾根の尾根線伝いを中心に分布する傾向を見せ、南尾根以外では第6号住居跡が北尾根から確認されただけである。1軒だけ離れた第6号住居跡は水瓶、鉄製の鎌、刀子等が出土したり、火災を受けている等、南尾根の住居跡とはやや異なった特徴がみられる。南尾根の住居跡群の中では第4号住居跡がカマドをもたない点で特異である。同住居跡からは須恵器の坏を打ち欠いて作った転用硯が多数出土している。その他の住居からも坏、甕等の他に鉄鉢形の須恵器、土師器坏を利用した灯明具、コップ形土器等が検出されている。

## 2　縄文時代の遺構と遺物

**第3号土坑**

尾根頂部付近D9グリッドにおいて確認されている。確認面の標高は88.7mである。規模は1.6×1.2mを測り、形態はほぼ楕円形となる。主軸方向はN－30度－Wである。土坑内からは1個体の深鉢が割れた状態で出土している。

出土した土器はほぼ器形が復元できるものであるが底部は確認されていない。器形はほぼ円筒形に近い形状を呈するもので、底部から口縁部に向けて徐々に開き、胴部上半で僅かに膨らむ。




第63図　芳沼入遺跡全測図

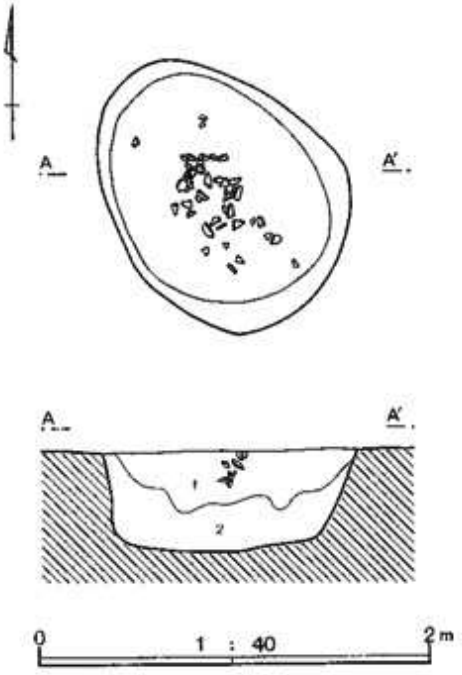
口縁部は肥厚し、胴部との接合部は屈曲する。

口縁部文様帯には縄文原体の側面が横位置に２列押圧されている。圧痕に用いられた原体は結節部を有する２段ＬＲの縄で、先端から結節部までの長さは約2.7cmである。結節は２段の縄の一方の条を他方の条に絡げたもので、結節したあともさらに両方の条を撚り合わせているようである。口唇部は指頭による圧痕が加えられ小波状を呈する。指頭圧痕によるはみ出しは内外面にみられる。縄文原体の側面圧痕と指頭圧痕の先後関係は明瞭ではないが、前者の方が後出のようである。

胴部には全面にわたって結節を有する２段ＬＲの縄文が横位に施文されている。結節部までの縄の長さ、段、節等から判断して、口縁部に用いられた側面圧痕の原体と同一原体により施文されたものと思われる。

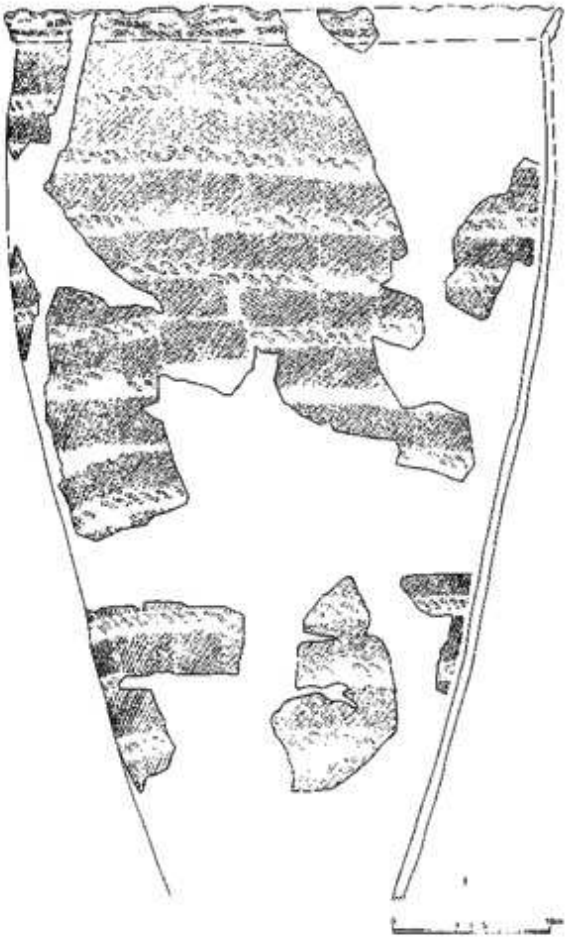
色調は鈍い赤褐色を呈し、胎土には白色不透明粒子、砂粒等が含まれる。口径約36cm、器高は推定58cm程度になるものと思われる。

前期終末に位置付けられる土器であろうと思われる。




ＳＫ３（水糸レベル 88.7m）
1層 暗褐色土 やや粘性に富む。赤色のパミスを若干含む。指頭大の礫を混入。
2層 暗褐色土 1層に類似するが褐色味がやや強い。パミスは含まれない。

第64図 第３号土坑



第65図 第３号土坑出土遺物

グリッド出土土器（第68図～第74図）

遺構外からは早期から後期にかけての遺物が検出されている。以下、早期のものを第１群、前期前半から中葉にかけての土器を第２群、前期後半から終末にかけての土器を第３群、中期の土器を第４群、後期の土器を第５群として論を進める。それぞれの群は必要に応じてさらに細別した。

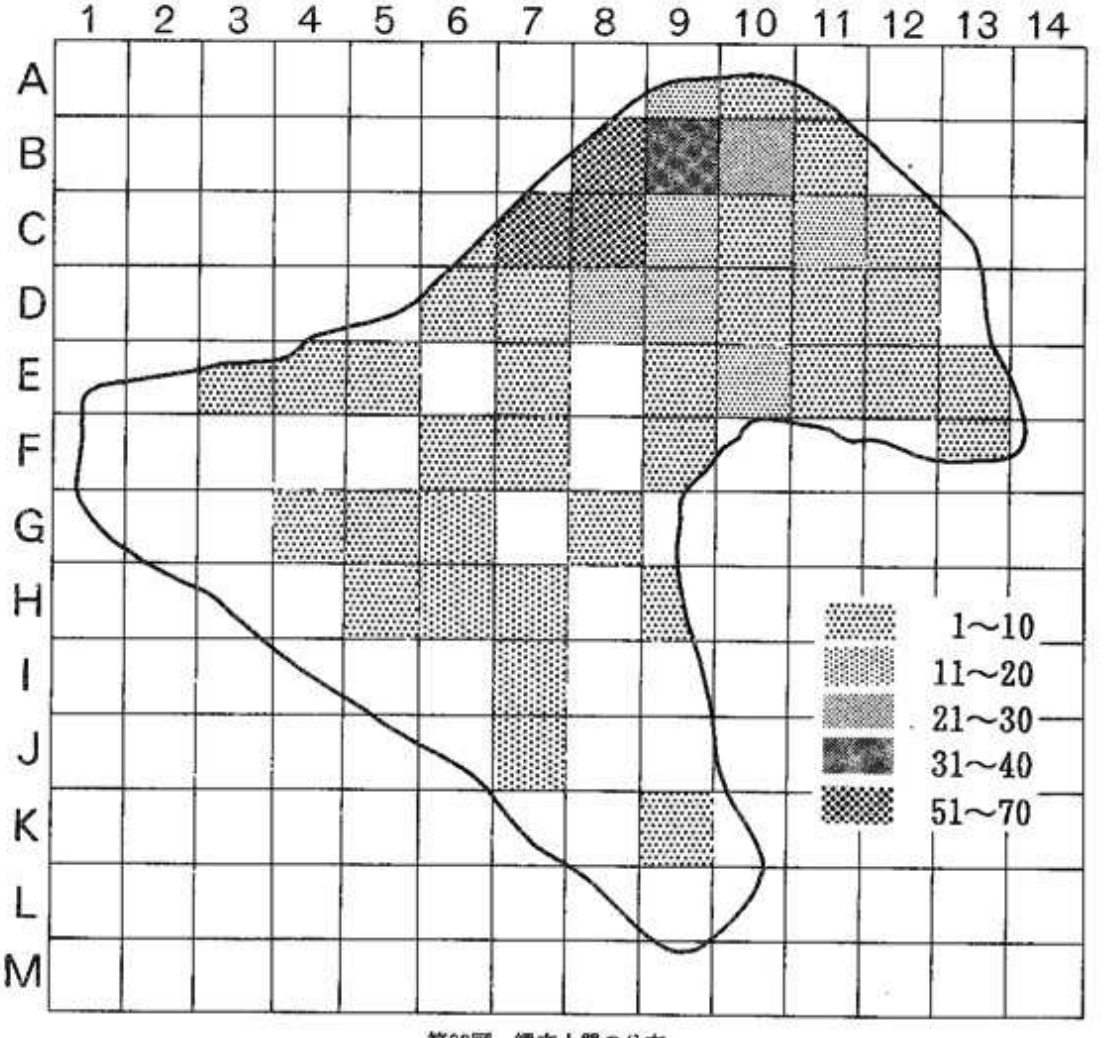
最も出土量が多いのは第２群、次いで第３群である。第２群土器は北尾根から西尾根にかけて分布しているが、西尾根北半の北西向き斜面部から北向き斜面部にかけて濃密な分布を見せる。第３群も第２群同様の分布、集中傾向を示すが、第２群第２類は西尾根の頂部付近、第３類は西尾根と南尾根の間の南西向き斜面から出土している。

第１群土器（１～７）

早期末葉の土器を本群とし、３類に分類する。

第１類（１～２）

沈線文系の土器を一括する。１は沈線間に貝殻腹縁文、２は沈線間に刺突文がみられる。




第66図　縄文土器の分布

第２類（３～５）

条痕文系の土器を一括する。繊維を含み、表裏にわたって条痕文が観察される。茅山上層式と思われる。５は表面のみに条痕文がみられ砂粒を多く含んでいる。

第３類（６～８）

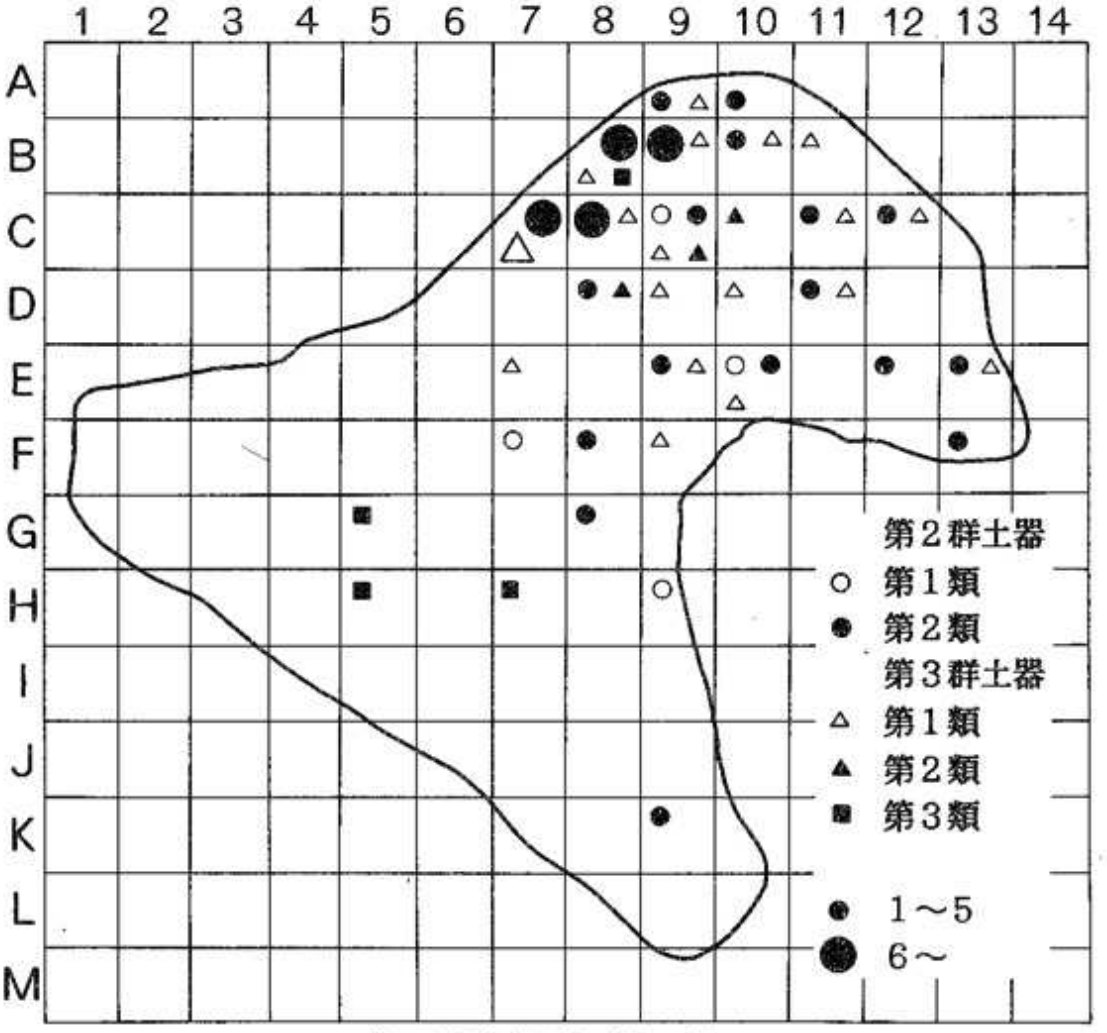
早期末様の縄文施文の土器を一括する。６は胎土に砂粒を含み、内面は丁寧に磨かれている。単節ＲＬの目の粗い縄文が表面に施文される。７は繊維を若干含み、単節ＲＬの縄文を横位と縦位に回転し羽状施文している。

第２群土器（９～73）

前期前半から中葉にかけての土器を本群とする。２類に分類し、黒浜式として認識したものを第１類、諸磯ｂ式として認識したものを第２類とする。

第１類（９～11）

いずれも繊維を多量に含む厚手の土器である。８は０段３条単節ＲＬの原体を横位と縦位に回転




第67図　縄文時代前期の土器の分布

し縄文を羽状に施文している。9は磨耗著しいが0段3条単節ＬＲのようである。10は0段3条単節ＲＬとＬＲの2種の原体を横位に回転し羽状施文している。11は磨耗のため判読しがたいが10と同じ施文法をとっているようである。

第2類土器（12～73）

半截竹管による平行沈線や爪形文、浮線文、櫛歯状工具による条線文を有する土器を一括する。本遺跡内において主体となる土器群である。施文の方法により6種に分類した。

第1種（12～16）

半截竹管による平行沈線と爪形文が施文された土器である。沈線を引いた後に竹管の間にＣ字状の爪形文を充塡させるものが一般的なようである。沈線が斜行するもの13、曲線的になるもの14もある。13は部分的に逆Ｃ字状の爪形文もみられる。15、16にはそれぞれ単節ＬＲ、単節ＲＬの縄文が地文として施されている。12は平縁の口縁部片である。

第2種（17～25）

曲線的な沈線により文様を描出するものを一括する。17、20には縦位の沈線の間にレンズ状のモチーフが、18には鋸歯状のモチーフがみられる。24、25は文様帯を平行沈線によって区画し、その間に渦巻き状の沈線が描出されている。18は強く外反する口縁部付近の破片である。21には無節Ｌ、17、20、25には単節ＲＬ横位施文の縄文が地文として用いられている。

第3種（26～46）

縄文を地文とし、その上に横位の平行沈線を施すものを一括する。26は波状口縁の波頂部、29、32は平縁の口縁部片で他は胴部片である。32には口唇に刻みが施される。40、41、43、45は単節ＬＲ、44は無節Ｌ、他は単節ＲＬの縄文を地文としている。

第4種（47～60）

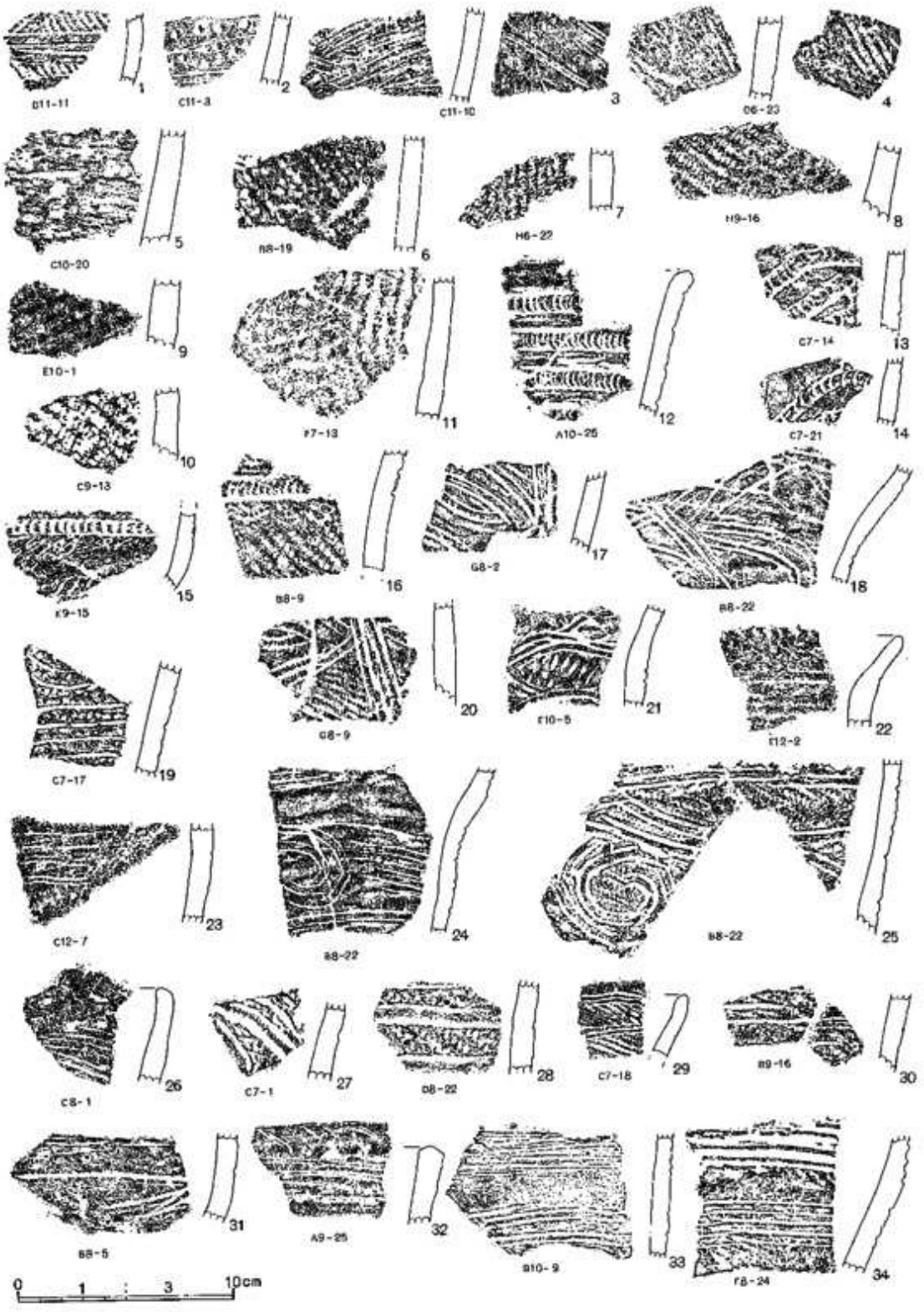
浮線文を有するものを一括する。47は口縁部片、48～50は口縁付近の屈曲を有するもの他は胴部片である。基本的に器面に縄文を施文して地文とし、浮線を貼付した後2本1対の浮線上に矢羽状に刻みを施している。49～51は焼成堅緻であるが、他は概して脆弱である。特に55～58は表裏にわたって剥落が著しい。この4点は器壁が薄く、内面は丁寧に磨かれている。胎土も他の土器とは異なり、同一個体である可能性が高いものと思われる。ＲＬに1を巻きつけた付加条第1種2本巻の原体が地文に用いられている。60は曲線的に浮線が貼付されたものである。

第5種（61～63）

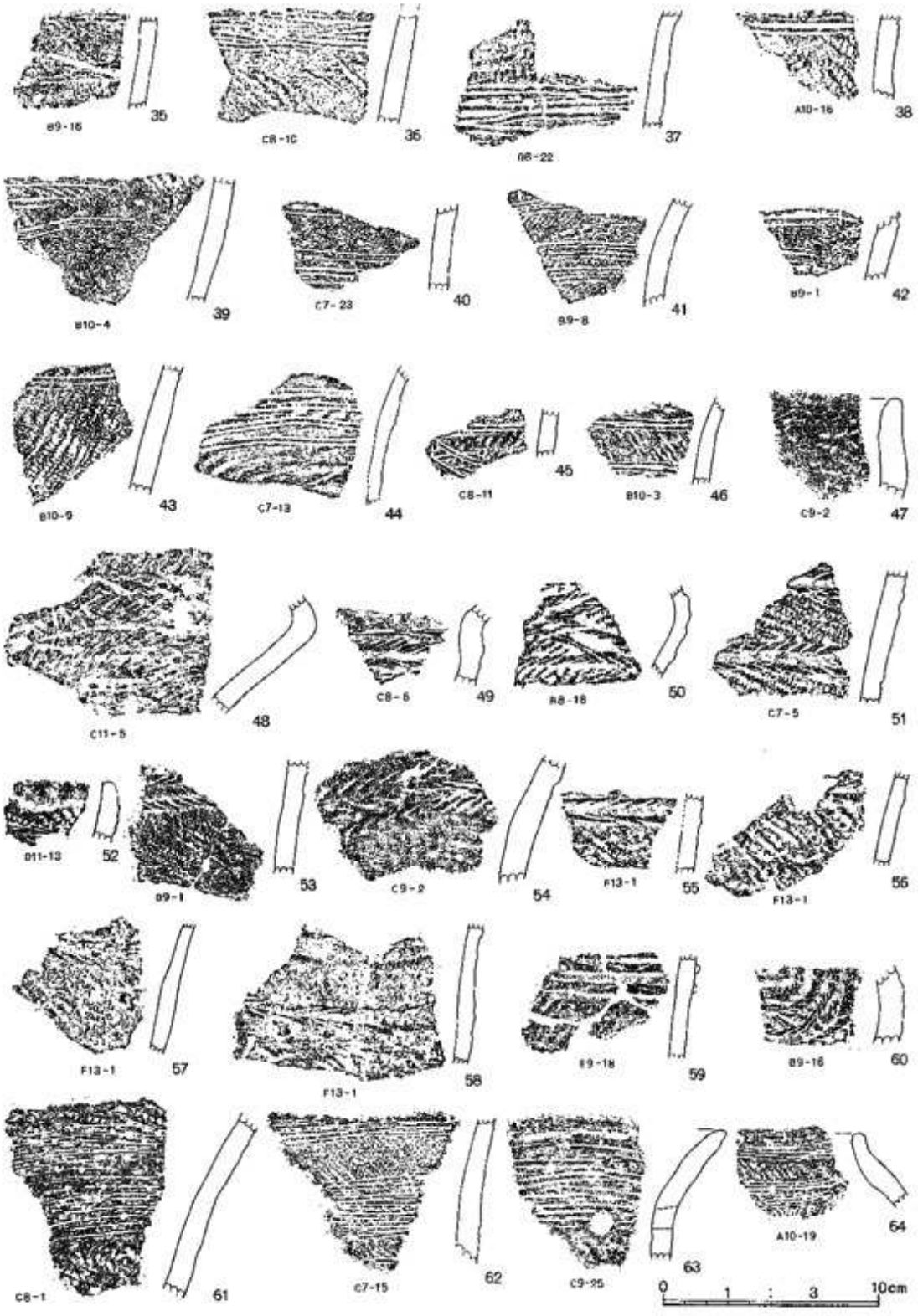
横走する条線をモチーフとし口縁部が外反する器形の深鉢の破片を一括する。63には補修孔がみられる。全ての破片に単節ＲＬの破片が地文として施される。

第6種（64～73）

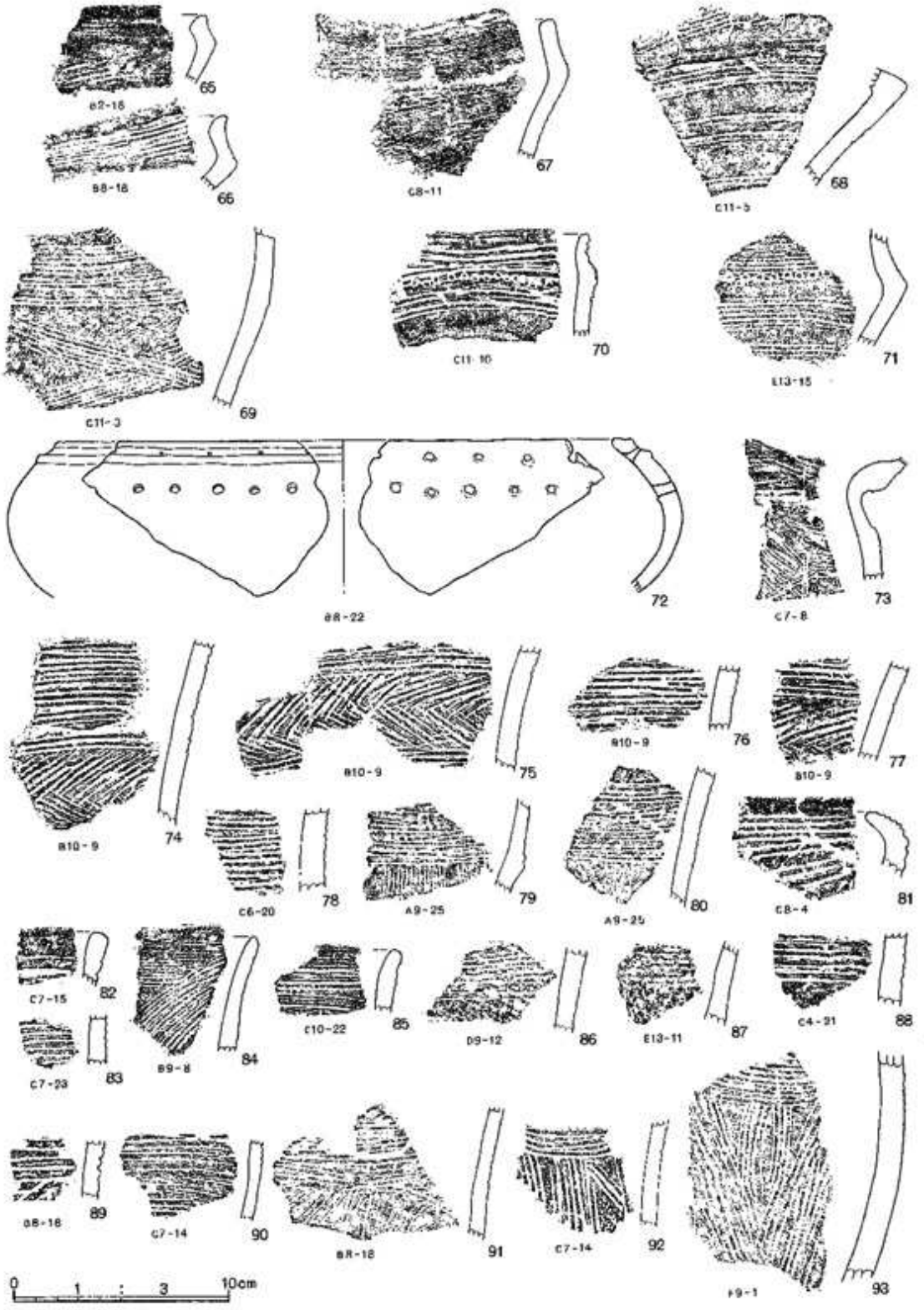
横走或いは斜行する条線をモチーフとし口縁部が強く屈曲するものを一括する。64～68、70～71は口縁が内側に屈曲する器形となるが、特に68の屈曲が著しい。66、67、70は緩い波状口縁になるようである。67、69には単節ＲＬ横位施文の縄文が地文として施文される。70、71は屈曲の突出部の上位に円形竹管の刺突がみられる。72は有孔の浅鉢で口唇直下に粘土紐を2段貼り付け、その間と最大径上位の2列にわたって円形の刺突列が貫通している。孔はいずれも焼成前に外面側から貫




第68図　グリッド出土土器(1)




第69図　グリッド出土土器(2)




第70図　グリッド出土土器(3)

通させたものと思われるが、外面からみる限りにおいて上位の刺突列の径は、下位の刺突列の径の半分以下である。内面からみると径の大きさは両者ともあまり変わらない。内面側にできる刺突による隆起部はほぼ完存するものもあるが、焼成後に除去しているような印象を受ける。除去するにとどまらず抉りを加えて径を大きくしているものもある。

**第3群土器（74～158）**

前期後半から終末にかけての土器を一括する。点数の上では第2群におよばないが器形復元がある程度可能なものが含まれる。諸磯c式を第1類、浮島式を第2類、十三菩提式を第3類、その他縄文のみのものを第4類とした。

第1類（74～110）

条線や貼付文で文様が構成される諸磯c式に比定されるものを本類とする。施文の違いにより4種に分類する。

第1種（74～81）

条線が施文されるものを一括する。74～78は胎土、色調等から同一個体と思われる。平行する横位の条線間に矢羽状の条線が充塡される。79は横走する平行沈線下に垂下する条線が、80はＬＲ縦位施文の縄文がみられる。これらは81以下の本類の土器に較べると胎土、色調等に差異が認められ、諸磯c式の中でもより古期に位置付くものと思われる。

第2種（82～102）

条線が施文されるもののうち第1種より新期に位置付くと思われるものを一括する。81～84は口縁部片、他は胴部片である。横走する条線がみられるもの（81～95）、それに加えて垂下、あるいは斜行する条線がみられるもの（84、89、91～95）、垂下する条線のみがみられるもの（95～100）、同心円状に沈線が巡るもの（101、102）がある。84、92、94、95、97、98には単節ＲＬの縄文が地文として施されている。86～88、101にも地文が看取されるが不明瞭である。

第3種（103～104）

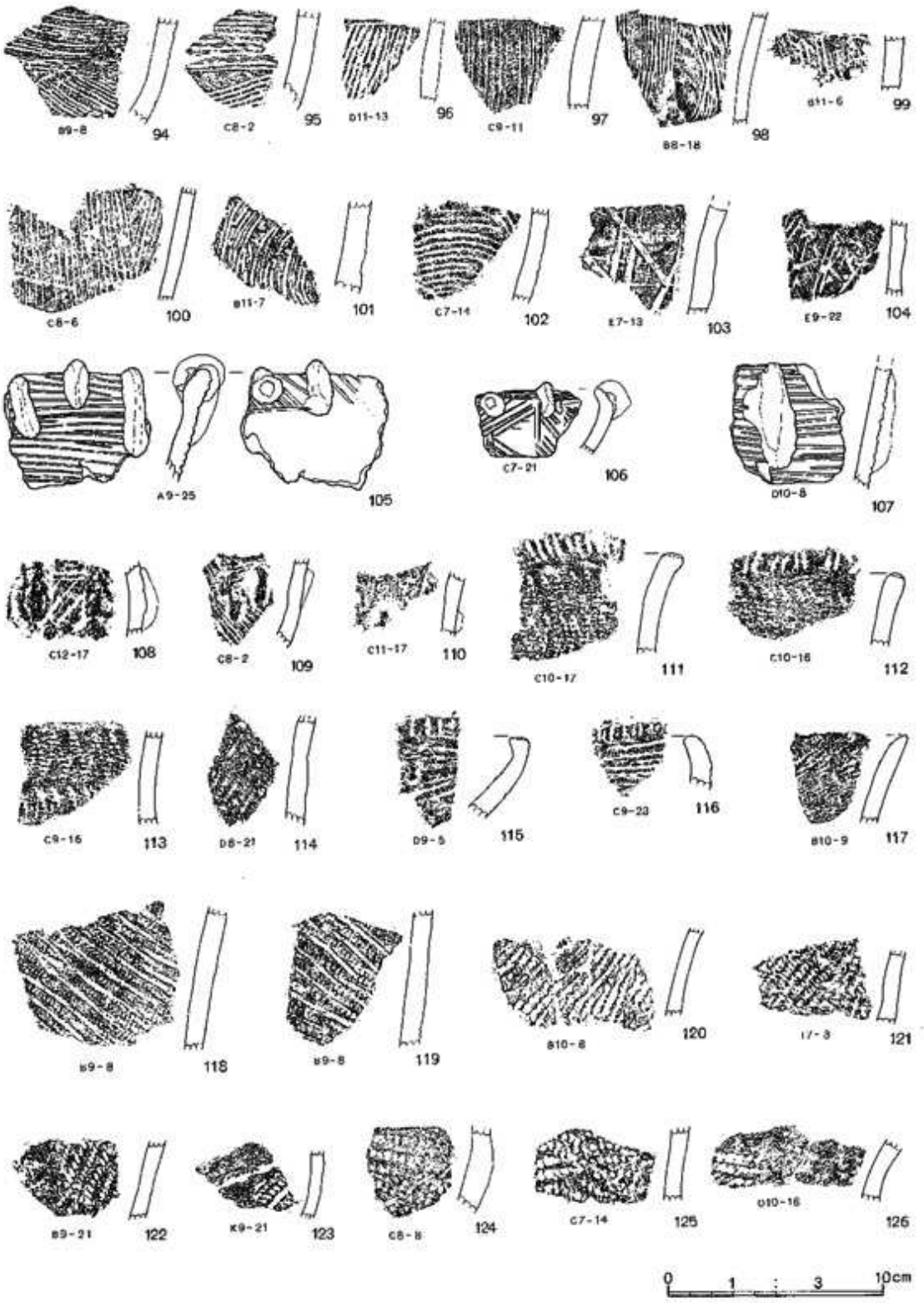
沈線が斜行し、格子目を構成するものを一括する。

第4種（105～110）

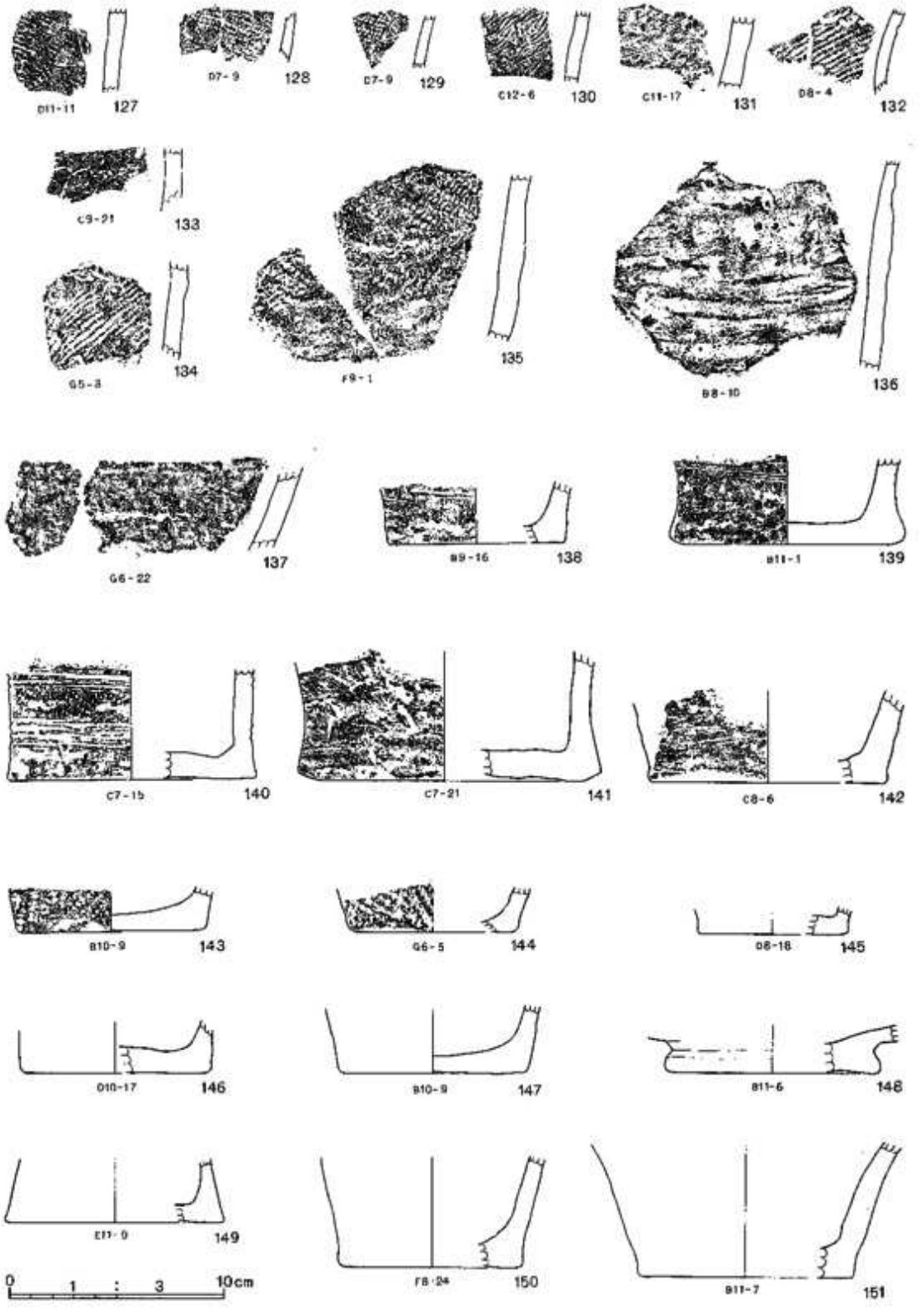
横走あるいは斜行する条線を地文とし豆粒状、棒状、耳たぶ状の貼付文を施している。105は口縁内面が肥厚し、肥厚部まで斜行する条線がおよび、口唇を巻くように棒状の粘土が貼付される。表面からみると長短の貼付が交互に繰り返される。長い方の貼付は折り返されて内面に入った後、円形竹管の刺突を有する貼付が重ねられる。106も105同様内面の肥厚部まで貼付がおよぶものと思われるが口唇部が剝落しており定かでない。他は口唇部が欠損しているものが多いので断言できないが、内面にまで貼付がおよぶものはないようである。

第2類（111～114）

浮島式に比定できるものを一括する。4点確認されているがいずれもアナダラ属の貝殻腹縁のロッキングにより施文されている。111、112は口縁部であるが、ともに口唇上面に刻みが施されている。




第71図　グリッド出土土器(4)



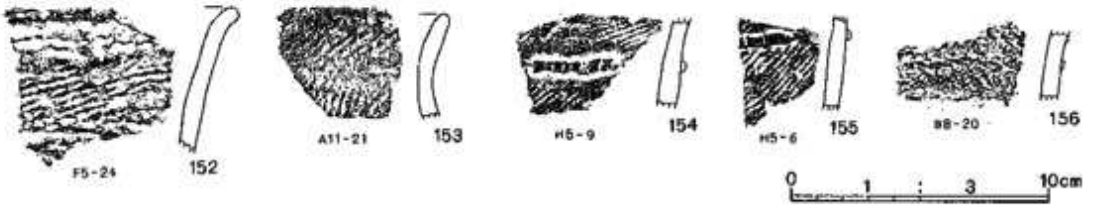

第72図　グリッド出土土器(5)

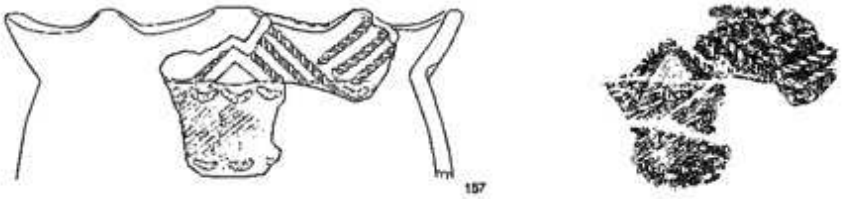
第３類（154～158）

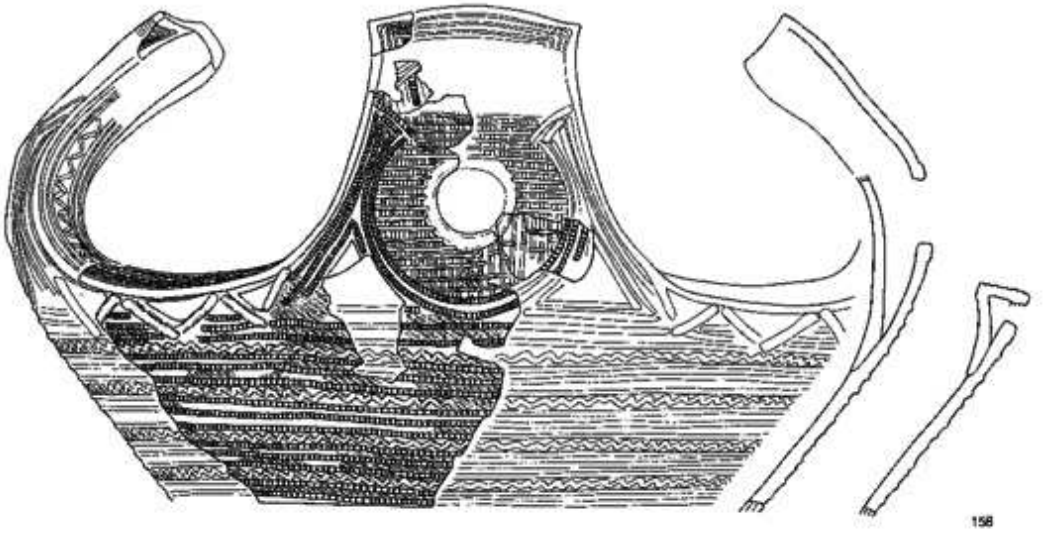
十三菩提式に比定できるものを一括する。154～156はソーメン状の貼付紐上に竹管による刺突を施し結節状浮線文としたものである。154、155には単節ＬＲ、156には単節ＲＬの横位施文の縄文が地文とされている。

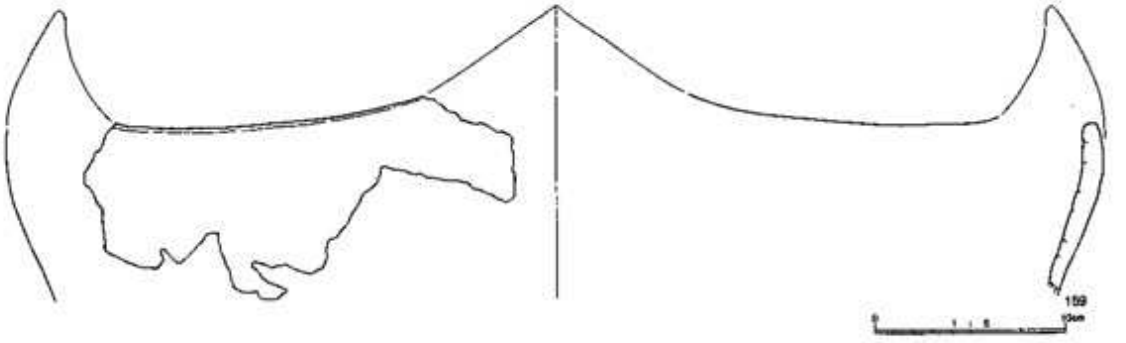
157は口縁部が外側に屈曲し、胴部が球状に内湾する器形となる深鉢であろうと思われる。波状口縁となり口唇上面には刻みが施される。屈曲部から口唇部にかけては三角印刻文と縄文原体の側面圧痕がみられる。側面圧痕は太い条と細い条を撚り合わせた１段Ｌの縄の圧痕で、印刻の右側に３列に並ぶ左上がりの圧痕の再右列をみると原体の長さは５㎝以上になるものと思われる。その右隣の左下がりの圧痕の最上位のものは波頂部において縄の余剰を折り返した痕跡が観察される。三角印刻の２つの斜辺にも側面圧痕が重複している。屈曲部以下の胴部には無節Ｌの縄文が横位に施文されている。綾繰り文風の文様が２段にわたって看取されるが、横位施文された無節Ｌの原体に付随する結節の回転によるものか、側面圧痕に用いられた原体を折り曲げて押圧したものかは判然としない。また、側面圧痕の原体と横位施文の原体が同一のものかどうかも即断しかねる。左下がりの側面圧痕の下端付近に結節部のような痕跡がみられる点を考慮すると同一原体である可能性も否定できない。胎土には砂粒が顕著に含まれる。

158は４単位の大きな把手をもつ深鉢である。胴部は検出されていないが、頸部と思われる現存部下端を境に「く」の字状に外反していたものと思われる。頸部から口唇部に向けて徐々に外傾し、把手部において強く内湾する器形となる。口唇部から内面にかけては極めて特徴的であり、外傾しながら立ち上がってきた口縁部の上端において、それと直交するように粘土板が接合され、さらに折り返されて口縁部内面に接合されている。従って、把手部および口縁部の上半は粘土板で塞がれることとなり内部に空洞が形成されている。把手部は単節ＲＬ横位施文の縄文を地文とし、太目の円形粘土紐の貼付、縦位、横位のソーメン状粘土紐の貼付、結節状浮線文の貼付、および印刻によって文様が構成されている。中央部に貼付された円形の太い粘土紐の内側は貫通する円形の印刻、結節状浮線文の間に形成された三角形の空隙も貫通する三角形の印刻である。波頂部付近の破片は断片的であり、文様構成は明確ではない。口縁部も単節ＲＬの縄文を地文とし、太目の粘土紐の貼付、結節状浮線文の貼付、ソーメン状粘土紐の貼付、印刻がみられる点において把手部と共通するが、それぞれの適用の仕方が若干異なる。把手部の結節状浮線文は曲線的であったのに対し、口縁部のそれは直線的に横走し３本を１単位とする。刺突のないソーメン状粘土紐の貼付は把手部において直線的だったのに対し、口縁部のものは折り返しながら貼付することによって波状を構成している。波状の貼付文の間には３本の結節状浮線文が貼付される。印刻は全て貫通する三角形のものであるが、印刻の外側が太目の粘土紐の貼付によって区画されている点が把手部の三角印刻と異なる。口唇部も不明瞭ではあるが単節ＲＬの縄文が地文としてみられる。口縁部同様結節状浮線文と波状の粘土紐の貼付がみられるが、口縁部の折り返し貼付による波状構成とは異なり、短い粘土紐を交互に貼付する事によって波状効果を描出している。「波状」というよりは「ハ状」に近い貼付である。結節状浮線文は波状の貼付の両側にそれぞれ２本ずつ貼付される。内面には特に文様は施されないが、把手部を塞ぐ粘土板との接合部には顕著な段差が看取される。

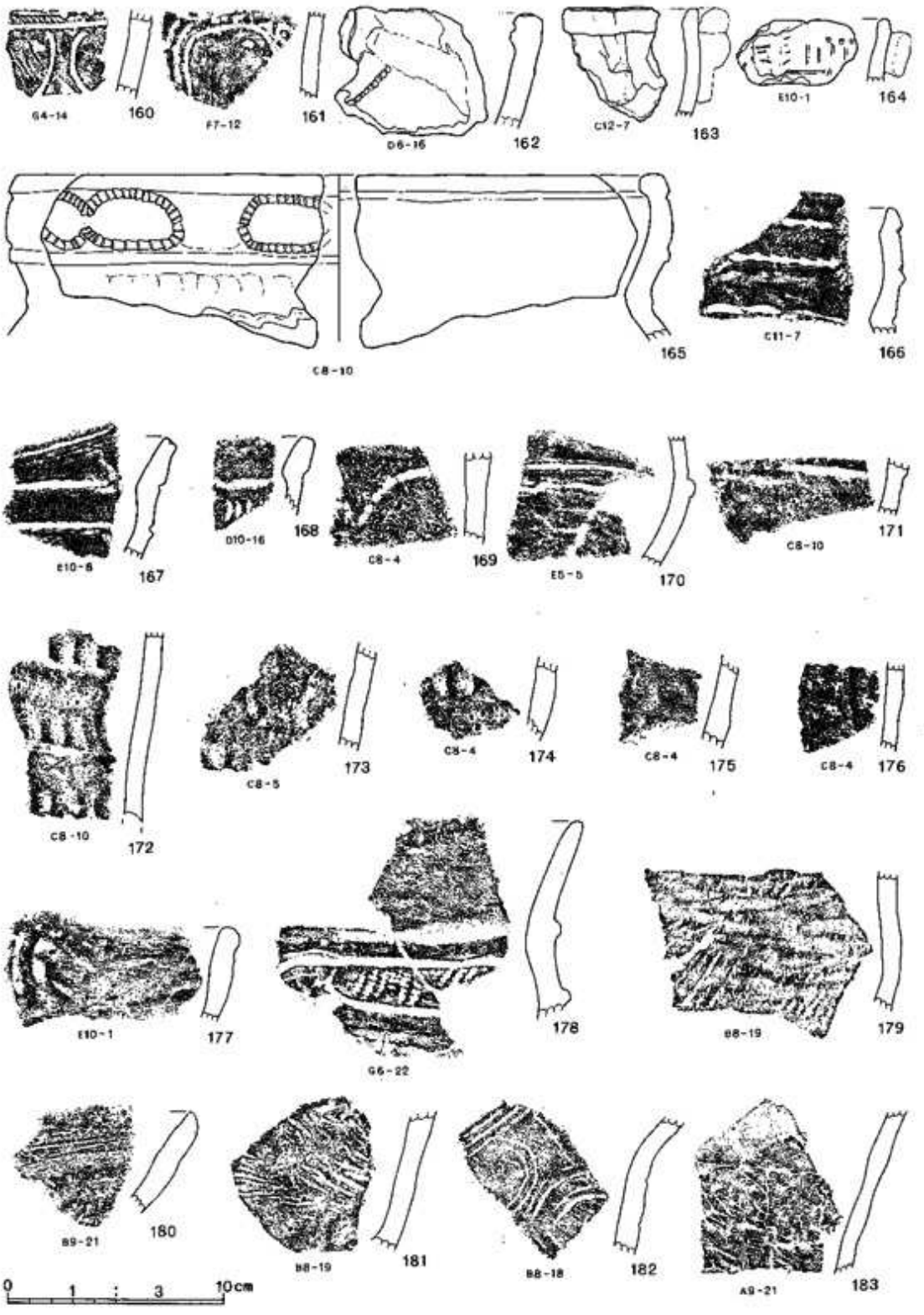



第73図　グリッド出土土器(6)




第74図　グリッド出土土器(7)

第４類（115～153）

細別は不詳であるが、前期の土器であろうと思われるものおよび前期の土器のものと思われる底部を一括する。115～117は口縁部片で前２者は口唇部に刻みを有する。118、119は付加条第１種２本巻による縄文が横位に施文される焼成堅緻な土器、132～134は結節による綾繰り文が看取される土器である。152の口唇直下にみられるのは縄文原体の側面圧痕であろうと思われる。底部の帰属時期を特定するのは困難であるが、諸磯ｂ式期のものが多いようである。148は72にみられるような浅鉢の底部と思われる。149は形状から判断して諸磯ｃ式期のものであろうか。

第４群土器（159～179）

中期の土器を一括する。３類に分類し、中期初頭と思われるものを第１類、阿玉台式の範疇で捉らえられるものを第２類、勝坂式に属すると思われるものを第３類とした。

第１類（159～161）

確定的ではないが中期初頭に位置付けが求められそうなものを一括した。159は無文の口縁部片であるが推定口径58cm程度の大形の深鉢になるものと思われる。口唇部の湾曲の度合いから４単位の波状口縁になるものと思われる。160は単節ＲＬ横位施文の地文上に、直線的に横走する沈線と枠状になるものと思われる曲線的な沈線が施される。横走する沈線上には円形竹管による刺突が３カ所確認されるが、割れ口にかかるため明瞭には見えない。

第２類（162～176）

阿玉台式土器と思われるものを一括する。162は把手部、163～168は口縁部片、他は胴部片である。口縁部片は167は波状になるようであるが、他は平縁である。162は表裏に角押文を枠状に巡らし、163、164は中空の貼付文を有する。これらは本類の中にあってもより古い段階（阿玉台Ｉａ段階）に位置付けが求められそうである。165は平縁の深鉢になるものと思われる。口縁部文様帯には角押文が枠状に巡らされ、頸部直下には波状の沈線がみられる。概して雲母を多量に含むが、162～164はそれほど顕著ではない。

第３類（177～179）

勝坂式と思われるものを一括する。177、178は口縁部片で、178は頸部に楕円区画文がみられ、区画内には単節ＲＬの縄文が縦位に施文される。

第５群土器（180～183）

詳細は不明であるが後期のものと思われるものを一括する。

グリッド出土石器（第75図・第76図）

１　磨製石斧。棒状の自然礫を素材とし、全体を入念に研磨しており、研磨以前の調整段階の剥離面は基部周辺に僅かに残る程度である。側縁は全体的に丸みを帯びているが、刃部周辺は特に入念に研磨されており、両刃の鋭いエッジを形成している。基部側も刃部ほどではないが鋭いエッジをなしている。凝灰岩製。長さ119、幅25、厚さ18mm。94ｇ。

2　磨製石斧。大形の磨製石斧の刃部片である。入念に研磨され、両刃の鋭いエッジをなしているが、使用に伴う剥落と思われる面が観察される。それらの面は本体が欠損する以前に形成されたものも含まれる。側縁は片側しか残されていないが、面取りするように研磨されており、定角式に近い形状を呈していたものと思われる。閃緑岩製。長さ55、幅50、厚さ23㎜。55ｇ。

3　打製石斧。節理を利用して分割した緑泥片岩を素材とし、全周にわたって側縁からの剥離を施して器体を完成させている。刃部および左側縁は表裏両面からの加工であるが、右側縁は表面側に対してのみ加工が施される。長さ96、幅69、厚さ15㎜。126ｇ。

4　打製石斧。風化が著しく剥離面は観察しづらいが、横長剥片を素材としているようである。両側縁は部分的ではあるが表裏両面から加工が施されるが、刃部は表面側に対してのみ剥離が加えられ、片刃の刃部を形成している。刃部は偏刃となる。ホルンフェルス製。長さ145、幅72、厚さ23㎜。290ｇ。

5　打製石斧。陵をもつ円礫の一方の面に剥離を施し、刃部と側縁を作出している。一側縁に分割面がみられるが、その面からも若干の加工が施されている。分割した後本器体を完成させたものか、欠損後再加工したものであるかは不詳である。砂岩製。長さ88、幅43、厚さ30㎜。104ｇ。

6　打製石斧。風化が著しく、剥離面の観察は困難であるが、横長剥片を素材としているものと思われる。片面には礫表皮を大きく残し、主として主要剥離面側に対して加工が加えられる。砂岩製。長さ87、幅50、厚さ15㎜。66ｇ。

7　打製石斧。縦長剥片を素材とし、片面には自然面を大きく残す。主として主要剥離面側に対して加工が施される。刃部は欠損した後再加工を試みたもののようである。全体的に風化が著しい。安山岩製。長さ89、幅69、厚さ27㎜。223ｇ。

8　片面に大きく自然面を残す剥片を素材とし、右側縁から刃部にかけての主要剥離面側に加工が施される。上半部は節理により欠損している。ホルンフェルス製。長さ101、幅120、厚さ29㎜。431ｇ。

9　削器。縦長剥片を素材としている。打点が明瞭な割にはバルブが発達していないのが特徴的な素材を用いている。連続する剥離を側縁に施して器体を完成させている。左側縁側の連続する剥離面は主要剥離面との切り合いを有していないため、素材が剥離された以前の加工であるのかそれ以後の剥離であるのかは識別できない。安山岩製。長さ77、幅42、厚さ16㎜。53ｇ。

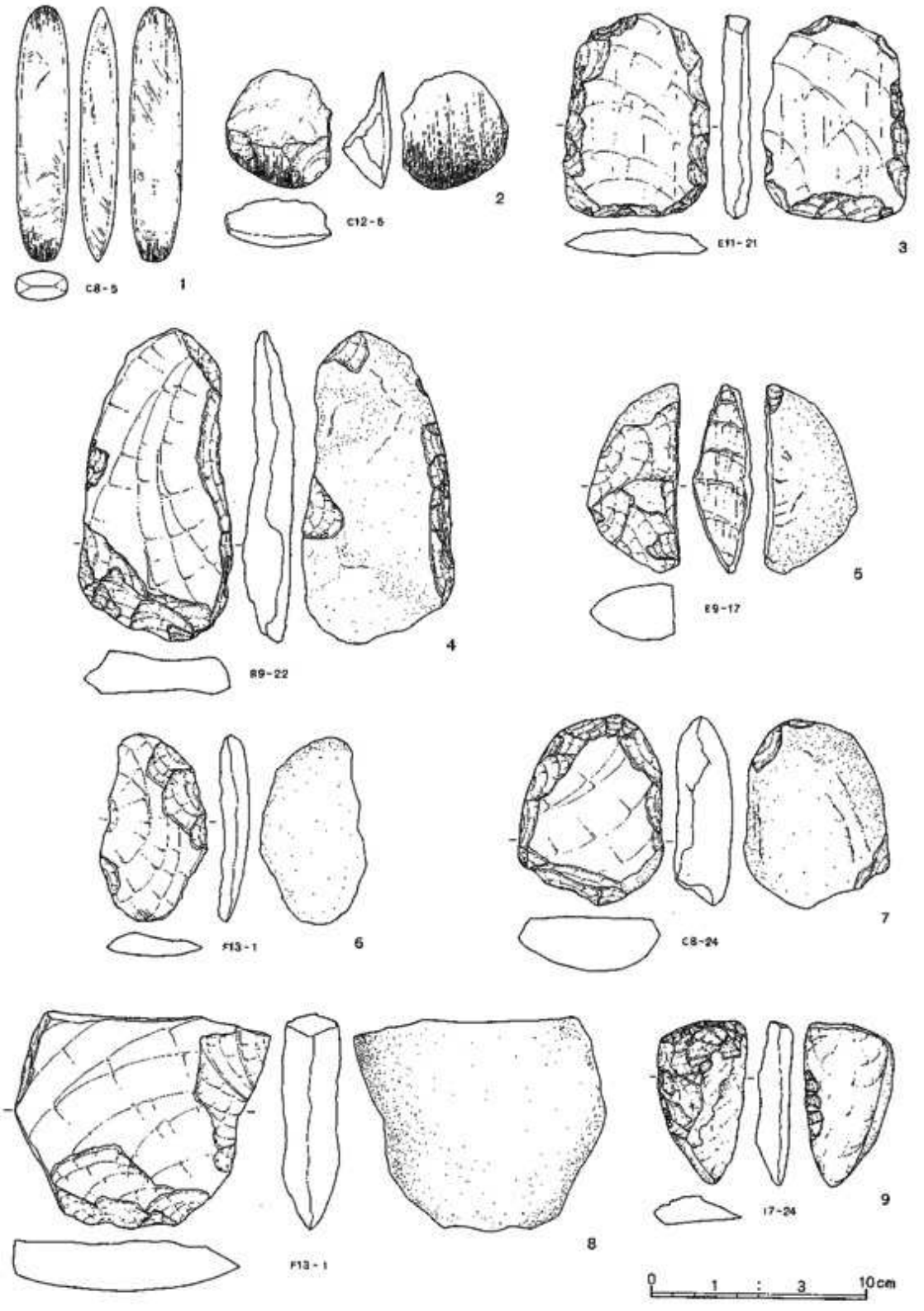
10　礫器。自然面を大きく残す素材の一端に急角度の連続する剥離を施している。ホルンフェルス製。長さ101、幅47、厚さ31㎜。193ｇ。

11　礫器。円礫を素材とし、表裏に自然面を残す。砂岩製。長さ120、幅87、厚さ54㎜。652ｇ。

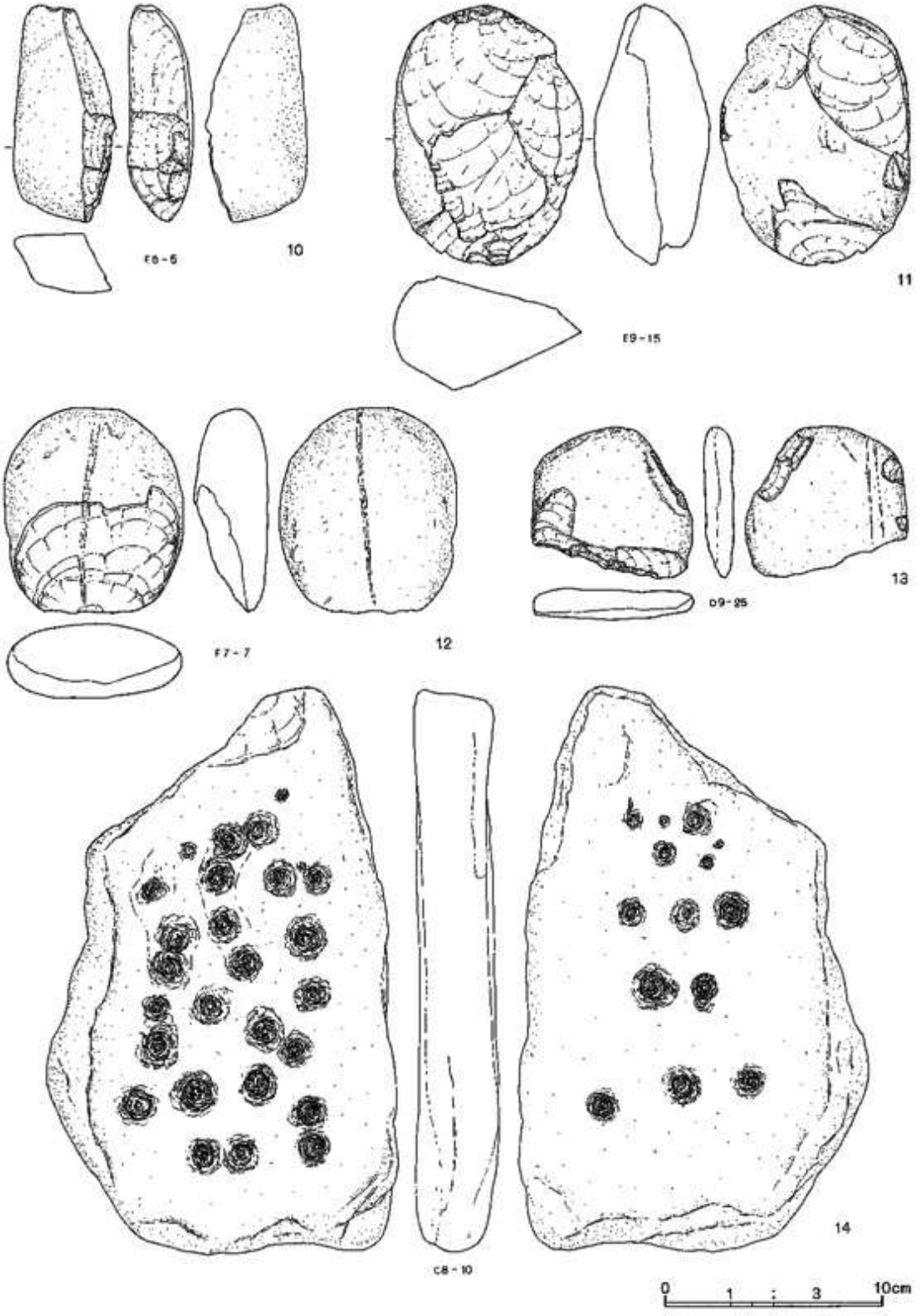
12　礫器。円礫を素材とし、下端から大きな剥離を１回施している。縁辺には小剥離も観察される。砂岩製。長さ94、幅82、厚さ35㎜。360ｇ。

13　礫器。緑泥片岩の偏平な自然礫を素材とし、片面からの剥離で刃部を作出している。側縁には部分的ではあるが両面からの剥離もみられる。長さ70、幅75、厚さ14㎜。110ｇ。

14　凹み石。表裏にわたって多数の凹みが観察される。緑泥片岩製。長さ271、幅163、厚さ41㎜。2470ｇ。




第75図　グリッド出土石器(1)




第76図　グリッド出土石器(2)

## 3　弥生時代の遺構と遺物

本遺跡における弥生時代の遺構は土坑が２基確認されただけであり、住居跡は確認されていない。

今回報告する遺跡群の中で弥生時代の遺構、遺物が確認されたのは蟹沢遺跡と本遺跡のみであるが、谷を隔てて隣接する蟹沢遺跡からは10件の住居跡と１基の土坑等から多数の土器が出土している。遺構の質と量の点において本遺跡と対称的である。

検出された２基の土坑はいずれも西尾根の西向き斜面の頂部付近に位置し、谷を介して蟹沢遺跡の住居跡群と対峙している。

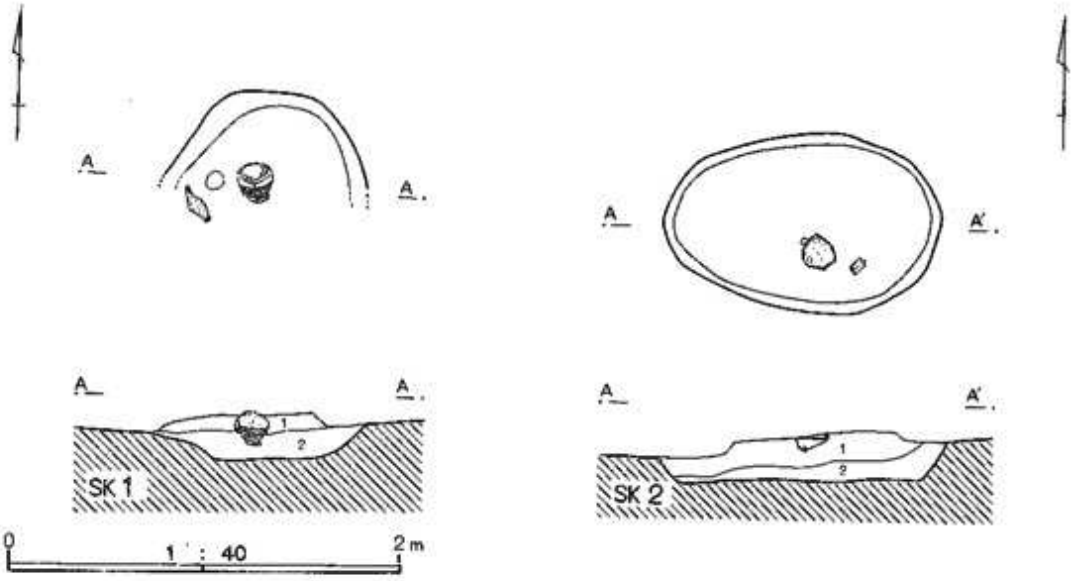
両遺跡とも後期吉ケ谷式期の比較的新しい段階の範疇で捉らえられるものであろうが、それぞれの遺構の時間的関係についてはさらなる検討を必要とする。

検出された遺構が、蟹沢遺跡は住居跡を主体としているのに対し、一方の芳沼入遺跡は土坑を主体としていることから、両者は性格を異にする遺跡であろうと思われる。

### 第１号土坑

西尾根Ｄ７グリッドにおいて確認されている。南半部を欠いているがほぼ円形の形態になるものと思われる。残存部の規模は径2.1m、残存壁高は約46cmを測る。確認面の標高は約88.2m、床面の対水平角は約３度である。

内部からはほぼ完形に近い甕が１個体と礫が１点確認されている。甕は土坑のほぼ中央から倒立した状態で検出された。甕に施文された縄文の原体は一見ＬＲの単節斜縄文風であるが、節を詳細




ＳＫ１（水糸レベル　88.3m）
1層　褐色土　しまりやや良く砂質。若干の焼土を含む。
2層　暗褐色土　しまりやや良く砂質。焼土粒、炭化物粒を若干含む。
3層　赤褐色土　しまりやや良く砂質。焼土ブロック、炭化物を含む。

ＳＫ２（水糸レベル　88.7m）
1層　暗褐色土　しまり悪く砂質。炭化物を若干含む。ローム ブロックを混入。
2層　黒褐色土　しまり悪く砂質。1層より黒味が強い。

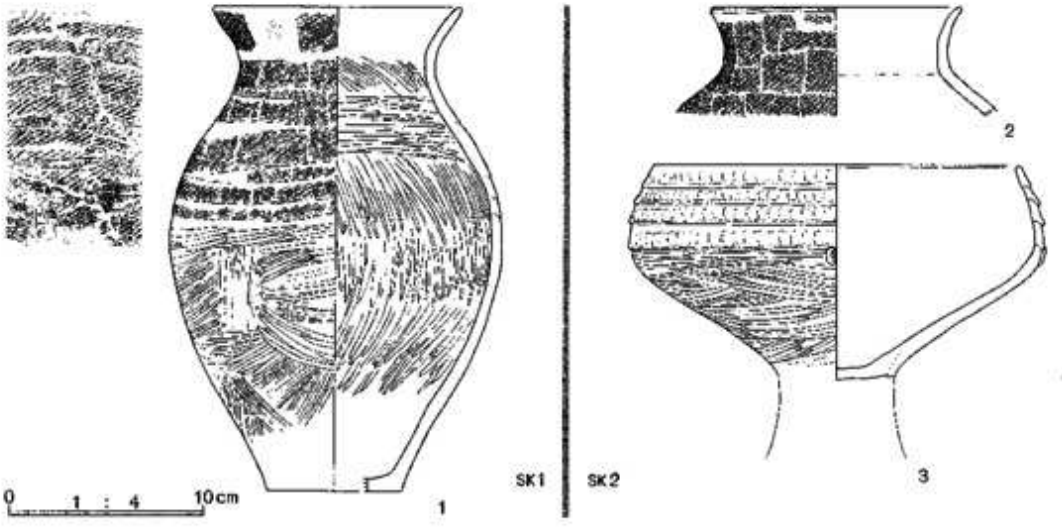
第77図　弥生時代の土坑

に観察すると、さらに小さな節をほぼ不偏的に見て取ることができる。最小の節は非常に小さなものであるため繊維痕の見誤りである可能性も否定できないが、複節ＬＲＬの原体を使用しているものと思われる。

### 第２号土坑

西尾根の頂部付近、第１号土坑の東側のＤ８グリッドにおいて確認されている。規模は2.9×1.9ｍを測り、形態は東西に長い楕円形となる。残存壁高は約50cmである。確認面の標高は約88.5m、床面の対水平角は約２度である。長軸方向はＮ―83度―Ｅである。

内部からは甕の口縁部と高坏が検出されている。高坏の坏部は、剥落著しいが内外面全面に赤彩が施されていたようである。口縁部以下に段を４段有するが、最下段から無段部にかけて長さ８㎜、幅４㎜程度の豆粒状の貼付文が１ヵ所確認されている。本来的には４ヵ所に貼付されていたものと思われる。脚部は確認されていない。




第78図　土坑出土土器

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器　高 | 底　径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | (12.8) | 24.6 | (6.8) | sb | do | B | 40 | 複節ＬＲＬ？ |
| 2 | 甕 | (12.9) | 5.6 | ― | s | rb | B | 50 | ０段多条単節ＬＲ |
| 3 | 高坏 | 18.6 | 10.9 | ― | sb | do | B | 80 | 内外面全面に赤彩の痕跡。貼付文有り。 |

第27表　第１号・第２号土坑出土遺物

# 4　奈良時代の遺構と遺物

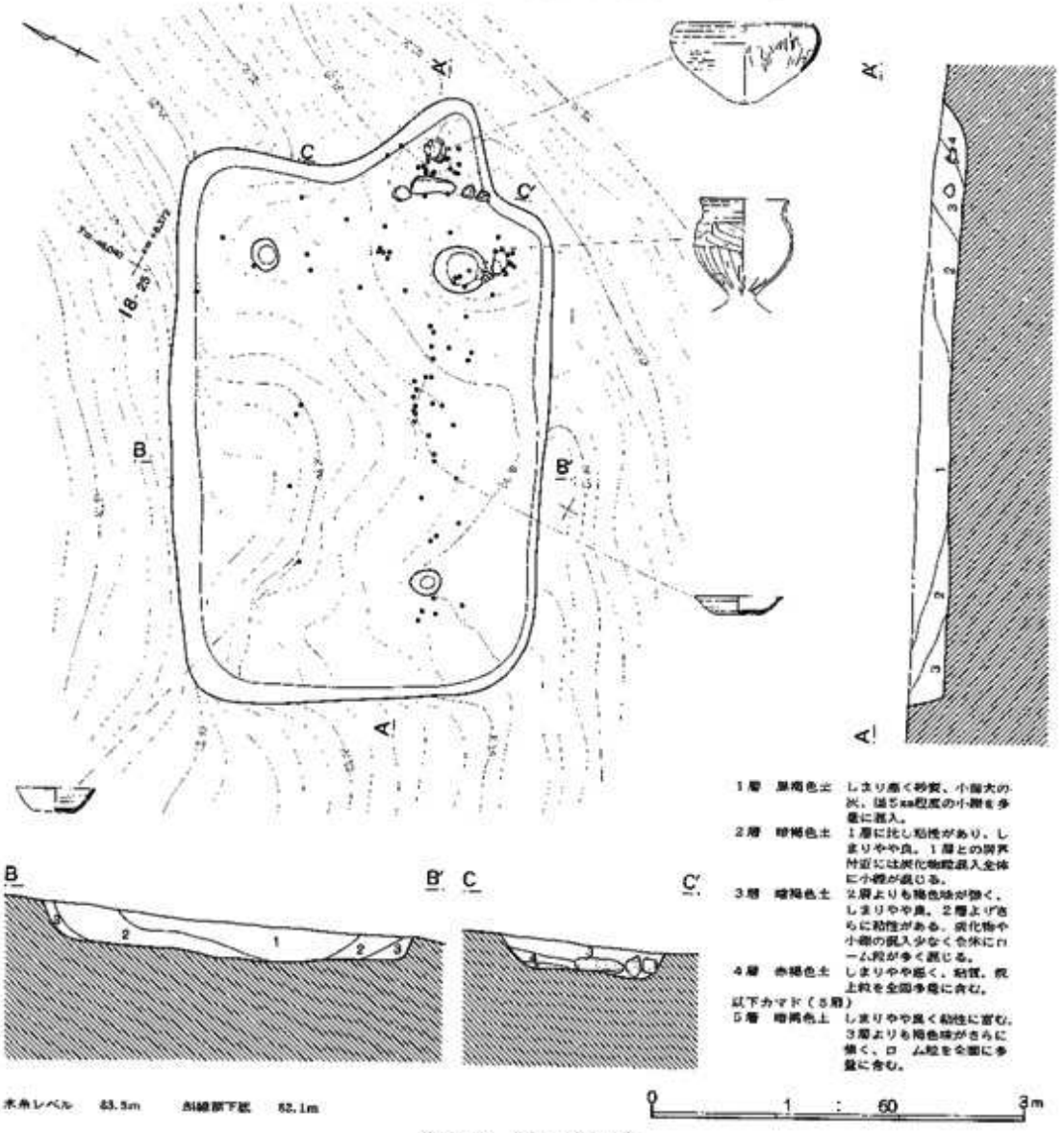
## 第１号住居跡

南尾根の東向き斜面部の頂部付近、Ｉ８、Ｉ９、Ｊ８、Ｊ９グリッドにかけて確認されている。規模は4.5×3.1mを測り、東西方向に長い長方形の形態となる。残存壁高は約30cm、確認面の標高は約83.4m、床面の対水平角は約３度である。

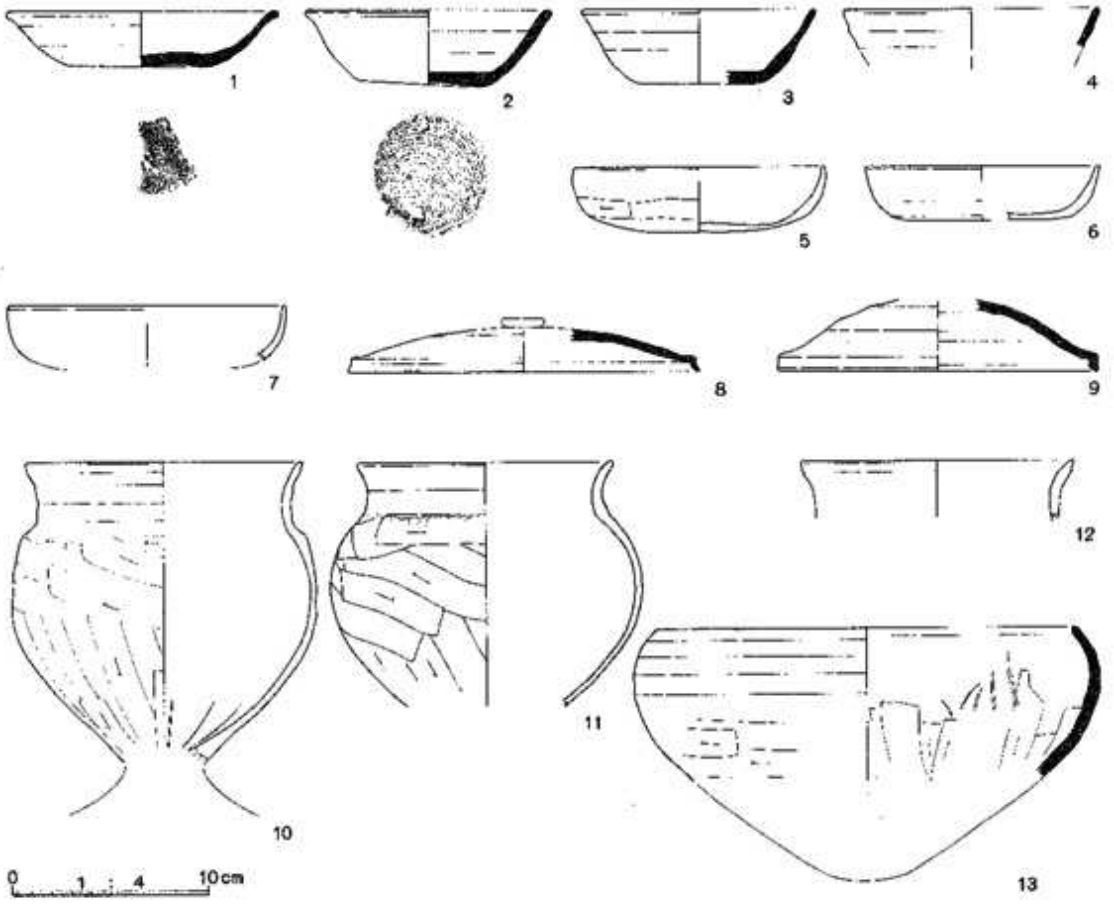
カマドは住居東壁の中央やや南寄りに作られているが、斜面部に作られた本住居の最も標高の低い場所に位置する。主軸方向はN―68度―Eである。

４本柱穴であった可能性が高いものと思われるが、確認されているのは３本である。

灯明具として使用したと思われる坏や鉄鉢形の須恵器が出土している。




第79図　第１号住居跡




第80図　第1号住居跡出土遺物

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | S坏 | (13.8) | 2.8 | (7.2) | w針 | g | A | 40 | 底部回転糸切り。 |
| 2 | S坏 | 12.7 | 3.8 | 7.0 | s針 | o | C | 100 | 同上。内外面に黒色の油煙付着。灯明具か。 |
| 3 | S坏 | (12.0) | 3.8 | (5.6) | w針 | gb | B | 30 | 底部回転糸切り。 |
| 4 | S坏 | (13.2) | 2.1 | — | 針 | gb | B | 30 | |
| 5 | 坏 | (12.6) | 3.3 | (3.5) | bw | o | B | 40 | 底部ヘラ削り。 |
| 6 | 坏 | (11.8) | 2.7 | (7.2) | b | o | B | 40 | 底部ヘラ削り。 |
| 7 | 坏 | (14.0) | 2.7 | — | b | do | B | 10 | |
| 8 | S蓋 | (17.9) | 2.2 | — | 針 | lg | B | 30 | |
| 9 | S蓋 | (16.5) | 3.6 | — | 針 | lg | B | 30 | |
| 10 | 台付甕 | 14.2 | 15.4 | — | bw | o | A | 50 | |
| 11 | 台付甕 | 13.1 | 12.4 | — | bw | o | A | 80 | |
| 12 | 台付甕 | (13.9) | 2.9 | — | bw | o | B | 40 | |
| 13 | S鉢 | (21.4) | (11.0) | — | s | gb | B | 30 | 鉄鉢形。内外面に削り。 |

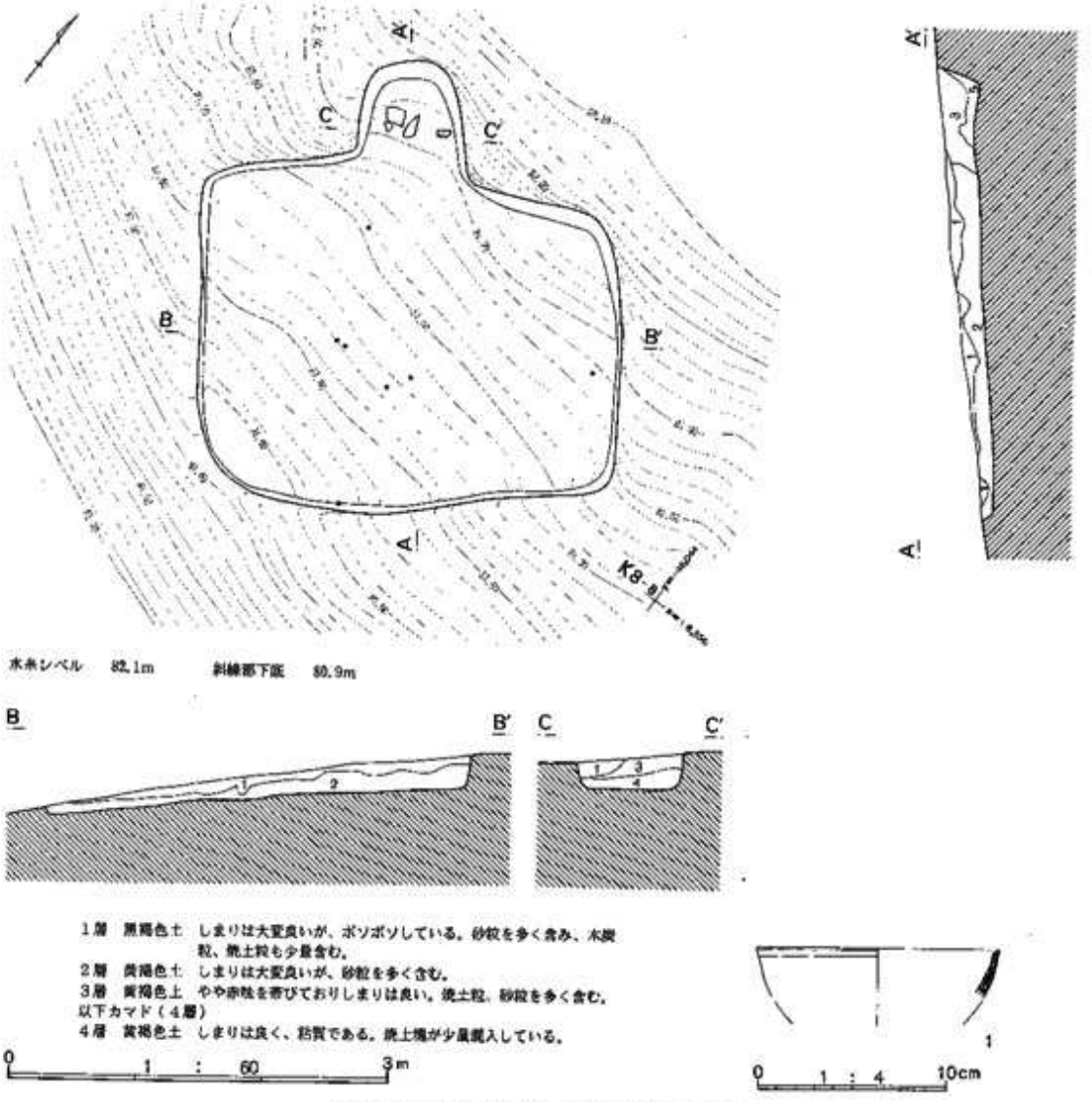
第28表　第1号住居跡出土遺物

## 第２号住居跡

南尾根の南西向き斜面部のＫ８グリッドにおいて確認されている。規模は3.4×2.8mを測り、形態は東西方向にやや長い長方形となる。残存壁高は約34cm、確認面の標高は約82.0m、床面の対水平角は約５度である。

カマドは住居北壁のほぼ中央に作られ、主軸方向はＮ－43度－Ｗである。本遺跡内の住居としては唯一西への偏角をもつ住居である。

遺物は非常に少なく図示できるものは須恵器の椀のみである。




第81図　第２号住居跡・同住居跡出土遺物

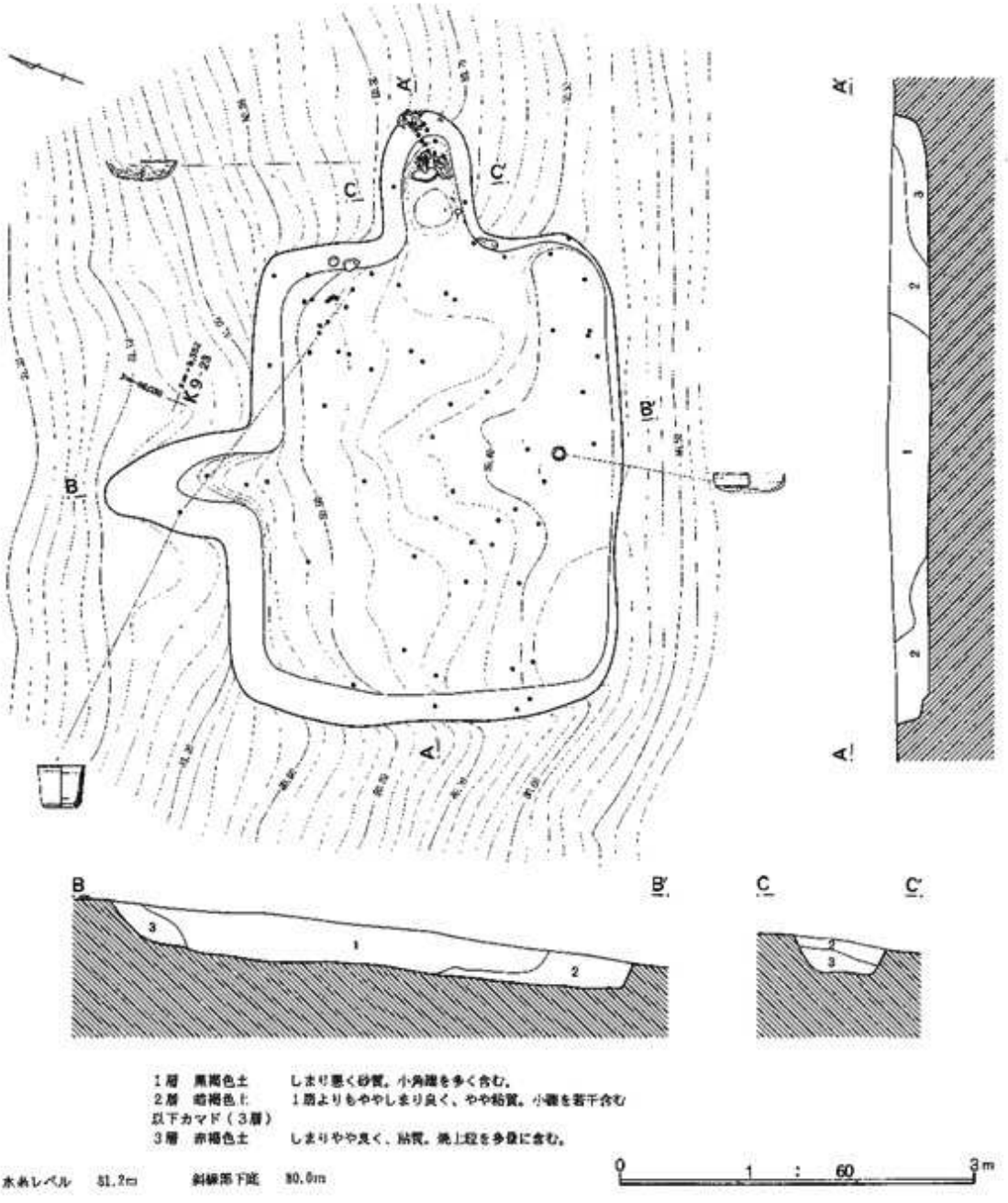
| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | S椀 | (12.9) | 2.6 | — | s | g | B | 20 | |

第29表　第２号住居跡出土遺物

**第３号住居跡**

南尾根南端付近の尾根線上、Ｋ９、Ｌ９グリッドにおいて確認されている。規模は4.1×3.3mを測り、形態は東西方向にやや長い長方形となる。残存壁高は約40cm、確認面の標高は約81.1m、床面の対水平角は約５度である。

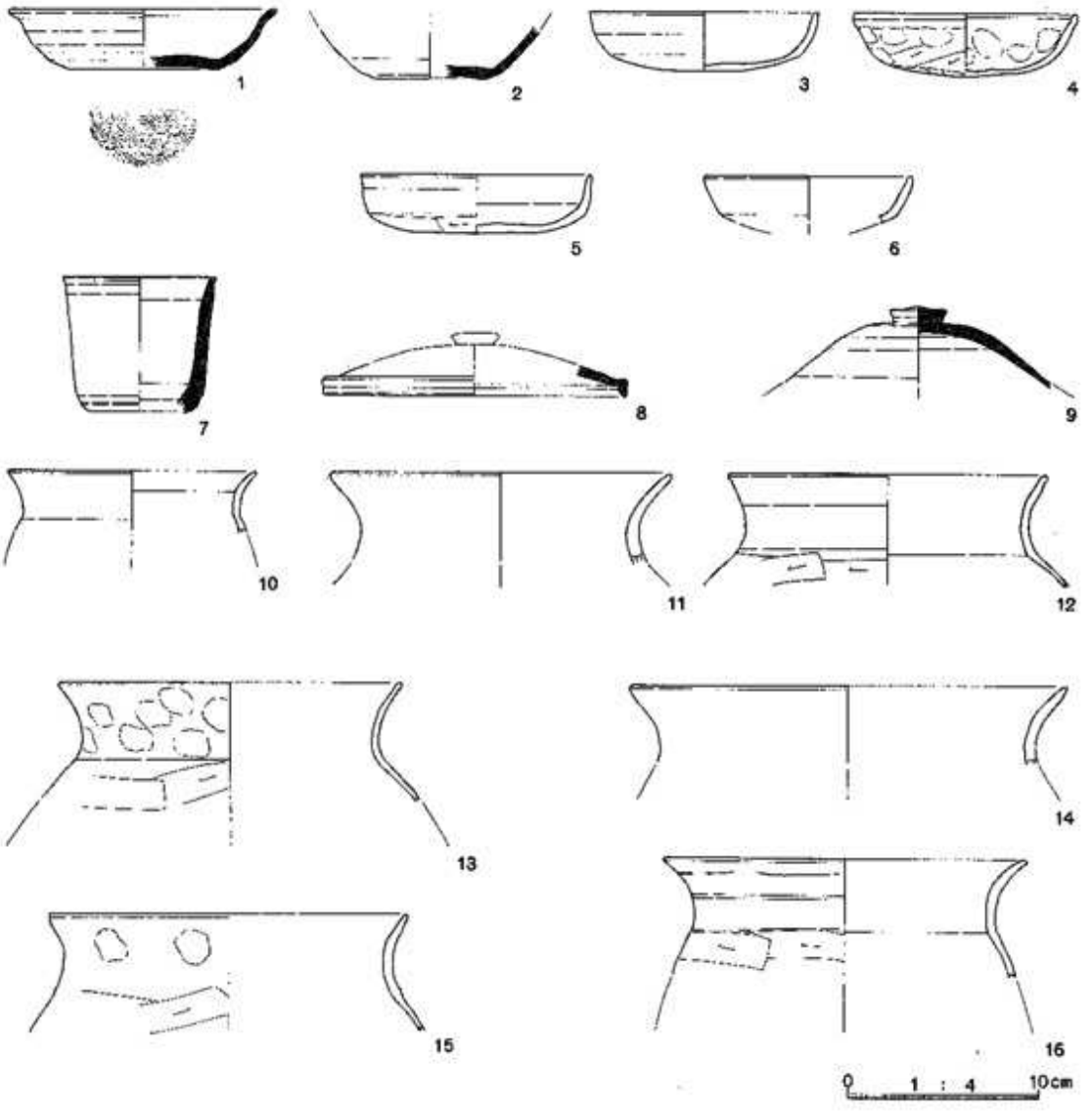
カマドは東壁ほぼ中央に作られ、主軸方向はN－69度－Eである。北壁ほぼ中央にも焼土を含むカマド状の掘り込みが確認されているが、２基が併存していたものか、作り替えによるものである




第82図　第３号住居跡

のか、住居の重複であるのかは明らかではない。いずれにしても主として使用されたカマドは、カマド構築材や遺物の出土状況から見て東壁側のカマドであろうと思われる。

須恵器の坏やコップ形土器が出土している。




第83図　第３号住居跡出土遺物

**第４号住居跡**

南尾根最南端の南東向き斜面の尾根線上、Ｌ９グリッドにおいて確認されている。規模は4.0×3.3mを測り、台形に近い形態となる。残存壁高は約44cm、確認面の標高は約80.3m、床面の対水平角は約５度である。

カマドは確認されていないが長軸方向はN―54度―Eである。

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | S坏 | (14.1) | 3.1 | (7.8) | 針 | g | A | 30 | 底部回転糸切り。 |
| 2 | S坏 | — | 2.5 | (5.4) | wb | g | C | 30 | 底部回転糸切り。 |
| 3 | 坏 | (12.0) | 3.0 | — | b | o | B | 40 | 底部ヘラ削り。 |
| 4 | 坏 | (11.6) | 3.3 | — | b | o | A | 50 | 底部ヘラ削り。 |
| 5 | 坏 | 12.0 | 3.1 | — | b | o | B | 90 | 底部ヘラ削り。 |
| 6 | 坏 | (10.8) | 2.3 | — | b | o | B | 20 | |
| 7 | Sコップ形 | (7.8) | 7.0 | (5.2) | w 針? | g | A | 40 | 口唇部はやや内傾し平坦。 |
| 8 | S蓋 | (15.6) | 1.6 | — | w | lg | B | 20 | |
| 9 | S蓋 | (13.8) | 4.0 | — | w針 | g | A | 40 | |
| 10 | 甕 | (12.9) | 3.1 | — | bw | o | B | 10 | |
| 11 | 甕 | (18.0) | 4.6 | — | wb | o | B | 20 | |
| 12 | 甕 | (16.8) | 5.7 | — | bw | do | B | 30 | |
| 13 | 甕 | (17.9) | 6.2 | — | bw | do | B | 30 | |
| 14 | 甕 | (22.8) | 4.0 | — | wb | o | B | 20 | |
| 15 | 甕 | (18.8) | 6.2 | — | bw | o | B | 40 | |
| 16 | 甕 | (19.0) | 6.1 | — | bw | o | B | 40 | |

第30表　第３号住居跡出土遺物

住居内には２ヶ所の土坑が確認されている。東側の土坑は方形で遺物はほとんど含まれないが、下面に近付くにつれて焼土、炭化物を多く含むようになる。西側の土坑は三角形に近い形態を呈し、覆土には多量の焼土、焼土塊が含まれる。内部からはほぼ完形の土師器甕が出土している。甕は住居床面上には露出していなかったようである。

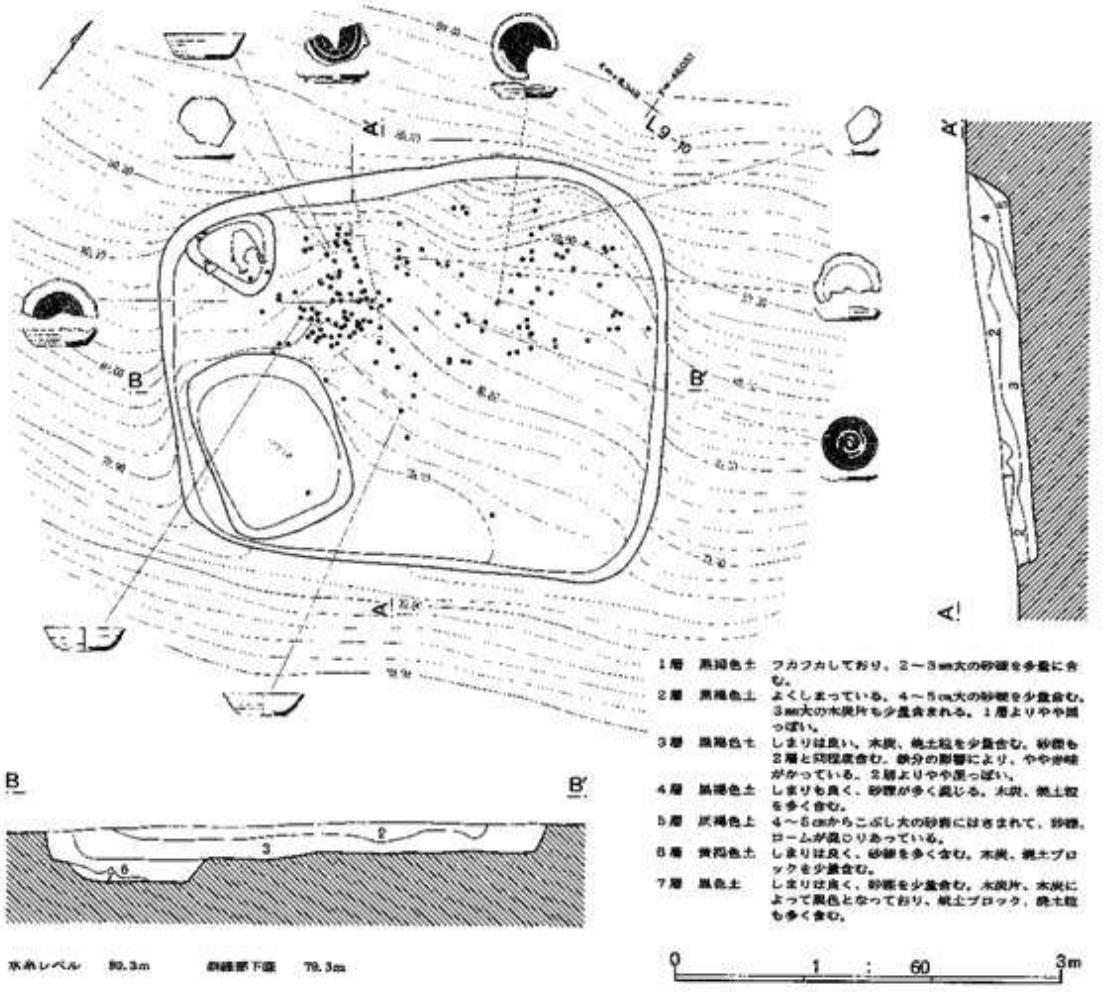
本住居跡は、カマドが無い、床下に２基の土坑をもつ、形態が台形に近い等、他の住居跡には見られない特徴をもっている。ただし、先述したように本遺跡においては地山と覆土の関係が判別しづらい遺構が多いため、カマドがないと断言することはできない。

出土遺物についても他の住居とは異なる際立った特徴をもっており、転用硯を多く出土している。転用硯は、坏、椀等の口縁部を除去し、器高を減じるように加工されている。16のように坏等の口縁部を除去した跡が平滑になるように仕上げられたものと、口縁部を折り取るように除去し、そのあとが波状を呈するものがある。16、17、18は見込部の摩滅が顕著であり（図中網部）、磨り面として使用された可能性が高い。

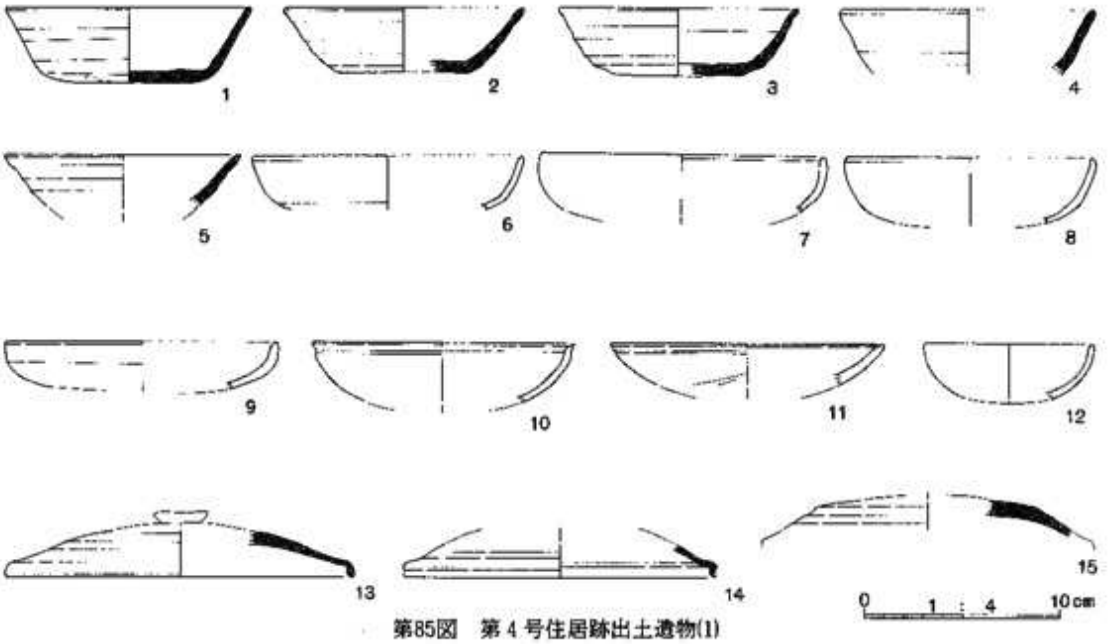
転用硯であろうと推測される遺物は第６号住居跡からも１点確認されているが、他の住居からは出土していない。

遺物の出土量は本遺跡の住居の中では第６号住居跡と並んで最も多い方に属する。

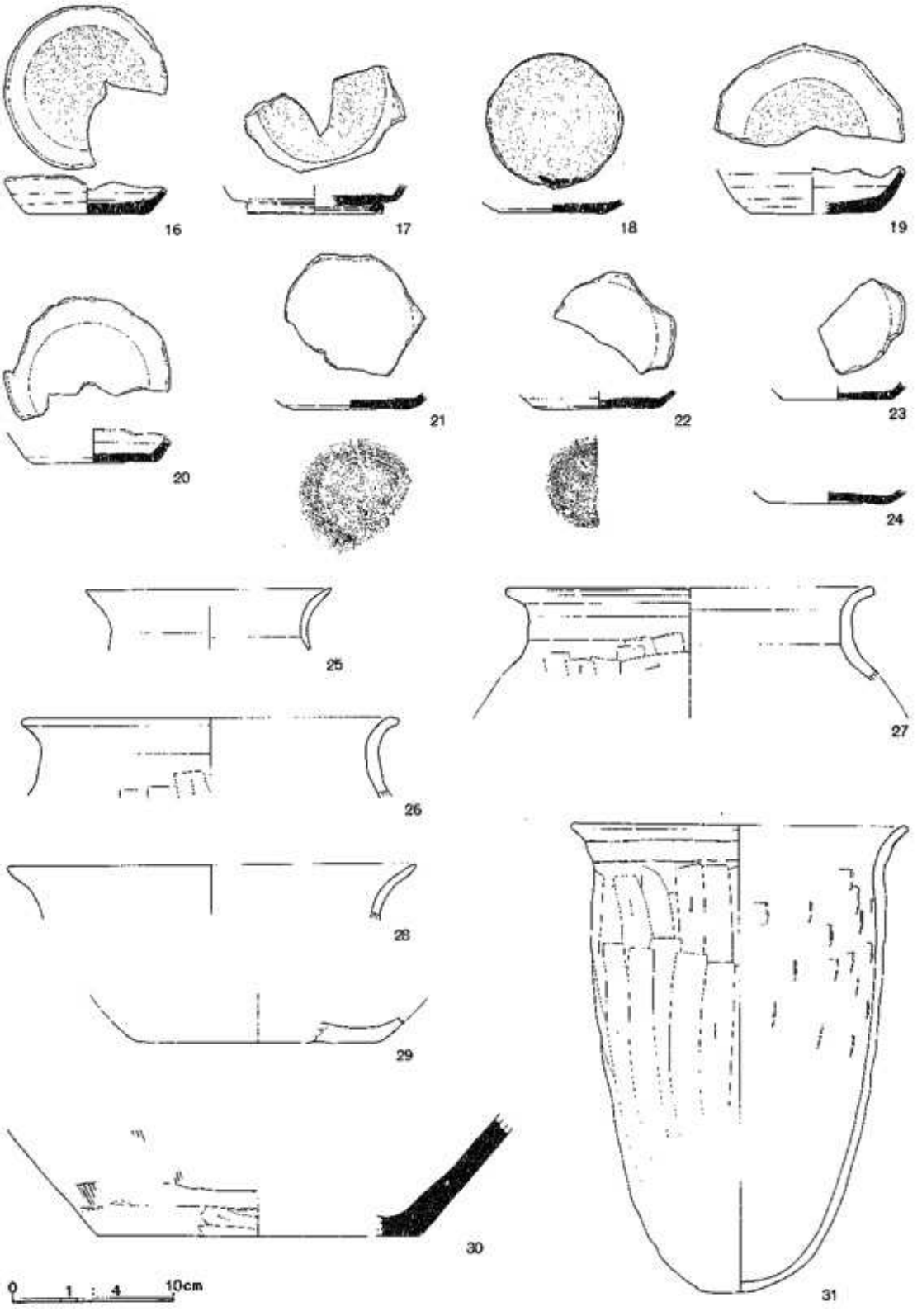
17は第３号住居跡出土の破片と接合している。




第84図　第4号住居跡




第85図　第4号住居跡出土遺物(1)




第86図　第4号住居跡出土遺物(2)

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | S坏 | 12.6 | 3.8 | 7.0 | 針 | g | A | 80 | 火襷痕。底部ヘラ削りの後なで。 |
| 2 | S坏 | (12.4) | 3.3 | (6.6) | w針 | g | A | 40 | 火襷痕。底部回転糸切りの後ヘラ削り。 |
| 3 | S坏 | (12.2) | 3.5 | (6.8) | 針? | gb | A | 40 | 底部回転糸切りの後ヘラ削り。 |
| 4 | S椀 | (13.2) | 3.3 | — | 針 | g | B | 20 | |
| 5 | S椀 | (12.0) | 2.8 | — | w | g | B | 20 | |
| 6 | 坏 | (13.8) | 2.8 | — | b | o | B | 20 | |
| 7 | 坏 | (14.4) | 3.0 | — | wb | o | B | 20 | |
| 8 | 椀 | (12.6) | 3.6 | — | bs | o | B | 20 | |
| 9 | 坏 | (14.0) | 2.6 | — | bw | o | B | 20 | |
| 10 | 椀 | (13.4) | 3.0 | — | bw | o | A | 30 | |
| 11 | 椀 | (14.0) | 2.1 | — | wb | o | B | 30 | |
| 12 | 椀 | (8.8) | (3.0) | — | b | o | B | 20 | |
| 13 | S蓋 | (17.9) | 2.4 | — | w針 | g | B | 20 | |
| 14 | S蓋 | (16.0) | 1.7 | — | w針 | g | B | 20 | |
| 15 | S蓋 | (14.7) | 1.4 | — | w針 | g | B | 30 | |
| 16 | S転用硯 | — | 1.5 | 7.2 | s針 | g | B | 80 | 底部ヘラ削り。 |
| 17 | S転用硯 | — | 1.8 | 8.3 | w | g | A | 60 | 摩滅顕著。 |
| 18 | S転用硯 | — | 0.7 | 6.6 | w針 | g | A | 100 | 底部回転糸切りの後ヘラ削り。墨痕?付着。 |
| 19 | S転用硯 | — | 2.5 | 8.0 | s針 | g | B | 50 | 底部削り。墨痕?付着。 |
| 20 | S転用硯 | — | 1.4 | 7.4 | b | lg | C | 60 | 底部回転糸切りの後ヘラ削り。 |
| 21 | S転用硯 | — | 0.7 | 7.2 | w針 | g | B | 60 | 底部回転糸切りの後ヘラ削り。 |
| 22 | S転用硯 | — | 1.1 | 7.0 | b針 | g | A | 50 | 底部回転糸切り。 |
| 23 | S転用硯 | — | 0.8 | (6.6) | w針 | lg | B | 30 | 底部回転糸切りの後ヘラ削り。 |
| 24 | S転用硯 | — | 0.7 | 7.2 | s | o | C | 90 | 底部回転糸切り。 |
| 25 | 甕 | (15.2) | 3.8 | — | s | o | B | 20 | |
| 26 | 甕 | (23.4) | 4.8 | — | s | o | B | 20 | |
| 27 | 甕 | (23.0) | 5.4 | — | s | o | B | 30 | |
| 28 | 甕 | (25.4) | 3.0 | — | b | o | B | 20 | |
| 29 | 甕 | — | 1.2 | (14.0) | s | o | B | 30 | |
| 30 | S甕 | — | 6.5 | (19.8) | w針 | o | B | 30 | |
| 31 | 甕 | 20.9 | 28.8 | — | s | o | B | 90 | |

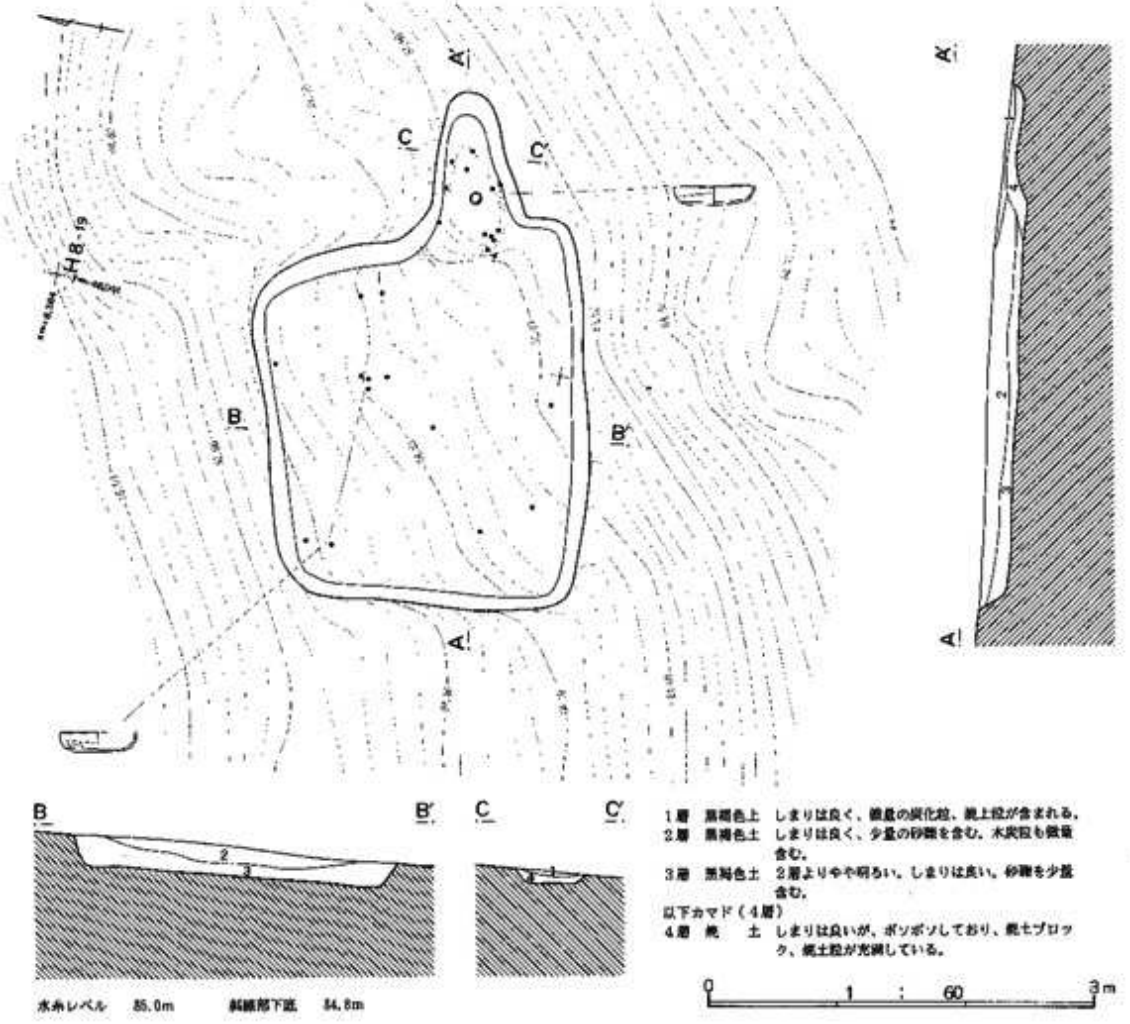
第31表　第4号住居跡出土遺物

### 第5号住居跡

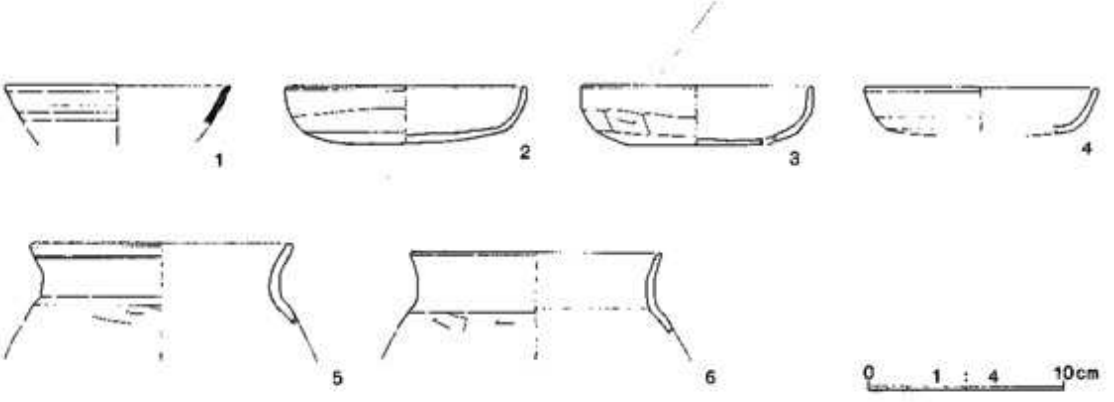
南尾根中央付近の尾根線近くの東向き斜面、H8グリッドにおいて確認されている。規模は3.1×2.6mを測り、東西にやや長い長方形の形態となる。残存壁高は約26cm、確認面の標高は約84.9m、床面の対水平角は約5度である。

カマドは住居東壁中央やや南よりに作られ、主軸方向はN－79度－Eである。

カマド内においてほぼ完形の坏が出土している。




第87図　第5号住居跡



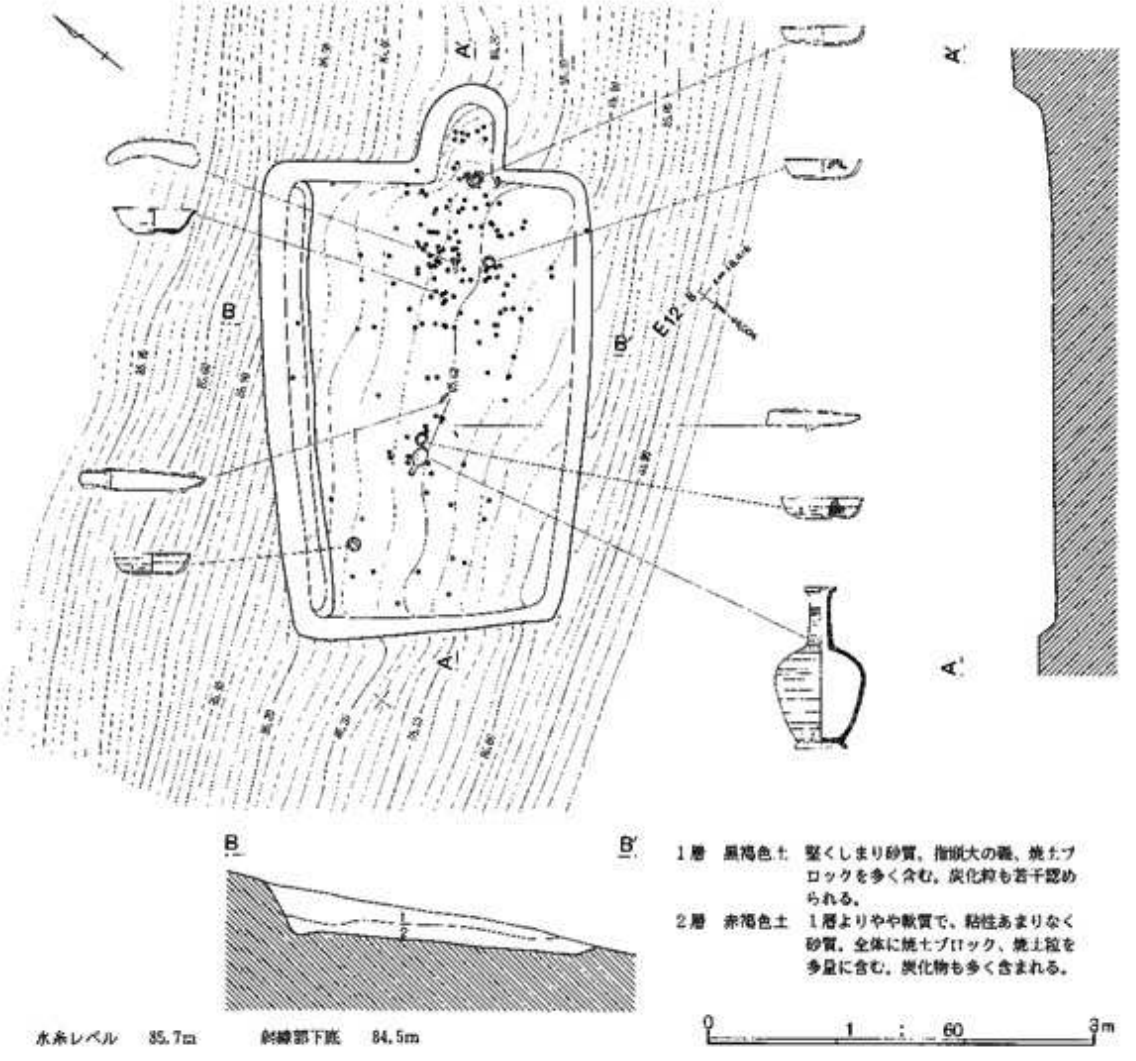

第88図　第5号住居跡出土遺物

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | S椀 | (11.6) | 1.8 | — | w針 | g | A | 20 | |
| 2 | 坏 | 12.2 | 2.9 | — | b | o | B | 80 | 底部ヘラ削り。内面に油煙付着。灯明具か。 |
| 3 | 坏 | (11.7) | 3.0 | — | b | o | B | 50 | 底部ヘラ削り。 |
| 4 | 坏 | (12.0) | 2.3 | — | bw | o | B | 20 | |
| 5 | 甕 | (13.4) | 4.0 | — | wb | rb | B | 20 | |
| 6 | 甕 | (12.9) | 4.0 | — | wb | o | B | 40 | |

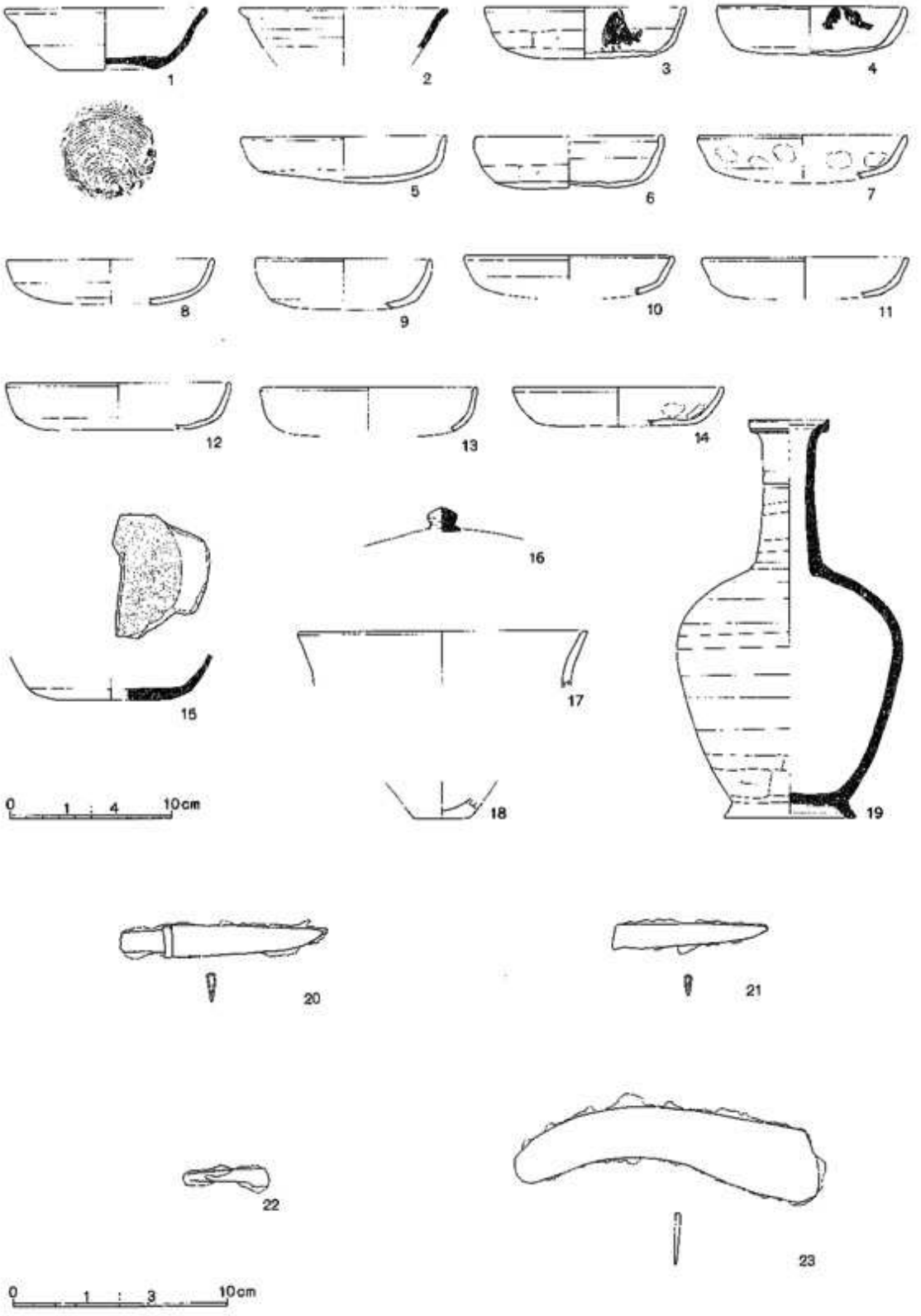
第32表　第５号住居跡出土遺物

## 第６号住居跡

北尾根の中央付近の尾根線上近く、E12グリッドにおいて確認されている。本遺跡内において唯一北尾根に構築された住居である。規模は3.7×2.6mを測り、形態は長方形となる。残存壁高は約




第89図　第６号住居跡




第90図　第６号住居跡出土遺物

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | S坏 | 12.6 | 13.8 | 5.8 | w針 | gb | A | 90 | |
| 2 | S坏 | (12.8) | 2.5 | — | w針 | gb | A | 30 | |
| 3 | 坏 | 12.5 | 3.2 | — | bw | do | B | 100 | 底部ヘラ削り。内面油煙付着。灯明具か。 |
| 4 | 坏 | 11.8 | 3.0 | — | b | b | B | 95 | 底部ヘラ削り。内面油煙付着。灯明具か。 |
| 5 | 坏 | 12.8 | 2.8 | — | b | o | B | 80 | 底部ヘラ削り。 |
| 6 | 坏 | 11.5 | 3.2 | 5.5 | b | do | A | 100 | 底部ヘラ削り。 |
| 7 | 坏 | 13.0 | (2.9) | — | b | do | B | 30 | |
| 8 | 坏 | (12.8) | 2.7 | — | b | do | B | 30 | |
| 9 | 坏 | (10.9) | (3.1) | — | bw | do | B | 40 | |
| 10 | 坏 | (13.2) | 2.5 | — | b | o | B | 40 | |
| 11 | 坏 | (12.8) | 2.6 | — | b | o | C | 30 | |
| 12 | 坏 | (14.0) | (3.9) | — | b | o | B | 30 | |
| 13 | 坏 | (13.5) | 2.8 | — | sb | o | B | 20 | |
| 14 | 坏 | (13.1) | 2.4 | — | b | o | A | 30 | 底部ヘラ削り。 |
| 15 | S転用硯 | — | 2.9 | (7.2) | w針 | g | A | 40 | 底部回転糸切りの後ヘラ削り。 |
| 16 | S蓋 | — | — | — | 針 | g | A | 100 | 摩滅顕著。 |
| 17 | 甕 | (17.9) | 3.3 | — | wb | o | B | 30 | |
| 18 | 甕 | — | 0.7 | (3.0) | s | o | B | 70 | |
| 19 | S水瓶 | 5.5 | 8.2 | 24.5 | w針 | g | A | 95 | 頸部に2条の沈線が巡る。 |
| 20 | 刀子 | 長さ9.6、幅1.5、棟幅0.4cm。両関。ハバキを有する。茎下端欠損。 | | | | | | | |
| 21 | 刀子 | 長さ7.3、幅1.1、棟幅0.3cm。茎部欠損。 | | | | | | | |
| 22 | 刀子 | 長さ4.1、幅0.8cm。片関。木質部残存。切先部欠損。 | | | | | | | |
| 23 | 鎌 | 長さ14.2、幅3.3、棟幅0.2cm。 | | | | | | | |

第33表　第6号住居跡出土遺物

34cm。確認面の標高は約85.6m、床面の対水平角は約5度である。

カマドは住居北東壁中央やや南寄りに作られる。主軸方向はN—53度—Eである。

住居北西壁添いに壁溝が確認されている。焼土や炭化物が全面に分布しており、炭化材等も散見される。焼失家屋であった可能性も考えられる。

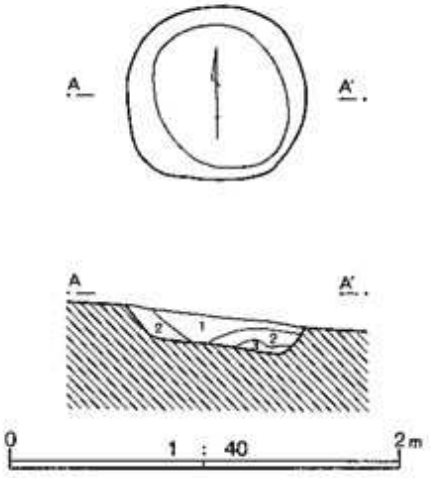
出土遺物は本遺跡内の住居としては最も多い方で、ほぼ完形の水瓶や灯明具として使用されたと思われる坏、鉄製の鎌、刀子等が出土している。水瓶内からも長さ3cm程度のやや炭化の進んだ材が確認されている。

### 第4号土坑

南尾根の南端近く、第3号住居跡の東側、K9グリッドにおいて確認されている。規模は1.0×

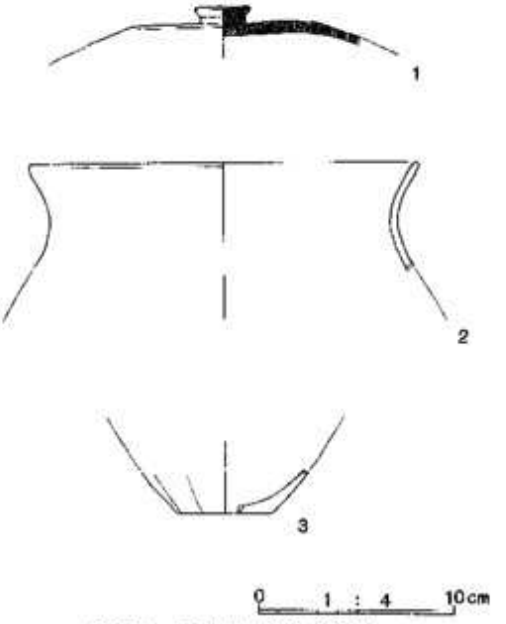
1.0mを測り、形態はほぼ円形となる。残存壁高は約16cmである。確認面の標高は約80.6m、床面の対水平角は約8度である。

遺物が出土していないので時期を特定することはできないが、南尾根は奈良時代の遺構以外は確認されていないので、さしあたり奈良時代の土坑として認識しておく。




SK4（水糸レベル 80.7m）
1層 黒褐色土 焼土混じりで、しまりは良い。ロームブロック、ローム粒が多量に含まれている。
2層 黄褐色土 しまりは良い。少量砂礫を混入する。
3層 黄褐色土 しまりは良い。砂礫を多く混入する。

第91図 第4号土坑




第92図 第4号土坑出土遺物

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | S蓋 | — | 1.8 | — | w針 | g | A | 40 | |
| 2 | 甕 | (20.0) | 5.4 | — | bw | o | B | 40 | |
| 3 | 甕 | — | 2.1 | (4.7) | bw | o | B | 40 | |

第34表 第4号土坑出土遺物

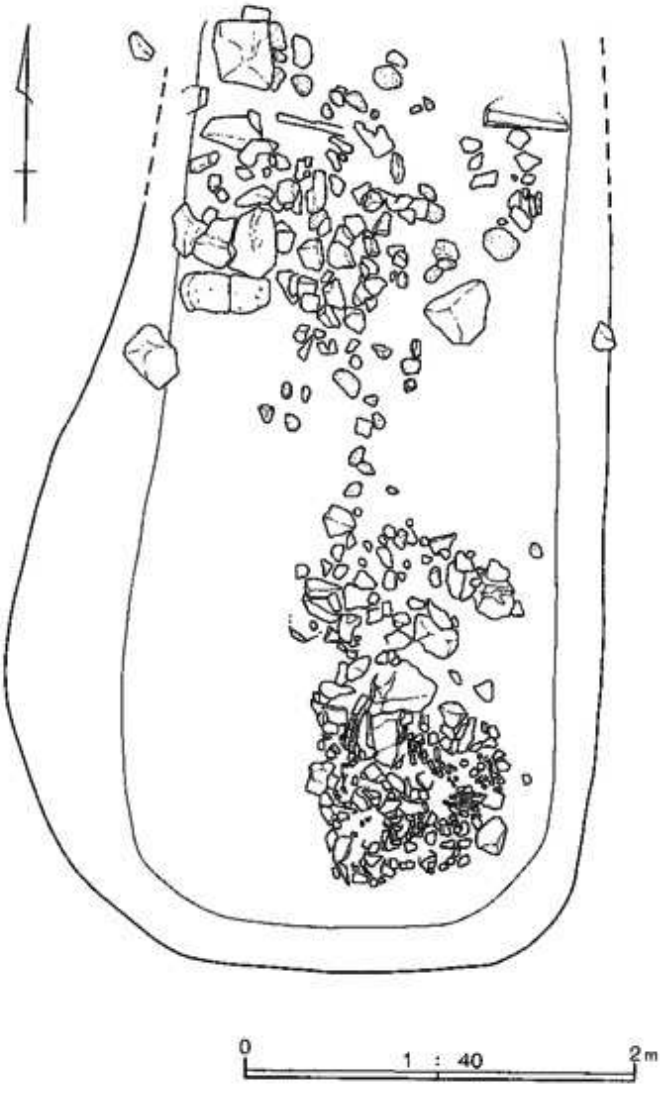
## 5 石室状遺構

中央谷の谷頭部、北尾根寄りのE10グリッド付近の南向き斜面部において検出されている。

遺存状態はあまり良くなく、古墳の石室とするには問題も残ろうが、石室状の遺構として認識しておく。

遺構を構成する石材は凝灰岩、緑泥片岩、その他の円礫であり、凝灰岩には手斧状、或いはのみ状と思われる工具による加工痕が明瞭に観察される。

第93図は遺構南西部のほぼ全域および北東部等の石材が既に抜き取られた後の状態であると思われるため、全体の石材の配置を正確に把握することはできないが、遺構北部に加工痕を有する凝灰岩の截石が多くみられる。特に北西部は側壁状に截石が配置されているようにも見受けられる。北東部も石材が抜き取られた痕跡から判断して北西部とほぼ同様の石材配置であったと思われる。遺構南半部には比較的大形の不整形の凝灰岩と加工に伴う屑石状の凝灰岩が多くみられる。円礫は北半部の側壁状の石材の間とその南部に多くみられるようである。




第93図　石室状遺構

石材を配置する部分については地山を若干掘削しているようであるが、掘り方はあまり明瞭ではない（図版17参照）。

墳丘も明確ではなく、当初からある程度石材が露出していたようである。周溝等も確認されていない。

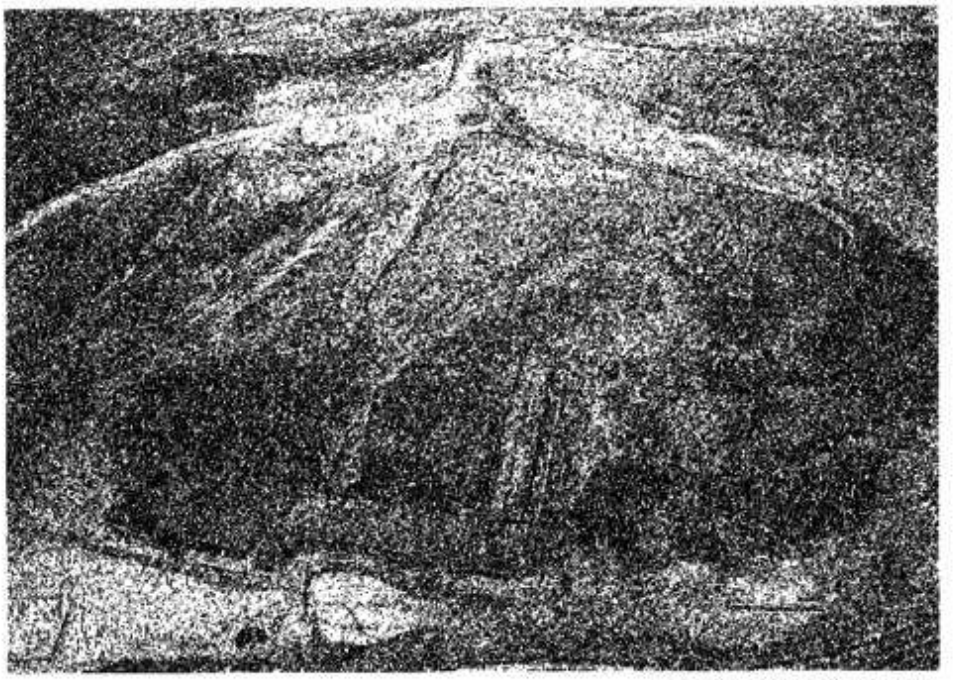
## 6　中・近世の遺物

特にまとまった遺物は出土していないが、古銭が採集されている。

1は永楽通宝である。D9—15グリッドにおいて採集されている。大野田遺跡では宋銭の出土をみているが、明銭は全遺跡を通じてこの1点のみである。

2は寛永通宝である。E7—25グリッドにおいて採集されている。寛永通宝も全遺跡を通じてこの1点のみである。江戸時代のものと思われる陶磁器片等は隣接する蟹沢遺跡や大野田遺跡から確認されている。

第94図　中・近世の遺物（S＝1：1）



芳沼入遺跡と芳沼入下遺跡

# 芳沼入下遺跡

# Ⅵ　芳沼入下遺跡の調査

## 1　遺跡の概観

本遺跡は芳沼入遺跡をのせる丘陵の末端部の南東向き斜面部に位置する。

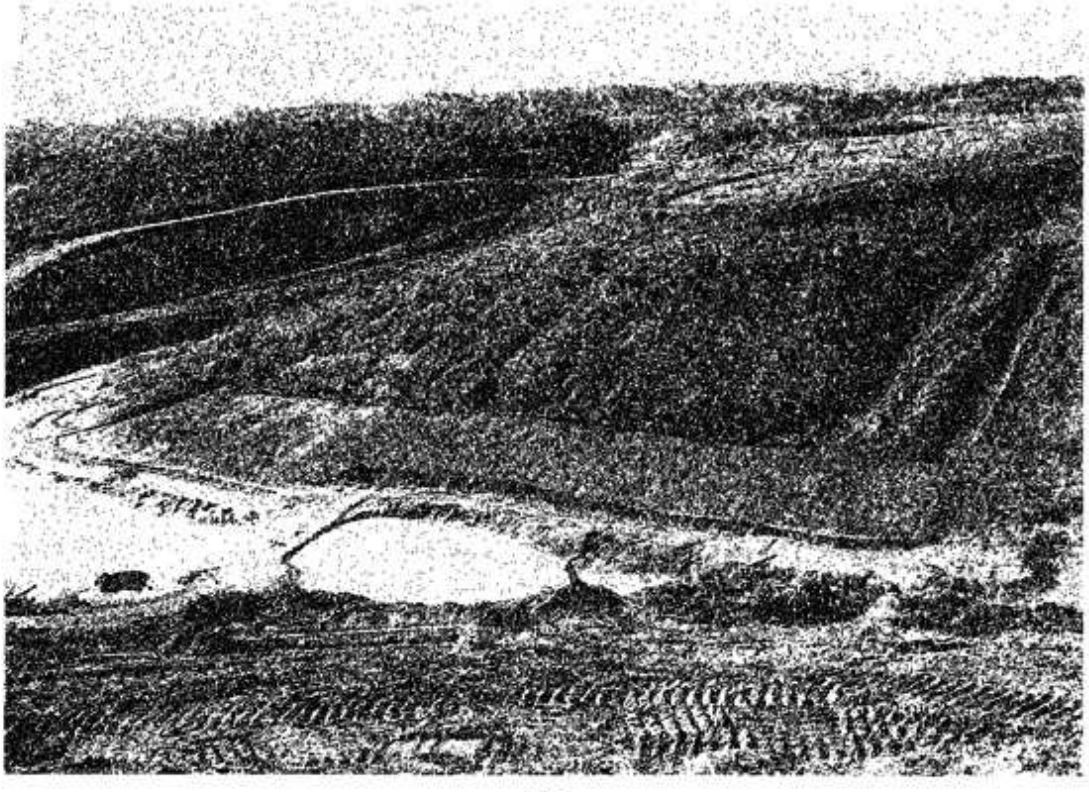
遺跡は粕川に開口する吉沼谷に面しており、遺跡の北方と南方には吉沼谷の支谷が開析されている。谷との比高差は約２ｍを測る。

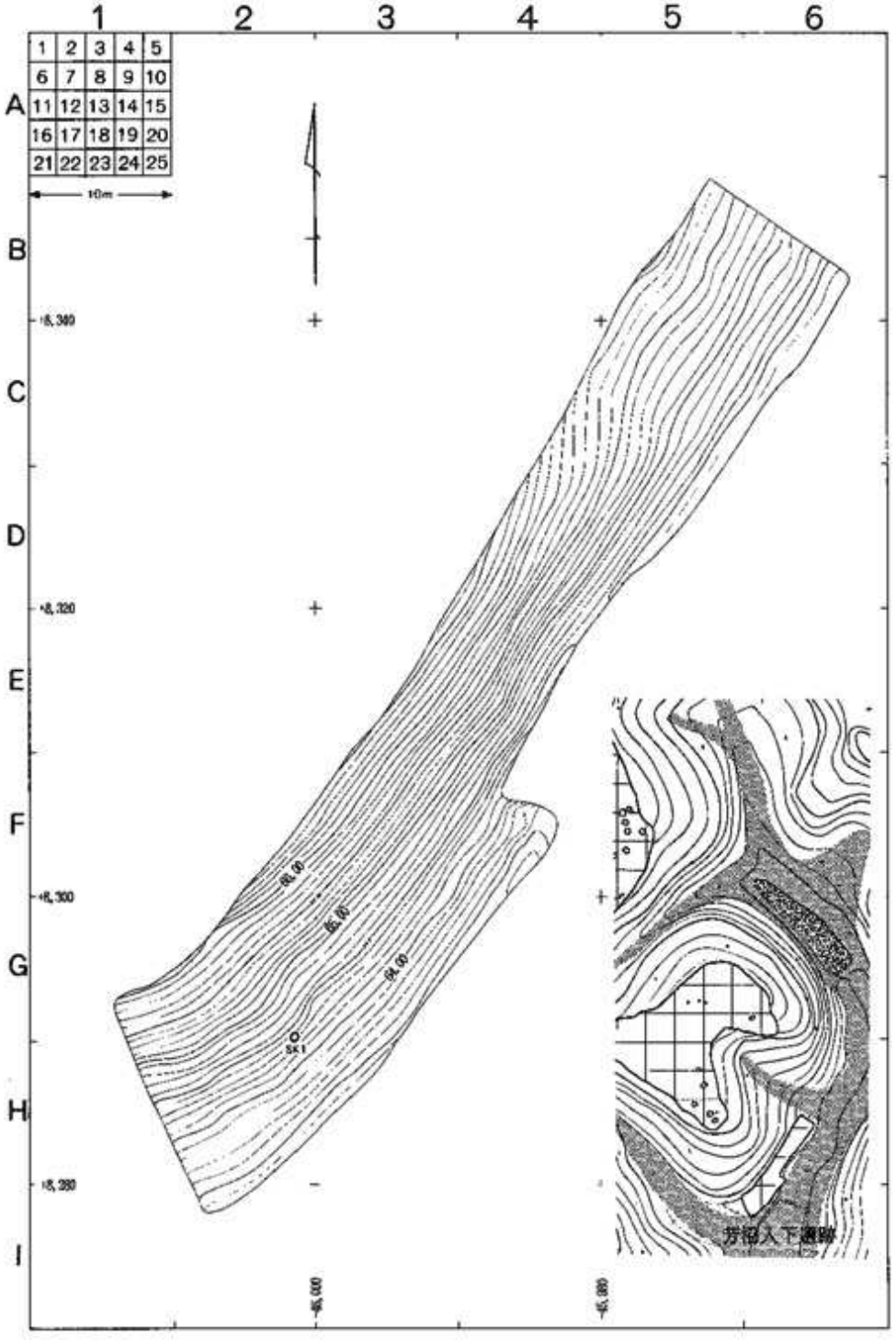
検出された遺構は土坑１基のみである。

本遺跡からは住居跡等は検出されておらず、唯一の土坑からも遺物は検出されていない。遺構外に散布している遺物が土坑と関係するものであるか否かは不詳であるが、その出土状態をみると芳沼入遺跡からの流れ込みの可能性が考えられる。

本遺跡は芳沼入遺跡をのせる三つの尾根のうち南尾根の尾根裾に位置するわけであるが、第Ⅴ章で既に述べたように芳沼入遺跡からは縄文時代、弥生時代、奈良時代の遺構、遺物が確認されている。芳沼入遺跡の各時代毎の遺構、遺物分布をみると、縄文時代の遺構、遺物は西尾根から北尾根にかけて集中する傾向を見せ、弥生時代の遺構、遺物は西尾根の頂部付近から確認されている。本遺跡と同一の南尾根に分布の主体を持つのは奈良時代の遺構だけであった。

南尾根末端部の斜面に所在する本遺跡から、縄文時代および弥生時代の遺物が確認されず、奈良時代の遺物のみが検出されるのは、芳沼入遺跡の遺構、遺物の分布状態を反映した結果と考えられる。






第95図　芳沼入下遺跡全測図

## 2　奈良時代の遺構と遺物

**第1号土坑**

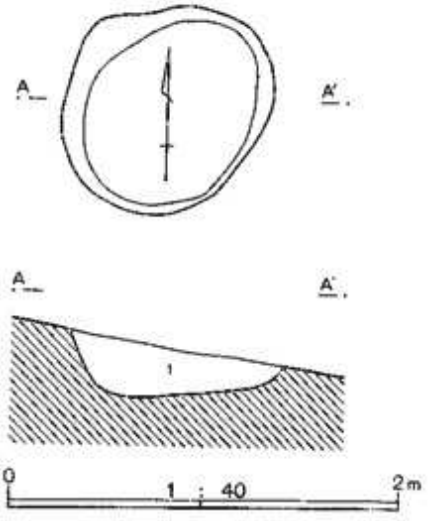
遺跡の南東端、G2グリッドにおいて確認されている。

ほぼ円形の形態を呈し、直径約110cmを測る。

遺物は出土しておらず時期を特定することはできないが、周辺に散布している遺物の状況や、同一丘陵上の芳沼入遺跡からは主として奈良時代の遺構が確認されているので、それらとほぼ同時期の遺構として把握しておく。

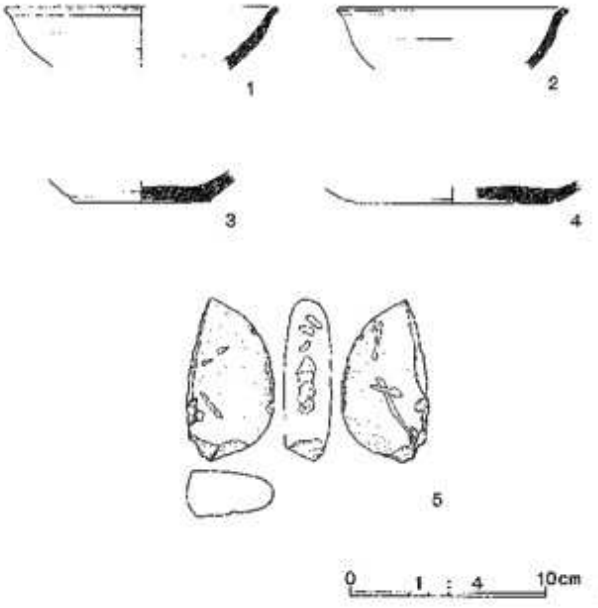
グリッド出土遺物（第97図）

奈良時代のものと思われる土師器片、須恵器片が散布しているが、器形が復元できるものはない。辛うじて図化できるものを第97図に示す。土師器片、須恵器片以外には線刻礫が出土している。




SK 1（水糸レベル 64.6m）
1層　赤褐色土　焼土、炭化物粒を全体に含む。

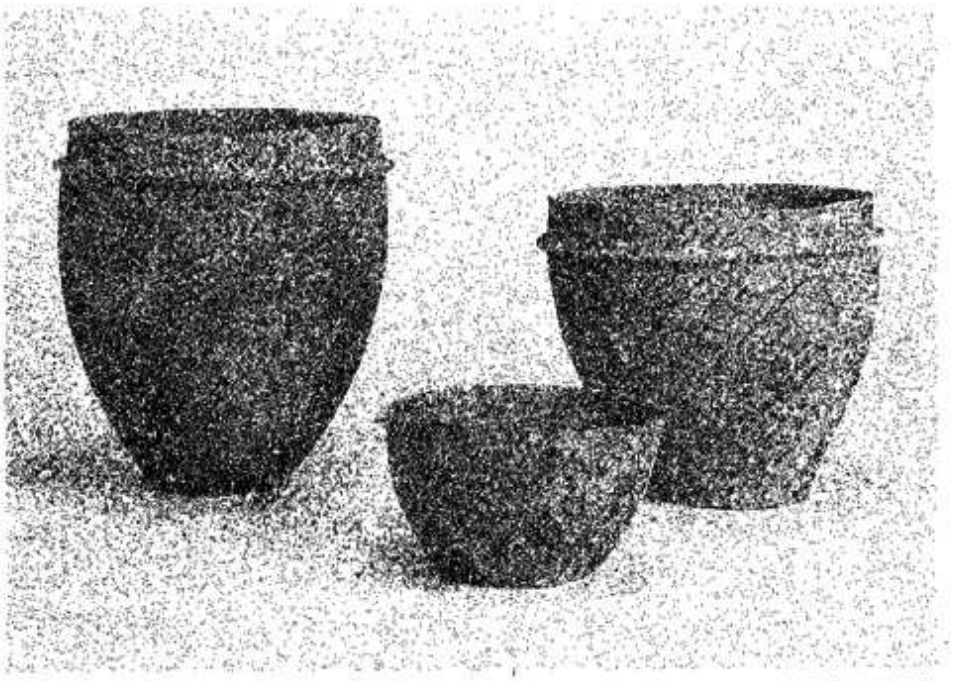
第96図　第1号土坑




第97図　グリッド出土遺物

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | S坏 | (14.2) | 3.1 | — | w | g | B | 10 | |
| 2 | S坏 | (12.1) | 3.1 | — | b針 | lg | B | 10 | |
| 3 | S坏 | — | 1.7 | (7.1) | w針 | g | B | 50 | 底部回転糸切り。 |
| 4 | S坏 | — | 1.1 | (10.1) | w針 | gb | A | 40 | 底部回転糸切り後回転ヘラ削り。 |

第35表　グリッド出土遺物



住居内出土遺物

新田坊遺跡

# Ⅶ　新田坊遺跡の調査

## 1　遺跡の概観

本遺跡は滑川に開口する長沼谷最奥部西側の馬の背状の尾根に位置する。遺跡は長沼谷に開口する支谷によって隣接する尾根と隔てられる。長沼谷の対岸北東には尺尻遺跡が所在する。遺跡を載せる尾根は先端幅約40m、付け根幅約15mのしゃもじ形を呈し、遺跡ほぼ中央の尾根最高点の標高は約77m、谷との比高は約15mを測る。斜面は急傾斜で眼下に長沼を臨む。長沼を境として北側は滑川に開口する谷であるが、南側は南方の粕川に開口する谷である。本遺跡は滑川、粕川両水系が開析した谷が最も近接する地域である。長沼の南側に隣接する低い尾根の稜線がちょうど分水嶺となっている。双方の谷が近接していることによってほぼ直線的に両水系が結ばれる点で周辺の他の谷筋とは異なる。

検出された遺構は縄文時代前期の土坑２基、集石土坑１基、平安時代の住居跡11軒、土坑13基、溝跡２条である。

縄文時代前期の土坑は尾根頂部から東側に下る尾根線上から、集石土坑は北向き斜面から検出されている。土坑は諸磯ｃ式期のものと思われるが、遺構外から出土する遺物の多くは諸磯ｂ式期のものである。本遺跡内では諸磯ｂ式期の遺物が最も多いが、それらは尾根頂部付近の平坦部から集中的に出土している。諸磯ｃ式は北向き斜面等から散発的に出土している。

他に早期の土器、中期の土器等が若干検出されているが、早期の土器は東向き斜面部に多いようである。

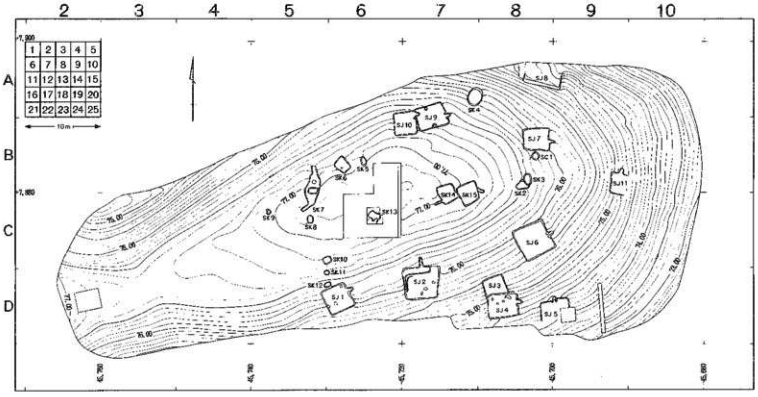
平安時代の住居跡は尾根頂部を取り囲むように南向き斜面部、東向き斜面部、北向き斜面部において確認されており、尾根頂部付近の平坦面からは確認されていない。カマドは北カマド、東カマドがみられる。土坑の多くは環状に分布する住居跡の内側、住居よりも標高の高い尾根頂部付近の平坦部から多く確認されている。土坑の中には炭窯跡と思われるものも含まれる。

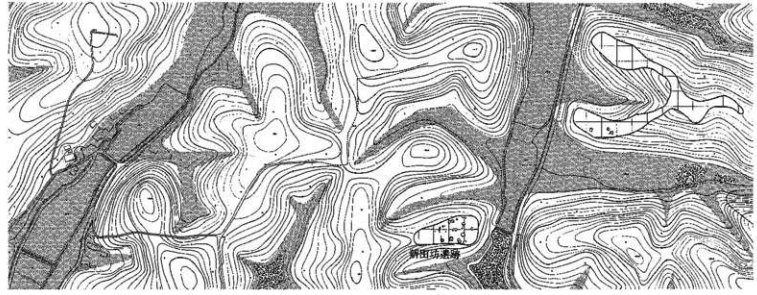
住居内から出土した特徴的な遺物としては羽釜や鉄製品等が挙げられるが、遺構外からふいごの羽口片も採集されている。

## 2　縄文時代の遺構と遺物

**第１号集石**

遺跡東部の北向き斜面部、Ａ７、Ａ８グリッドにおいて確認されている。拳大前後の円礫約100点で構成されているが人頭大に近いものも１点含まれている。土坑のプランに添ってほぼ円形に集積されている。隣接する尺尻遺跡においても類似した集石土坑が検出されているが、本遺跡例は尺尻遺跡例より構成礫の点数は少なめでやや大形の礫によって構成されている。土器等は検出されていないが縄文時代前期頃の遺構であろうと思われる。




第98図　新田坊遺跡全測図

**第14号土坑**

東向きに傾斜する斜面部の付け根付近の尾根線上、Ｂ７、Ｃ７グリッドにおいて確認されている。規模は2.5×2.4mを測り形態はほぼ方形となる。残存壁高は約26cm、床面の対水平角は約１度である。第２号溝跡および第15号土坑と重複しているが、土層断面および出土遺物の違いから、第２号溝跡は本土坑より新期（平安時代）のものと判断できる。

出土遺物は諸磯ｃ式期の土器片を中心としている。点数自体は多くないが、遺跡全体としてもさほど多くはない諸磯ｃ式の土器が本土坑内においてまとまって検出されていることから、本土坑は諸磯ｃ式期の遺構であろうと推定される。

**第14号土坑出土土器**（第101図）

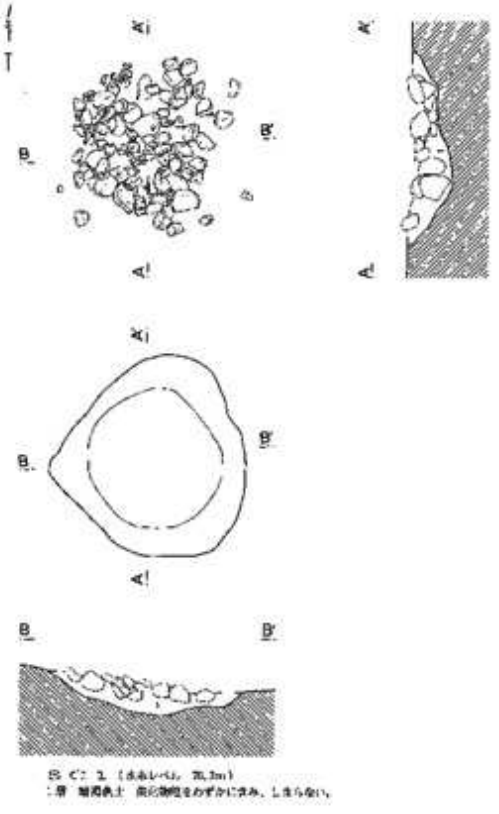
諸磯ｃ式を主体とするようであるが、他の時期も若干混入しており、３類に細別される。

第１類（１～４）

諸磯ｂ式に比定される土器である。１～３は半截竹管による平行沈線を施文した後に、沈線間に爪形文を施したものである。１には単節ＬＲの縄文が地文としてみられる。

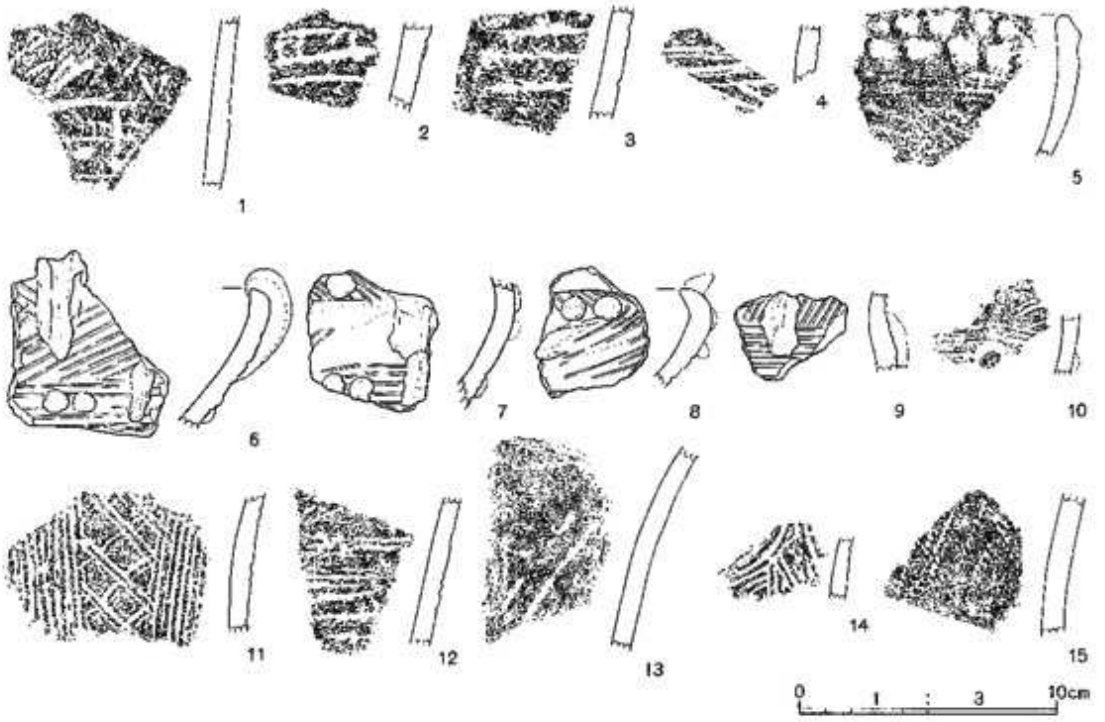
第２類（５～13）

諸磯ｃ式に比定される土器である。６～10は横走あるいは斜行する条線を地文とし、その上に耳たぶ状、豆粒状の貼付文を有する。11～13は条線のみがみられる土器である。11は斜行する条線が

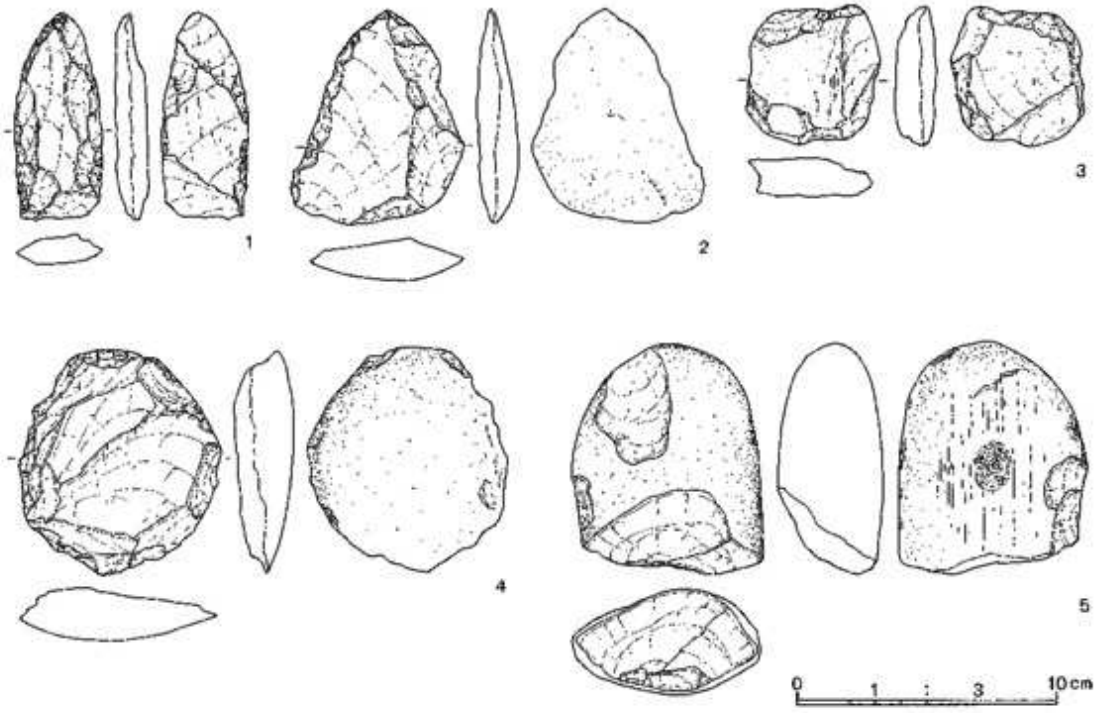



第99図　第１号集石土坑

第100図　第14号・第15号土坑




第101図　第14号土坑出土土器




第102図　第14号土坑出土石器

格子目を構成している。

第３類（14）

十三菩提式と思われる土器である。波状口縁の深鉢の口縁部付近であろうと思われる。結節浮線文がみられる。

**第14号土坑出土石器**（第102図）

1　打製石斧。節理によって分割された緑泥片岩を素材とした直刃の石斧である。両側縁は両面から、刃部は表面からの加工で仕上げられている。長さ80、幅34、厚さ13㎜。47ｇ

2　打製石斧。自然面を大きく残す剥片を素材とし、全周にわたって自然面側からの加工が施される。ホルンフェルス製。長さ83、幅67、厚さ17㎜。89ｇ

3　打製石斧。節理によって分割された粘板岩を素材とし、全周に加工が施される。欠損後再加工したものと思われる。長さ54、幅52、厚さ17㎜。64ｇ

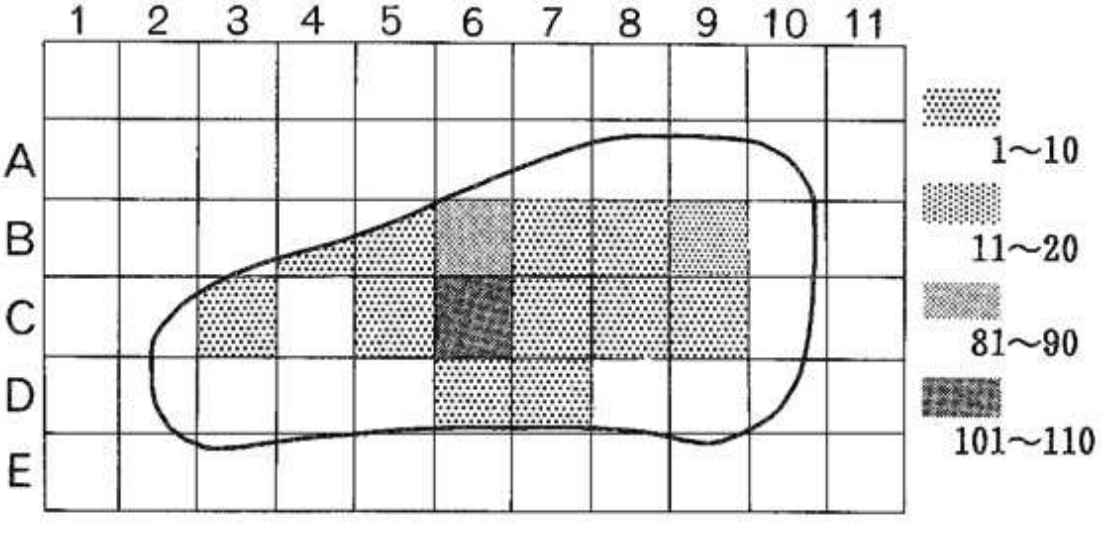
4　打製石斧。自然面を大きく残し、全周にわたって自然面側からの剥離が施される。砂岩製。長さ83、幅78、厚さ24㎜。167ｇ

5　礫器。円柱状の礫を素材とし、一端から一回の大きな剥離が加えられた後、数回の小剥離が加えられている。凹み石状の凹みも僅かに認められる。長さ89、幅74、厚さ42㎜。327ｇ

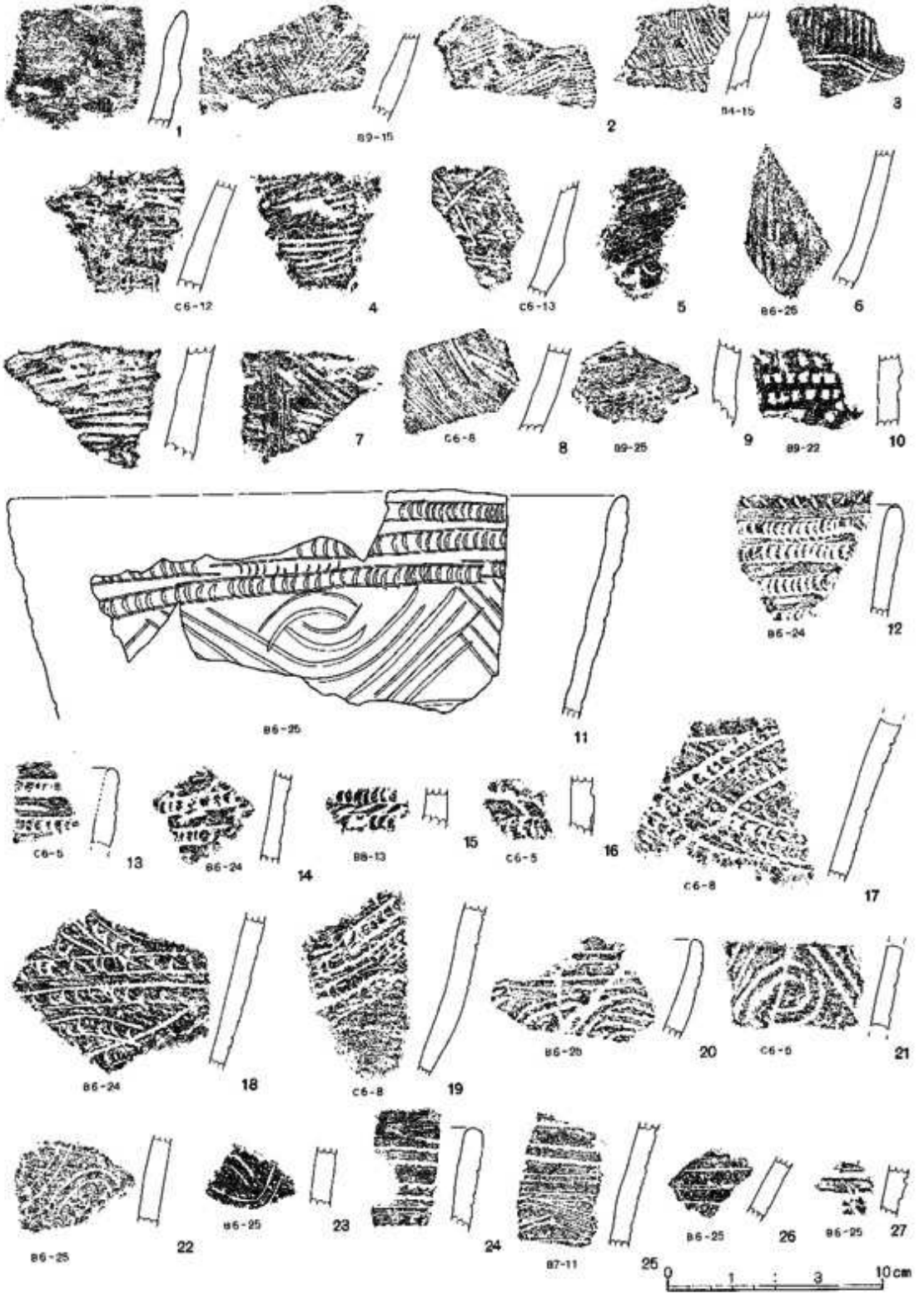
**グリッド出土土器**（第104図～106図）

早期から中期にかけての土器が検出されている。早期末葉の土器を第１群、前期前半から中葉にかけての土器を第２群、前期末葉の土器を第３群、その他の前期の土器を第４群、中期前半の土器を第５群とする。

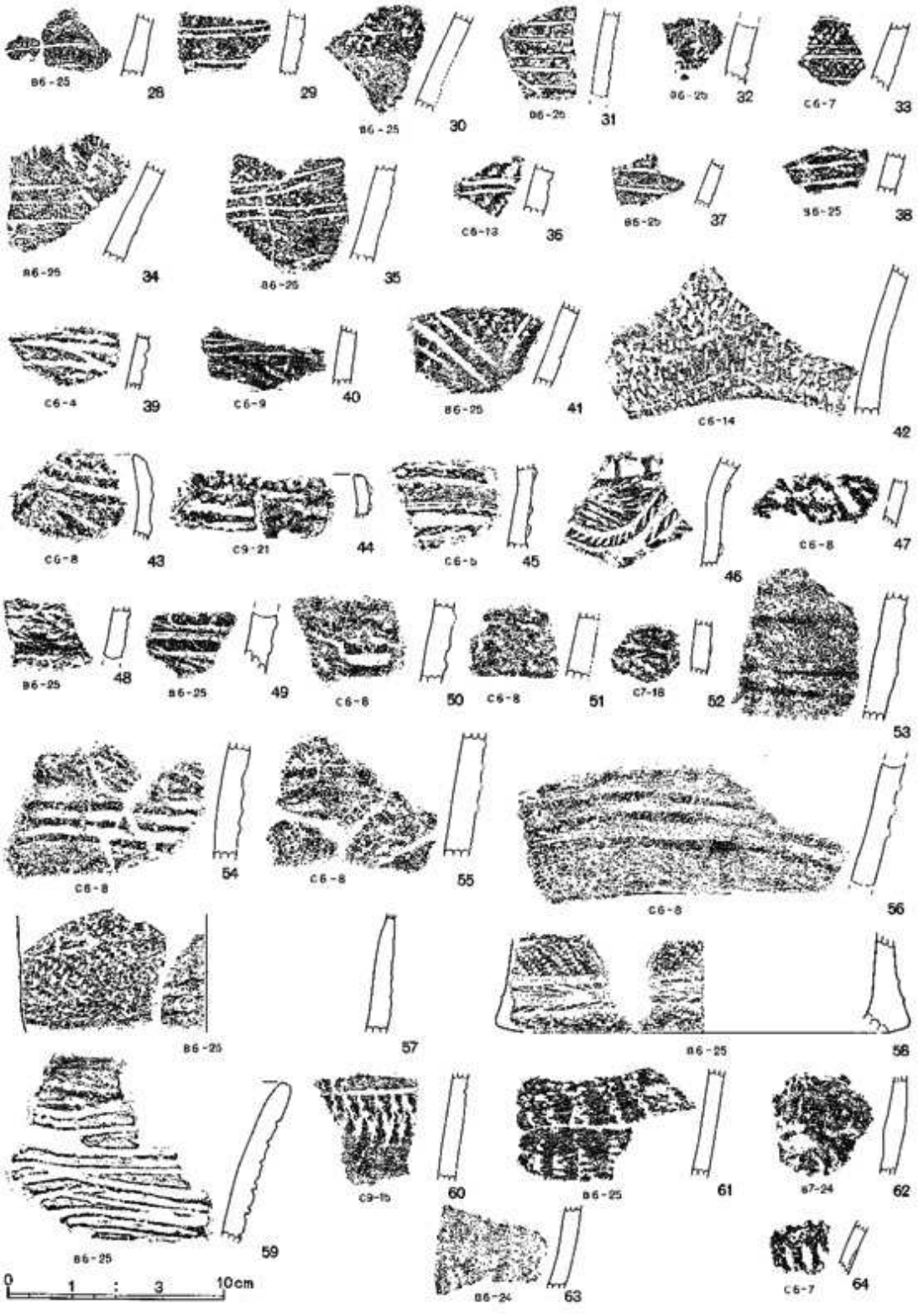
本遺跡内において最も多く出土しているのは第２群土器であり、尾根頂部付近の平坦部から集中的に出土している。



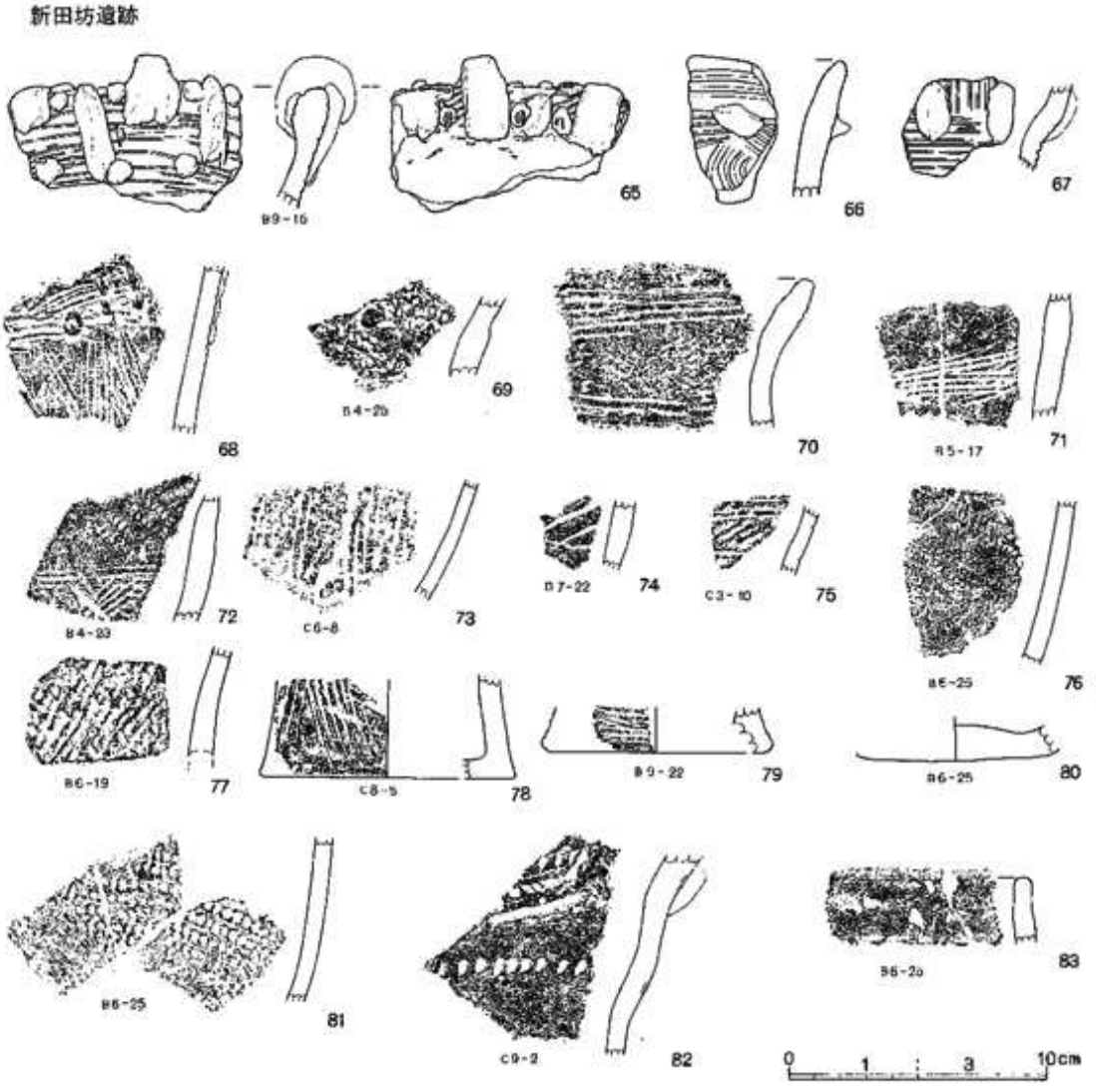

第103図　縄文土器の分布




第104図　グリッド出土土器(1)




第105図　グリッド出土土器(2)




第106図　グリッド出土土器(3)

**第1群土器**（第104図　1～10）

早期末葉条痕文系の土器を一括する。1は口縁部、他は胴部片である。繊維を含み表裏に条痕がみられるものが多い。

**第2群土器**（第104図、第105図　11～58）

前期前半の土器を一括する。本遺跡の縄文時代の遺物において主体となる時期で、諸磯b式に比定される。尾根の中央部付近の平坦部からある程度のまとまりをもって出土している。

11～19は半截竹管による平行沈線と同一工具による爪形文が施される土器である。爪形文は沈線を入れたのちに沈線に重複するように施文されている。C字状の爪形文が殆どである。17～19は曲線的な文様構成をもつ。

20～41は半截竹管による平行沈線を基本としたものである。20～23は平行沈線を曲線的に用い

る。24～25は沈線上に刺突が加わる。26～29は平行沈線のみがみられる。30～41は縄文を地文としその上に平行沈線を施している。41は縄文のみが施文されている底部付近の破片である。地文がみられるものは33、36は単節ＬＲ、他は単節ＲＬの横位施文によるものである。

43～58は浮線文を用いるものである。43、44は口縁部、58は底部である。44、45は浮線上に縄文があるもの、46、48、58は浮線文上に刻みを有するものである。他の浮線文は剝落著しく、細部は不詳である。44、45には単節ＬＲの、47～49、52、54、57、58には単節ＲＬの横位施文による縄文が地文として施されている。

**第３群土器**（第105図、第106図　59～75）

前期末葉の土器を一括する。施文等の違いにより３類に分類する。

第１類（59～64）

貝殻腹縁文が施されるものを一括する。60～63はアナダラ属の貝殻腹縁をロッキングして施文したものである。59は口縁部片で沈線のみが施文されている浮島式に比定されるものと思われる。

第２類（65～74）

条線文や貼付文がみられるものを一括する。諸磯ｃ式の範疇で捉らえられるものと思われる。第14号土坑と同時期のものと思われる。

65～69は耳たぶ状、棒状、円形の貼付文を有する土器である。

65、66は口縁部片である。65、68の貼付文上には刺突が施されている。70～74は条線をモチーフとするものであるが、69、72には単節ＲＬ横位施文の縄文が地文として施されている。

第３類（75）

上記以外の前期終末の土器を第３類とする。75は無節Ｌ横位施文の地文縄文上に平行沈線が施されている。

**第４群土器**（第106図　76～80）

細別は不詳であるが前期のものと思われるものを一括する。76、77は縄文のみがみられる胴部片、78～80は底部片である。78、79は器面にみられる条線や底部の立ち上がりの状態から諸磯ｃ式の土器の底部の可能性が考えられる。

**第５群土器**（第106図　81～82）

中期の土器を一括する。点数も少なく、明瞭に区分できるものではないが２類に分類した。

第１類（81）

目の粗い単節ＲＬの縄文を斜位に施文した土器である。底部付近の破片であろうと思われる。

第２類（82）

枠状に巡る隆帯と刺突文がみられる土器である。緩く屈曲しており、阿玉台式に比定できるものと思われる。胎土には雲母が含まれる。

グリッド出土石器（第107図・第108図）

1　打製石斧。撥形を呈する石斧で、全周にわたって表裏から加工が施される。左側縁から刃部にかけて部分的に欠損している。砂岩製。長さ89、幅43、厚さ14㎜。54ｇ。

2　打製石斧。1と同様撥形になるものと思われるが、刃部は大きく欠損している。片面に大きく自然面を残す。ホルンフェルス製。長さ80、幅47、厚さ18㎜。57ｇ。

3　打製石斧。幅広の撥形の石斧になるものと思われるが、刃部は斜めに大きく欠損している。1と2はやや湾曲しながら刃部に向けて幅が広がっているのに対し、本例はほぼ直線的に開く。片面に自然面を大きく残す。ホルンフェルス製。長さ109、幅51、厚さ21㎜。106ｇ。

4　打製石斧。短冊形を呈する片刃の石斧である。片面は全面自然面で、側縁および刃部は全て自然面側から主要剥離面側に向けて剥離が加えられている。ホルンフェルス製。長さ109、幅56、厚さ22㎜。164ｇ。

5　打製石斧。片面に大きく自然面を残す剥片を素材とし、主として主要剥離面側に対して加工が施される。砂岩製。長さ93、幅72、厚さ22㎜。167ｇ。

6　打製石斧。柱状の礫を素材とした石斧である。本遺跡のみならず、各遺跡を通じて最も大きな石斧である。両側縁は表裏にわたって剥離が施されているが、対向する側縁からの剥離面の大きさおよび同一側縁の表裏の剥離面の大きさが著しく異なるため、全面が剥離面で覆われることなく、表裏に大きく自然面を残す。砂岩製。長さ196、幅73、厚さ42㎜。818ｇ。

7　断定できないが、不整形の打製石斧の欠損品と思われる。ホルンフェルス製。長さ55、幅62、厚さ14㎜。56ｇ。

8　打製石斧。側縁と刃部に対して若干の加工を施した小形の石斧である。ホルンフェルス製。長さ60、幅42、厚さ20㎜。53ｇ。

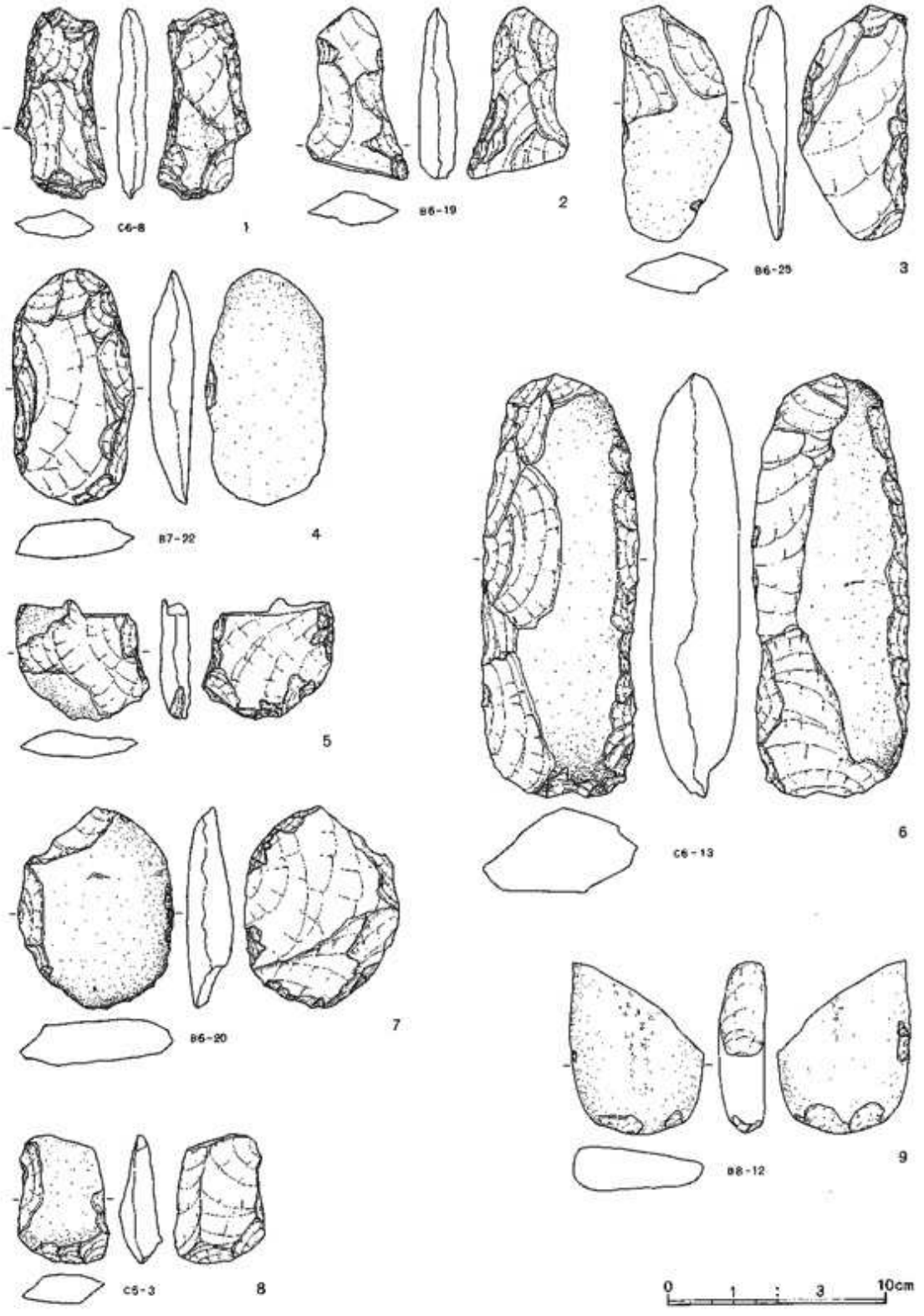
9　敲き石。偏平な板状の礫を素材とし、末端部に垂直方向の剥離が表裏にわたってみられる。敲打した時の剥落痕であろうと思われる。上半部は大きく欠損している。折れ面と若干の剥落痕以外は全て自然面である。砂岩製。長さ80、幅62、厚さ24㎜。150ｇ。

10　凹み石。円礫を素材とし、明瞭な凹みは表裏に2個ずつ確認される。側面には浅い凹みと擦痕が観察される。礫全体が劣化していることから被熱している可能性が考えられる。閃緑岩製。長さ106、幅76、厚さ59㎜。646ｇ。

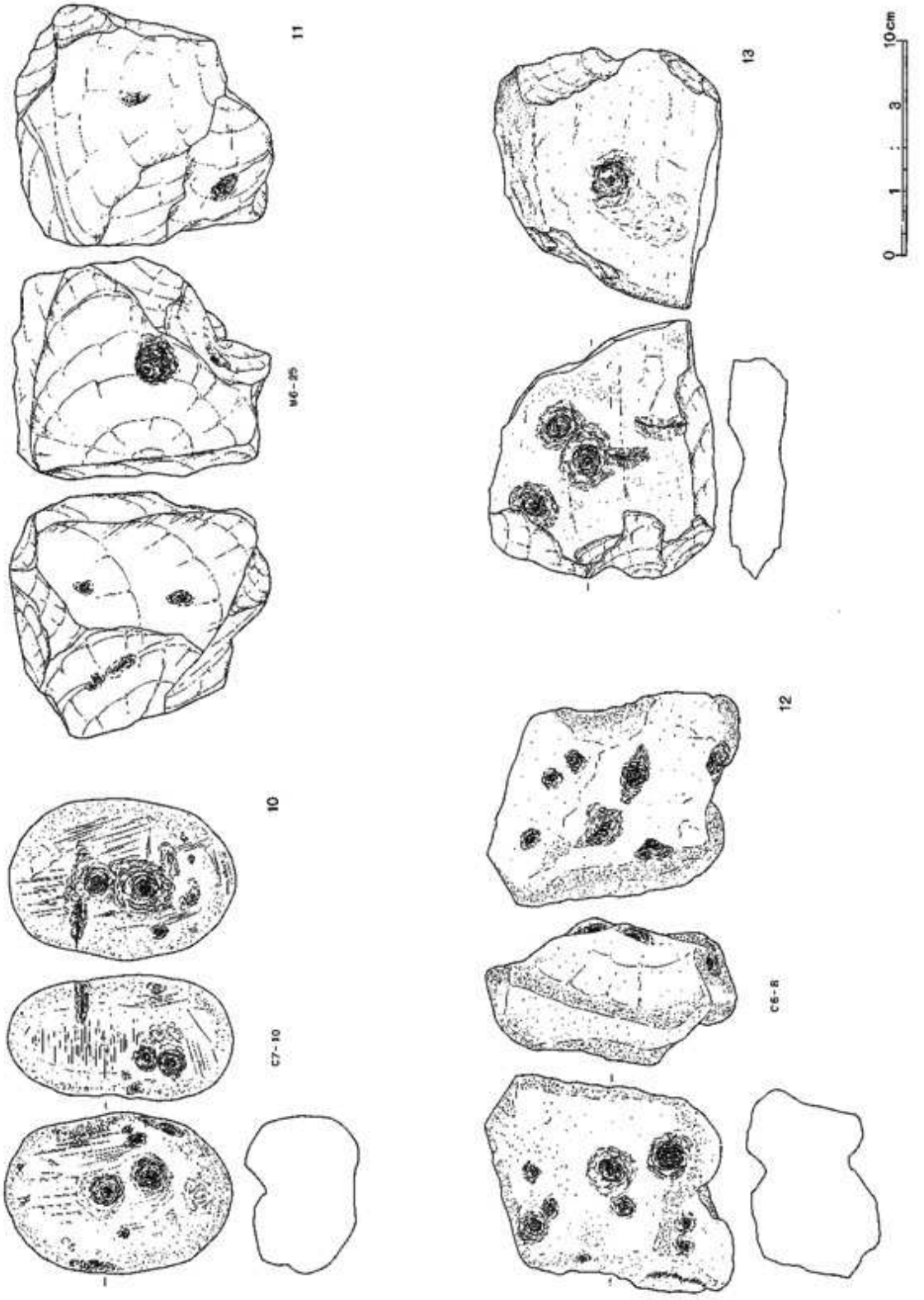
11　凹み石。自然破砕によって形成されたと思われる複数の面に凹みが形成されている。砂岩製。全体的に赤色を呈するが、新しい剥離面は赤みがない。10とは異なり被熱した結果の赤化であろうと思われる。長さ118、幅101、厚さ69㎜。728ｇ。

12　凹み石。不整形の自然礫の複数の面に凹みが形成されている。赤みがかった礫岩を素材としているが、被熱したものではないようである。本遺跡の地山中に同色、同様の礫岩が含まれている。長さ122、幅115、厚さ104㎜。1389ｇ。

13　凹み石。偏平な緑泥片岩を素材とし表裏に凹みが観察される。他の凹み石は径の割には深めに凹みが形成されているが、本例の凹みはそれらより径も大きく浅くなめらかな凹みである。長さ107、幅121、厚さ28㎜。484ｇ。




第107図　グリッド出土石器(1)




第108図　グリッド出土石器(2)

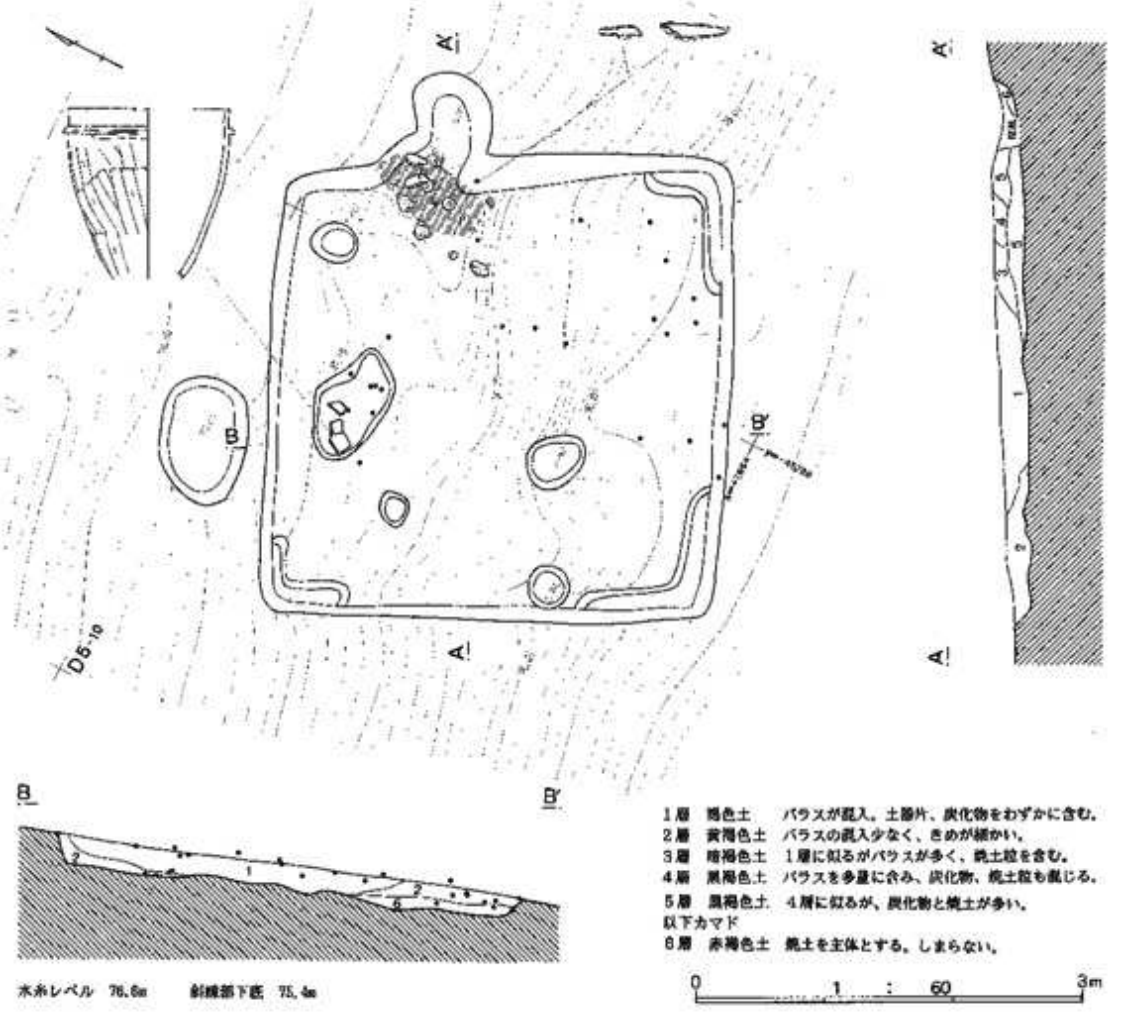
## 3　平安時代の遺構と遺物

**第１号住居跡**

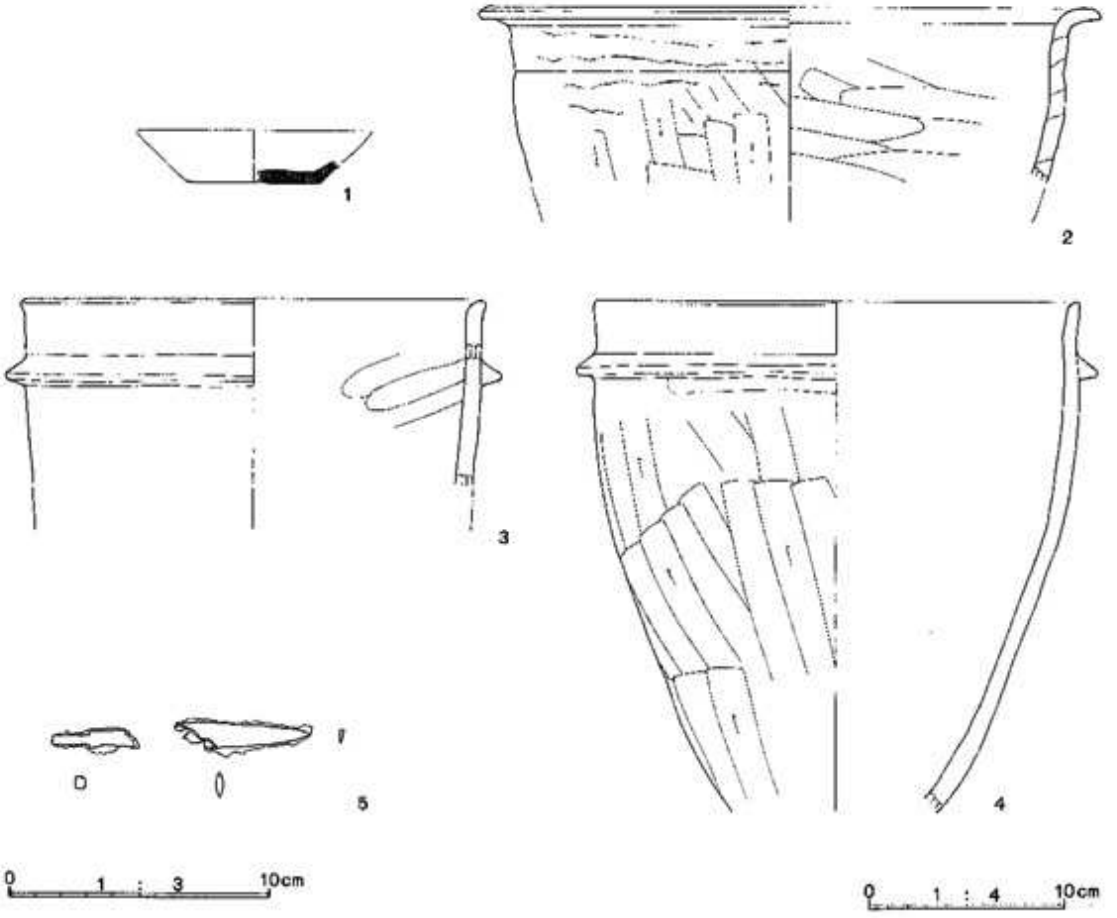
南側斜面部中央やや西寄りのＤ５、Ｄ６グリッドにおいて確認されている。規模は3.6×3.5mを測り、形態は方形となる。残存壁高は約22cmである。住居西半は基盤の凝灰岩を掘り込んでいる。確認面の標高は約76.4m、床面の対水平角は約11度である。

カマドは住居東壁中央やや北寄りに作られ、主軸方向はN－65度－Eである。粘土等の袖材は確認されなかったが、カマド内に散乱する赤化した角礫はカマドの構築材と思われる。カマド最奥部は焼土化が著しいが、カマドの西側も比較的良く焼土化している。隣接して刀子が確認されている。

住居中央西寄りに浅い皿状の落込みが認められ、覆土には焼土粒、炭化物粒が含まれる。底面直上からは羽釜片が出土している。浅い小ピットが数ケ所確認されたが柱穴として認識するには至らなかった。壁溝は断続的に確認されている。




第109図　第１号住居跡




第110図　第１号住居跡出土遺物

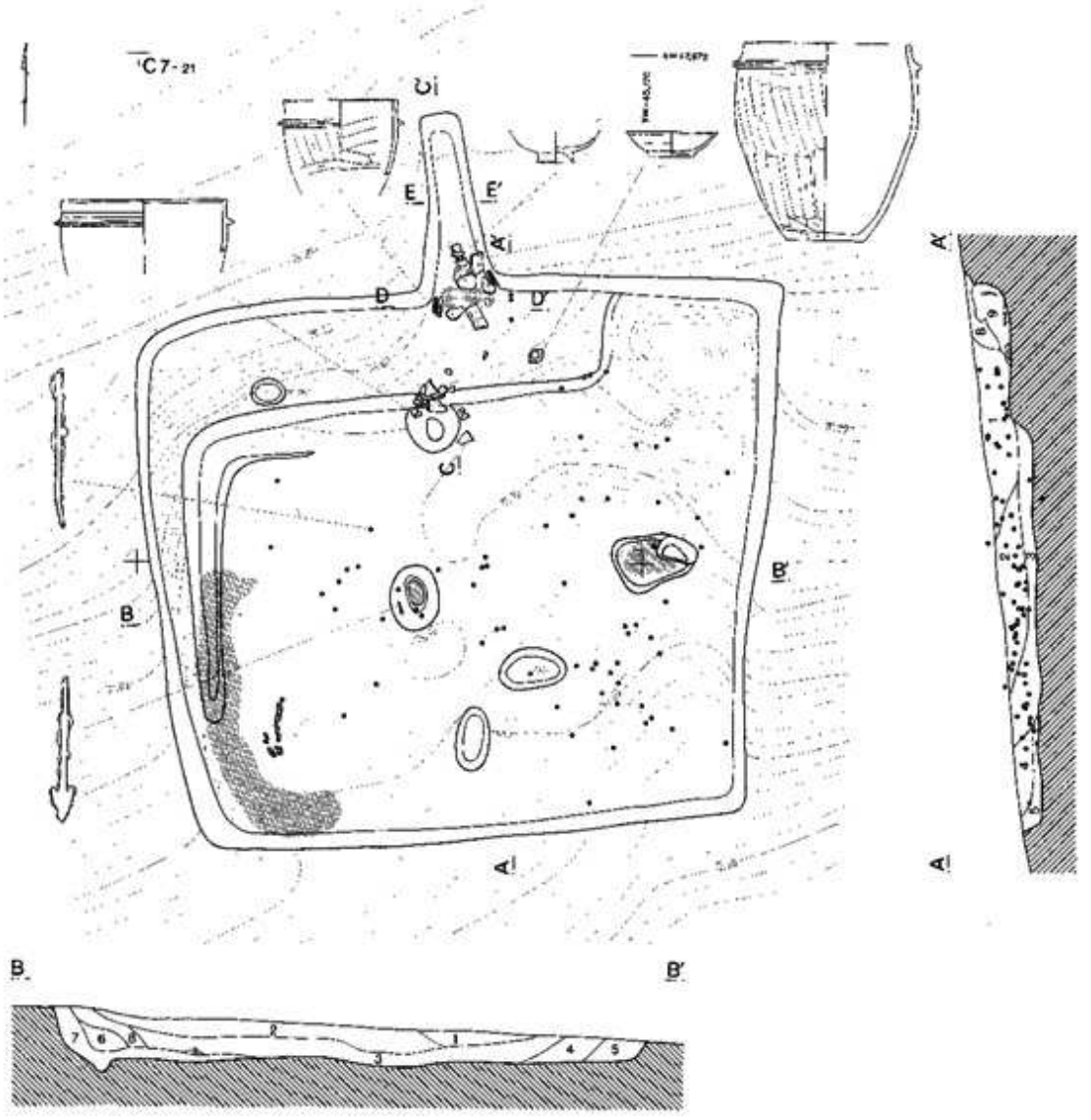
| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | S坏 | (8.8) | 1.0 | (6.6) | wb | lg | B | 30 | |
| 2 | 鉢 | (31.9) | 8.9 | — | w | do | B | 40 | |
| 3 | 羽釜 | (23.8) | 9.4 | — | sw | o | C | 40 | |
| 4 | 羽釜 | (24.8) | 26.0 | — | w | rb | C | 30 | |
| 5 | 刀子？ | 切先側現存長5.3、幅1.0、厚さ0.3cm。両刃。茎側現存長3.4cm。両関。 | | | | | | | |

第36表　第１号住居跡出土遺物

## 第２号住居跡

南側斜面部ほぼ中央のＣ７、Ｄ７グリッドにおいて確認されている。規模は5.2×4.2mを測り、形態は方形となる。残存壁高は約50cmである。確認面の標高は約76.3m、床面の対水平角は約２度である。住居北壁から西壁にかけての部分にテラス状の段を有する。

カマドは住居北壁ほぼ中央に作られ、主軸方向はN－８度－Wである。遺存状態は本遺跡内では最も良好で、トンネル状の煙道を確認することができた。地山の凝灰岩を掘り残して袖とし、板状



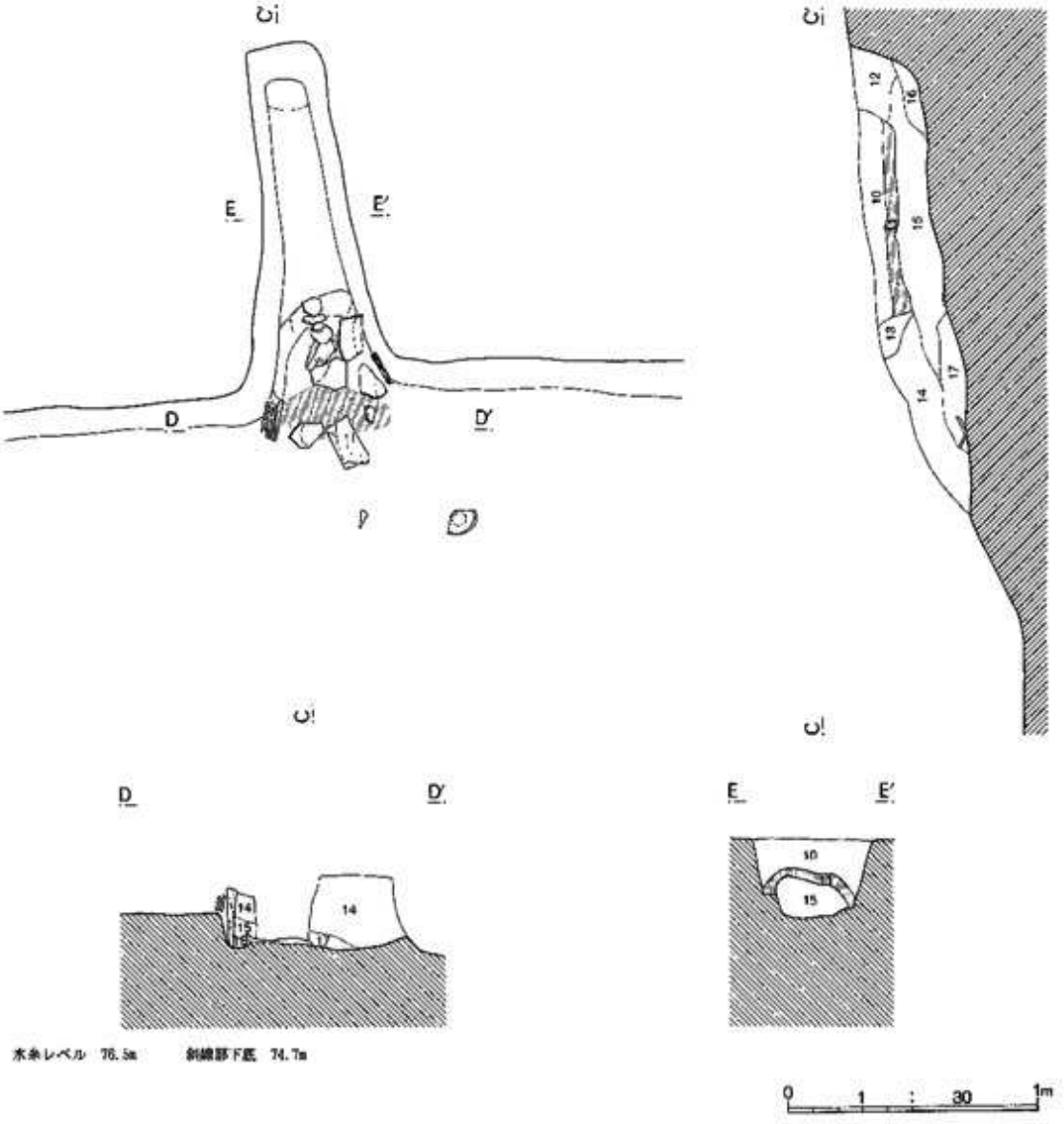

1層　黄褐色土　小パラスを含むが、他の混入物なし。
2層　暗褐色土　パラスを極めて多量に含む。炭化物、焼土の混入なし。
3層　黒褐色土　炭化物、焼土粒を多量に含む。土器片も多量に混入する。パラス多量に含む。
4層　黒褐色土　3層に似るが、炭化物の混入は少ない。パラス多量に含む。
5層　褐色土　パラスの混入少なくしまらない。
6層　赤褐色土　焼土主体。小パラスを含む。あまりしまらない。
7層　暗赤褐色土　炭化物、焼土粒を多量に含む。3層に似るがパラスの混入少ない。
8層　黄褐色土　わずかに炭化物を含む。パラスの混入少ない。
9層　赤褐色土　焼土主体。炭化物を多量に含む。

以下カマド（10層～18層）
10層　赤褐色土　5mm前後のパラスが多量に混じる。
11層　橙色土　焼けしまった板状の焼土層。煙道天井と思われる。
12層　明赤褐色土　しまらない焼土層。
13層　褐色土　2～3mmの小パラスを含むが、しまっている。カマド天井か。
14層　黄褐色土　1層に似るが、焼土粒子を含みしまらない天井の崩落部か。
15層　黄褐色土　3～5mmの小パラスを多量に含み、しまらない。焼土、炭化物は含まれない。
16層　赤褐色土　焼土ブロック、炭化物を含みしまらない。
17層　褐色土　焼土と炭化物を多量に含む。
18層　黄褐色土　袖石固定のための土。あまり粘性なし。

水糸レベル　76.3m　　斜線部下底　75.3m

0　1 : 60　3m

第111図　第2号住居跡



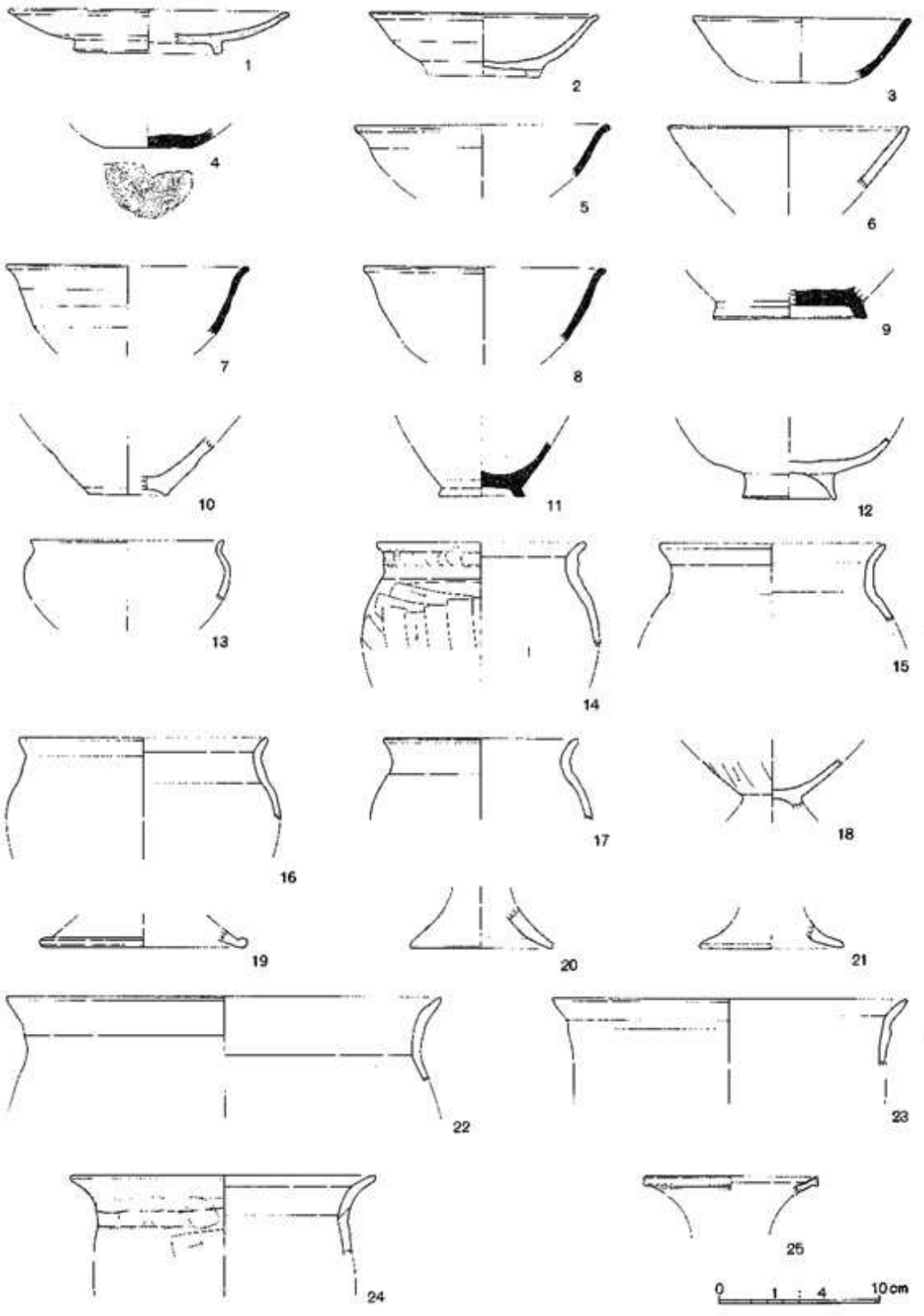

第112図　第2号住居跡カマド

の直立させた緑泥片岩を添えている。凝灰岩部と緑泥片岩の隙間からは羽釜片等が確認されている。煙道部と袖部の境界付近には角柱状の礫が直立し、その頂部には高台が伏せてあった。支脚として利用されたものと思われる。カマド内およびその前面からは羽釜片や坏片が集中して出土している。

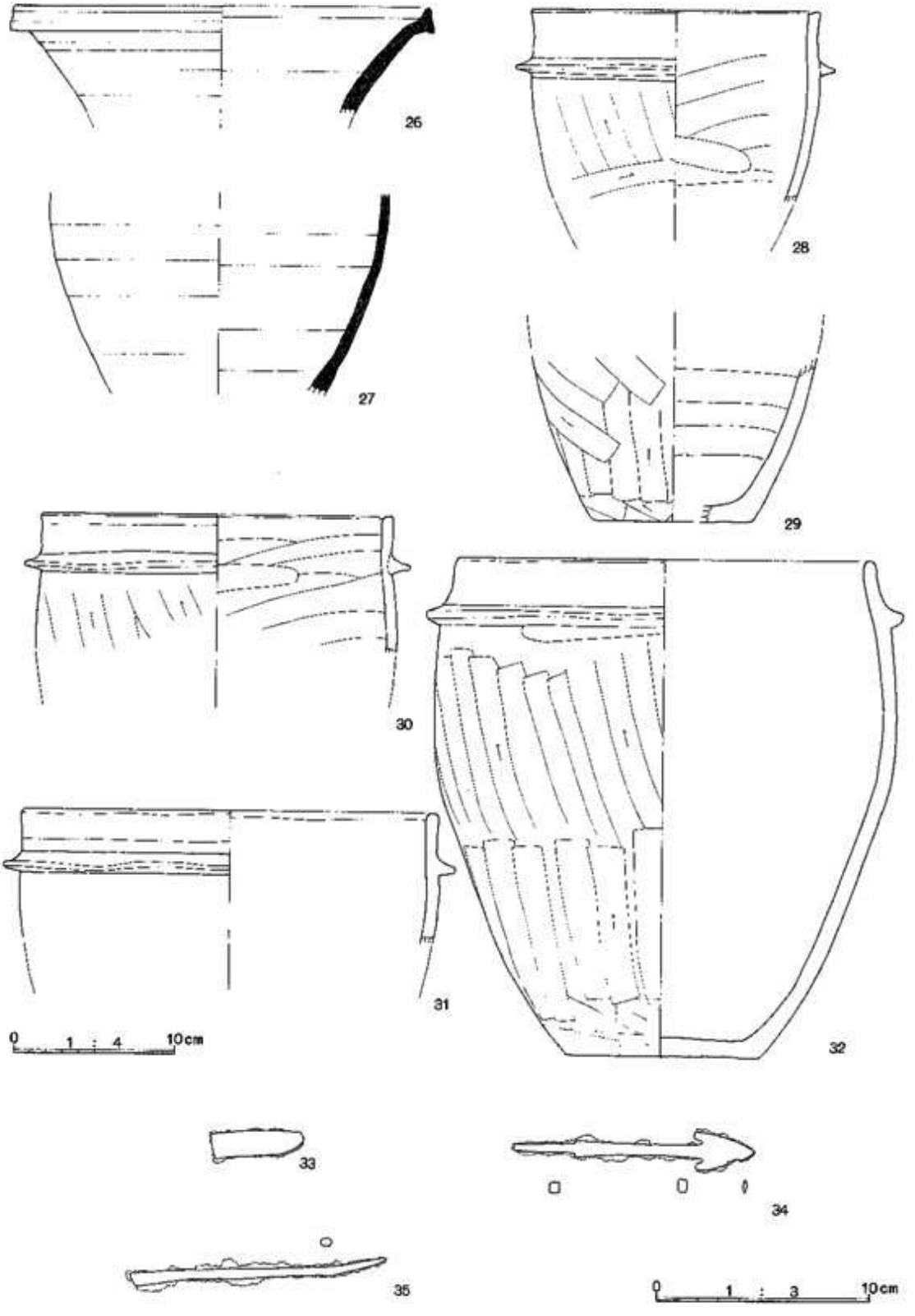
住居中央部付近とその東側に、焼土が詰った地床炉状の浅い掘り込みが確認されている。東側の掘り込みの内部からは繊維質の炭化材も検出されている。中央部の掘り込みからはやや浮いた状態で鉄鏃が出土している。

住居南西には大量の焼土が堆積している。地山の凝灰岩まで赤化している先述の地床炉状の掘り込みとは異なり、廃棄されたような様相を呈する焼土である。

壁溝は北壁から西壁にかけて検出された。



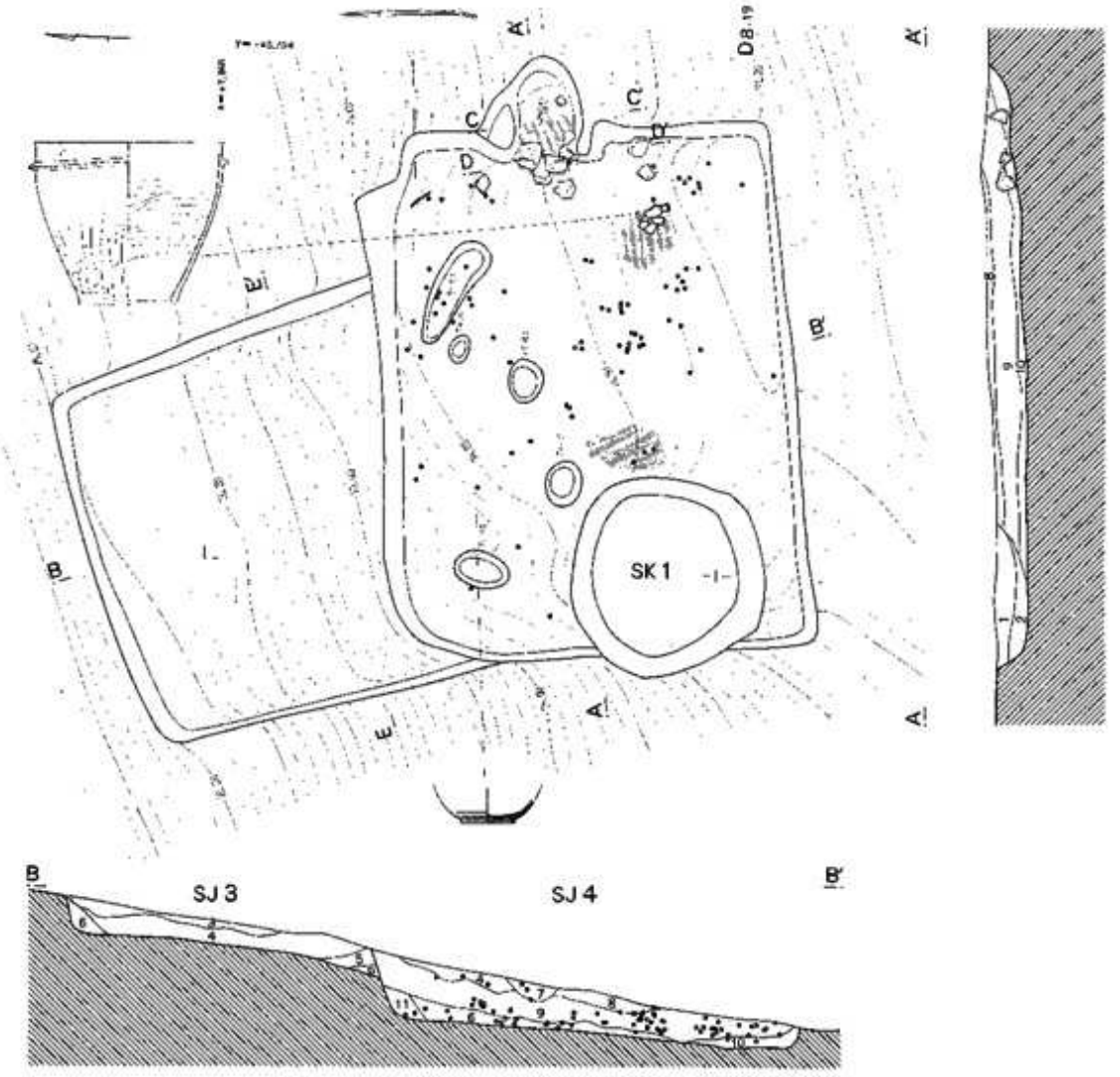

第113図　第２号住居跡出土遺物(1)

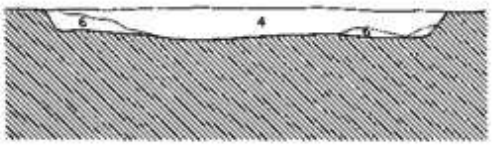



第114図　第２号住居跡出土遺物(2)

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | K皿 | (17.4) | 2.7 | (8.6) | b | lg | B | 30 | 黒笹90号窯式並行か。 |
| 2 | 坏 | (14.2) | (3.9) | (6.9) | w | rb | B | 70 | 高台部剥落。剥落部に回転糸切り痕。 |
| 3 | S坏 | (13.6) | (4.0) | — | b | lg | B | 20 | |
| 4 | S坏 | (8.4) | 0.8 | (5.6) | 針w | lg | B | 40 | 底部回転糸切り。 |
| 5 | S坏 | (15.9) | 3.2 | — | wb | g | C | 30 | |
| 6 | 椀 | (15.0) | 3.8 | — | w | o | A | 30 | |
| 7 | S椀 | (15.1) | 4.2 | — | w | do | C | 30 | |
| 8 | S椀 | (15.6) | 4.5 | — | w | g | C | 30 | |
| 9 | S椀 | — | 1.4 | (9.5) | w針 | g | B | 40 | |
| 10 | 椀 | — | 3.1 | (4.9) | s | rb | B | 20 | |
| 11 | S椀 | — | 3.2 | (5.4) | w | dg | B | 40 | |
| 12 | 椀 | — | 3.6 | 5.8 | s針 | o | B | 50 | カマド内支脚上に倒立状態で出土。 |
| 13 | 椀 | (12.0) | 3.8 | — | w | rb | B | 20 | |
| 14 | 台付甕 | (13.0) | 6.5 | — | w | rb | A | 40 | |
| 15 | 台付甕 | (14.1) | 4.8 | — | rb | o | B | 30 | |
| 16 | 台付甕 | (15.5) | 4.9 | — | rc | o | B | 30 | |
| 17 | 台付甕 | (12.1) | 5.0 | — | b | do | B | 30 | |
| 18 | 台付甕 | (8.8) | 2.9 | — | w | do | B | 30 | |
| 19 | 台付甕 | — | 1.2 | (13.0) | b | o | B | 10 | |
| 20 | 台付甕 | — | 2.5 | (8.9) | w | o | B | 20 | |
| 21 | 台付甕 | — | 1.7 | (9.0) | wb | o | B | 20 | |
| 22 | 甕 | (27.0) | 5.1 | — | wb | do | B | 30 | |
| 23 | 甕 | (22.1) | 4.0 | — | wb | o | B | 30 | |
| 24 | 甕 | (19.0) | 4.8 | — | br | o | B | 40 | |
| 25 | K長頸瓶 | (10.9) | 1.1 | — | | | A | 10 | |
| 26 | S甕 | (26.2) | 6.7 | — | bw | dg | A | 40 | |
| 27 | S甕 | — | 12.5 | — | w | db | A | 40 | |
| 28 | 羽釜 | (18.0) | 11.7 | — | ws | o | B | 20 | |
| 29 | 羽釜 | — | 10.2 | (9.4) | ws | rb | B | 40 | |
| 30 | 羽釜 | (22.0) | 8.5 | — | ws | rb | B | 30 | |
| 31 | 羽釜 | (26.1) | 8.0 | — | sw | rb | B | 40 | |
| 32 | 羽釜 | (26.2) | 30.8 | (11.6) | rb | ws | B | 40 | |
| 33 | 刀子 | 長さ4.3、幅1.2。茎側欠損。 | | | | | | | |
| 34 | 鉄鏃 | 長さ11.3、幅1.3cm。両関 | | | | | | | |
| 35 | 棒状鉄製品 | 長さ12.2、長径0.5。 | | | | | | | |

第37表　第2号住居跡出土遺物



第1号土坑（1層～2層）
1層　褐色土　シルトを多く含む。しまりなし。粘性なし。
2層　褐色土　シルトを微量含む。しまりなし。粘性あり。
第3号住居跡（3層～6層）
3層　褐色土　シルトを微量に含む。他の混入物はみられない。粘性なし。
4層　暗褐色土　シルトを多く含む。しまり、粘性ややあり。
5層　褐色土　4層に類似するがシルトを多く含み、しまり、粘性ややあり。
6層　黄褐色土　5層より顕著でしまりあり。粘性ややあり。
第4号住居跡（7層～13層）
7層　褐色土　砂質。粒子細かい。しまりあり。粘性なし。
8層　褐色土　シルトを含む。粘性なし。しまりあり。
9層　暗褐色土　焼土粒、シルトを多く含む。粘性ややあり。しまりあり。
10層　黄褐色土　シルト、炭化物を少量含む。しまりあり。粘性ややあり。
11層　褐色土　シルトを少量含む。粘性あり。しまりあり。
第4号住居跡カマド（12層～13層）
12層　赤褐色土　焼土粒、焼土塊、炭化物粒を多く含む。しまり、粘性ややあり。
13層　赤褐色土　焼土多く、炭化物、シルトを含むしまりあり。粘性ややあり。

水糸レベル　75.6m　　斜線部下底　74.2m

0　1 : 60　3m

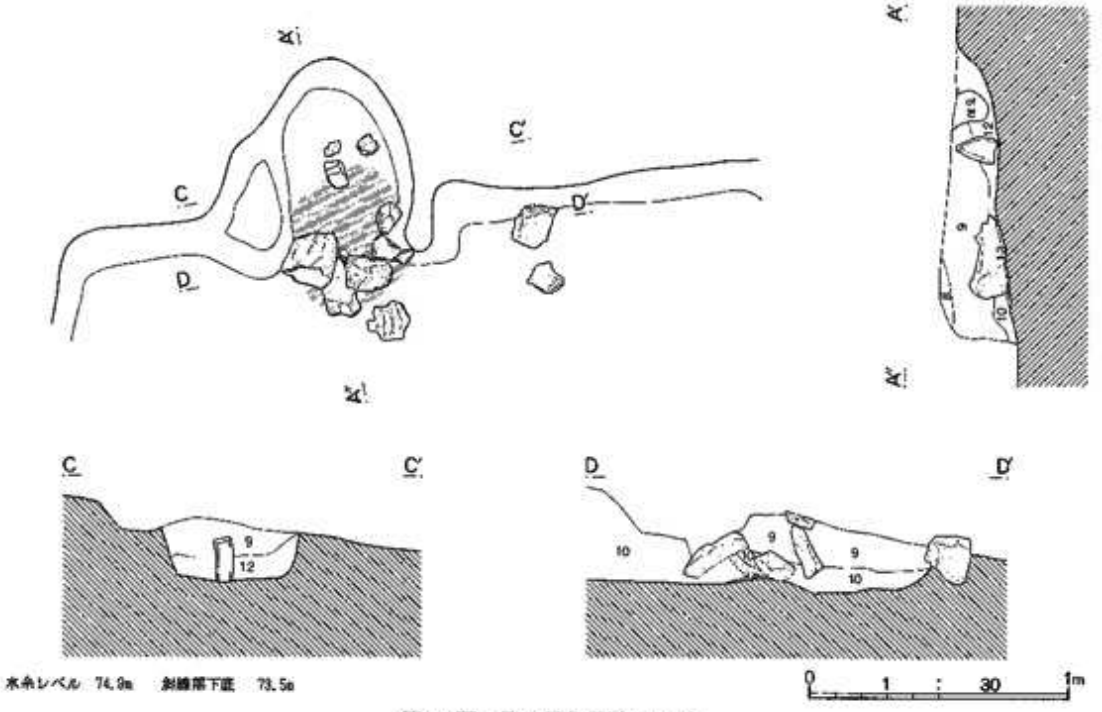
第115図　第3号・第4号住居跡

**第３号住居跡**

南側斜面中央やや東寄りのＤ８グリッドにおいて確認されている。第４号住居跡と重複しているため全体を把握することはできないが、東西約3.1mを測り、形態はほぼ方形になるものと思われる。残存壁高は約24cmである。確認面の標高は約75.5m、床面の対水平角は約１度である。主軸方向はＮ―19度―Ｗである。

カマド、貯蔵穴、柱穴、壁溝は確認できなかった。

遺物も確認できなかったので時期の特定は困難であるが、覆土の切りあいから判断して第４号住居跡より古期に位置づくものと思われる。




第116図　第４号住居跡カマド

**第４号住居跡**

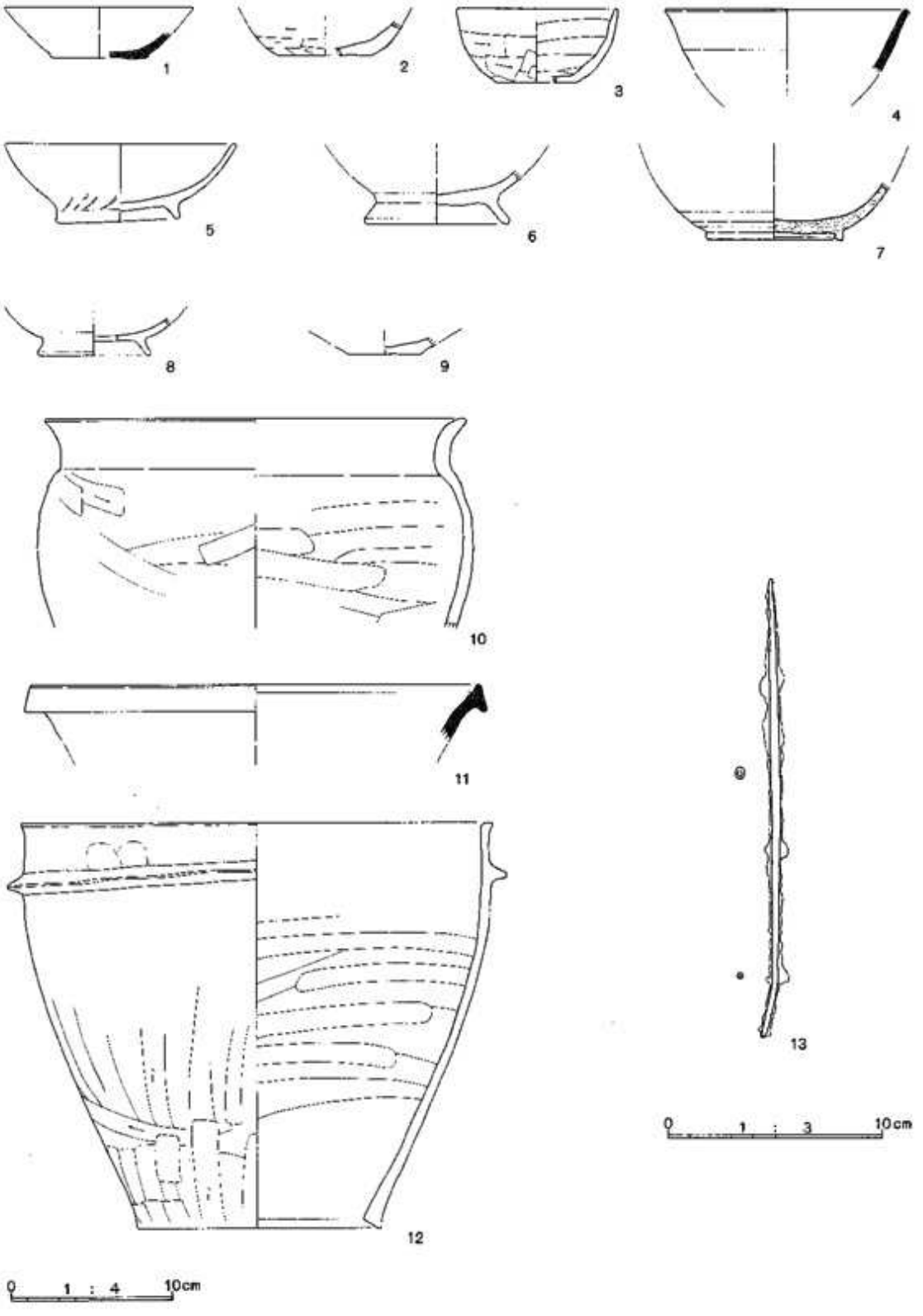
南側斜面中央やや東寄りのＤ８グリッドにおいて第３号住居跡に重複して確認されている。規模は3.7×3.3mを測り、形態は東西にやや長い長方形となる。残存壁高は約30cmである。確認面の標高は約75m、床面の対水平角は約１度である。西壁に本住居を穿って土坑が構築されている。

カマドは住居東壁中央やや北寄りに作られ、主軸方向はＮ―80度―Ｅである。内部および周辺には被熱して赤化した角礫が散乱しているがカマドの構築材であろうと思われる。カマド中央部に直立した角柱状の礫は支脚として利用されたものであろう。

貯蔵穴、壁溝は確認できなかったが、柱穴状のピットが１箇所確認されている。

住居中央部付近と、カマドの南東部の２ヵ所は床面が焼土化している。また、住居北西角からは廃棄されたような焼土の集中が確認されている。

第１号土坑と重複しているが、本住居跡の方が古期に位置付く。




第117図　第４号住居跡出土遺物

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | S坏 | (11.7) | (3.2) | 6.0 | wb | g | B | 20 | 底部回転糸切り。 |
| 2 | 椀 | — | 1.9 | 5.8 | w | o | B | 20 | |
| 3 | 椀 | (9.8) | 4.6 | 5.0 | w | do | B | 40 | |
| 4 | S椀 | (15.2) | 3.8 | — | w | g | B | 30 | |
| 5 | 椀 | (14.3) | 4.8 | 7.7 | w | o | B | 80 | |
| 6 | 椀 | — | 2.9 | 8.8 | w | o | B | 80 | |
| 7 | K椀 | — | 3.4 | 8.5 | b | lg | A | 70 | 底部回転糸切り後回転ヘラ削り。見込部に三又トチン痕跡。黒笹14号窯式か。 |
| 8 | 椀 | — | 2.0 | 7.0 | w | do | B | 40 | |
| 9 | 椀 | — | 0.6 | 4.6 | br | do | B | 80 | |
| 10 | 鉢 | (26.2) | 12.9 | — | w | o | B | 40 | |
| 11 | S甕 | (28.0) | 3.5 | — | w | dg | A | 10 | |
| 12 | 羽釜 | (29.3) | 25.0 | 15.0 | sw | o | B | 50 | 鍔状の羽釜。 |
| 13 | 棒状鉄製品 | 長さ21.2、長径0.5cm。 | | | | | | | |

第38表　第４号住居跡出土遺物

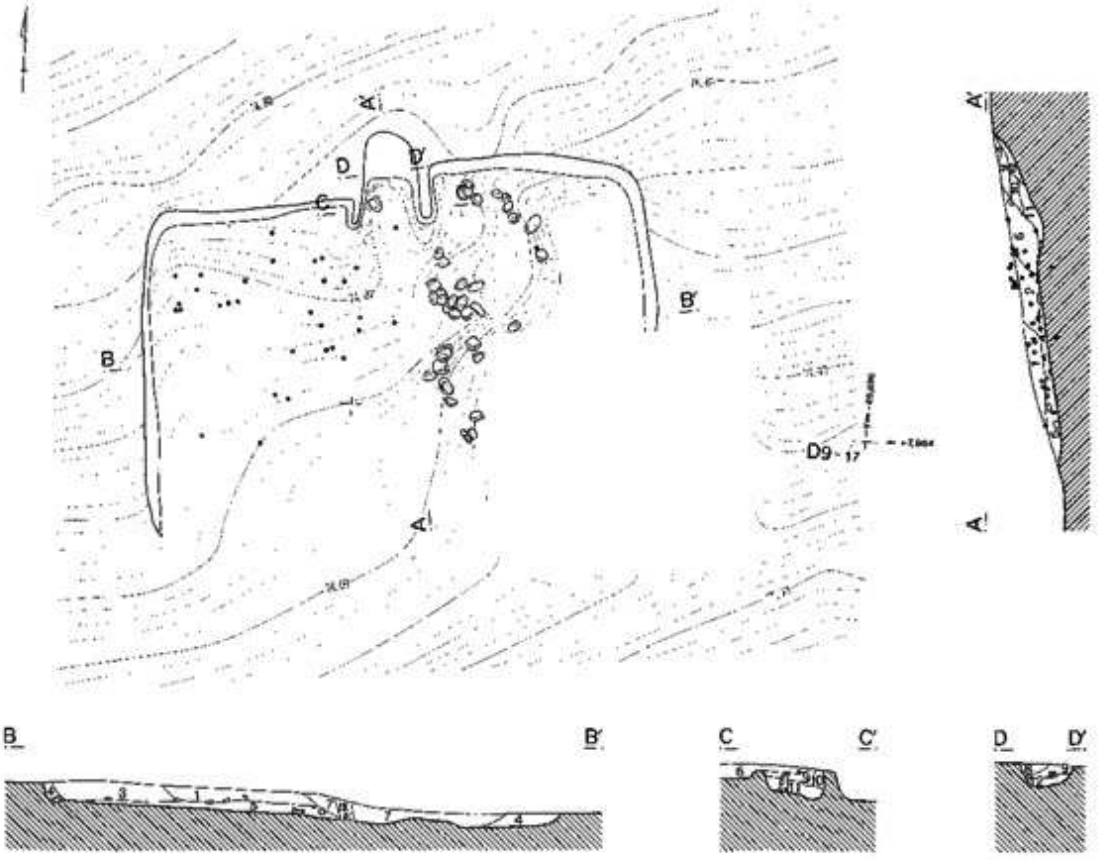
**第５号住居跡**

南側斜面の東部のＤ８、Ｄ９グリッドにおいて確認されている。住居南半部は欠失しており全体の規模は明らかではないが、東西約3.6mを測る。形態はほぼ方形になるものと思われる。残存壁高は約28cmである。確認面の標高は約74.5m、床面の対水平角は約５度である。住居北部から東半部にかけて小円礫が大量に確認されたが、地山に起因するものと思われる。

カマドは北壁ほぼ中央部に作られ、主軸方向はN－２度－Wである。

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | S坏 | (10.9) | 1.5 | — | w | gb | B | 20 | |
| 2 | S坏 | (12.0) | 3.2 | — | bw | lg | C | 40 | |
| 3 | S坏 | (11.1) | 3.3 | — | b | gb | B | 20 | |
| 4 | S坏 | (14.9) | 2.3 | — | w | g | B | 30 | |
| 5 | S坏 | (6.0) | 2.9 | — | wb | g | B | 20 | |
| 6 | S坏 | — | 0.6 | 5.2 | w | g | A | 70 | 底部回転糸切り。 |
| 7 | S坏 | — | 0.5 | 4.8 | w | lg | C | 40 | 底部回転糸切り。火襷痕あり。 |
| 8 | S椀 | (14.0) | 3.7 | — | w | g | B | 20 | |
| 9 | 椀 | (12.0) | 2.4 | — | b | o | B | 20 | |
| 10 | 台付甕 | — | 2.1 | — | w | rb | C | 40 | |
| 11 | 甕 | — | 3.1 | (4.2) | w | rb | C | 30 | |

第39表　第５号住居跡出土遺物



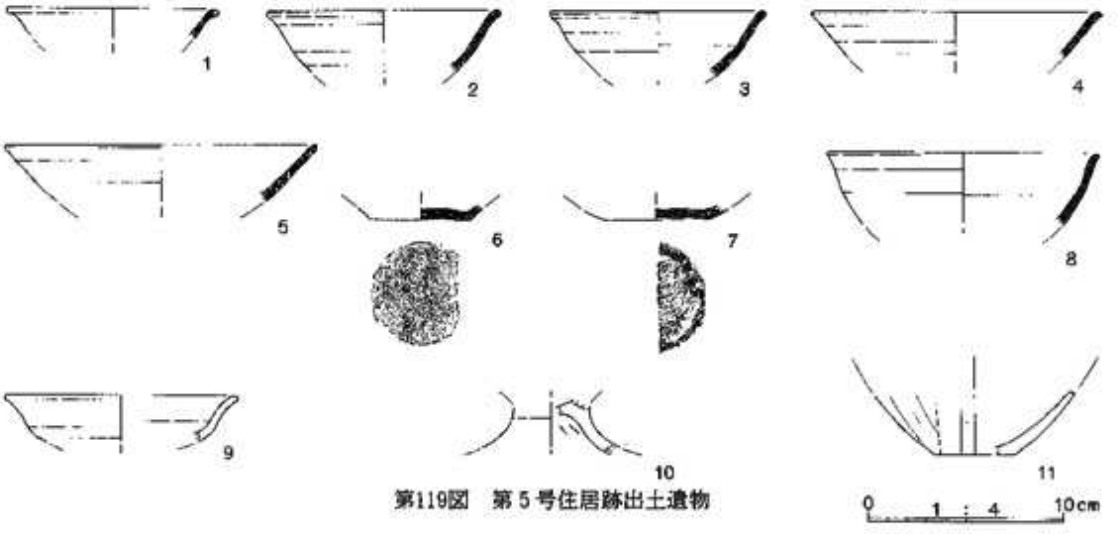

1層　褐色土　4～5mmの小礫を多量に含む。しまらない。
2層　褐色土　1層に似るが、焼土粒を含む。
3層　褐色土　10～20mmの小礫を多量に含む。硬くしまる。
4層　褐色土　2～3mmの小礫をわずかに含む。
5層　暗褐色土　円礫（5～10cm）を多量に含む。床面として敷かれた層か。やや粘性あり。
6層　褐色土　焼土粒を多量に含み、土器片混入。パサつく。
7層　灰黄褐色土　あまりしまらず、混入物もない。

以下カマド（8層～12層）
8層　明赤褐色土　焼土主体。混入物なくややしまる。
9層　褐色土　わずかに焼土細粒含む。しまらない。
10層　赤褐色土　焼土ブロックを多量に含む。天井の崩落によって形成されたものと思われる。
11層　褐色土　焼土小ブロックと炭との混合層。燃焼部使用時の堆積灰。
12層　褐色土　地山土と焼土細粒との混合層。しまらない。

水糸レベル　74.6m　　斜線部下底　73.8m

0　1 : 60　3m

第118図　第5号住居跡

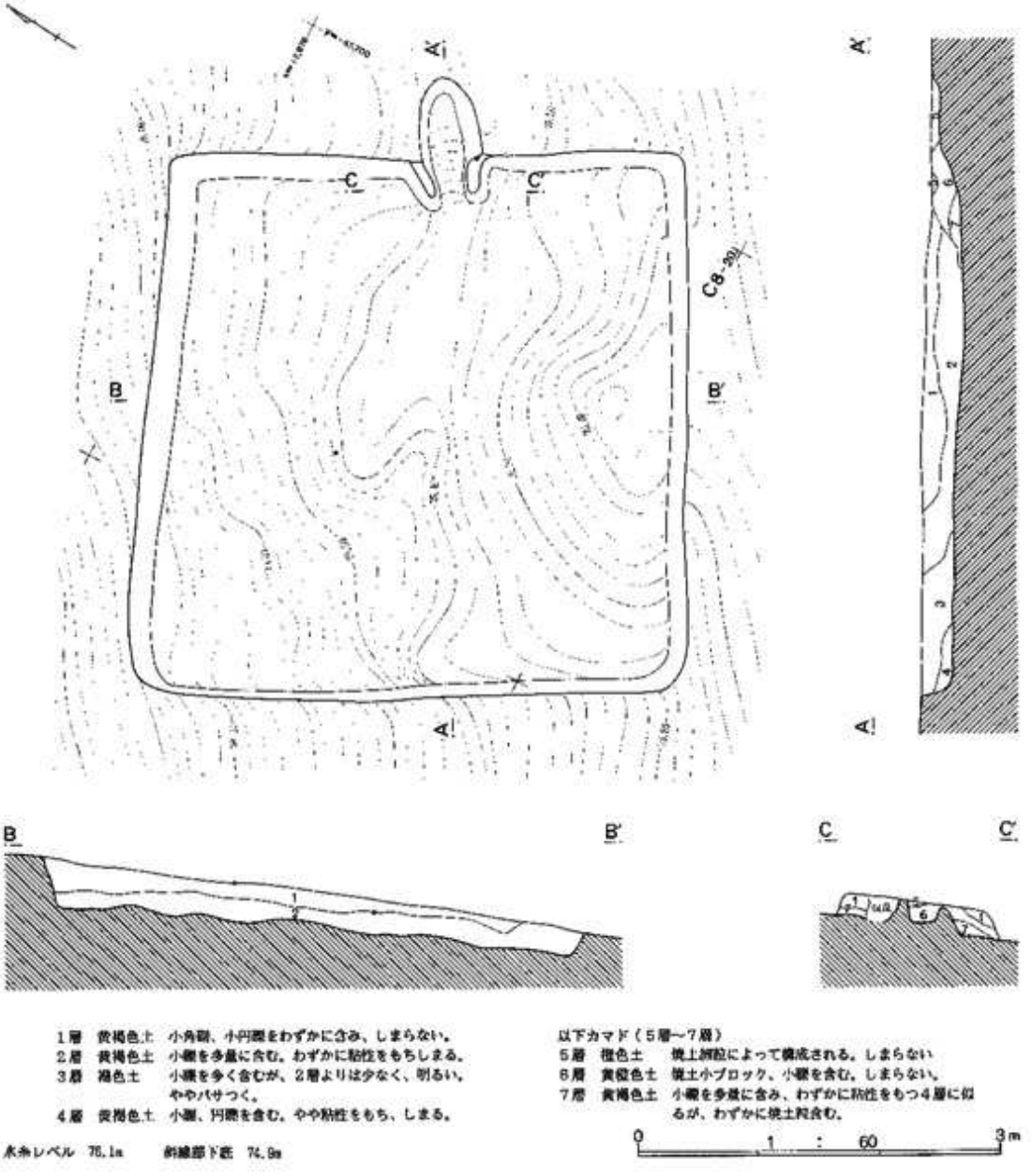



第119図　第5号住居跡出土遺物

## 第６号住居跡

南側斜面東部の尾根線付近のＣ８、Ｃ９グリッドにおいて確認されている。規模は約4.5×4.4mを測り、ほぼ方形の形態となる。残存壁高は約40cmである。確認面の標高は約76.1m、床面の対水平角は約７度である。住居の北西側の約２／３からは小円礫が面的に確認されているが、人為的なものではなく、地山に含まれていたものと思われる。

カマドは住居東壁中央のやや南に作られ、主軸方向はＮ―60度―Ｅである。袖部は地山を掘り残すことによって作られている。

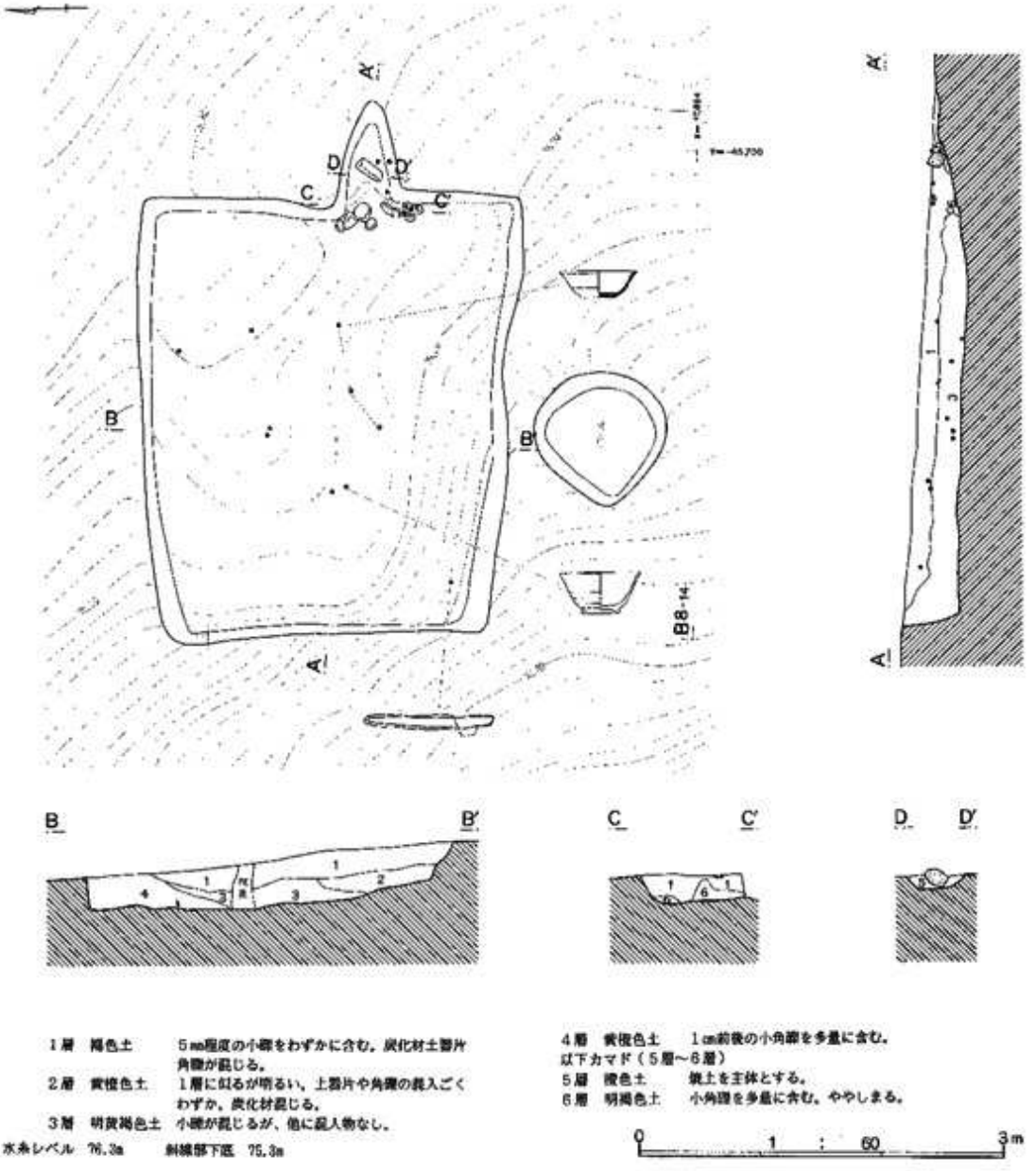



第120図　第６号住居跡

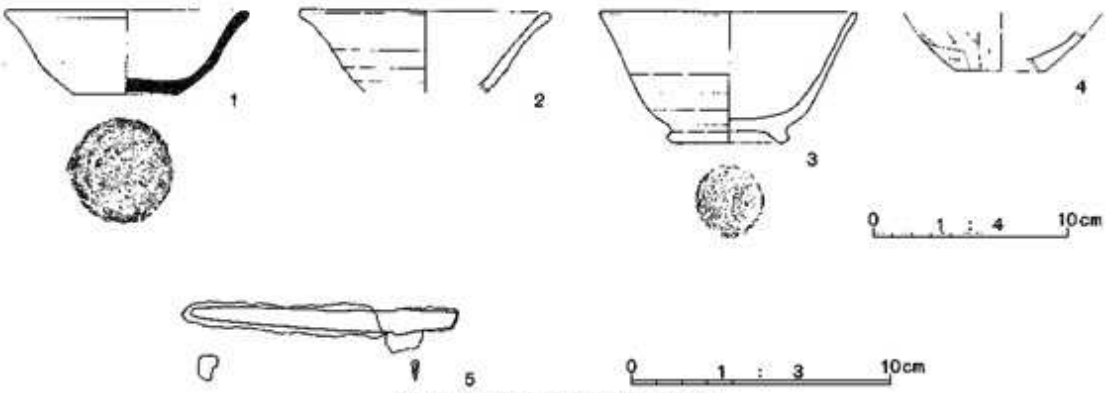
## 第７号住居跡

北側斜面東部の尾根線付近のＢ８、Ｂ９グリッドにおいて確認されている。規模は約3.7×3.2mを測り、形態は東西にやや長い長方形となる。残存壁高は約44cmである。確認面の標高は約76.3m、床面の対水平角は約７度である。床面より20～30cm浮いた状態で焼土、炭化材が検出されている。特に住居南半部からの検出が顕著である。

カマドは東壁中央やや南寄りに作られ、主軸方向はＮ－91度－Ｅである。周辺に小角礫を多量に含む粘質土のブロックが確認されている。カマド構築の際に使用されたものである可能性も考えられる。カマド内部の角柱状の礫は支脚の倒れたものであろう。




第121図　第７号住居跡



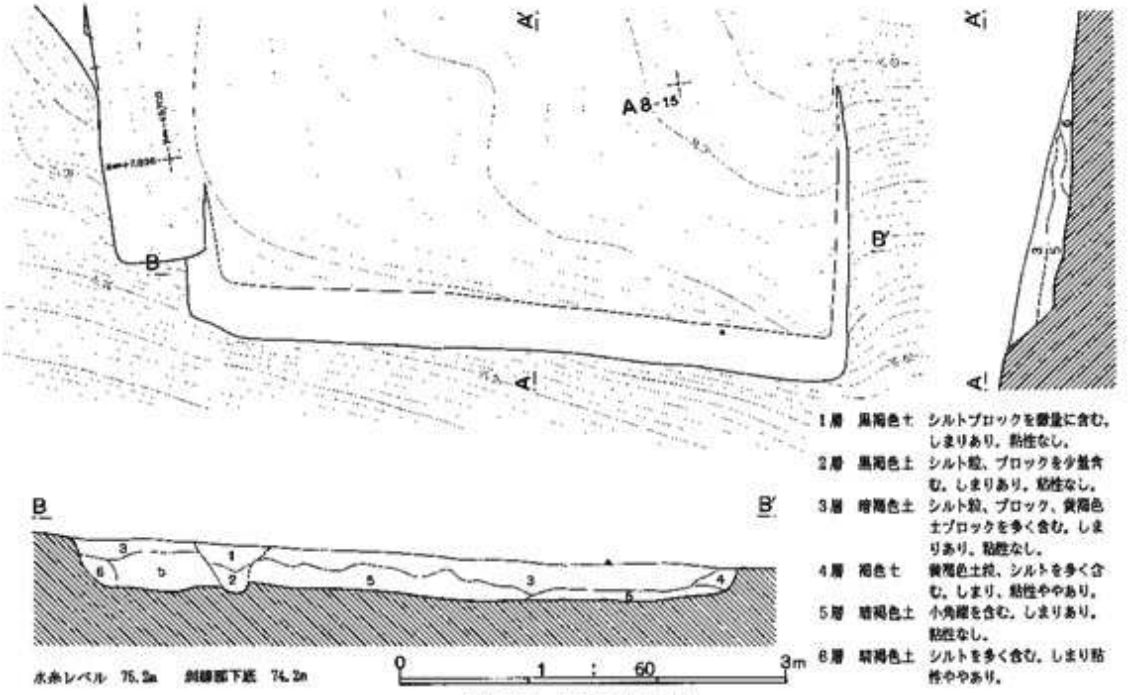

第122図　第７号住居跡出土遺物

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器　高 | 底　径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | S坏 | (12.5) | 4.3 | 5.4 | w | g | A | 40 | 底部回転糸切り。 |
| 2 | 坏 | (12.9) | 4.2 | — | s | do | B | 30 | |
| 3 | 椀 | (13.2) | 6.7 | 5.6 | s | do | B | 40 | 底部回転糸切り後高台。 |
| 4 | 甕 | — | 1.9 | (4.6) | b | o | B | 30 | |
| 5 | 刀子 | 長さ10.3、棟幅0.3cm。両関。木質部残存。切先側欠損。 | | | | | | | |

第40表　第７号住居跡出土遺物

## 第８号住居跡

北斜面東部のＡ８、Ａ９グリッドにおいて確認されている。住居北半は失われているが東西約5.1mを測る。形態はほぼ方形になるものと思われる。残存壁高は約40cmである。確認面の標高は約75.2m、床面の対水平角は約３度である。住居南壁側は基盤の岩板を掘り込んでいる。

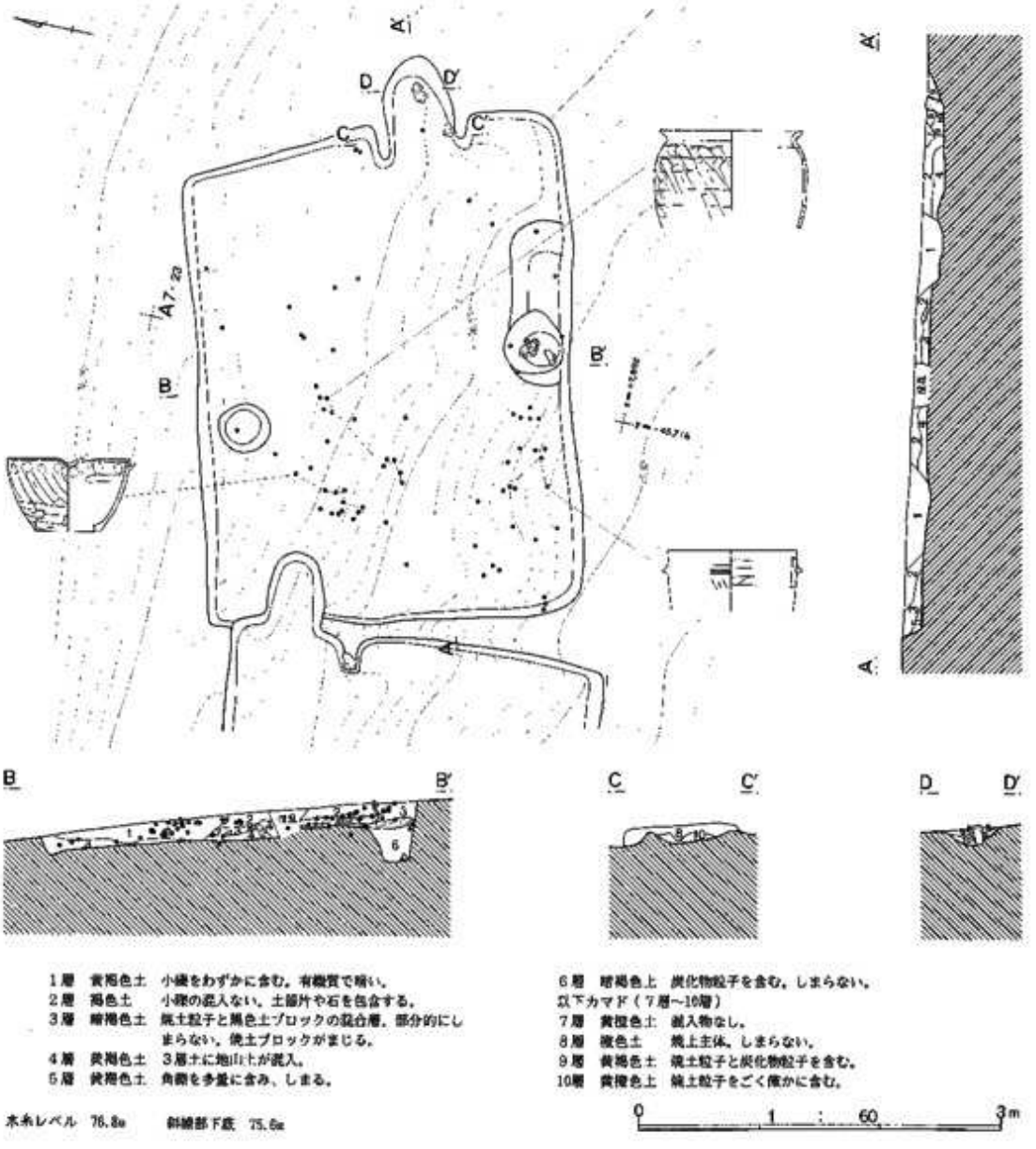



第123図　第８号住居跡

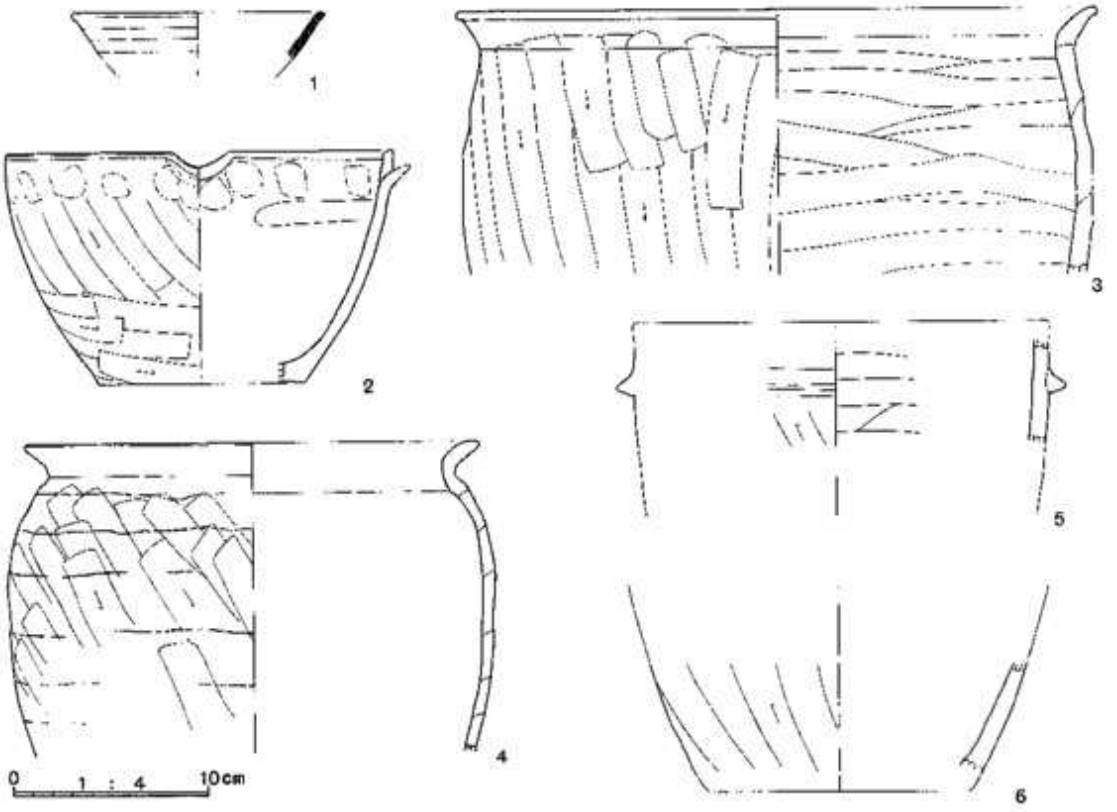
## 第９号住居跡

遺跡中央やや東寄りの北側斜面Ａ７、Ｂ７グリッドにおいて確認されている。規模は4.1×3.2mを測り、形態は東西にやや長い長方形となる。残存壁高は約50cmである。確認面の標高は約76.8m、床面の対水平角は約３度である。西壁北部には第10号住居跡のカマドが重複している。

カマドは東壁南寄りに作られ、主軸方向はＮ―73度―Ｅである。袖部は地山を掘り残して作ったものと思われる。カマドのほぼ中央には支脚に使用されたと思われる角柱状の石が埋め込まれている。床面直上に２ケ所焼土の集中部が見られる。北壁側の焼土の下には浅い皿状のピットが確認された。南壁側の焼土の下にはピットが穿たれ底面からは５個の礫(大きいもので拳大)が確認された。




第124図　第９号住居跡




第125図　第９号住居跡出土遺物

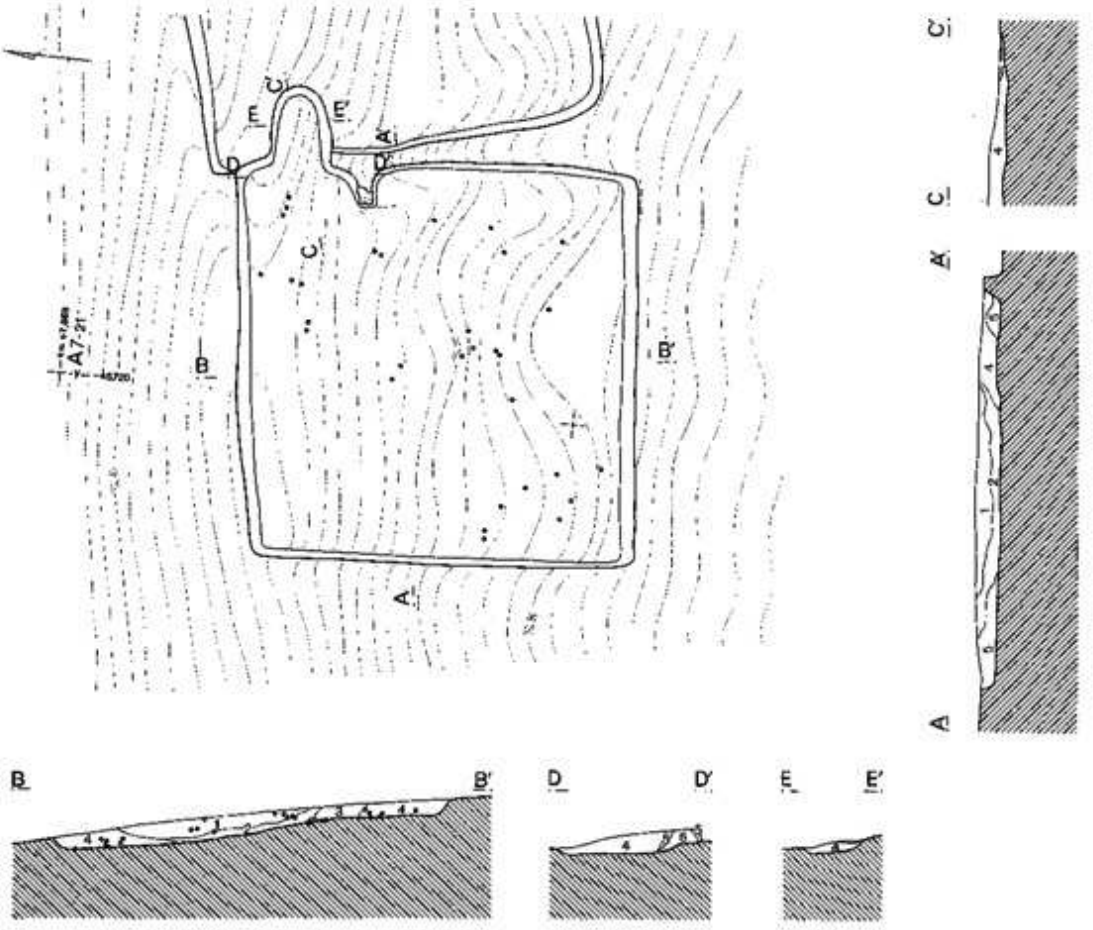
| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器　高 | 底　径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | S坏 | (13.0) | 2.4 | — | b | lg | B | 20 | |
| 2 | 片口鉢 | (20.0) | 11.8 | 10.5 | ws | o | B | 40 | |
| 3 | 鉢 | (32.9) | 13.5 | — | s | do | B | 30 | |
| 4 | 鉢 | (23.4) | 15.8 | — | ws | o | B | 40 | 表面輪積み痕顕著。 |
| 5 | 羽釜 | (21.3) | 5.4 | — | ws | o | B | 10 | |
| 6 | 羽釜 | — | 5.5 | (13.4) | ws | rb | B | 30 | |

第41表　第９号住居跡出土遺物

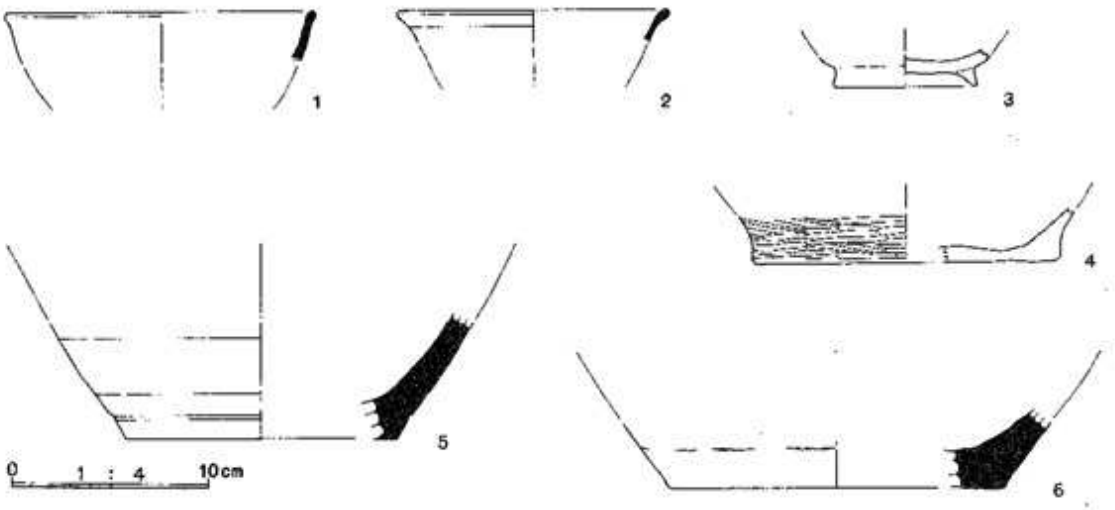
**第10号住居跡**

北側斜面の中央付近、Ａ６、Ａ７、Ｂ６、Ｂ７グリッドにおいて確認されている。規模は3.1×3.1mを測り、形態は方形である。残存壁高は約20cmである。確認面の標高は約76.9m、床面の対水平角は約５度である。

カマドは東壁北端に作られ、主軸方向はN—82度—Eである。カマドは第９号住居に重複している。




第126図　第10号住居跡




第127図　第10号住居跡出土遺物

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | S坏 | (14.0) | 1.7 | — | b | lg | C | 10 | |
| 2 | S椀 | (16.0) | 2.6 | — | bw | lg | C | 20 | |
| 3 | 椀 | (8.8) | 1.7 | (7.4) | sw | o | B | 70 | |
| 4 | 甕 | — | 2.5 | (15.9) | ws | o | B | 40 | 底面も磨き。 |
| 5 | S甕 | — | 5.9 | (14.0) | w | dg | A | 30 | |
| 6 | S甕 | — | 3.3 | (17.0) | sw | g | A | 40 | |

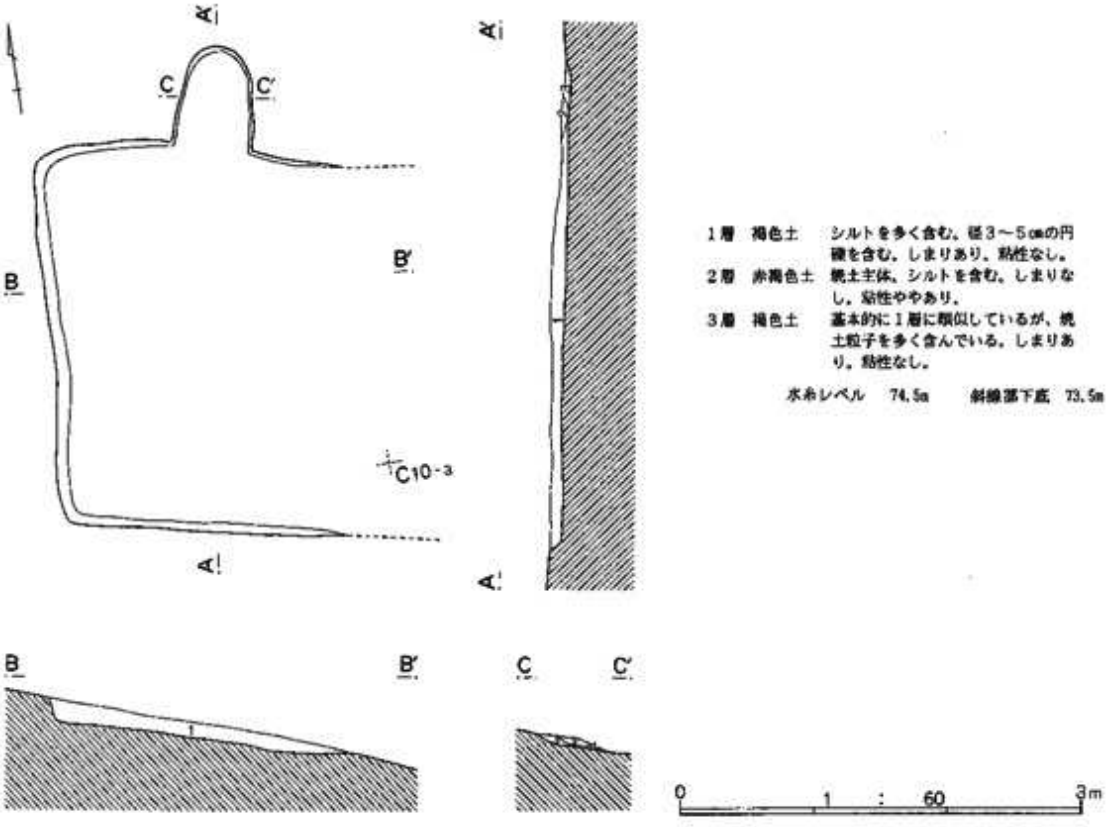
第42表　第10号住居跡出土遺物

**第11号住居跡**

東斜面ほぼ中央のＢ９、Ｂ10、Ｃ９、Ｃ10グリッドにおいて確認されている。住居東側は失われているが南北約2.9mを測る。形態はほぼ方形になるものと思われる。残存壁高は約16cmである。確認面の標高は約74.3m、床面の対水平角は約7.5度である。

カマドは北壁ほぼ中央に作られ、主軸方向はＮ－10度－Ｅである。

遺物は出土していない。




第128図　第11号住居跡

第129図　第６号・第８号住居跡出土遺物

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器　高 | 底　径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | S坏 | (14.1) | 2.9 | — | w | g | B | 20 | |
| 2 | 鉢 | — | 6.3 | — | b | do | B | 30 | |

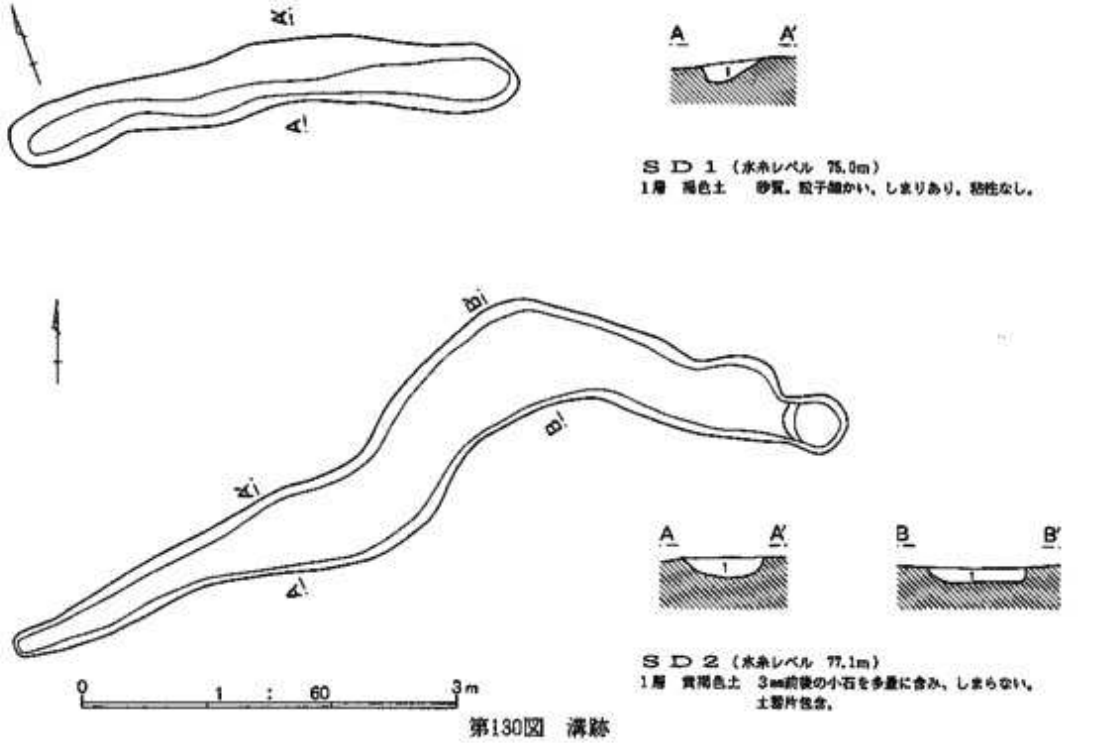
第43表　第６号・第８号住居跡出土遺物

**第１号溝跡**

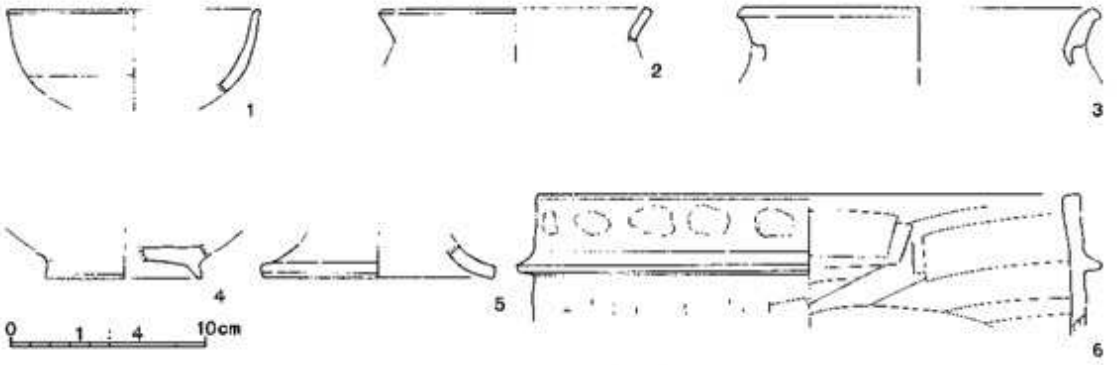
Ｄ８グリッドにおいて第４号住居跡、第１号土坑と重複して確認されている。ほぼ東西に横走する。長さ約4.1m、幅約0.6m、確認面からの深さ16cmを測る。切り合いから判断して第４号住居跡、第１号土坑よりは新しいものと考えられる。

**第２号溝跡**

Ｂ７、Ｃ７周辺において縄文時代の第14号、第15号土坑と重複して確認されている。屈曲しながら東西方向に横走する。長さ7.3m、幅90cm、確認面からの深さ16cmを測る。切り合い、出土遺物から判断して両土坑よりは新しいものと考えられる。羽釜片等が出土しており、他の住居跡と同時期に形成された溝跡であろうと思われる。




第130図　溝跡




第131図　第２号溝跡出土遺物

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 椀 | (13.0) | 4.3 | -- | ws | do | B | 20 | |
| 2 | 甕 | (14.0) | 1.7 | — | b | do | C | 20 | |
| 3 | 甕 | (17.8) | 2.8 | — | w | do | B | 20 | |
| 4 | 椀 | — | 1.8 | (8.0) | w | o | B | 20 | |
| 5 | 台付甕 | — | 1.6 | (11.7) | w | o | B | 20 | |
| 6 | 羽釜 | (27.9) | 6.8 | — | ws | do | B | 30 | |

第44表　第２号溝跡出土遺物

**第１号土坑**

Ｄ８グリッドにおいて第４号住居跡、第１号溝跡と重複して確認されている。切り合いから第４号住居跡よりは新しく、第１号溝跡よりは古いものと判断される。覆土中からは焼破礫が集中的に検出されているが、焼土は確認されなかった。長径2.4m、短径1.4m、確認面からの深さ0.32mを測る。

**第２号土坑**

Ｃ８グリッドにおいて第３号土坑と重複して確認されている。切り合いから第３号土坑よりは新しいものと判断される。長径2.0m、短径1.3m、確認面からの深さ0.14mを測る。

**第３号土坑**

Ｂ８グリッドにおいて第２号土坑と重複して確認されている。切り合いから判断して第２号土坑よりは古いものと判断される。土師器の坏片が１点出土している。長径1.5m、短径1.0m、確認面からの深さ0.32mを測る。

**第４号土坑**

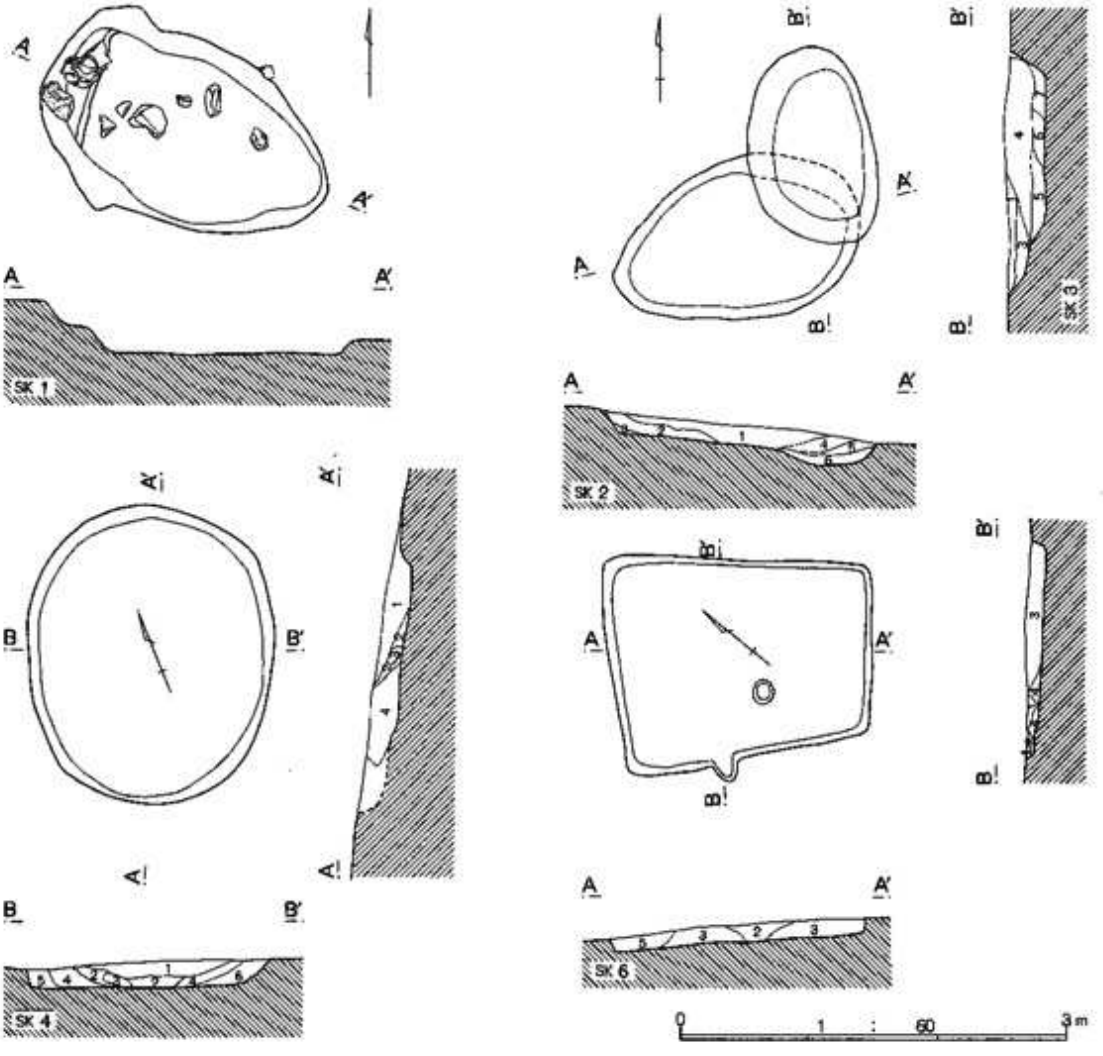
Ａ７、Ａ８グリッドにおいて確認されている。ほぼ楕円形の形態となる。長径2.3m、短径1.9m、確認面からの深さ0.22mを測る。

**第5号土坑**

B6グリッドにおいて確認されている。卵形の形態を呈する。長径1.3m、短径0.7m、確認面からの深さ0.26mを測る。

**第6号土坑**

B6グリッドにおいて確認されている。台形に近い形態を呈する。南西壁に焼土化したカマド状の掘り込みが張り出し、その掘り込みの北東側には小ピットが穿たれている。一見して小型の住居を思わせる様相を示している。甕の底部片（羽釜状の鍔を有するものと思われる）等が出土している。長径2.1m、短径1.5m、確認面からの深さ0.14mを測る。遺構の性格としては第13号住居跡に類似するものと思われる。

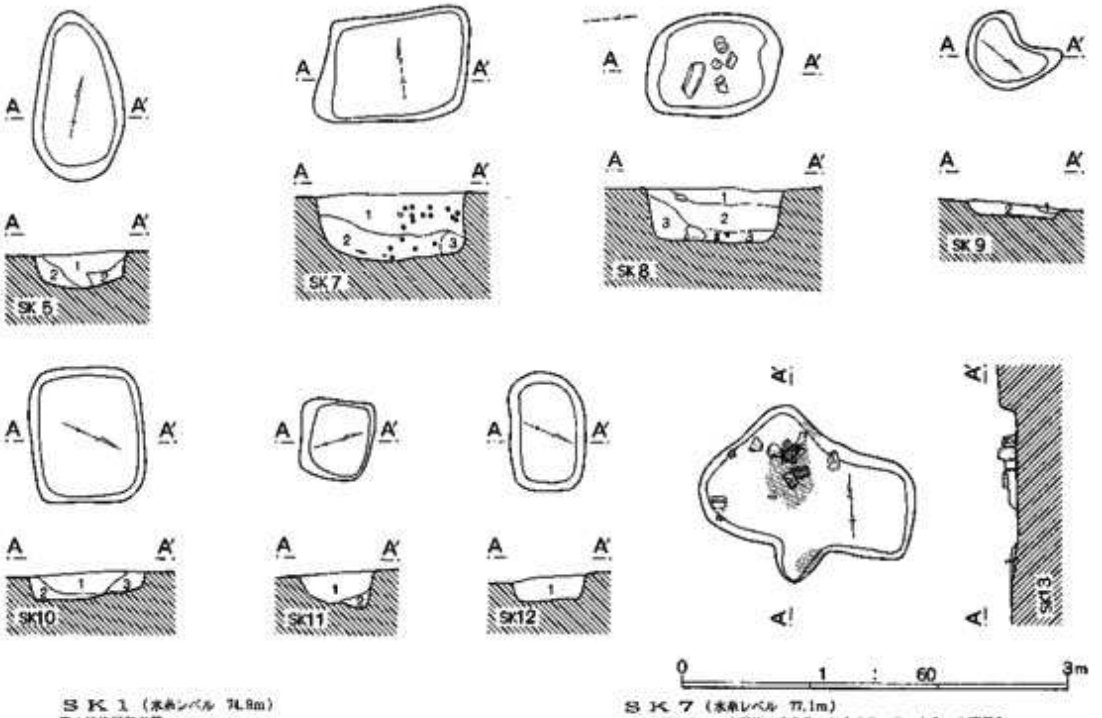



第132図　平安時代の土坑(1)

**第７号土坑**

Ｂ５、Ｃ５グリッドにおいて確認されている。形態はほぼ長方形となり、長径1.2m、短径0.8m、確認面からの深さ0.48mを測る。

本遺跡の土坑の中ではもっとも多くの遺物が出土している。須恵器の壺の口縁部片、長頸瓶の口縁部片等須恵器の破片が目立つ。覆土中には炭化材が混じっている。本土坑をとりまくように浅い不整形の掘り込みが確認されている（全測図参照）が本土坑に関連するものであるか否かは不詳である。




ＳＫ１（水糸レベル 74.8m）
第４号住居跡参照

ＳＫ２・ＳＫ３（水糸レベル 76.0m）
1層 明褐色土 縄文岩粒を微量に含む。しまりややあり。粘性なし。
2層 褐色土 縄文岩粒を微量に含む。しまりなし。粘性ややあり。
3層 褐色土 縄文岩粒を少量含む。しまりややあり。粘性ややあり。
4層 黄褐色土 縄文岩粒を多量に含む。しまりあり。粘性なし。
5層 褐色土 縄文岩粒を少量含む。しまりあり。粘性ややあり。
6層 暗褐色土 縄文岩粒を少量含む。しまりあり。粘性ややあり。
7層 暗褐色土 縄文岩粒を微量に含む。しまりあり。粘性ややあり。

ＳＫ４（水糸レベル 76.4m）
1層 黒褐色土 わずかに小礫（3～5mm）を含む。有機質で暗い。
2層 黄褐色土 1層に似るが、色調がやや明るい。
3層 黄褐色土 1cm前後の小礫土体となり2層とまじる。
4層 黄褐色土 5mm程の小礫をわずかに含む。色調は明るい。
5層 黄褐色土 4層に似るが、黒色土ブロックがまじる。
6層 黄褐色土 1cm前後の礫（角礫）が混入する。

ＳＫ５（水糸レベル 77.1m）
1層 暗黄褐色土 有機質で炭化物を含む。
2層 明黄褐色土 明るく炭化物をごくわずかに含む。

ＳＫ６（水糸レベル 77.1m）
1層 褐色土 黒土層、焼けてしまらないが粘質。
2層 黄褐色土 3層と焼土粒子の混合層。
3層 黄褐色土 5mm前後の小礫混合土。
4層 黄褐色土 5mm前後の小礫多量に混合、ややしまる。
5層 黄褐色土 褐色の掘り込み上、しまらず炭化物がわずかに混入。

ＳＫ７（水糸レベル 77.1m）
1層 褐色土 土器片、炭化物を包含する。5～10mmの礫混入。
2層 黄褐色土 1層に似るが、炭化物の混入少なく、やや明るい。
3層 灰白色土 2層と浅山縄灰岩の混合土。

ＳＫ８（水糸レベル 77.2m）
1層 黄褐色土 焼土粒を多量に含む。
2層 黄褐色土 焼土ブロックをわずかに含む。1層に似るがやや明るい。
3層 灰黄褐色土 炭化物と焼土ブロックの混合土。土器片を包含する。

ＳＫ９（水糸レベル 77.2m）
1層 明黄褐色土 焼土層。わずかに焼土化し、しまらない。
2層 淡赤褐色土 混入物なし。しまらない。

ＳＫ１０（水糸レベル 77.0m）
1層 黄褐色土 炭化物と焼土粒を多量に含む。
2層 黄褐色土 わずかに焼土粒を含み、小礫混入。
3層 黄褐色土 小礫（5mm前後）が混入し、やや粘質。

ＳＫ１１（水糸レベル 76.8m）
1層 黄褐色土 炭化物をごくわずか含み、土器片を包含する。小礫多量。
2層 明黄褐色土 1層に比べ礫少なく、明るい。

ＳＫ１２（水糸レベル 76.6m）
1層 黄褐色土 黒褐色土のブロック混入。小礫含む。

ＳＫ１３（水糸レベル 77.3m）
1層 赤色土 焼土主体で上面は固く 焼けしまる。
2層 赤色土 焼土が多量に含まれしまらない。

第133図　平安時代の土坑(2)

**第８号土坑**

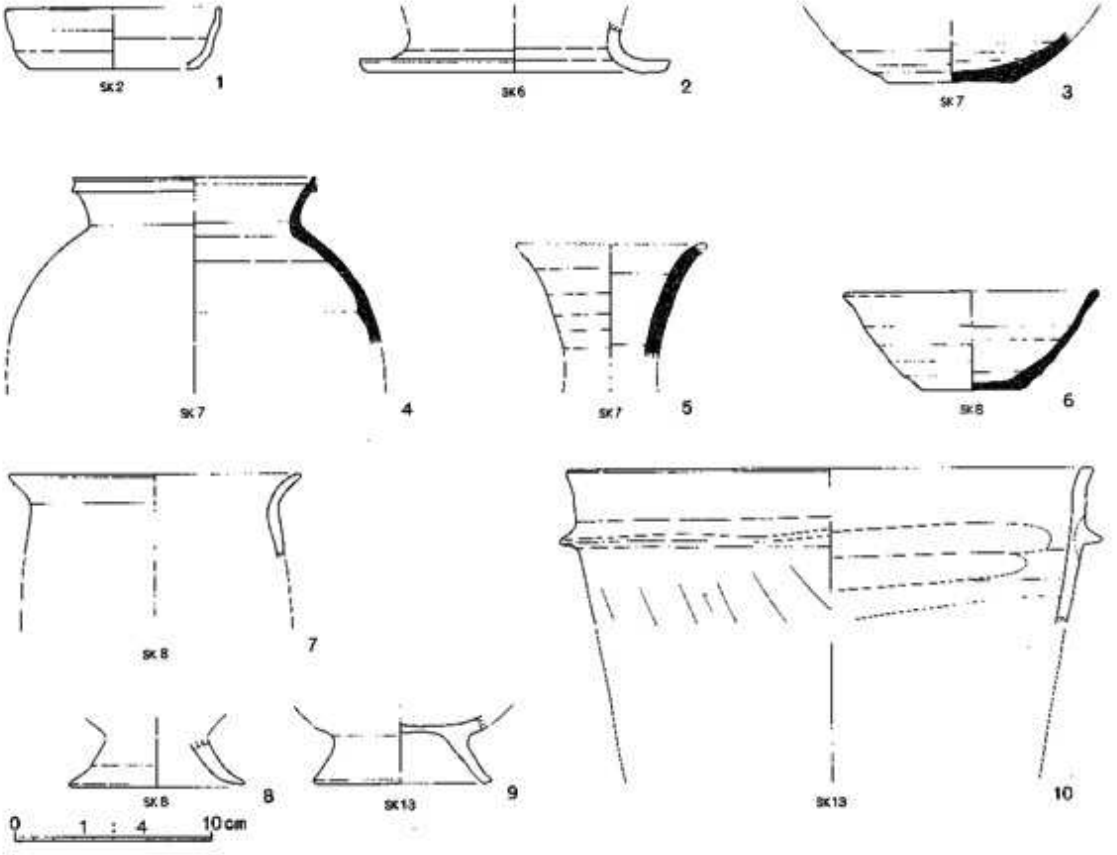
Ｃ５グリッドにおいて確認されている。形態は正方形に近い長方形となり、長径1.0m、短径0.8m、確認面からの深さ0.38mを測る。基盤の凝灰岩まで掘り込み、壁はほぼ直立する。土師器甕の口縁部片、台付き甕の脚部、礫等が床面直上から出土している。土器の周辺には焼土が集中している。形態、遺物の出土量等、第７号土坑に類似する。

**第９号土坑**

Ｃ５グリッドにおいて確認されている。形態は湾曲した楕円形となり、長径0.7m、短径0.6m、確認面からの深さ0.12mを測る。北端の突出部は焼土化している。

**第10号土坑**

Ｃ５、Ｃ６グリッドにかけて確認されている。形態は長方形となり、長径1.0m、短径0.9m、確認面からの深さ0.20mを測る。覆土には炭化物が含まれている。第11号、第12号土坑とは南北に並ぶものである。11号、12号土坑も含めて、規模、形態、覆土は、尺尻遺跡の南東に広がる滑川町「滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群」において多数検出されている炭焼窯状遺構に類似している（滑川町教育委員会　木村俊彦氏ご教示）。




第134図　平安時代の土坑出土遺物

**第11号土坑**

Ｄ５、Ｄ６グリッドにかけて確認されている。形態は正方形に極めて近い長方形となり、長径0.65m、短径0.6m、確認面からの深さ0.23mを測る。遺物は出土していない。

**第12号土坑**

Ｄ５、Ｄ６グリッドにかけて、第１号住居跡に隣接して確認されている。形態は長方形となり、長径0.9m、短径0.6m、確認面からの深さ0.18mを測る。

**第13号土坑**

遺跡のほぼ中央、Ｃ６グリッドにおいて確認されている。本遺跡内ではもっとも標高が高い地点に位置する。形態は南北にカマド状の張り出しを有する長方形となり、張り出し部を除いた規模は長径1.7m、短径1.3m、確認面からの深さ0.1mを測る。両張り出し部とも焼土が多量に含まれる。北側の張り出し部の南側には焼礫が散在し、礫散布域の内外からは多量の焼土が検出されている。散在した礫の中央部には直立した角柱状の礫が焼土中に埋め込まれている。礫の形態、直立した状態は、第２号住居跡を始めとする各住居跡のカマド内で確認された支脚に極めて類似している。高台付き椀の底部、羽釜の口縁部片等が出土している。高台付き椀の底部は直立した支脚状の礫に寄りかかるように出土しており、第２号住居跡のカマド内の支脚と高台付き椀の底部の関係を髣髴とさせる。工房的な性格を有する遺構である可能性も考えられる。

**第15号土坑（第100図　参照）**

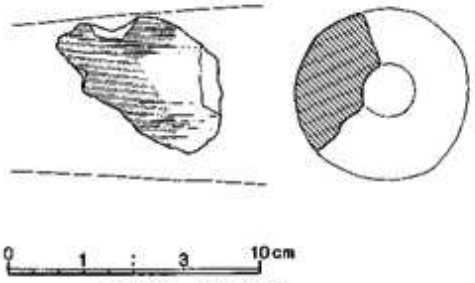
東向きに傾斜する斜面部の付け根付近の尾根線上、Ｂ７、Ｃ７グリッドにおいて確認されている。１辺約2.8mのほぼ方形の形態を示す。確認面からの深さは約20cmである。第２号溝跡、第14号土坑と重複しているが、切り合いから第２号溝跡よりは古期に位置付くものと考えられる。第14号土坑との切り合いは不明瞭であるが、出土遺物から第14号土坑よりは新しいものと思われる。

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器　高 | 底　径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | (11.0) | 3.1 | (8.4) | b | o | B | 20 | |
| 2 | 甑 | — | 2.5 | (15.0) | w | o | B | 30 | 羽釜状の甑か。 |
| 3 | S鉢 | — | 2.1 | (6.4) | w | g | B | 50 | 底部回転糸切り。 |
| 4 | S甕 | 12.4 | 8.4 | — | d | g | A | 40 | 外面自然釉。 |
| 5 | S長頸瓶 | (9.8) | 5.4 | — | w | dg | A | 40 | 内外面自然釉。 |
| 6 | S坏 | (13.1) | 5.0 | (5.2) | b | lg | C | 40 | |
| 7 | 甕 | (14.9) | 4.1 | — | b | o | B | 30 | |
| 8 | 台付甕 | — | 2.5 | (9.0) | b | o | B | 30 | |
| 9 | 台付甕 | — | 3.2 | 8.6 | sw | o | B | 80 | |
| 10 | 羽釜 | (27.1) | 8.0 | — | sw | rb | B | 40 | |

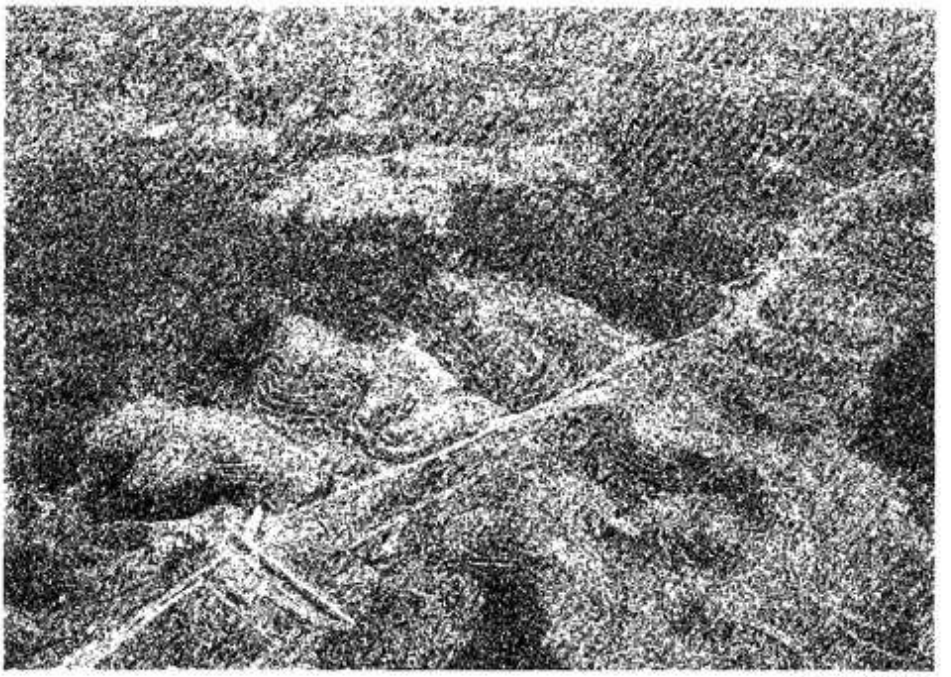
第45表　平安時代の土坑出土遺物

**採集資料**

出土地点を特定することはできないが、本遺跡内において羽口片が1点採集されている。大きく欠損しているので本来の大きさは不明である。図中右側の網部は還元されて変色しており、差込み口の方であろうと思われる。




第135図　採集資料



尺尻遺跡遠景

# 尺尻遺跡

# Ⅷ　尺尻遺跡の調査

## 1　遺跡の概観

滑川流域では最も大きな谷の部類に属する長沼谷の東側の丘陵上に位置し、長沼谷の支谷である南の蓮沼谷、北の尺尻谷によって周囲の丘陵と隔てられている。尺尻谷を挟んで北方には尺尻北遺跡、長沼谷を挟んで南西には新田坊遺跡が所在する。

遺跡を載せる丘陵にはさらに長沼谷からの小さな支谷が入り込み、尾根を二股に分けている。以下本文中では二股に分けられた北側の尾根を「北尾根」、南側の尾根を「南尾根」、両尾根のつけねから東側を「東尾根」と仮称する。尾根頂上の標高は約98m、蓮沼谷と頂上との比高は約32m、南尾根の遺構が検出されている付近との比高は約7.5mを測る。

検出された遺構は縄文時代前期の住居跡1軒、集石土坑2基、平安時代の住居跡3軒、土坑2基である。他に遺構は伴わないが旧石器時代の遺物、縄文時代中期の遺物等が確認されている。

旧石器時代の遺物は北尾根から、縄文時代の遺構、遺物は南尾根を中心に東尾根、北尾根から、平安時代の遺構、遺物は南尾根の南向き斜面部から検出されている。

## 2　旧石器時代の遺物

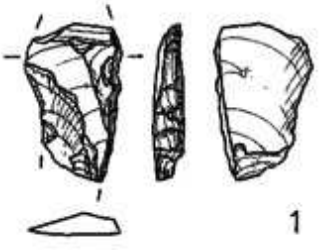
旧石器時代の遺物はナイフ形石器の欠損品が1点確認されただけである。北尾根中ほどのD8グリッドから検出されている。

黒曜石製で単設打面の石核から剥離された石刃状の剥片を素材としている。両端を折れにより欠損しているので定かではないが、器体の厚さの変化から推察して、素材剥片の打点側がナイフ形石器の基部になっているものと思われる。

プランティングは非常に急峻で、素材剥片の主要剥離面とのなす角度はほぼ直角に近い。

プランティングと反対側の側縁は鋭いエッジをなしているが、微細な刃こぼれ状の剥離が連続している。

現存する器体の大きさは長さ2.4、幅1.6、厚さ0.5cmである。



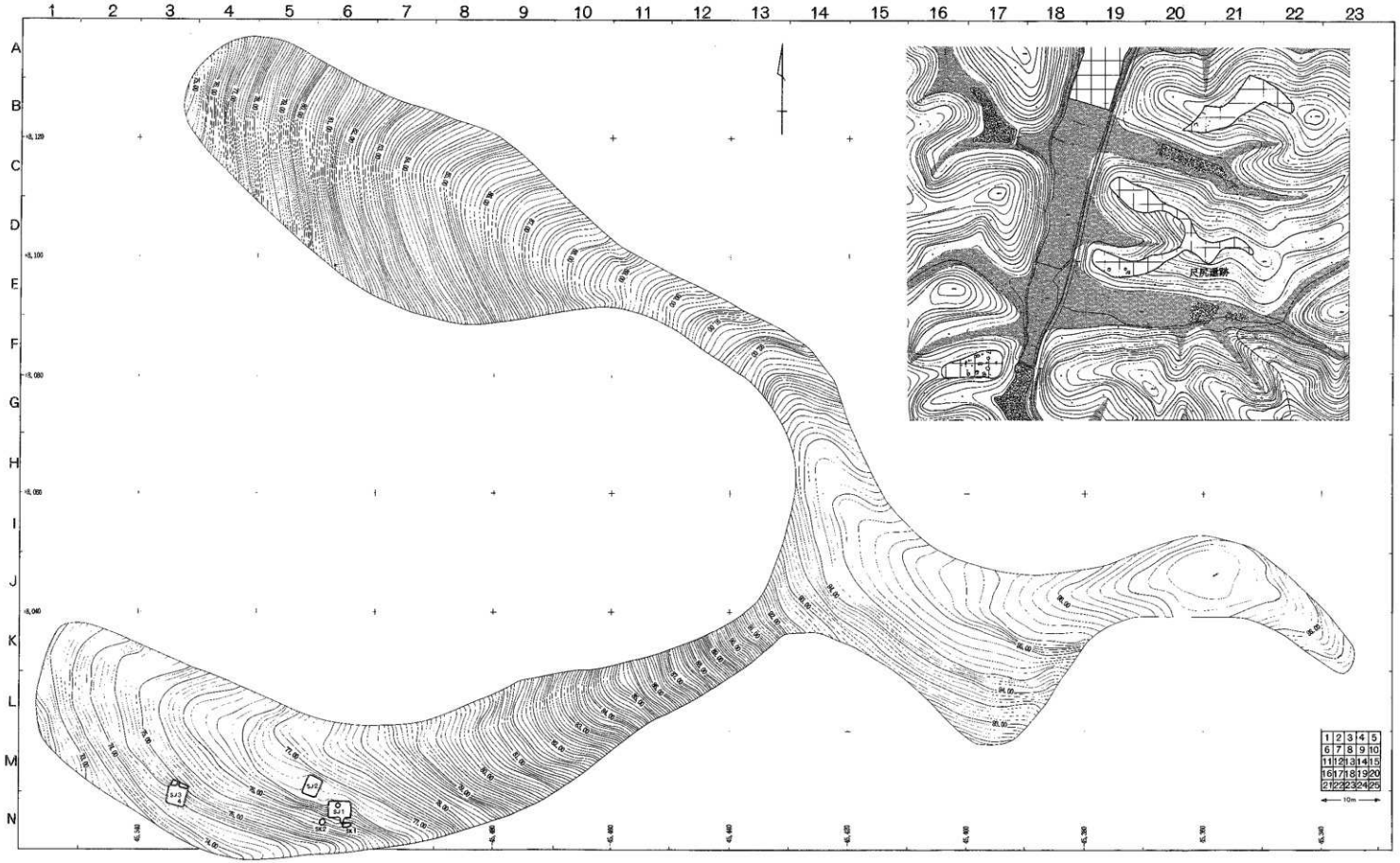

S=4/5

第136図　旧石器時代の遺物

## 3　縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は諸磯b式期の住居跡1軒と、集石土坑2基である。集石土坑の帰属時期は中から時期を特定するような遺物が出土していないので明らかではないが、周辺から主として諸磯b式期を中心とした土器が多く出土しているので、住居跡同様諸磯b式期のものである可能性が高いものと思われる。これらの遺構、遺物はいずれも南尾根を中心に分布している。

遺構が伴わない土器は諸磯b式とは分布を異にしており、前期黒浜期の遺物は東尾根の西端付近、中期の土器は北尾根西端付近を中心に分布している。




第137図　尺尻北遺跡全測図

**第2号住居跡**

遺跡内南尾根の南側斜面部付近のM5、M6、N5、N6グリッドにまたがって確認されている。規模は3.4×2.6mを測り、形態は南北に長い長方形となる。残存壁高は約32cm、確認面の標高は約77.8m、床面の対水平角は約6度である。

炉跡、柱穴等住居に付随する施設は確認できなかった。

出土遺物は諸磯b式期の土器片を中心とし、石器類は剥片等が2点出土しただけである。

**第2号住居跡出土遺物（第139図）**

諸磯b式期の土器が主体となっている。4種に分類した。

第1種（1～12）

竹管による平行沈線を有するものを本種とする。

1～3は口縁部片で他は胴部片である。1、2、12以外のものは縄文を地文としているが不明瞭なものが多い。9は単節RLの横位施文である。

第2種（13～22）

半截竹管による爪形文を有する土器を本類とする。

13～15は口縁部片、他は胴部片である。横位に平行する多段のC字状の爪形文が多いが、斜行するもの逆C字状のものも含まれる。基本的に爪形文を施文する以前に同一工具によって平行沈線を施しているようである。平行沈線は、対になる上位の沈線のほうがより鋭く、深く刻まれるため、後に沈線上に重複して施文される爪形文の押し引きの痕跡は、上位の沈線側にはほとんど残されず、下位の沈線側に残されるものが殆どである。こうした手法は本種の土器に共通するようであるが、13の土器から良く読み取れる。ただし爪形文に先行して平行沈線を施すことなく、爪形文の押し引きのみによって同様の効果を描出するもの（13の最下段の爪形文）、C字状の爪形文以前に逆C字状の爪形文を浅く施した痕跡のあるもの（21）等もみられる。16は器面に単節RLの縄文が施文されている。

第3種（23～27）

浮線文を有する土器を本類とする。

23、24は口縁部片であり、曲線的な浮線文も用いられている。25、27は浮線文上に斜位の刻みが、26には縄文が施される。25は対になる2本の浮線文上に矢羽状に刻みが施されている。浮線文は棒状の粘土紐の貼り付けによるものである。25、26には地文に縄文が施される。

第4種（28～32）

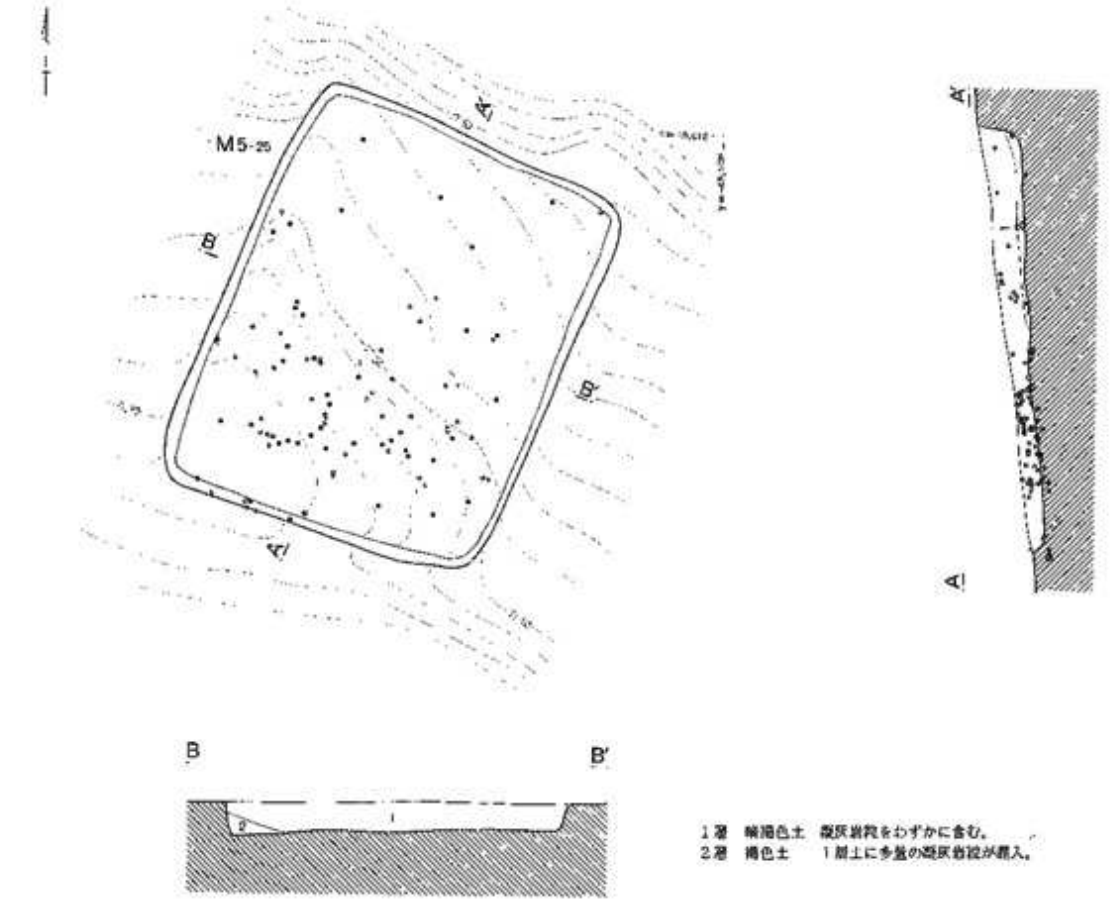
縄文のみが観察されるものを本類とした。第1類から第3類の地文にも縄文が用いられているため本来的には他の類に帰属する可能性がある。単節RLのものが多い。

その他

諸磯c式と思われる条線のみが施文されたものが1点確認されている（33）。

底部

6個体分の底部が検出されているがいずれも諸磯b式期かc式期のものと思われる。




第138図　第2号住居跡

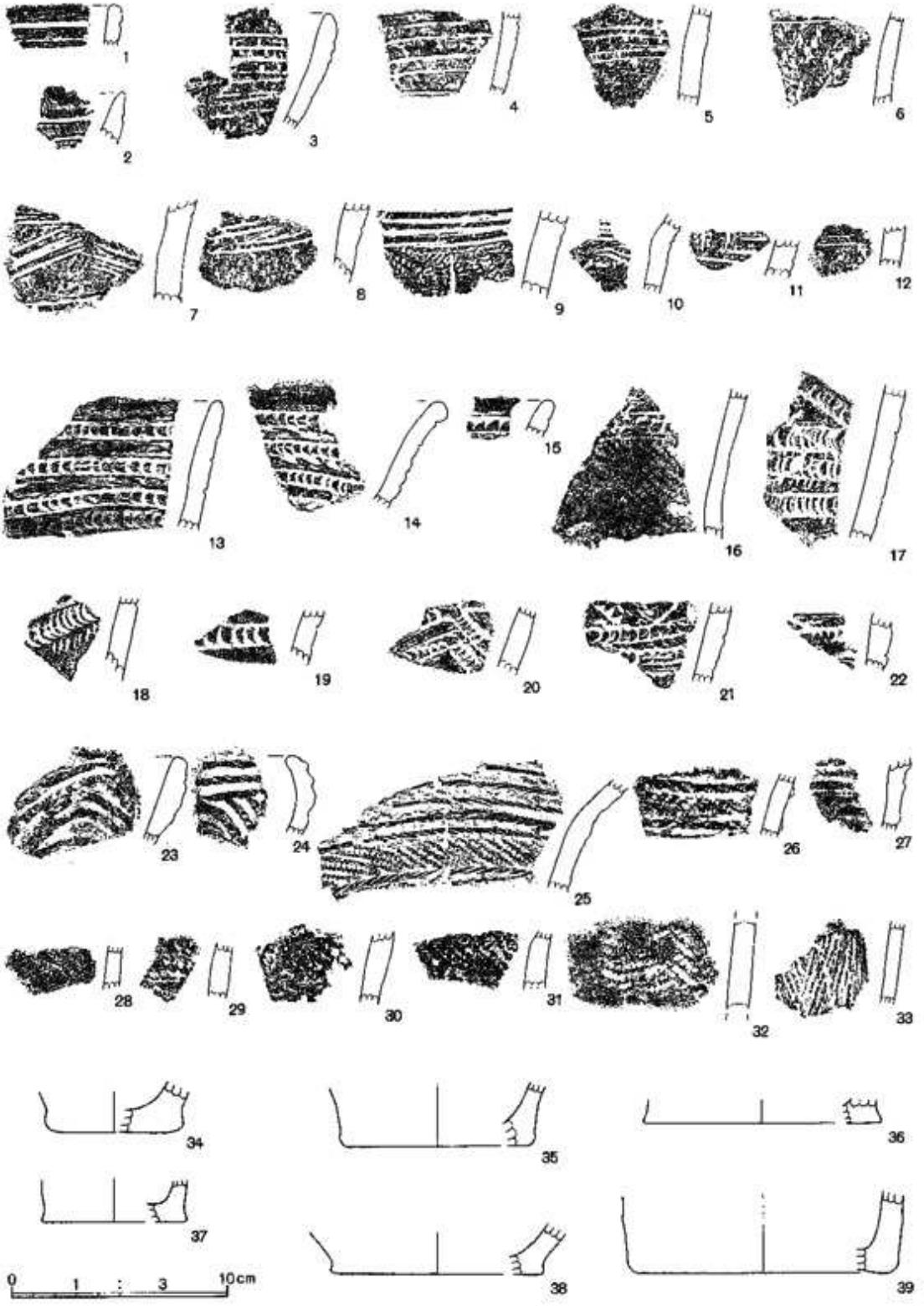
### 第1号集石土坑

M5グリッドで確認されている。土坑部分は径85cm、確認面からの深さ26cmを測り、ほぼ円形に近い形態を呈する。覆土には多量の炭化物が含まれる。焼けた円礫を主体とし、拳大前後のものから礫片まで含めると約530点の礫が土坑内に詰め込まれている。円礫は地山に含まれているものとは異なるため、他の場所で採集してきたものとおもわれる。

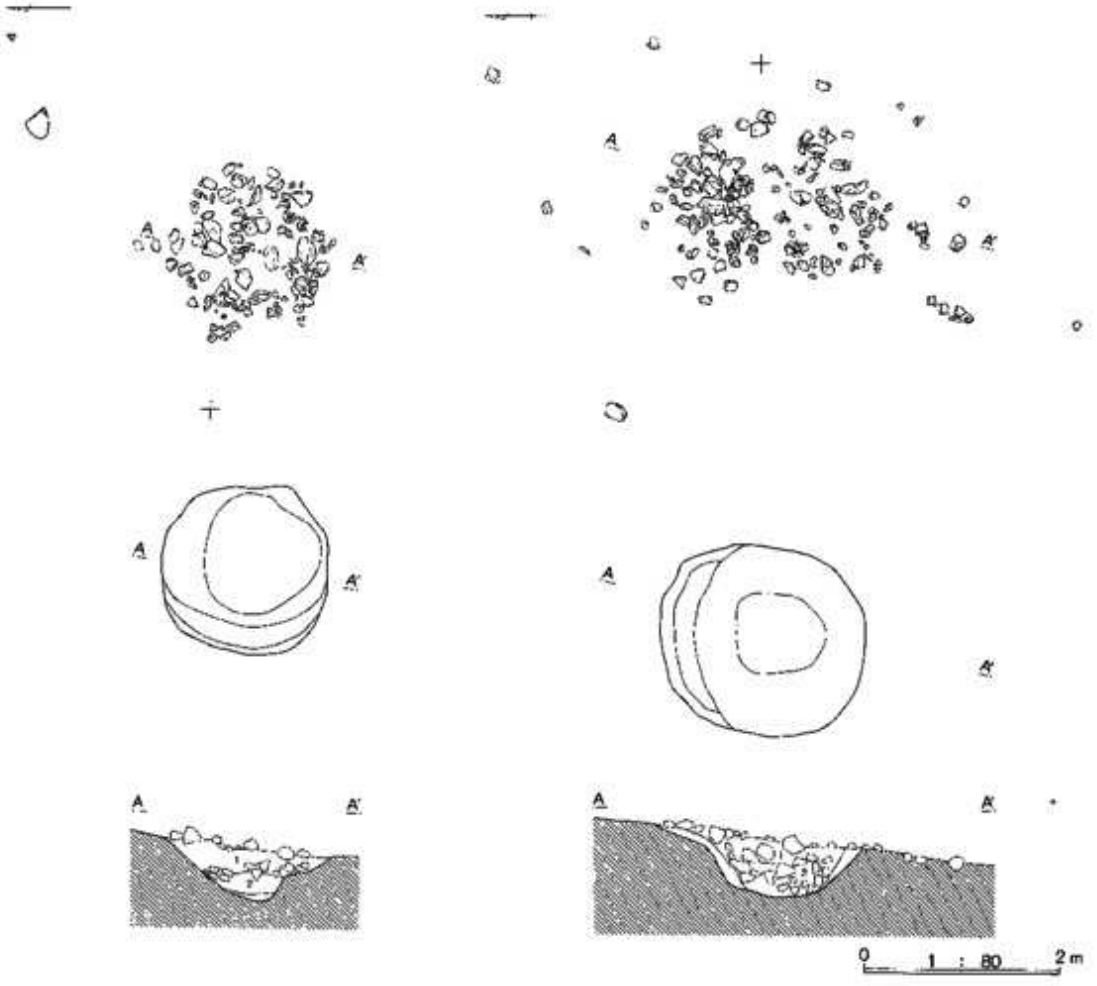
### 第2号集石土坑

M4グリッドで確認されている。第1号集石土坑の南西側に約4m離れた場所に位置する。土坑部分は長径106cm、短径95cm、確認面からの深さ27cmを測り、南北にわずかに長い楕円形を呈する。覆土には炭化物が多量に混入する。円礫も若干含むが第1号集石土坑とは異なり、本集石土坑は地山に含まれる角礫を主体としている。本遺跡内で採集した礫を使用している可能性が高い。礫の密集度も第1号集石土坑よりは散漫である。拳大より小さめのものを中心に約490点の礫で構成されている。

土坑の形態、石材等は新田坊遺跡の第1号集石土坑に類似する。




第139図　第２号住居跡出土遺物




第140図　集石土坑

グリッド出土土器（第142図）

前期から中期にかけての遺物が出土している。時期毎の遺物分布は章頭と第141図に示したとおりである。前期前半から中葉にかけての土器を第１群、前期終末の土器を第２群、中期の土器を第３群とする。

第１群土器（１～22）

第１類（１）

明瞭に識別できるのは１点のみであるが黒浜式土器を本類とする。０段多条の単節ＲＬと０段多条単節ＬＲの２種の原体を交互に横位に回転し、菱形を構成するように羽状施文している。繊維を多量に含む。諸磯ｂ式とは分布が異なり、東尾根から確認されている。

第２類（２～22）

諸磯ｂ式を一括する。第２号住居跡とほぼ同時期で、本遺跡内の縄文時代の主体をなす時期のも

のである。2～14は諸磯b式の中でもより古期に、15～22はより新期に位置付くものと思われる。

2～5は爪形文が施されたもので、2は口縁が外反する深鉢の口縁部片、他は胴部片である。C字状の爪形文が多く、5は地文に縄文を用いている。爪形文の施文の手法は第2号住居跡第2類と同様である。

6～8は浮線文が施されたもので、いずれも浮線上に刻みがみられる。6は地文に単節RLの縄文を横位に回転させている。8は曲線状の浮線も用いられており浮線間に円形の刺突がみられる。

9～14は縄文のみが施された部位の破片である。

15～22は沈線が施されたもので21、22は地文に縄文がみられる。

**第2群土器**（23～33）

第1類（23～31）

諸磯c式を一括する。点数は多くないが南尾根第3号住居跡付近および北尾根西半から検出されている。

第2類（32、33）

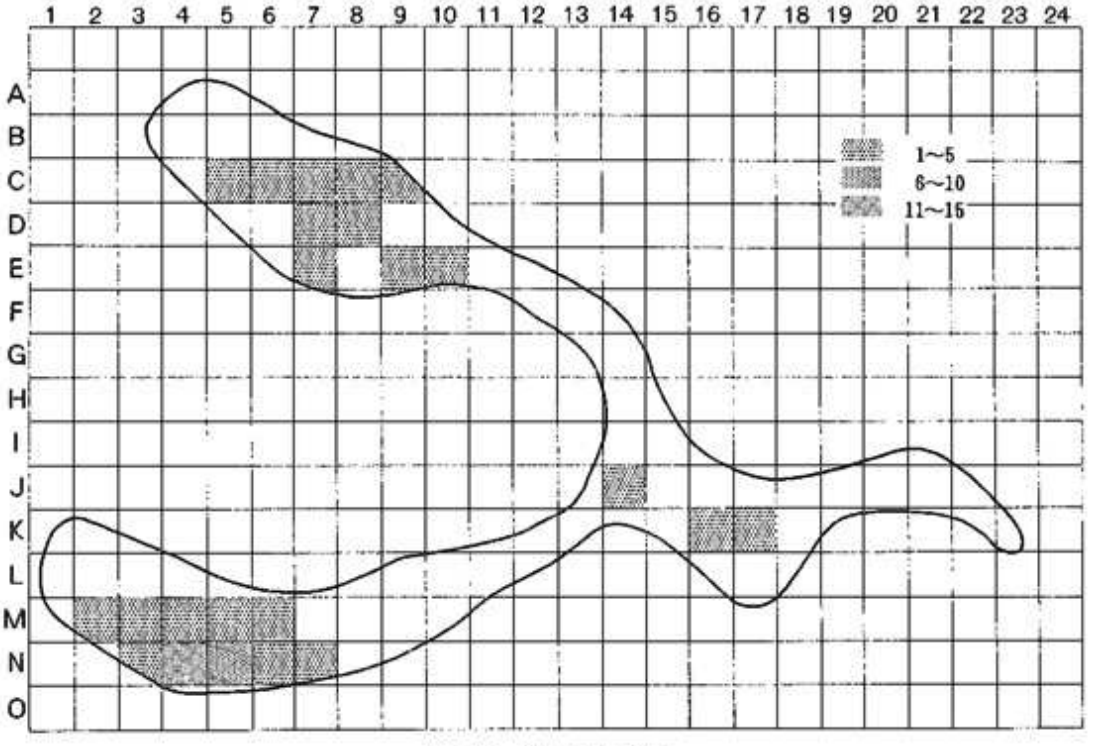
十三菩提式を一括する。32はLRの縄文を地文とし、その上に結節浮線文が施されている。

**第3群土器**（34～40）

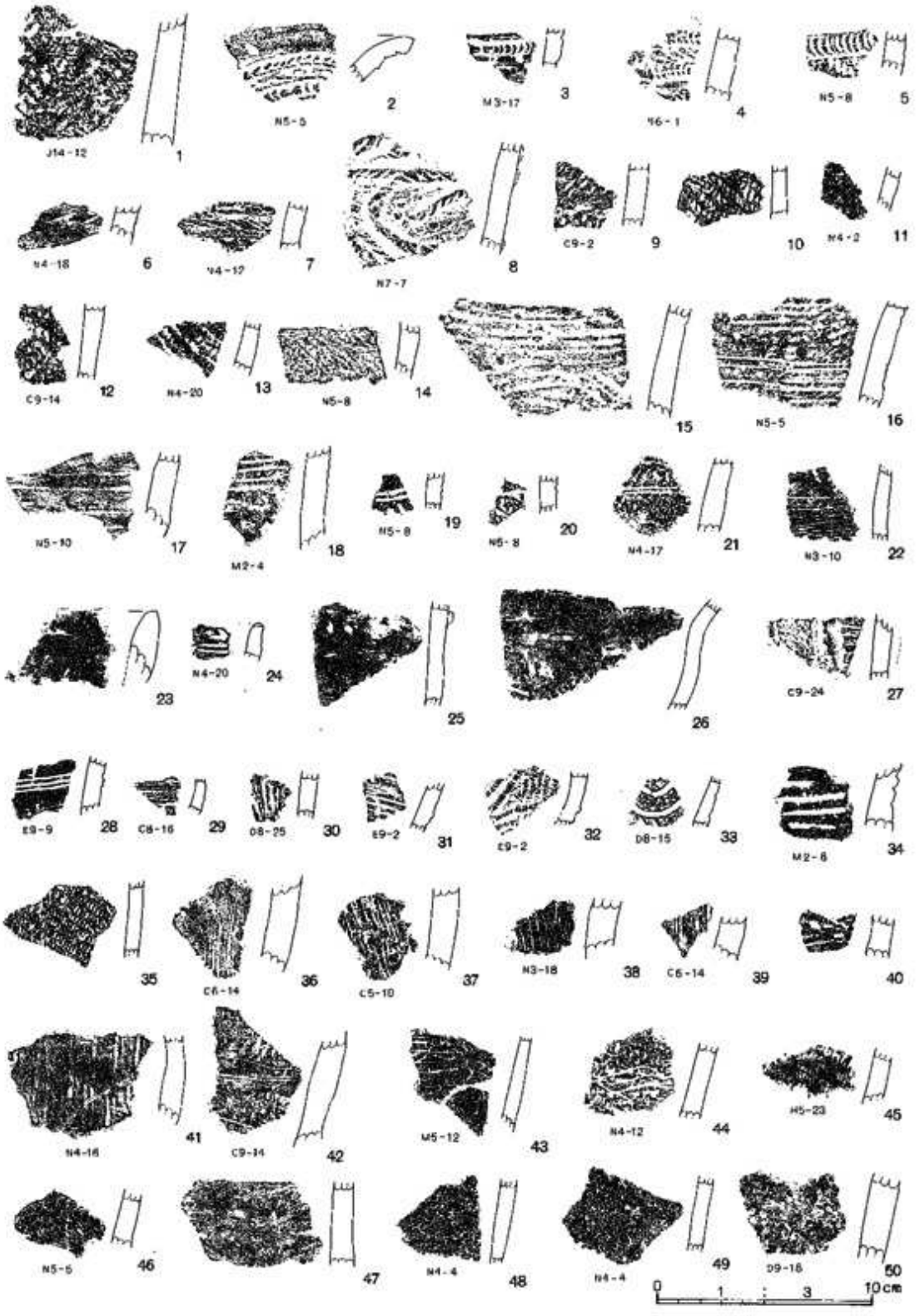
中期の土器を一括する。34、35は勝坂式、それ以外は加曽利E式と思われる。勝坂式は南尾根に、加曽利E式は北尾根に分布の中心をもつようである。

**その他**（41～50）

時期は不詳であるが図の取れるものを示した。




第141図　縄文土器の分布




第142図　グリッド出土土器

グリッド出土石器

1　磨製石斧。わずかに湾曲した棒状の礫を素材とし、全体をよく研磨して仕上げている。刃部の研磨は特に入念で鋭いエッジを形成している。側縁は全体に丸みをおびている。研磨以前の調整段階の剥離痕は上端と左側縁上部にわずかに認められる程度である。凝灰岩製。長さ182、幅29、厚さ18㎜。149ｇ。

2　撥形の打製石斧。表面には自然面を大きく残し、裏面には素材剥片の主要剥離面が残る。両側縁はそれぞれ1回の打撃による分割面である。素材剥片の鋭い縁辺を残置することによって斜刃の刃部が形成されているが、周辺にはそれ以外の剥離は看取されない。側縁に対する剥離も左側縁裏面側にわずかに認められる程度である。安山岩製。長さ105、幅50、厚さ25㎜。121ｇ。

3　撥形の打製石斧。器表面が全体に薄く剥落しているようであり、剥離面単位の観察はできない。両側縁は素材を分割した時に形成されたものであろうと思われる。刃部も素材段階の鋭い縁辺を残置したもののようである。手法的には2の打製石斧とほぼ共通するようである。白色の脆弱な石を用いている。長さ114、幅58、厚さ29㎜。230ｇ。

4　打製石斧。偏平な自然礫を素材とし、表面側には若干の敲打痕がみられる。裏面は自然面をそのまま残している。刃部側を大きく欠損した後、欠損部に再調整を施して刃部を再生している。砂岩製。長さ116、幅51、厚さ24㎜。121ｇ。

5　短冊形の打製石斧。緑泥片岩の節理を利用して分割し、縁辺に調整を施して石斧としている。右側縁の折れ面を除いてほぼ全周に加工がおよぶ。長さ108、幅63、厚さ20㎜。167ｇ

6　打製石斧。裏面に素材剥片の主要剥離面を大きく残し、基部側を欠損している。欠損部の状況から本来分銅形の打製石斧であったことが伺える。安山岩製。長さ76、幅67、厚さ20㎜。107ｇ。

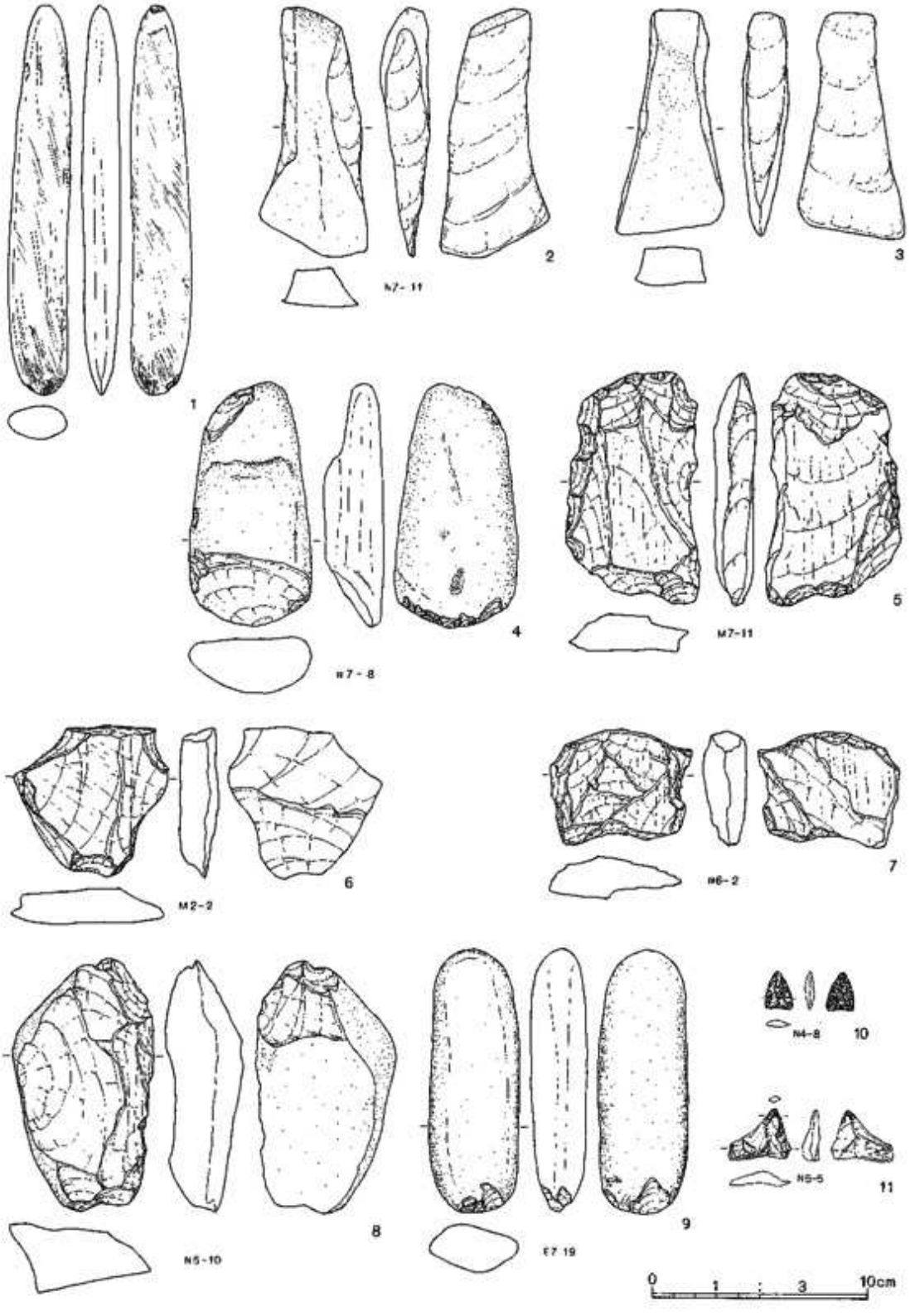
7　打製石斧。節理面を利用して分割した緑泥片岩を用いている。刃部側を大きく欠損する。長さ54、幅66、厚さ21㎜。75ｇ。

8　削器。自然面を残す石核を素材とし、一側縁に刃部が形成される。ホルンフェルス製。長さ117、幅67、厚さ37㎜。293ｇ。

9　敲き石。棒状の礫を素材とし、末端部に垂直方向の加撃による剥離痕が残る。砂岩製。長さ123、幅42、厚さ27㎜。208ｇ。

10　石鏃。二等辺三角形に近い平基無茎鏃で裏面に素材剥片の主要剥離面をわずかに残す。表面の先端から全ての剥離面を切る垂直方向の細長い剥離が認められる。使用に伴う衝撃によって形成された剥離面である可能性がある。黒曜石製。長さ18、幅13、厚さ5㎜。1ｇ。

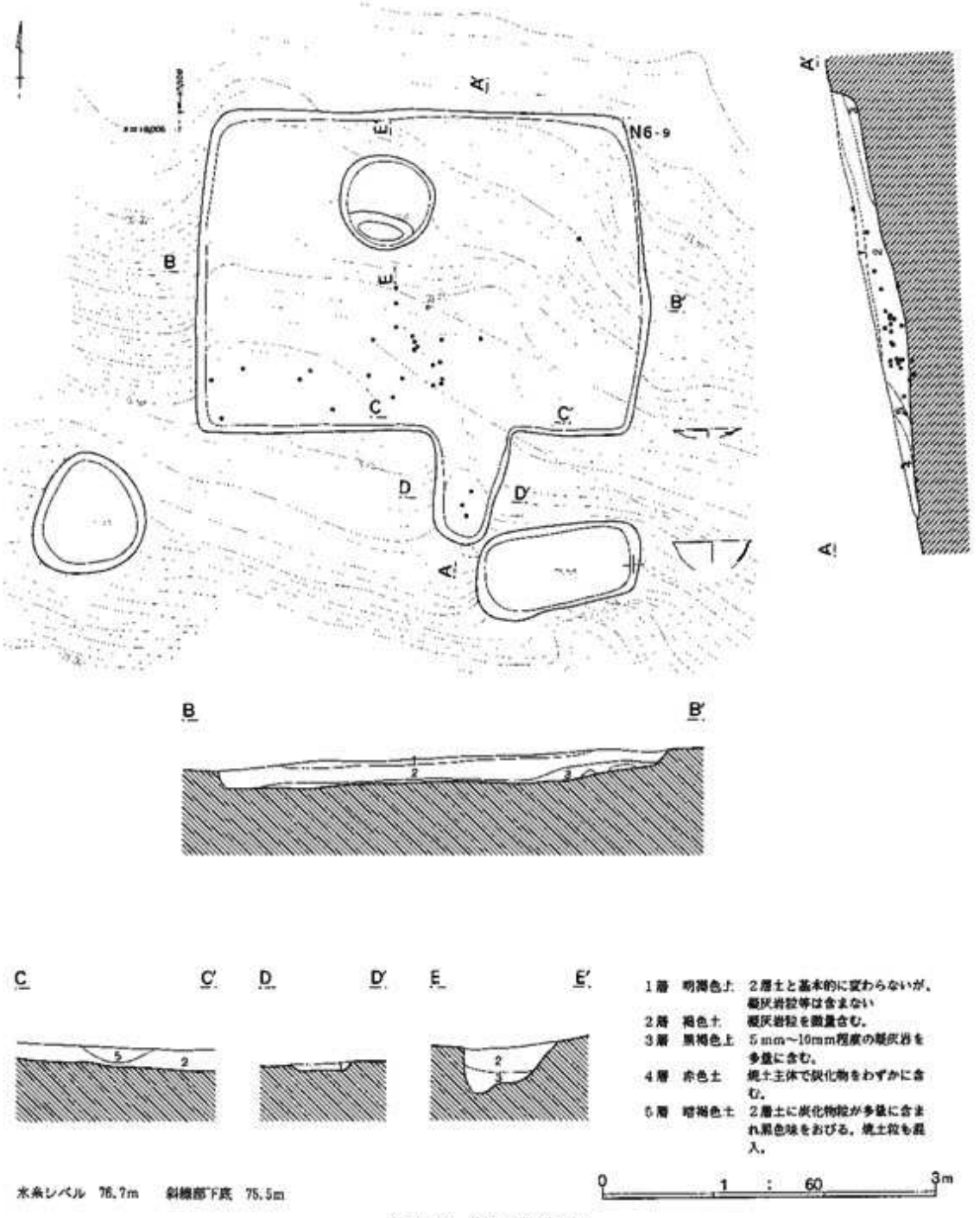
11　折れ面を有する剥片を素材に、先端が先鋭になるように調整が施されている。チャート製。長さ24、幅29、厚さ8㎜。4ｇ。




第143図　グリッド出土石器

## 4　平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構は住居跡３軒と土坑２基が確認されている。いずれも南尾根の南向き斜面部から検出され、第３号住居跡と第４号住居跡は重複している。北尾根、東尾根からは遺構、遺物は確認されていない。



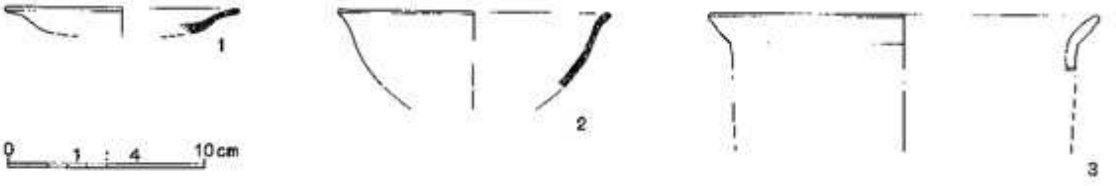

第144図　第１号住居跡

**第1号住居跡**

南尾根の南西斜面部N6グリッドにおいて確認されている。規模は4.1×2.8mを測り、東西に長い長方形の形態を呈する。残存壁高は約26cm、確認面の標高は約76.6m、床面の対水平角は約7度である。

カマドは住居南壁の中央やや東寄りに作られ、主軸方向はN—182度—Eである。住居内で最も標高が低い部分に位置する。貯蔵穴は住居中央からやや北西よりに位置し、床面からの深さ約6cmを測る。柱穴、壁溝は確認されなかった。

遺物は小破片が多いが、須恵器の皿、椀、土師器の甕等が確認されている。9世紀末頃の住居跡と思われる。




第145図　第1号住居跡出土遺物

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | S皿 | (12.0) | 1.3 | — | w | g | A | 20 | |
| 2 | S椀 | (14.1) | 3.8 | — | w | g | B | 30 | |
| 3 | 甕 | (20.0) | 2.8 | — | bw | o | B | 20 | |

第46表　第1号住居跡出土遺物

**第3号・第4号住居跡**

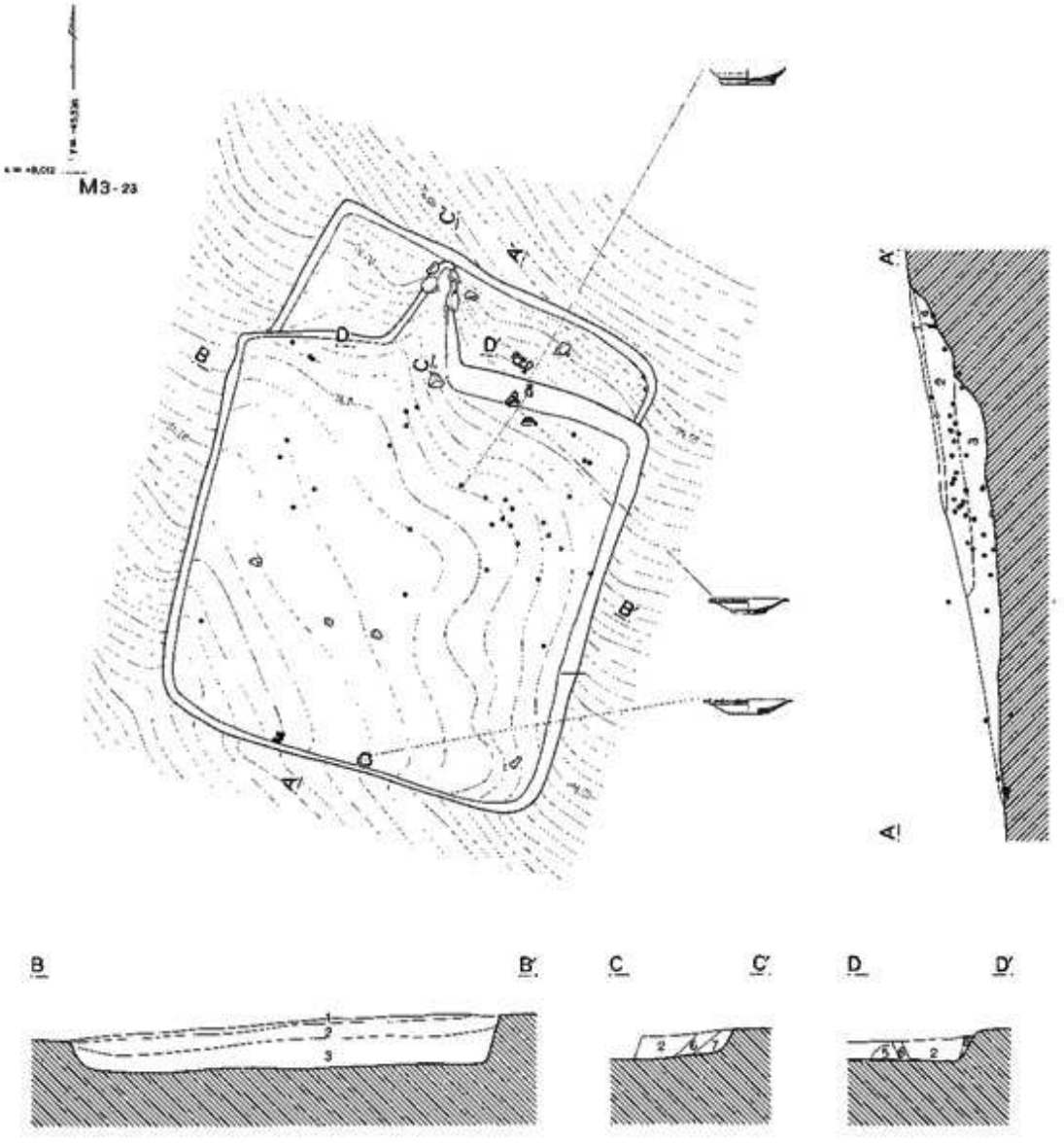
南尾根西端の南側斜面部のN3、M3グリッドに跨がって確認されている。一見2軒の住居が重複している様に見えるが明瞭に判別することはできなかった。層の堆積状況からみると、カマドが現存する住居の北半部に、カマドが現存しない住居跡が重複していたことも考えられる。第146図では掘り込みが深く、遺存状態が良好な方を強調しているため逆転してみえるが、2軒の住居の重複だとするとカマドの現存する方が古期、現存しないほうが新期と考えられる。古期の住居跡を第3号住居跡、新期の住居跡を第4号住居跡と認識しておく。土層断面図にはかからなかったが住居南部に焼土がやや集中する部分が確認されている。第4号住居跡のカマドだった可能性も考えられる。だとすると新規の住居は第1号住居跡同様南側にカマドをもつことになる。古期の住居は規模4.4×3.3mを測り、形態は方形となる。残存壁高は約40cm、確認面の標高は約75m、床面の対水平角は約15度である。

カマドは住居北壁の中央からやや西に作られ、主軸方向はN—21度—Eである。袖を識別することはできなかったが両壁は非常に良く焼けしまり焼土が板状となっている。煙道最奥部の両壁は緑

泥片岩が添えられている。

貯蔵穴、柱穴、壁溝等は確認できなかった。

須恵器の皿、灰釉陶器の椀等が出土している。10世紀頃の住居跡であろうと思われる。

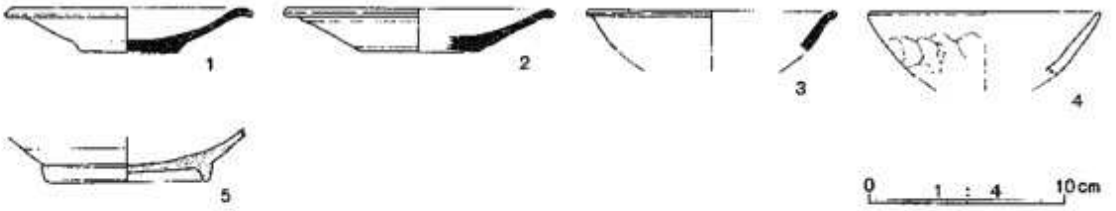



1層　明褐色土　炭化物粒等は含まず、比較的よくしまる。
2層　暗褐色土　炭化物粒、焼土粒を微量に含む。
3層　褐色土　2層土に似るが、2層よりやや明るい色調のローム質の土質である。炭化物粒、焼土粒を含み、わずかながら1～数cm大の炭化物塊も含まれる。
4層　褐色土　2層上基調で凝灰岩粒を含む。
5層　黒褐色土　硬質土に凝灰岩粒を多量に含む（地山）
6層　焼土　よく焼きしまり、塊状となる。
7層　褐色土　2層土に似るが、炭化物粒は含まれない。焼土の微粒子は多量に含まれる。

水糸レベル　75.1m　斜線部下底　73.9m

0　1 : 60　3m

第146図　第3号・第4号住居跡




第147図　第３号住居跡出土遺物

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器　高 | 底　径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | S皿 | 12.8 | 2.3 | 5.0 | w | g | A | 90 | 底部回転糸切り。 |
| 2 | S皿 | 13.9 | 2.2 | 6.0 | wr | gb | C | 50 | 底部回転糸切り。 |
| 3 | S椀 | (12.9) | 2.1 | — | w | g | B | 20 | |
| 4 | 椀 | (12.0) | 3.3 | — | br | do | B | 30 | |
| 5 | K椀 | — | 2.4 | 7.6 | w | lg | A | 80 | 底部回転糸切りの後回転ヘラ削り。 |

第47表　第３号住居跡出土遺物

**第１号土坑**

Ｎ６グリッドにおいて第１号住居跡カマドの東側に隣接して確認されている。

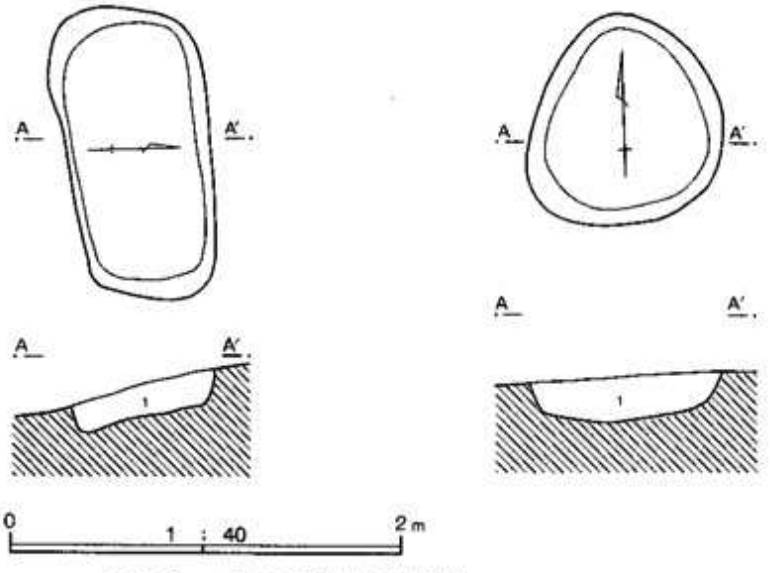
形態はほぼ長方形で、長径1.5m、短径0.8m、確認面からの深さ0.2mを測る。

図示できる遺物はないが覆土から土師器片等が若干出土している。時期的には第１号住居跡とほぼ同時期の土坑であろうと思われる。

**第２号土坑**

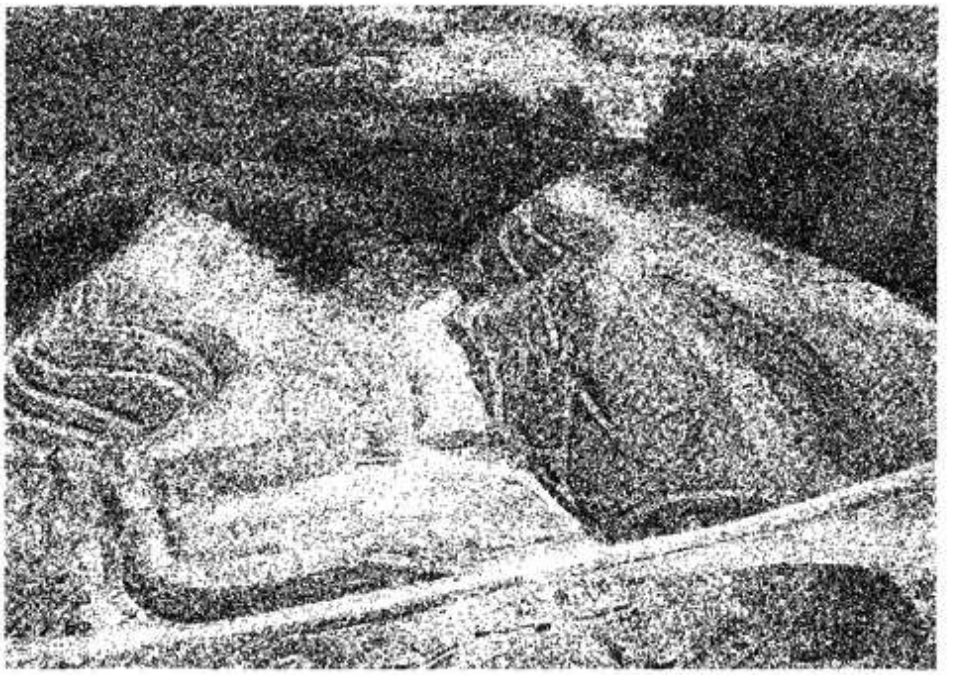
Ｎ６グリッドにおいて確認されている。第１号住居跡の南西側に位置する。

形態は隅丸三角形状を呈し、長径1.1m、確認面からの深さ0.2mを測る。




ＳＫ１・ＳＫ２（水糸レベル 76.1m）
1層　黒色土　褐炭粒をわずかに含む。

第148図　平安時代の土坑



尺尻北遺跡（左）と尺尻遺跡（右）

# 尺尻北遺跡

# Ⅸ　尺尻北遺跡の調査

## 1　遺跡の概観

本遺跡は滑川流域でも最大級の谷である長沼谷の東側の丘陵上に位置する。北側には長沼谷の支谷である北新沼谷、南側には同じく長沼谷の支谷である尺尻谷が開析し、それらによって隣接する丘陵と区画されている。尺尻谷を挟んで南方には尺尻遺跡が所在し、眼下には長沼谷に立地する大野田遺跡を見降ろす。

遺跡をのせる丘陵の頂部は標高約96mを測り、最高点の東側で尺尻遺跡の尾根線に連なっている。尾根線をさらに東にたどると、式内社伊古乃速御五比売神社がかつて鎮座していたとされる二ノ宮山に行き着く。

検出された遺構は縄文時代前期の住居跡1軒、同期の土坑2基、平安時代の住居跡1軒のみである。

縄文時代の住居跡は県内では検出例が極めて少ない諸磯c式期のものである。遺構外の遺物は概して少ないが、主体となるのはやはり諸磯c式期の土器である。他に諸磯b式期の土器や、中期の土器も若干検出されている。諸磯b式およびc式の土器は遺跡西半の南向き斜面部から主として検出されるのに対し、中期の土器は遺跡東半の北向き斜面部から検出されている。南向き斜面部からは前期の土器の他に黒曜石製のチップが多数確認されているが、製品は石鏃が1点検出されているだけで、大形の剥片等もほとんどみられない。

平安時代の住居跡は1軒確認されただけであるが、ほぼ同時期の住居跡は同じ長沼谷沿いに立地する新田坊遺跡、尺尻遺跡からも確認されている。住居跡の軒数は、本遺跡、尺尻遺跡、新田坊遺跡の順に谷頭部に近付くほど多くなる傾向を見せる。

## 2　縄文時代の遺構と遺物

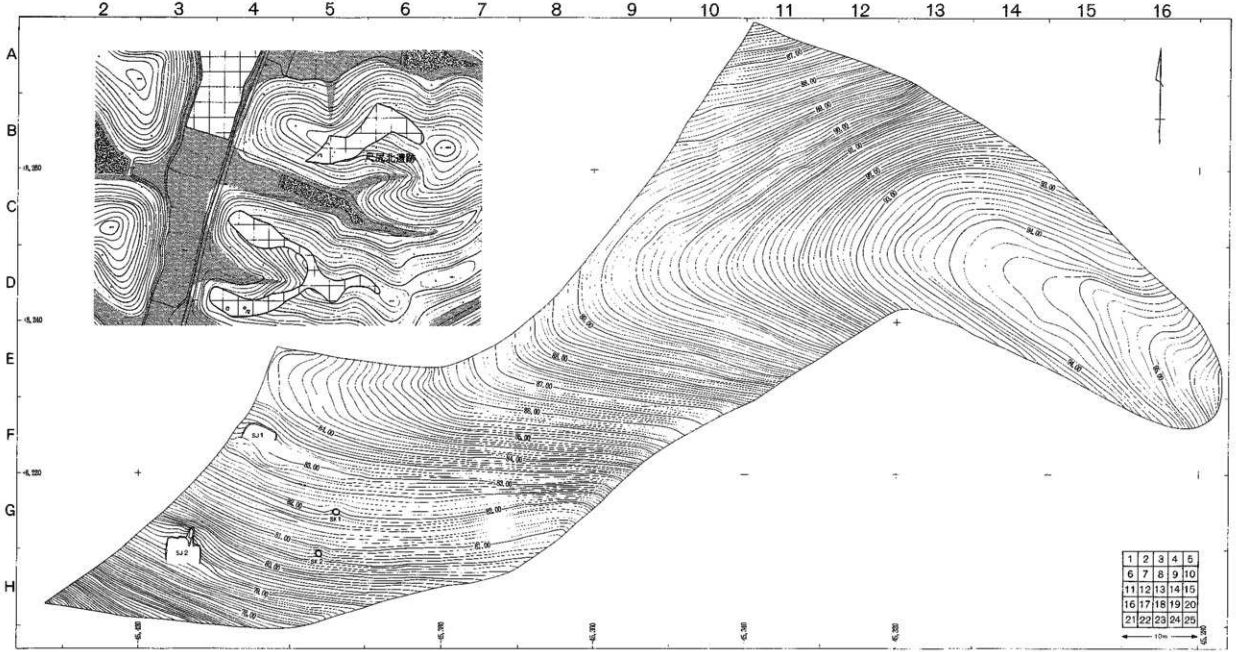
### 第1号住居跡

遺跡西端の尾根頂部付近のF4グリッドにおいて確認されている。標高約83m付近の南向き斜面部に構築された住居で、床面の対水平角は約6度である。形態は南北にやや長い隅丸方形になるものと思われるが、南半部は失われているため明らかではない。確認できる一辺の長さは約4.2mである。

確認面からの深さは最深部で約15cmを測る。床面は基盤となる凝灰岩の上面に形成されていたようである。

柱穴等は確認することができなかったが、住居中央南側に炉跡と思われる焼土の集中が認められたが、掘り込みは検出されていない。

出土遺物は脆弱なものが多く判別不能のものも少なくないが、文様が残されているものは諸磯c式期のものがほとんどである。住居内からは打製石斧を中心とした石器類も多く出土しているが、それらも諸磯c式期のものであろう。



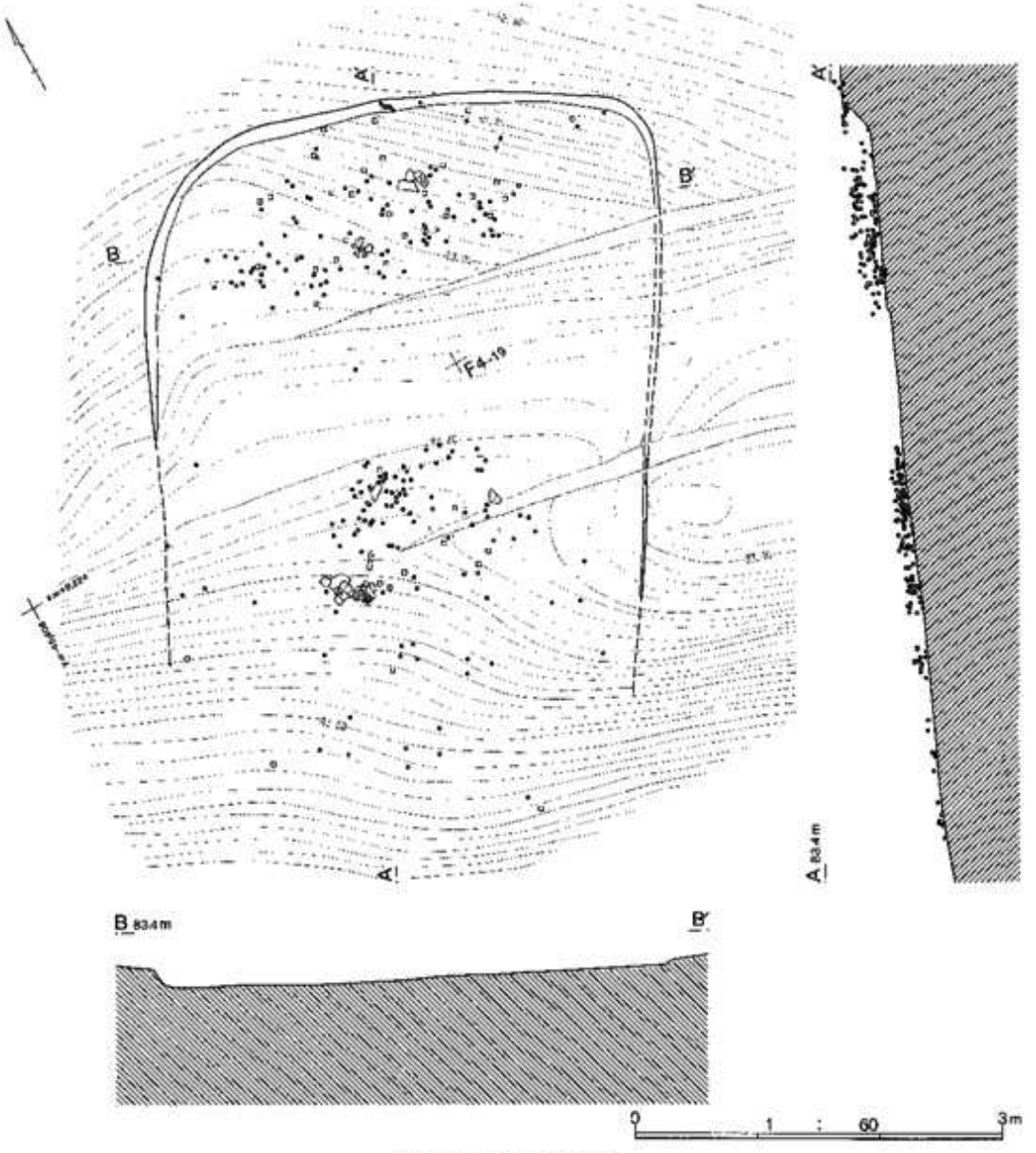

第149図　尺尻北遺跡全測図

**第１号住居跡出土土器**（第152図～第154図）

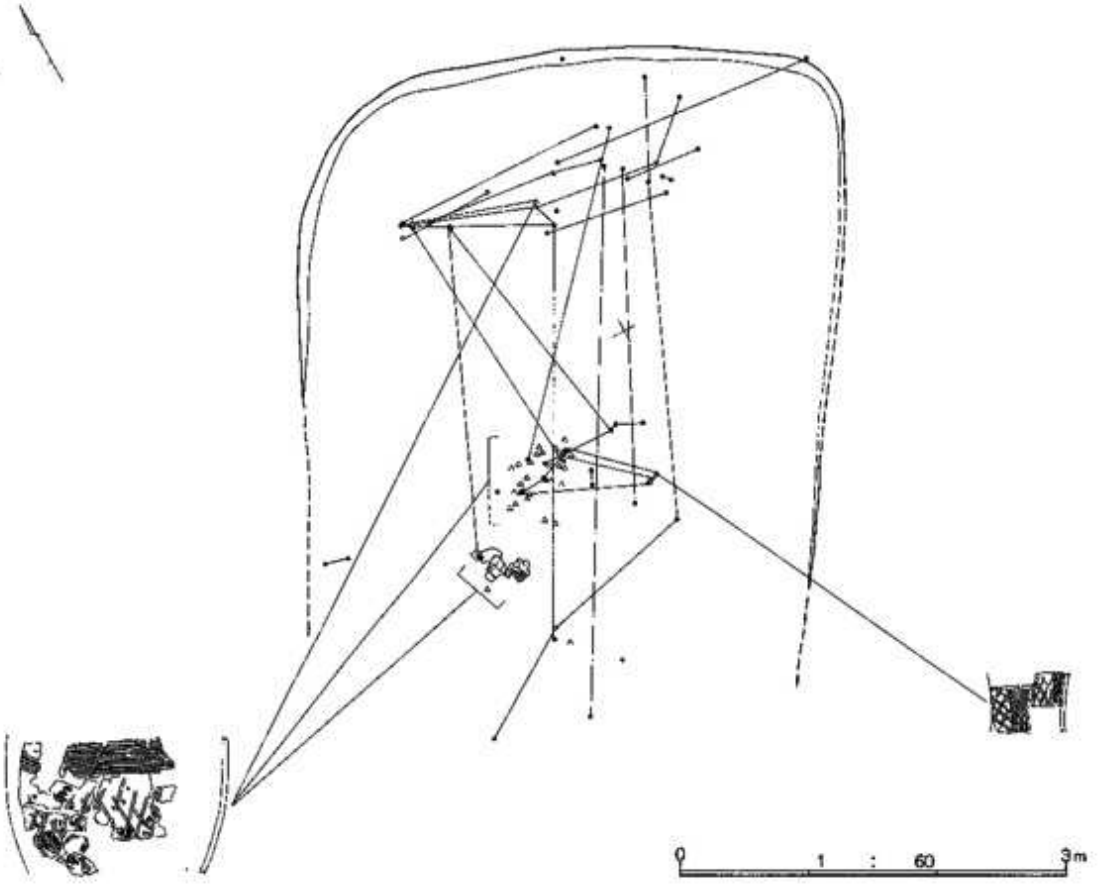
諸磯ｃ式を主体としているが、諸磯ｂ式も若干混入しているので、後者を第１類、前者を第２類と分類する。

第１類（１～８）

１、３～６は胴部片、２、７、８は口縁部片である。１～６は浮線文がみられる土器で、２本１対の浮線上に矢羽上に刻みが施されている。５、６の浮線は器体とは異なる胎土が用いられており、浮線部分だけは白色を呈する。１、３には地文として単節ＲＬの縄文が施文されている。７は条線のみが施文された土器で、口縁部が内側に強く屈曲する土器である。８は浅鉢で、横位の浮線間に同心円状の浮線が貼付されている。



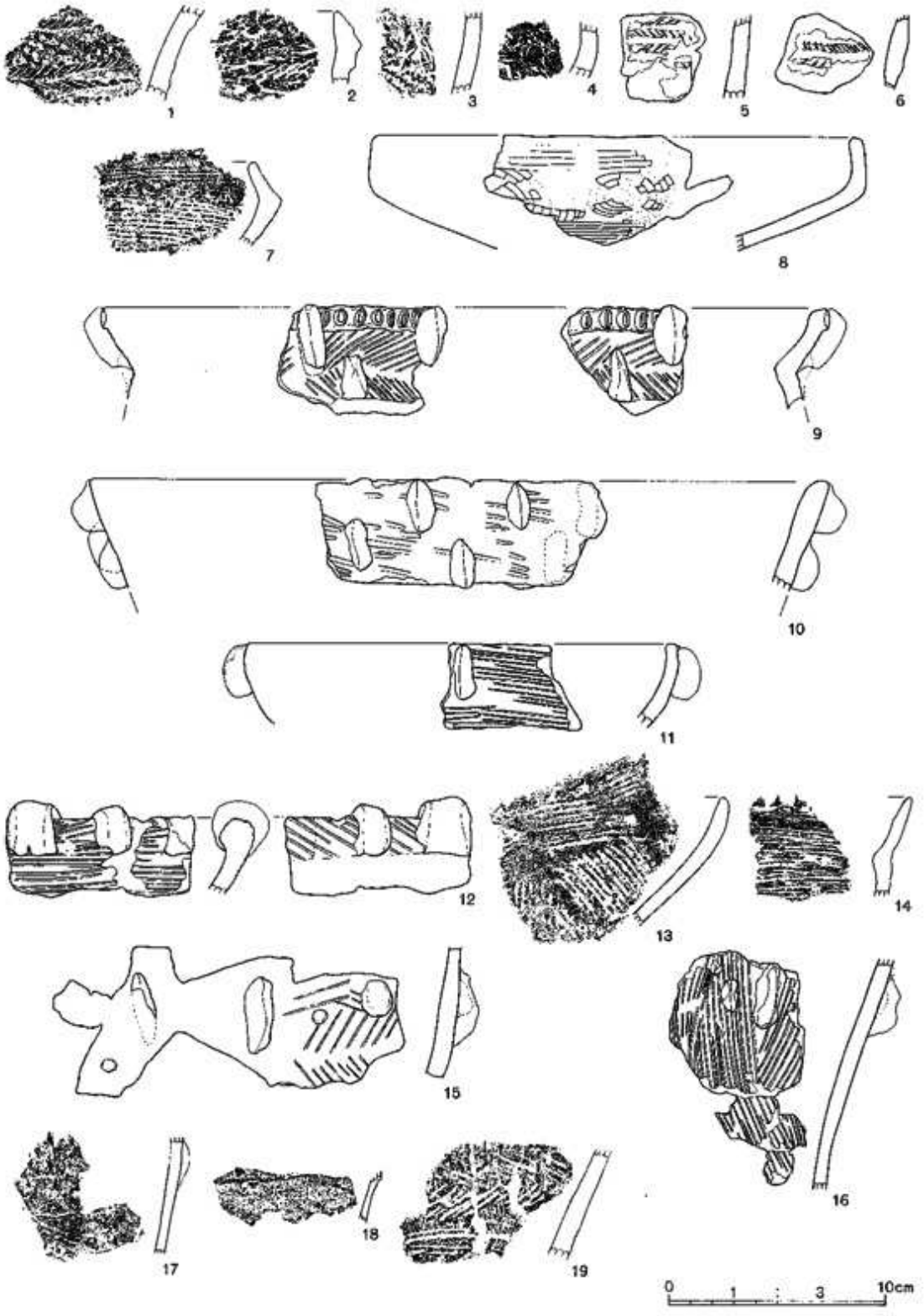

第150図　第１号住居跡



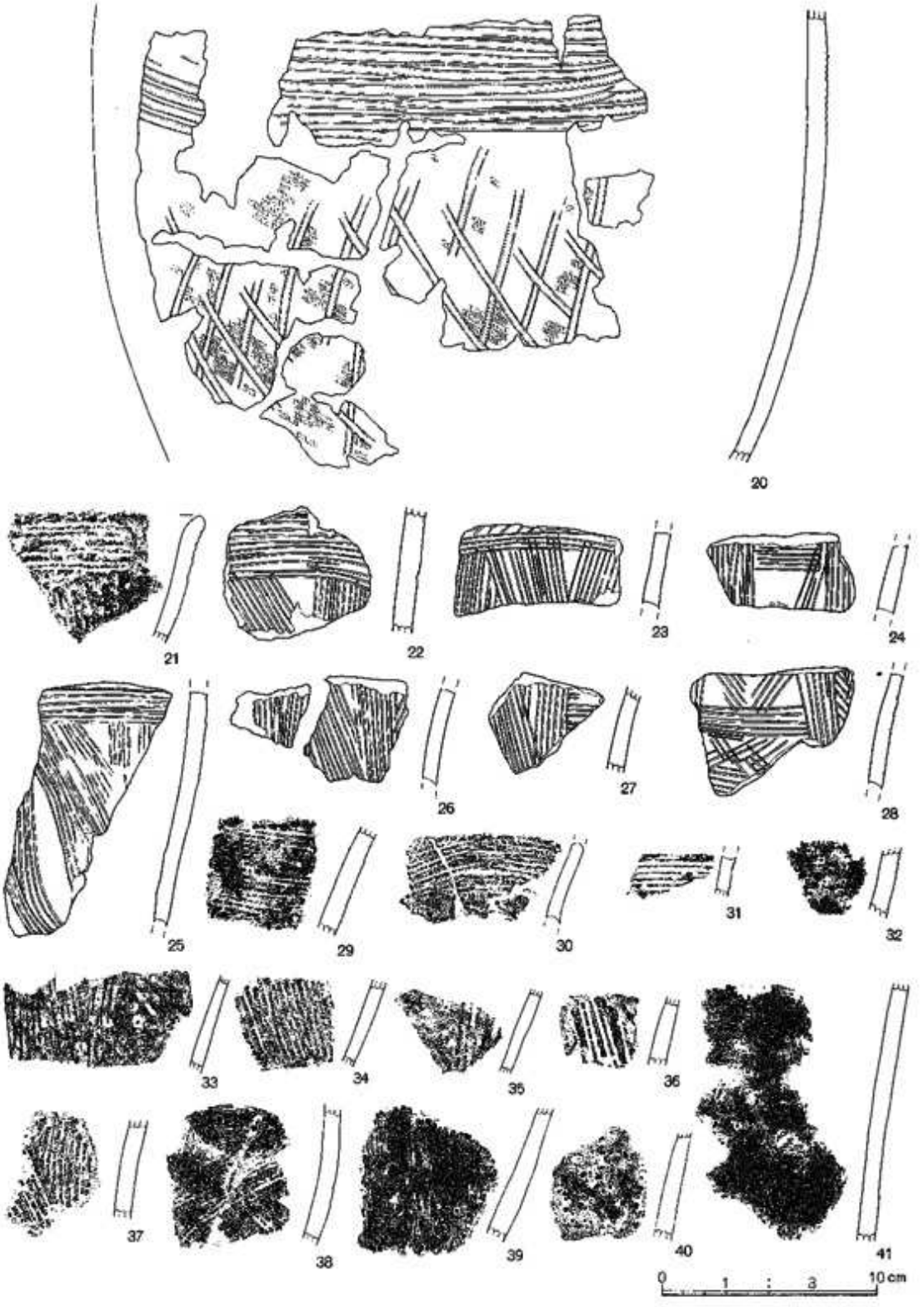

第151図　第１号住居跡接合図

第２類（９～45）

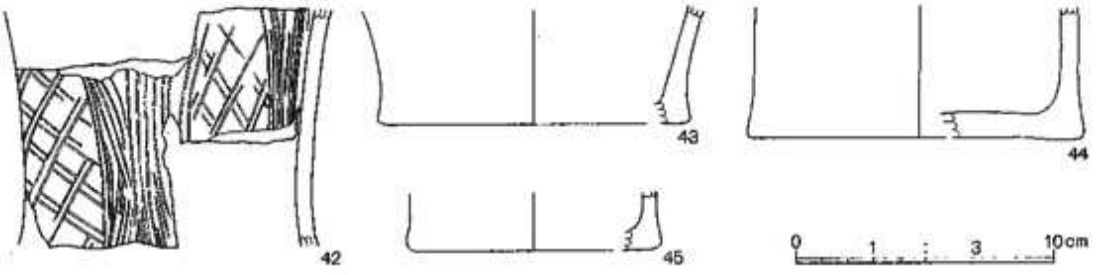
９～19は耳たぶ状、棒状、円形の貼付文がみられる土器である。底部から口縁部に向けて徐々に開く器形の深鉢、口縁部がやや内湾する器形の深鉢、口縁部が外側に屈曲する器形の深鉢がみられる。棒状の貼付文は横位に１段に貼付されるものと多段に貼付されるものがある（９、10)。耳たぶ状の貼付文は口唇をはさんで外面から内面にまたがって貼付されている（12)。貼付文を有する土器はいずれも地文として半截竹管あるいは多截竹管による条線文が施されている。17、18は同一個体と思われるが他の土器とは異なり、器壁が薄く、胎土もやや砂質である。20～42は主として条線が施文される土器である。20は口縁部に横走する沈線を巡らし、それ以下に斜行する沈線で格子目のモチーフを描出した深鉢である。横走する沈線と格子目の沈線は同一の半截竹管によるものと思われる。地文として単節ＲＬの縄文が施されている。21～41は横走する条線、垂下する条線、斜行する条線によってモチーフが構成されている土器である。21が口縁部片である他はいずれも胴部片である。42は垂下する条線による区画の間に斜行する条線で格子目が構成された深鉢の底部付近の破片の接合例である。20とは格子目を有する点で共通するが、本例には地文の縄文がみられない。




第152図　第1号住居跡出土土器(1)




第153図　第1号住居跡出土土器(2)




第154図　第１号住居跡出土土器(3)

底部

いずれも深鉢の底部片である。底部からやや外反ぎみに立ち上がる器形となるもので、第２類の土器の底部であろうと思われる。

**第１号住居跡出土石器**（第155図・第156図）

1　磨製石斧。全面が丁寧に研摩された磨製石斧である。側縁には研磨以前の剥離面の痕跡が部分的に残されている。刃部には若干の刃こぼれが観察される。基部側を大きく欠損している。凝灰岩製。長さ115、幅47、厚さ22㎜。166ｇ。

2　打製石斧。緑泥片岩製であるため、ほとんどの剥離面が節理の影響を受けている。長さ79、幅49、厚さ16㎜。56ｇ。

3　打製石斧。左側縁は節理面による平坦部が大きく残る。刃部は欠損している。緑泥片岩製。長さ168、幅57、厚さ21㎜。250ｇ。

4　打製石斧。両側縁から刃部にかけての部位に加工がみられる短冊形の打製石斧である。ホルンフェルス製。長さ90、幅42、厚さ17㎜。74ｇ。

5　打製石斧。両側縁から刃部にかけての部位に加工がみられる短冊形の打製石斧である。全体的に風化している。ホルンフェルス製。長さ92、幅44、厚さ14㎜。67ｇ。

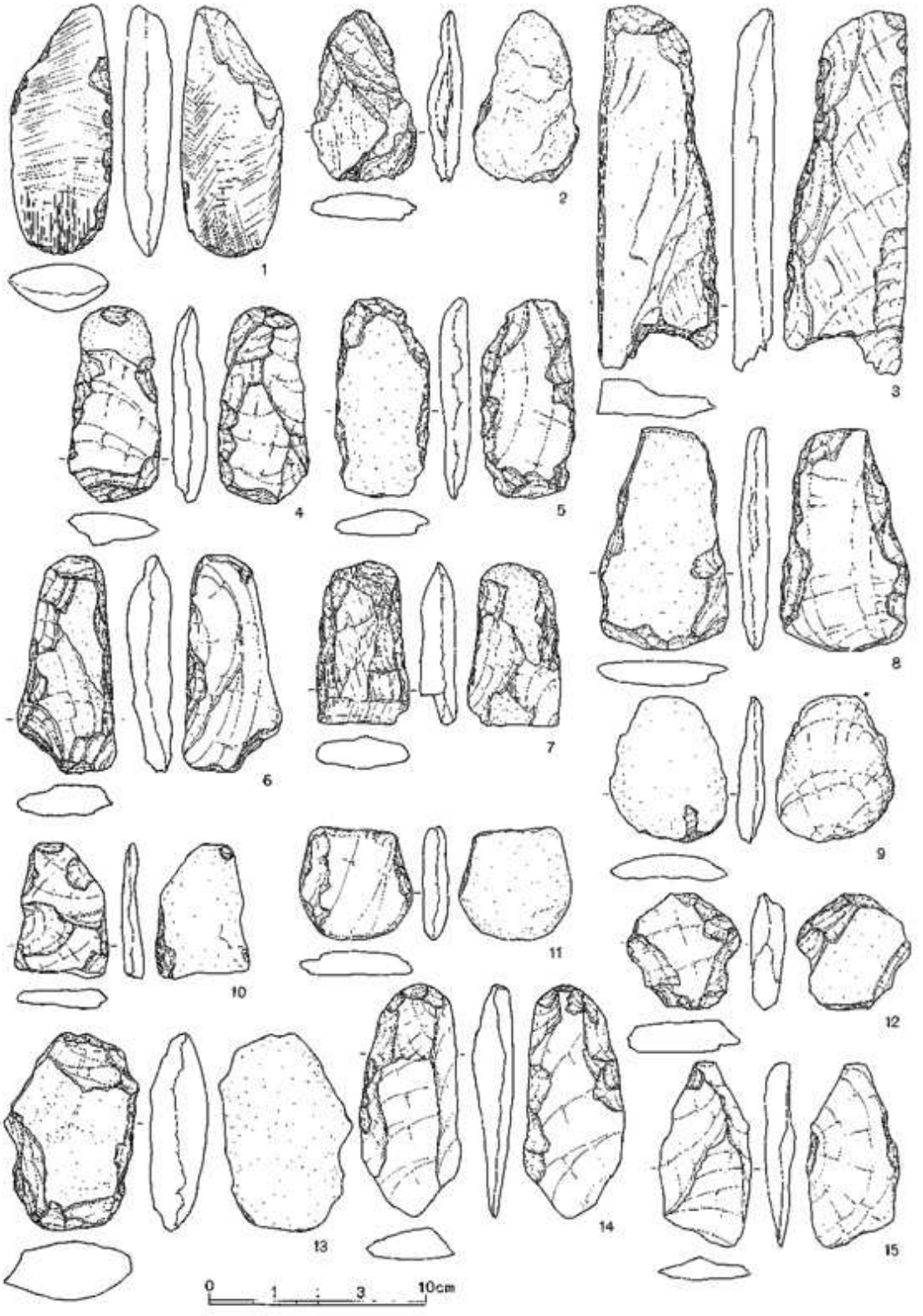
6　打製石斧。表裏のほぼ全週に加工がおよぶ撥形の打製石斧である。刃部が約半分欠損している。ホルンフェルス製。長さ100、幅46、厚さ21㎜。93ｇ。

7　打製石斧。刃部側を大きく欠損しているが短冊形の打製石斧になるものと思われる。片面に大きく自然面を残す。粘板岩製。長さ75、幅43、厚さ17㎜。66ｇ。

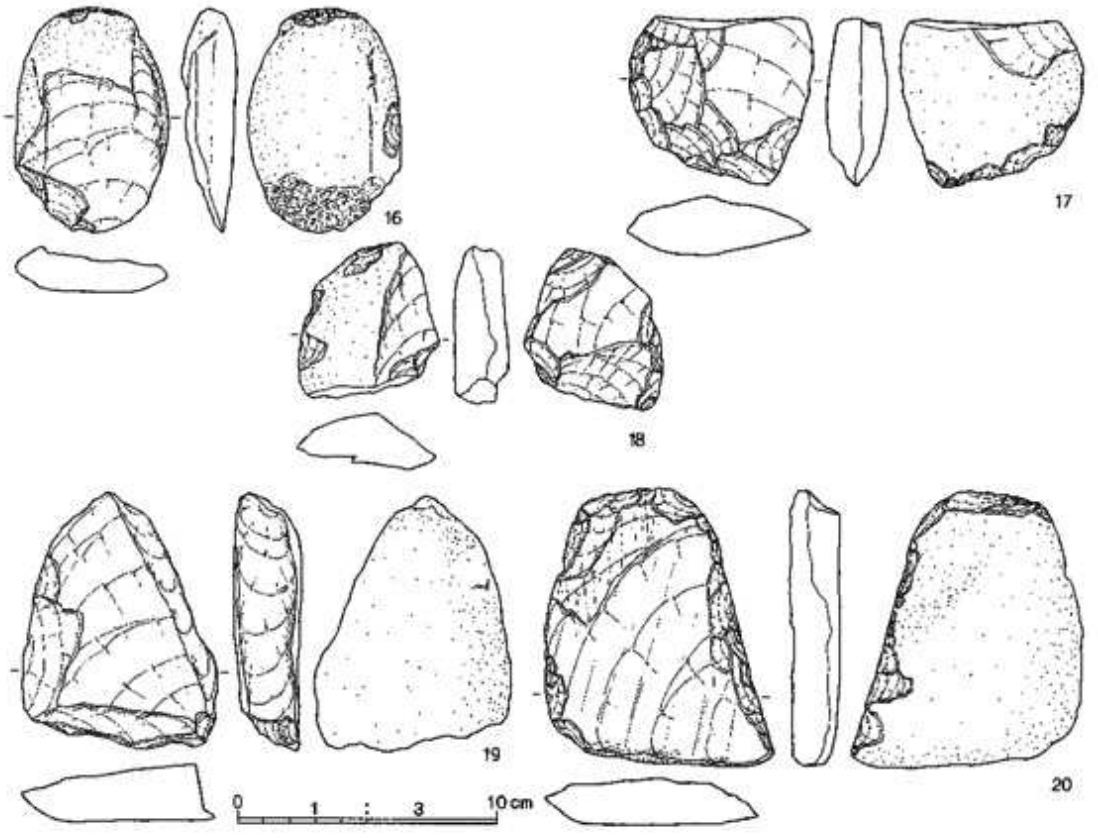
8　打製石斧。完形の撥形の打製石斧である。両側縁と刃部に剥離面がみられるが、全体的に風化している。ホルンフェルス製。長さ102、幅60、厚さ14㎜。95ｇ。

9　打製石斧。刃部方向からの衝撃により剥落した打製石斧の刃部片である。全体に風化している。ホルンフェルス製。長さ68、幅54、厚さ13㎜。44ｇ。

10　打製石斧。比較的薄手の打製石斧で折れにより刃部側を大きく欠損している。全体的に風化が著しい。ホルンフェルス製。長さ62、幅43、厚さ11㎜。27ｇ。




第155図　第1号住居跡出土石器(1)




第156図　第1号住居跡出土石器(2)

11　打製石斧。風化が著しく剥離面は判読しづらいが、打製石斧の刃部であろうと思われる。折れにより基部側は大きく欠損している。ホルンフェルス製。長さ52、幅52、厚さ12㎜。42g。

12　打製石斧。折れにより約半分を欠失しているが、分銅形の打製石斧になるものと思われる。片面に自然面を大きく残す。砂岩製。長さ53、幅53、厚さ16㎜。43g。

13　打製石斧。片面に自然面を大きく残し、自然面を打面として全周に剥離が施される。ホルンフェルス製。長さ92、幅62、厚さ27㎜。176g。

14　打製石斧。風化が著しく、剥離面は判読しづらいが、短冊形の打製石斧になるものと思われる。ホルンフェルス製。長さ108、幅47、厚さ19㎜。91g。

15　打製石斧。加工は両側縁に対して若干施される程度で、片面には自然面を大きく残す。ホルンフェルス製。長さ85、幅43、厚さ15㎜。45g。

16　磨製石斧。偏平な自然礫を素材とし、両面に自然面を大きく残す。下半部は欠失している。欠損部付近には敲打の痕跡が残る。磨製石斧とするには研磨痕が極めて不明瞭であるが、縄文時代前期にみられる磨製石斧と石材、敲打痕が類似しているため、磨製石斧の欠損品として認識しておく。凝灰岩製。長さ87、幅60、厚さ21㎜。134g。

17　打製石斧。基部側を大きく欠損しているため断定できないが、打製石斧であろうと思われる。片面に自然面を大きく残す。ホルンフェルス製。長さ64、幅71、厚さ24㎜。120g。

18　打製石斧。刃部側が大きく欠損し、基部側だけが残される。ホルンフェルス製。長さ61、幅54、厚さ22㎜。82ｇ。

19　礫器。片面に自然面を大きく残す分割礫を素材に片刃の刃部が作出されている。刃部の加工は自然面を打面として施されている。ホルンフェルス製。長さ99、幅76、厚さ28㎜。257ｇ。

20　削器。節理によって分割された偏平な緑泥片岩を素材とし、両側縁に加工が施される。自然面を大きく残す。長さ107、幅89、厚さ20㎜。247ｇ。

### 第１号土坑

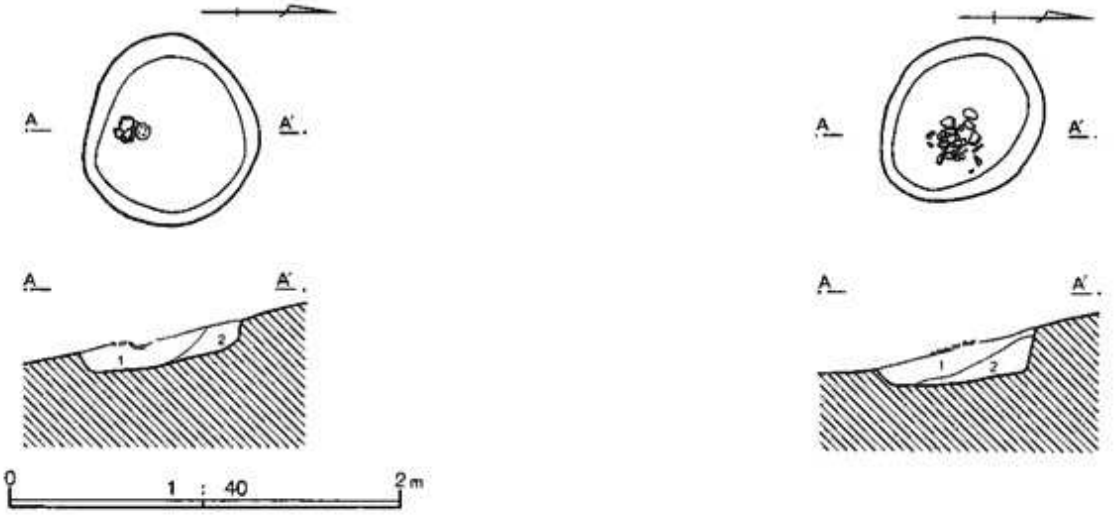
遺跡西部の南向き斜面部、Ｇ５グリッドにおいて確認されている。形態はほぼ円形となり、直径は約90㎝、確認面からの深さは約15㎝を測る。

出土遺物は無文のものがほとんどで、文様を有するものは第158図１のみである。１は深鉢の口縁部近くの破片で、横走する条線が看取される。２～４は胎土、色調等から同一個体と思われる。出土遺物から前期後半期に位置付けられる土坑であろうと思われる。

### 第２号土坑

遺跡西部の南向き斜面部、Ｈ５グリッドにおいて確認されている。形態はほぼ楕円形となり、長径約90㎝、短径約80㎝、確認面からの深さ約20㎝を測る。

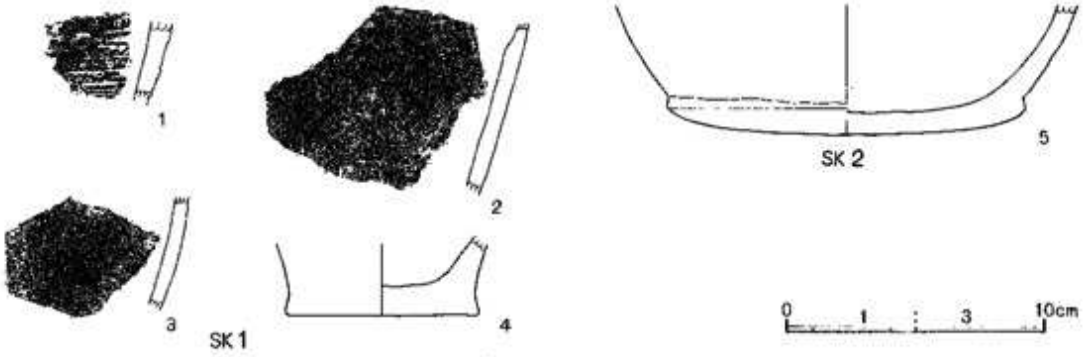
出土遺物は割れた状態の浅鉢が１個体検出されただけである。浅鉢の形態から前期前半期の土坑である可能性が考えられる。




ＳＫ１（水糸レベル 82.2m）・ＳＫ２（水糸レベル 80.9m）

１層　茶褐色土　微量に模灰岩粒を含む。
２層　褐色土　１層土にさらに粒径の大きい模灰岩粒を多量に含む。

第157図　縄文時代の土坑




第158図　土坑出土土器

**グリッド出土土器**

前期から中期にかけての土器が検出されている。前者を第１群、後者を第２群に分類する。

**第１群土器（第160図）**

前期前半のものを第１類、前期終末のものを第２類、第３類に分類する。

第１類(1)

口縁部が強く外反する器形の深鉢の破片で横走する条線が認められる。かなり不明瞭ではあるが単節ＲＬの縄文が地文として施文されていたようである。

第２類（２～24）

本遺跡の主体となる時期で、第１号住居跡も該期の遺構であろうと考えられる。２～６は条線を地文とした上に貼付文が施された口縁部付近の破片である。４は横走する条線の区画の中に矢羽状の条線が充塡され、後者の条線の上に棒状貼付文と２段の円形貼付文が交互に貼り付けられる。５は口唇部から外面にかけて耳たぶ状の貼付文が条線上に貼り付けられている。７～22は横走する条線、斜行する条線、垂下する条線がみられる土器である。21、22は斜行する沈線が格子目を構成することや、胎土、焼成等から第１号住居跡20の深鉢と同一個体であろうと思われる。23、24は無文の胴部片である。本類は諸磯ｃ式に比定される。

第３類(25)

１点であるが前期終末で諸磯ｃ式以外のものと思われるものを示した。口唇部には細かな刻みがみられ、指頭圧痕状の押圧文が多段に巡る。

底部（26、27）

断定できるものではないが、本群のものと思われる底部を示した。

**第２群土器（28～30）**

28は単節ＬＲの縄文と半截竹管による沈線が看取される。器壁もやや薄く、胎土等も第１群のものとは若干異なる。中期初頭に位置づくものと思われる。29、30は勝坂式の範疇で捉らえられるものであろう。

グリッド出土石器

器種別の内訳では打製石斧の比率が非常に高いがそのほとんどは欠損品である。本遺跡の打製石斧に用いられる石材はホルンフェルスを選択する傾向が極めて強い。それらは概して風化が著しく、剥離面の切りあいは不明瞭なものが多い。遺跡西半の南向き斜面部からは大量の黒曜石の砕片が検出されているが、黒曜石製の製品は石鏃が1点確認されただけである。

1　打製石斧。本遺跡群内で最も大形の打製石斧である。分割礫もしくは大形の剥片を素材としており、裏面には自然面を大きく残す。側縁は比較的急峻な剥離が施されており、中央やや基部よりに若干のくびれを有する。ホルンフェルス製。長さ177、幅103、厚さ43mm。959g。

2　打製石斧。両側縁から刃部にかけて加工が施された撥形の打製石斧であるが、風化のため剥離面の切り合いは不明瞭である。ホルンフェルス製。長さ92、幅45、厚さ16mm。70g。

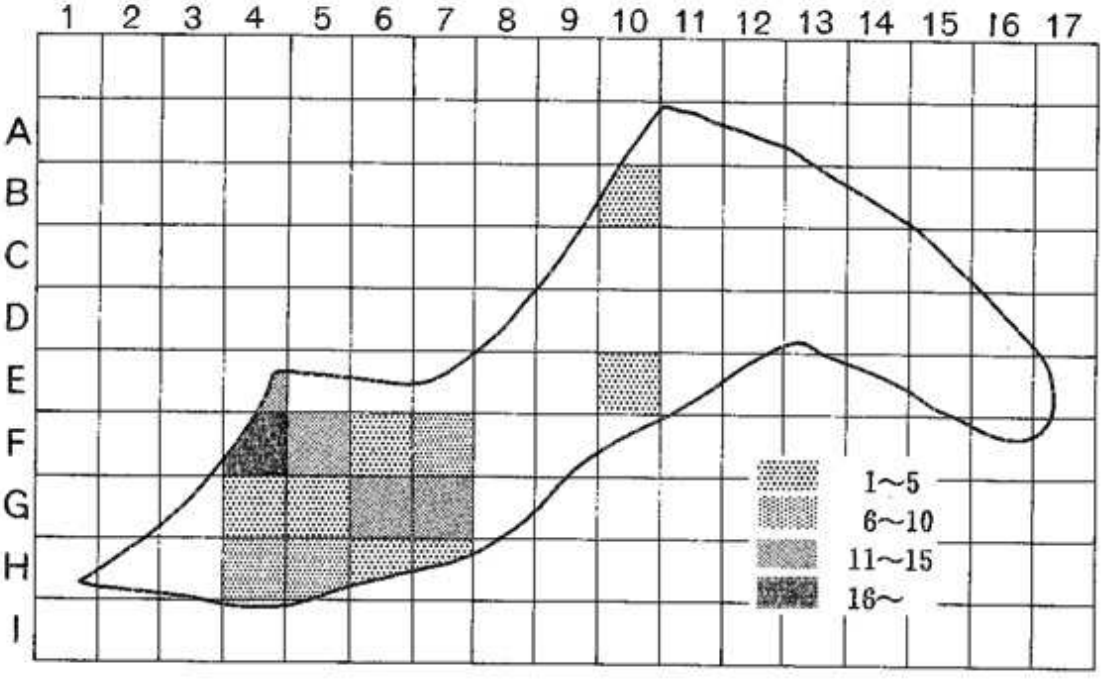
3　打製石斧。両側縁が表裏にわたって加工されている。刃部の加工は側縁ほど顕著ではない。基部側を大きく欠損している。ホルンフェルス製。長さ83、幅65、厚さ29mm。155g。

4　打製石斧。刃部側を大きく欠損した打製石斧であろうと思われる。両側縁の加工はそれぞれ片面に対してのみ施されている。緑泥片岩製。長さ99、幅69、厚さ21mm。206g。

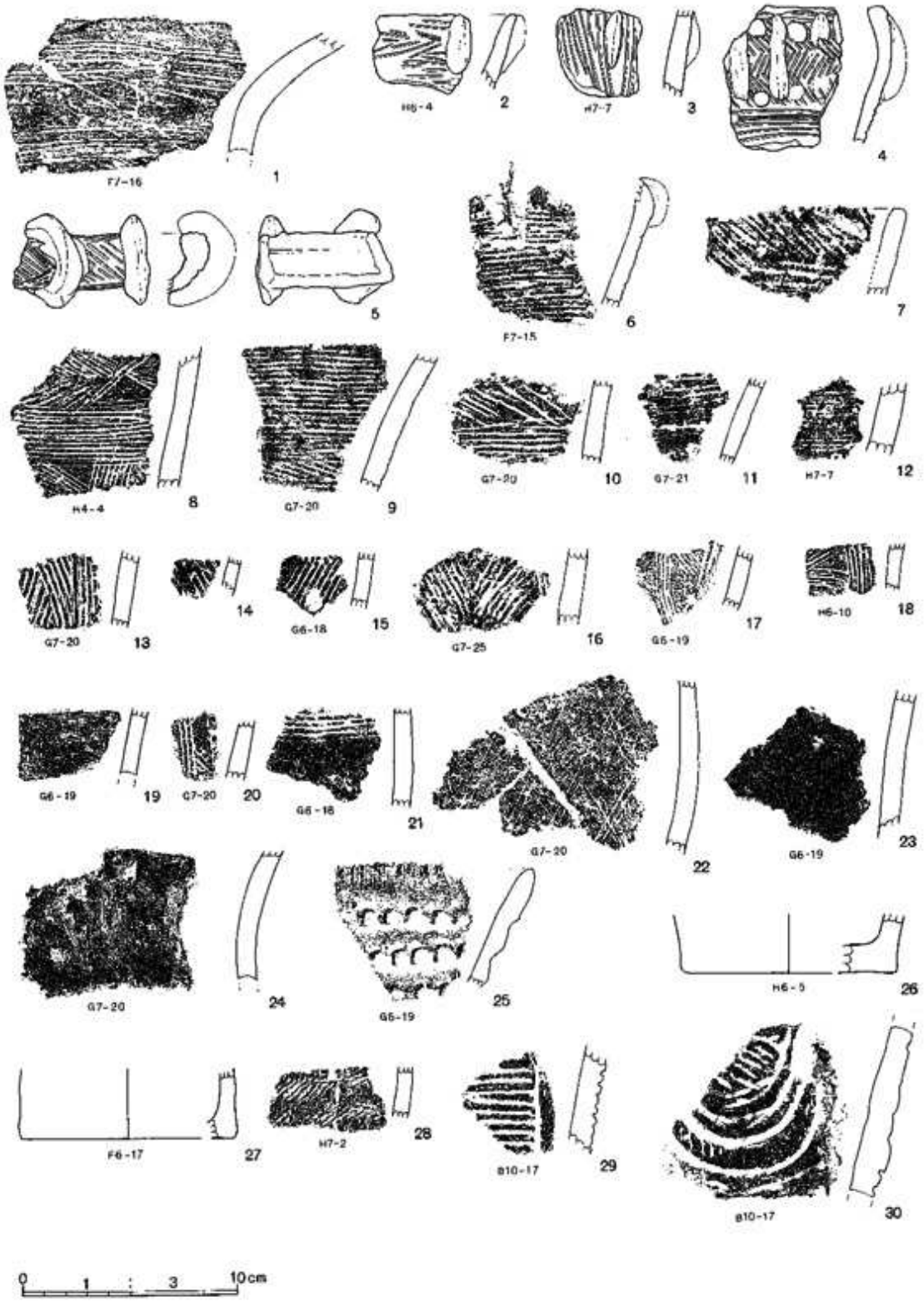
5　打製石斧。比較的大形の打製石斧であったと思われるが、欠損部が大きいため全体の形状は不詳である。ホルンフェルス製。長さ55、幅84、厚さ19mm。111g。

6　打製石斧。本来的には5とほぼ同じ大きさ、形態の打製石斧であったものと思われる。欠損の部位も5とほぼ同様である。ホルンフェルス製。長さ63、幅80、厚さ18mm。116g。

7　打製石斧。大きさ、欠損部位は5、6に類似するがそれらに較べると厚手である。ホルンフェルス製。長さ67、幅76、厚さ30mm。161g。




第159図　縄文土器の分布




第160図　グリッド出土土器

8　打製石斧。側縁の一部と刃部のみが残され、基部側は大きく欠損している。側縁、刃部とも表裏両面に対して加工が加えられている。ホルンフェルス製。長さ62、幅71、厚さ26㎜。121ｇ。

9　打製石斧。両側縁に加工が認められ、打製石斧であろうと思われるが、刃部、基部とも欠損しているので断言はできない。横長剥片を素材としている。ホルンフェルス製。長さ72、幅47、厚さ11㎜。32ｇ。

10　打製石斧。一側縁は表裏に連続する加工が看取されるが、反対側縁は折れ面である。刃部は斜刃となっているが再生されたものである可能性も考えられる。ホルンフェルス製。長さ100、幅50、厚さ15㎜。99ｇ。

11　打製石斧。撥形の打製石斧であったと思われるが、基部を欠損している。全体に風化が著しい。ホルンフェルス製。長さ73、幅68、厚さ26㎜。163ｇ。

12　打製石斧。撥形もしくは分銅形に近い形態を呈していたものと思われるが、基部側は折れにより欠損しているので確定的ではない。折れ面以外の全周に表裏にわたって加工が施されていたようであるが、風化が著しく、剥離面の切りあいは明瞭ではない。ホルンフェルス製。長さ52、幅68、厚さ20㎜。94ｇ。

13　打製石斧。両側縁および刃部に表裏にわたって加工が施されている。剥離の状況から使用時に刃部側からの衝撃によって剥落した刃部片であろうと思われる。ホルンフェルス製。長さ62、幅64、厚さ19㎜。75ｇ。

14　打製石斧。折れにより欠損しているため断言できないが分銅形の打製石斧であった可能性が考えられる。ホルンフェルス製。長さ76、幅72、厚さ18㎜。124ｇ。

15　打製石斧。縦長剥片を素材としており、表裏に自然面と素材剥片剥離時の主要剥離面を大きく残す。主要剥離面側に対する加工はほぼ全周におよんでいるが、自然面側に対する加工は部分的である。砂岩製。長さ76、幅55、厚さ15㎜。77ｇ。

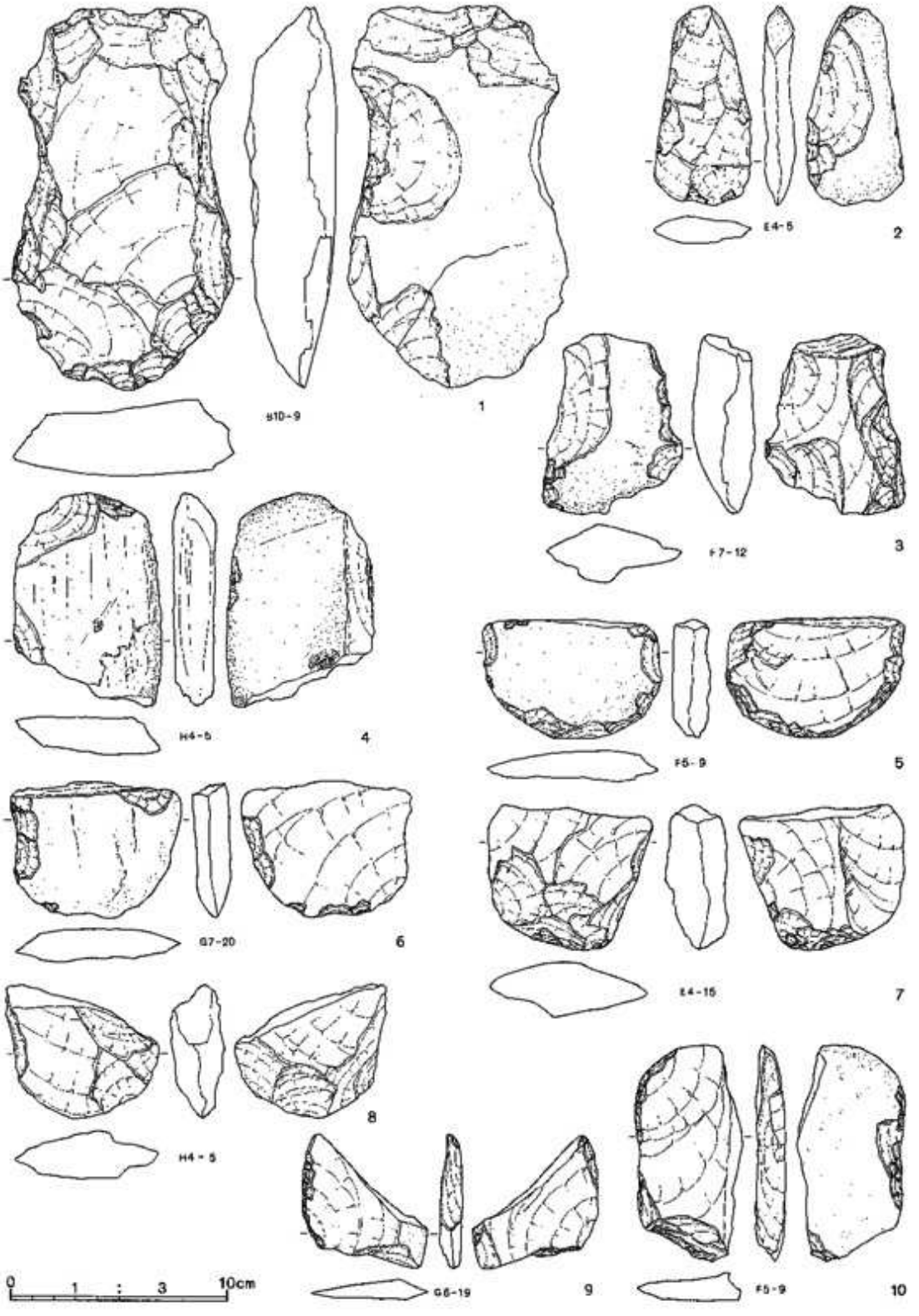
16　礫器。転石をそのまま素材とし、大小の剥離を施したやや不整形の礫器である。ホルンフェルス製。長さ76、幅111、厚さ46㎜。400ｇ。

17　凹み石。偏平な円礫を用いた凹み石で、表面に連続して３ヶ所、裏面に１ヶ所の凹みが形成されている。裏面の凹みは不明瞭なものである。側縁はほぼ全周にわたって敲打痕が残されている。敲き石としても使用されたものと思われる。閃緑岩製。長さ90、幅79、厚さ43㎜。418ｇ。

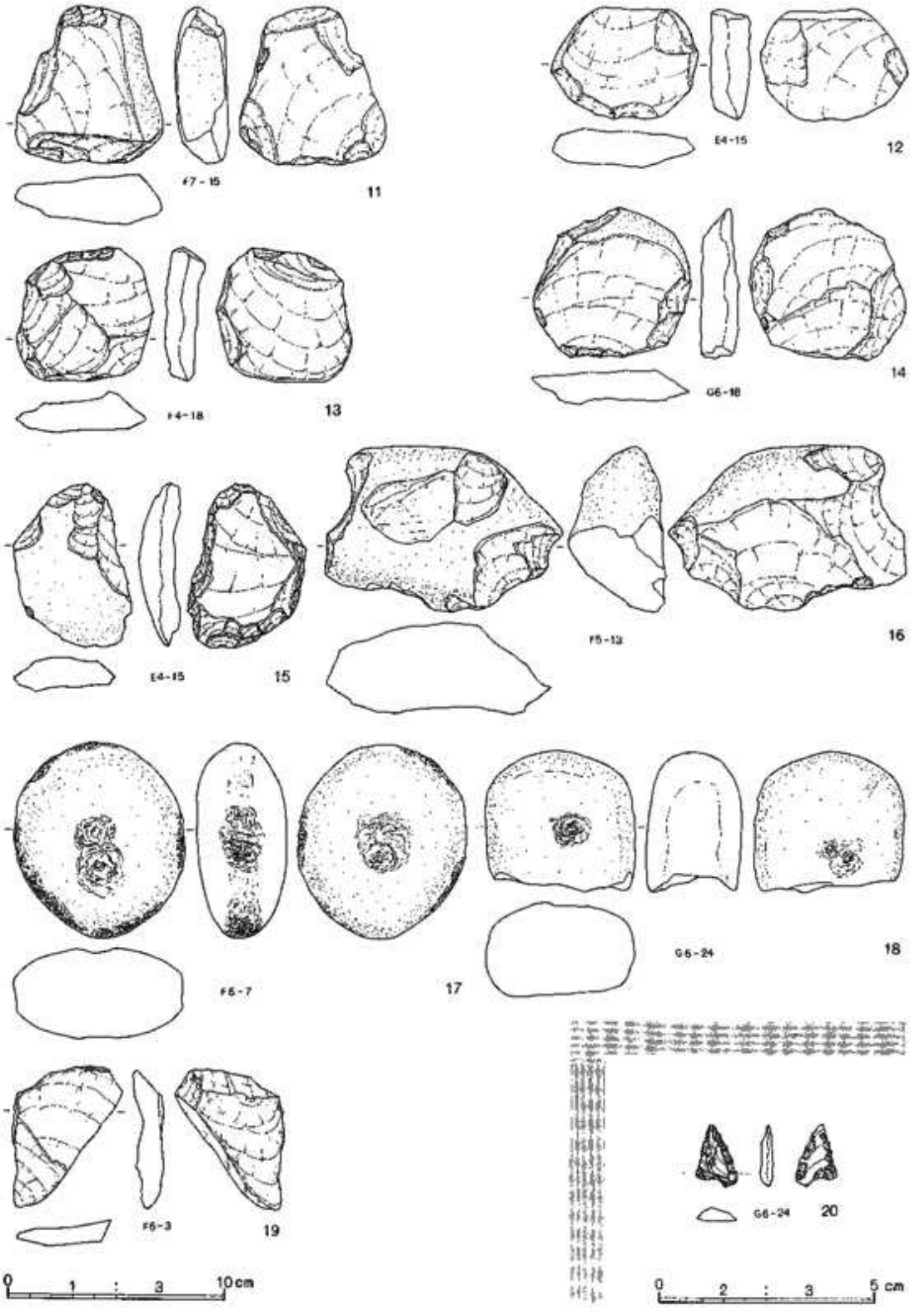
18　凹み石。偏平な楕円礫を用いた凹み石であるが大きく欠損している。凹みは表裏にみられるがいずれも浅く不明瞭なものである。被熱しており、全体に脆弱化している。欠損後に被熱したものと思われる。閃緑岩製。長さ65、幅70、厚さ46㎜。271ｇ。

19　剥片。チャート製の剥片で打点、バルブを明瞭に残している。チャートの砕片は若干検出されているが、比較的大形の剥片は本例のみである。長さ76、幅41、厚さ15㎜。38ｇ。

20　石鏃。小形の縦長剥片を素材とした凹基無茎鏃である。表面には自然面、裏面には主要剥離面が残る。大きさの割りには器体が厚く、両側縁からの剥離は中央に達することなく、急峻なものとなっている。素材剥片の打点側が石鏃の基部となっている。長さ14、幅10、厚さ３㎜。0.3ｇ。




第161図　グリッド出土石器(1)




第162図　グリッド出土石器(2)

# 3　平安時代の遺構と遺物

**第２号住居跡**

遺跡西端の南斜面部のＧ３、Ｈ３グリッドにおいて確認されている。形態はほぼ方形に近いものと思われるが、南向き斜面部に構築されており、南半部は検出できなかった。残存壁高は約46cmである。確認面の標高は約79.8m、床面の対水平角は約10度である。

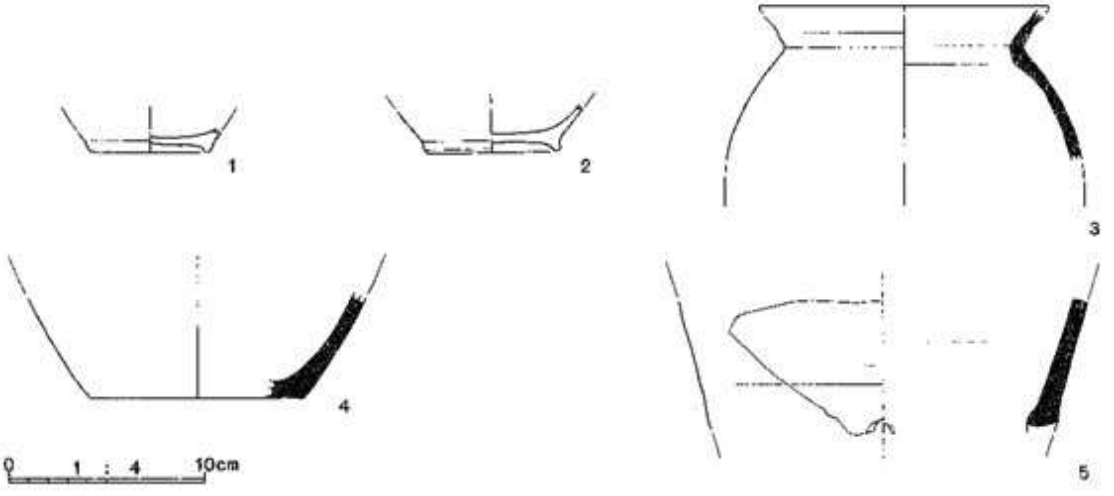
カマドは北壁中央やや東よりに作られ、主軸方向はＮ－14度－Ｅである。

住居北部およびカマドは基盤となる凝灰岩を掘り込んで作られている。カマドの袖はその凝灰岩を掘り残して作られている。煙道部付近に残された緑泥片岩はカマドの構築材であろう。

カマドで焼土が明瞭に視認できるのは緑泥片岩付近までで、その奥は掘り込みはしっかりしているものの焼土等は混入していない。

カマド西側の住居壁と煙道奥の焼土が混入していない部分はやや不整形となっているが、基盤の凝灰岩の影響によるものであろうと思われる。

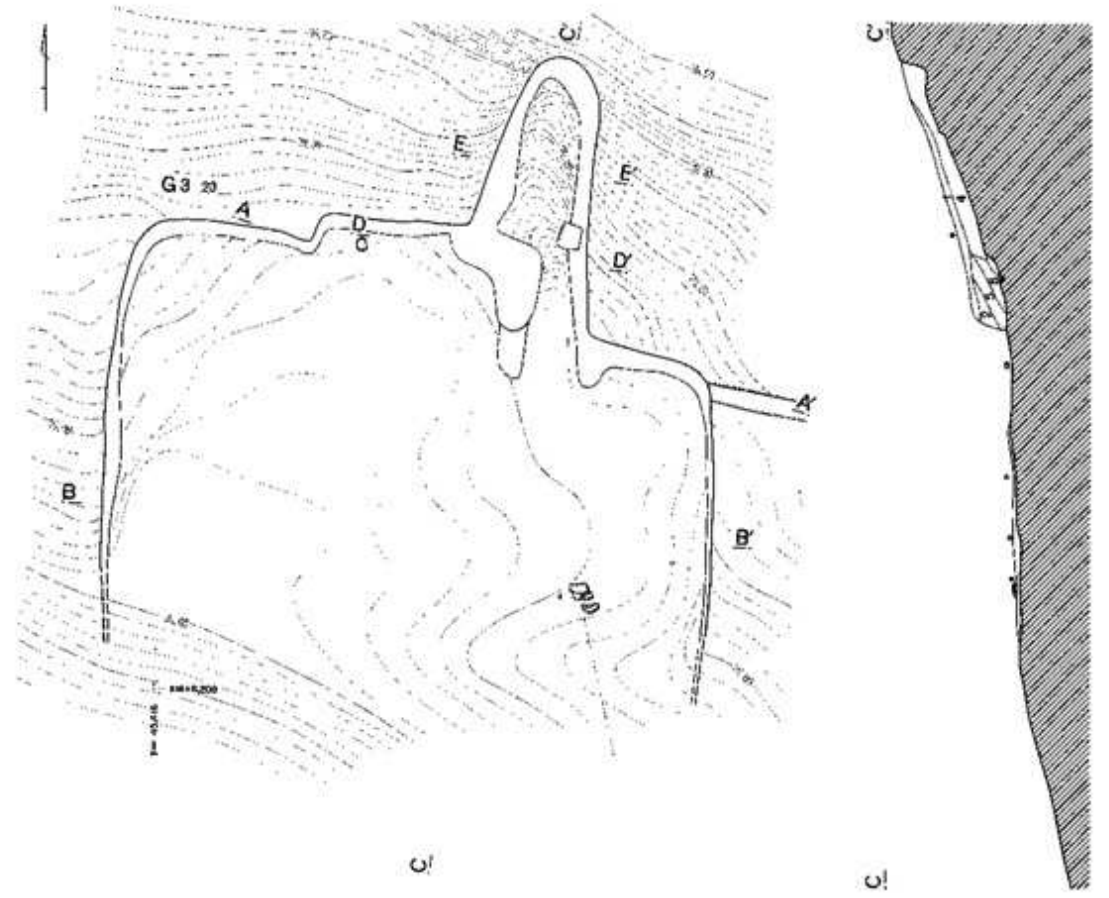
貯蔵穴、柱穴、壁溝は確認できなかった。



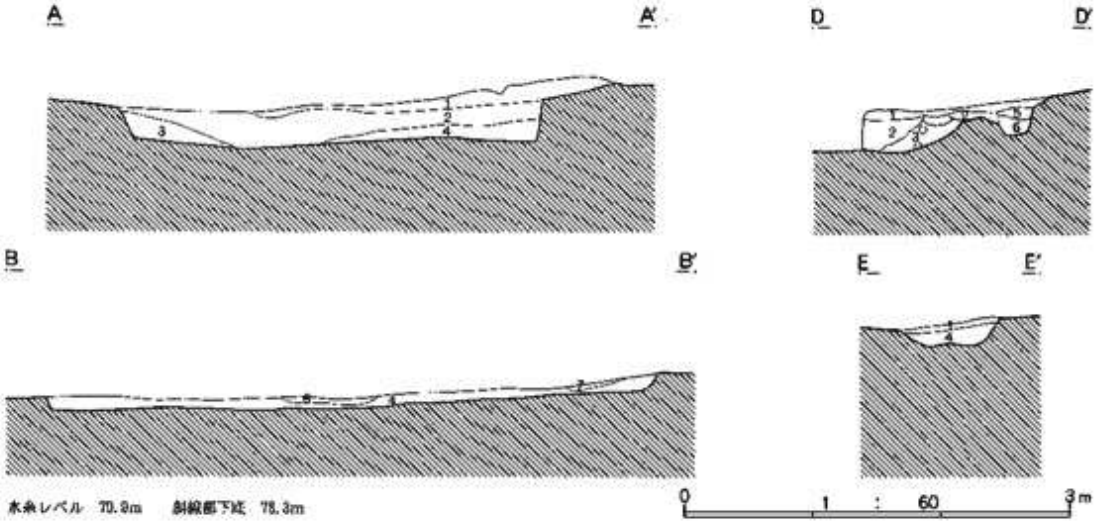

第163図　第２号住居跡出土遺物

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器　高 | 底　径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 椀 | — | 1.0 | (6.0) | sw | do | C | 80 | |
| 2 | 椀 | — | 2.4 | (6.6) | s | o | C | 80 | |
| 3 | Ｓ甕 | (14.9) | 7.3 | — | b | g | B | 40 | 外面自然釉。 |
| 4 | Ｓ甕 | — | 5.1 | (10.8) | w | g | B | 30 | |
| 5 | Ｓ甑？ | — | — | — | sw | do | C | 40 | 胴部下端付近に穿孔。 |

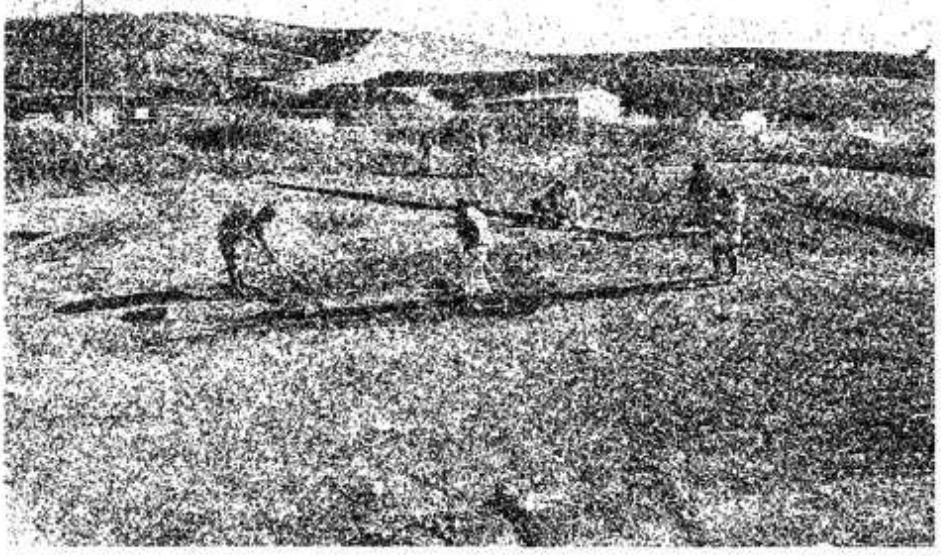
第48表　第２号住居跡出土遺物




1層　褐色土　炭化物等は含まず、よくしまる。
2層　黒褐色土　炭化物粒、焼土粒を多く含む。
3層　暗褐色土　焼土塊、地山粒。（凝灰岩をわずかに含む）
4層　黒褐色土　2層土に凝灰岩粒混入。
5層　黒褐色土　2層上に焼土塊。（径1cm程度を含む）
6層　黒褐色土　2層土基調だが多量の焼土粒、焼土塊を含む。
7層　黒褐色土　4層土基調に多量の炭化物粒、炭化物を含む。




第164図　第2号住居跡



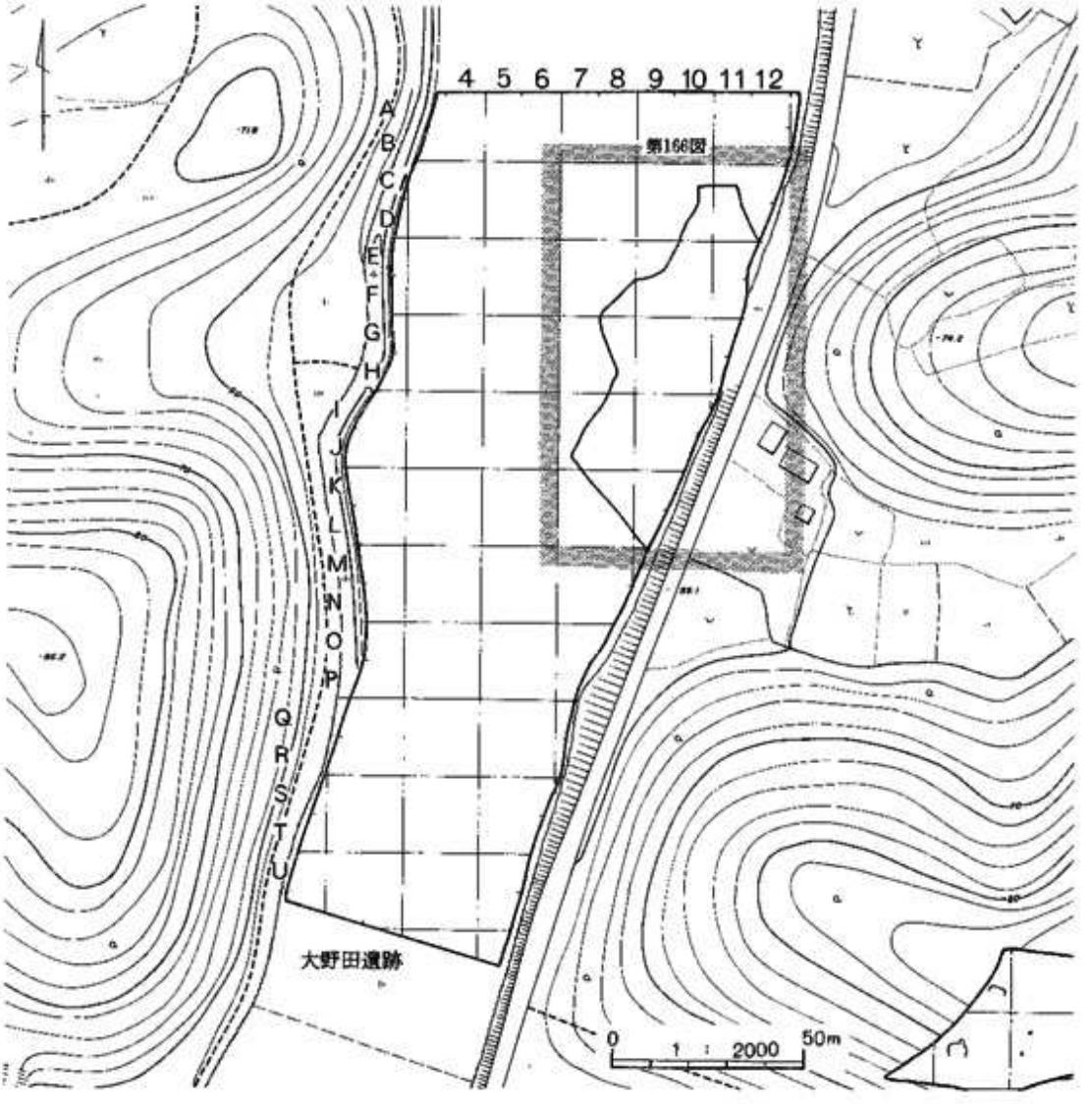
調査風景

大野田遺跡

# X　大野田遺跡の調査

## 1　遺跡の概観

大野田遺跡は丘陵上に立地する他の６遺跡とは異なり、丘陵に挟まれた谷底低地に立地する。遺跡の立地する谷は長沼谷（ながぬまやつ）と呼ばれる谷で、滑川が開析したものである。長沼谷は滑川上流右岸域では最大級の谷である。長沼谷からはさらに多くの支谷が発達し、支谷によって画される丘陵上には谷頭側から、新田坊遺跡、尺尻遺跡、尺尻北遺跡、天神山古墳群が分布している。谷頭には長沼という溜池が作られ、それぞれの支谷の谷頭にも多くの溜池が形成されている。長沼の背後の低い尾根を境として南側には柏川からの谷が開析しており、直線上に南北に連続する

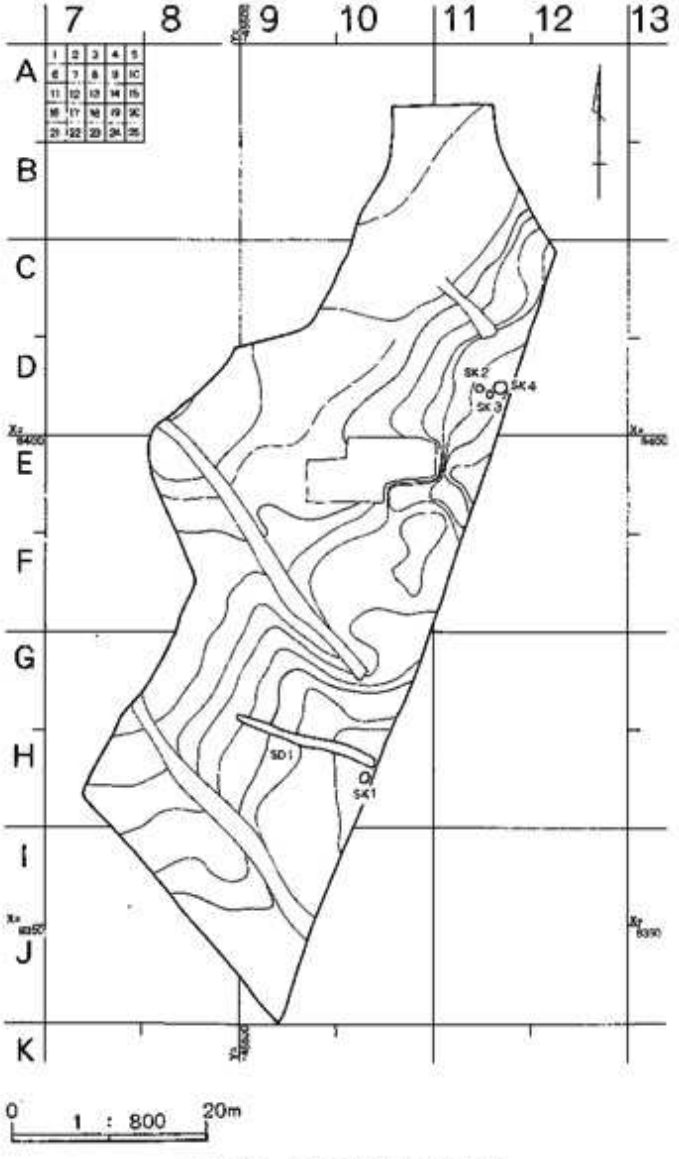



第165図　大野田遺跡全測図

両谷は滑川水系、柏川水系を結んでいる。

本遺跡内の大半には低地特有の泥土が堆積しているが、遺跡北東部においてはローム層が堆積している。ちょうど北新沼丘陵の裾部にあたる部分に位置するため、本来は北新沼丘陵の末端部に形成されたテラス状の台地であったものと思われる。本遺跡の周辺には西側に胴分沼丘陵、天神山古墳群を載せる丘陵、東側に尺尻北遺跡をのせる丘陵が所在するが、それらの丘陵から本遺跡内に延びるローム面は確認されていない。

検出された遺構は溝跡1条、土坑4基のみであり、住居跡等は確認されていない。これらの遺構はいずれも先述の新沼丘陵裾部のローム面から確認されており、低地部に堆積している泥土から遺構は検出されていない。溝跡、土坑とも帰属時期は明らかではないが、平安時代ごろの遺構であろうと思われる。




第166図　大野田遺跡遺構分布図

遺構外の遺物のほとんどもローム面から出土しており、低地の泥土からは中・近世、平安時代等の遺物がわずかに認められる程度である。

ローム面から検出される遺物は主として縄文時代と平安時代のものである。縄文時代の遺物は早期条痕文系、前期中葉から末葉にかけてのものを中心としている。

本遺跡は、当初、低地上に営まれた遺跡としての認識があったが、このような遺構、遺物の出土状況から見ると、むしろ丘陵末端部のテラス状の台地に形成された遺跡であると言ったほうが正しいようである。

だとすると、連続する新沼谷丘陵上からも遺構、遺物が検出される可能性が考えられるが、試掘調査の結果では何も得られていない。丘陵末端の平坦部のみに遺構、遺物が残されたようである。

## 2　縄文時代の遺物

### グリッド出土土器

本遺跡からは縄文時代の遺構は検出されていないが、新沼谷丘陵裾のローム面において早期から後期にかけての遺物が出土している。3群に分類し、早期の土器を第1群、前期の土器を第2群、後期の土器を第3群とする。遺物総点数は多くないが、本遺跡においては第1群土器が主体を占めるようである。隣接する尺尻北遺跡や、尺尻遺跡、新田坊遺跡、芳沼入遺跡で多数検出されている前期の土器は本遺跡では比較的少ない。

### 第1群土器（第168図）

第1類（1～3）

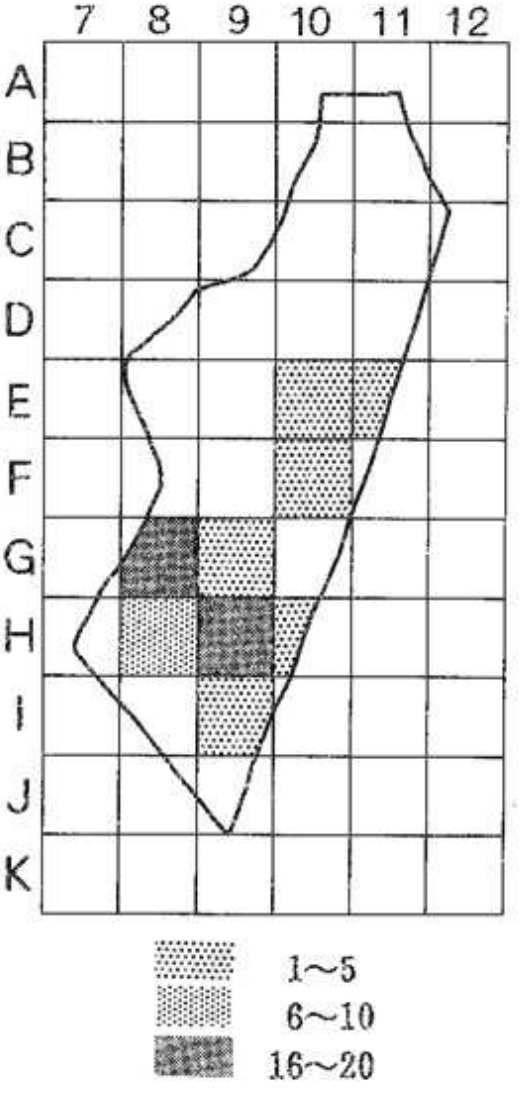
田戸下層式から田戸上層式にかけての土器と思われるものを一括する。1は口唇が肥厚する無文の口縁部片、2は器面に刺突文が施される胴部片、3は貝殻腹縁文が施される口縁部に近い部位の破片である。

第2類（4～12）

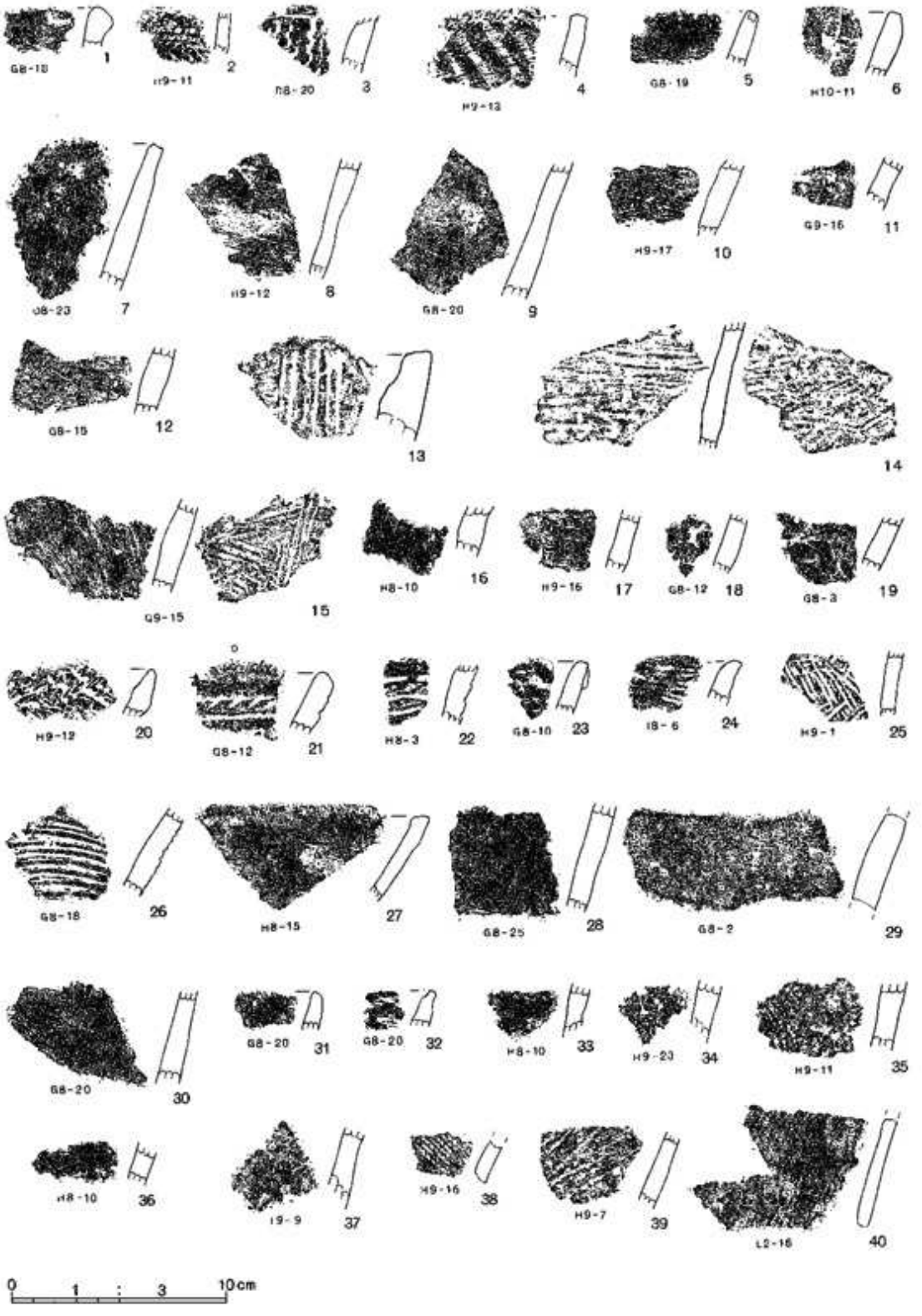
絡条体圧痕文系の土器を一括する。器面に擦痕がみられ、繊維を含むが焼成は非常に堅緻な土器である。4は器面および口唇に絡条体の圧痕文が施され、5、6は口唇に対して円形の刺突が、7は丸棒状工具による刻みが観察される。8～12は無文の胴部片であるが胎土、焼成等から本類と判断した。

第3類（13～18）

第2類より繊維の含有量が多く、条痕文が観察される土器である。焼成は第2類より堅緻ではない。13は小波状の口縁部片であるが口唇部に絡条体？の圧痕がみられる。14、15は表裏にわたって条痕文が観察される。16～18は文様が不明瞭であるが、胎土、焼成等から本類に帰属させた。茅山上層式に比定できるものと思われる。




第167図　縄文土器の分布




第168図　グリッド出土土器

**第2群土器**（第168図）

前期の土器を一括する。

第1類(19)

多量の繊維を含む土器である。器面が荒れており、文様は不明であるため断言できないが前期初頭の土器であろうと思われる。

第2類（20～22）

半截竹管による平行沈線や爪形文、浮線文が施される土器である。20、21はともに口縁部片で、前者には浮線文が、後者には平行沈線と爪形文が施されている。いずれも諸磯b式に比定されるものと思われる。

第3類（23～26）

貼付文や条線が施される土器である。23、24は口縁部片で前者には円形の貼付文が、後者には条線がみられる。25、26は胴部片であるが、ともに条線のみが施文される。25は斜行する条線が矢羽状になるもの、26は条線が弧状に巡るものであろう。いずれも諸磯c式に比定されるものと思われる。

**第3群土器**（27～30）

後期の土器を一括する。無文のものがほとんどであるが堀ノ内式の範疇で捉らえられるものと思われる。

**その他**（31～40）

無文、或いは縄文のみの土器片であり、帰属時期は明らかでない。

**グリッド出土石器**（第169図）

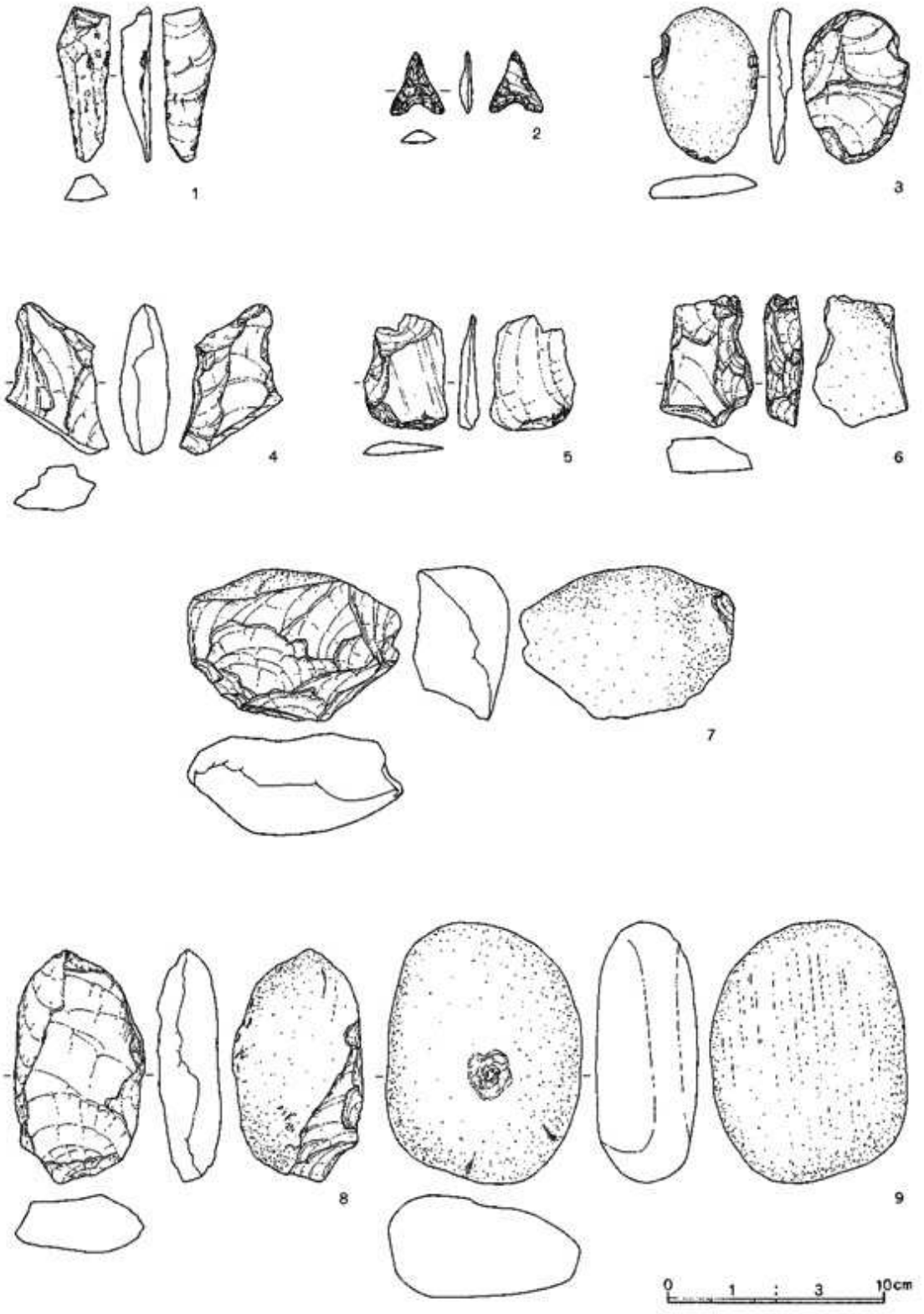
1　使用痕ある剥片。表面は全面自然面で、裏面は本剥片剥離時の主要剥離面である。両側縁には刃こぼれ状の微細な剥離痕が認められる。打点部は欠損している。黒曜石製。長さ72、幅24、厚さ15㎜。19ｇ。

2　石鏃。裏面に残される素材剥片の主要剥離面から判断して縦長剥片を素材としているようである。器体中央部に若干のくびれを有し、脚部がやや開く凹基無茎鏃である。チャート製。長さ19、幅16、厚さ4㎜。0.7ｇ。

3　敲き石。上下端、および側縁に剥離や潰れが観察される。剥離面は階段状のものが多い。粘板岩製。長さ72、幅50、厚さ11㎜。47ｇ。

4　打製石斧。撥形の打製石斧になるものと思われるが、刃部側は大きく欠損している。欠損は節理の影響によるものと思われる。基部側も欠損後に再加工したものである可能性が考えられる。ホルンフェルス製。長さ69、幅48、厚さ23㎜。69ｇ。

5　打製石斧。本来の形状は不詳であるが、打製石斧の一側縁下半部から刃部にかけての部位であろうと思われる。横方向からの剥離によって欠損しているため、製作時の側縁からの調整段階で欠




第169図　グリッド出土石器

損したものと思われる。片面には自然面を大きく残している。砂岩製。長さ54、幅39、厚さ10㎜。19ｇ。

6　打製石斧。撥形の打製石斧になるものと思われるが、刃部側は大きく欠損している。欠損後に部分的に加工が加えられている。片面には自然面を大きく残している。ホルンフェルス製。長さ61、幅43、厚さ18㎜。61ｇ。

7　礫器。片面に自然面を大きく残し、自然面側からのみ加工が施されたチョッパー状の片刃の礫器である。ホルンフェルス製。長さ70、幅99、厚さ44㎜。392ｇ。

8　礫器。7とは形状が異なるが、下端部は表裏からの交互剥離により、Ｚ字状の刃部が形成されている。砂岩製。長さ108、幅61、厚さ30㎜。248ｇ。

9　凹み石。偏平な転石を利用し、片面に1ヵ所の浅い凹みが形成されている。裏面と側面の一部には擦痕跡が認められ、擦り石としても利用されていたようである。砂岩製。長さ121、幅92、厚さ48㎜。870ｇ。

## 3　奈良・平安時代の遺構と遺物

奈良・平安時代の遺構と思われるものは、溝跡1条、土坑4基であり住居跡等は検出されていない。いずれの遺構も伴出遺物が少なく時期を明言できるものではないが、土師器片、須恵器片が若干含まれているのでさしあたり奈良・平安時代の遺構として認識しておく。

奈良・平安時代の遺構は本遺跡南半部の東側に隣接する尺尻遺跡から検出されているが、本遺跡北半部に連続する北新沼丘陵上からは確認されていない。

### 第1号溝跡

Ｇ8グリッドからＨ10グリッドにおいて検出されている。ほぼ東西方向に横走している。溝跡内からは、土師器片を中心に石製模造品、刀子状の鉄製品、縄文土器片等が出土している。最も出土量の多い土師器片によって本溝跡を奈良・平安時代期のものと推定したが、同期の土器片には図示できるようなものは含まれていない。以下に示したものは本来的には混入したものであろうが、参考までに掲載しておく。

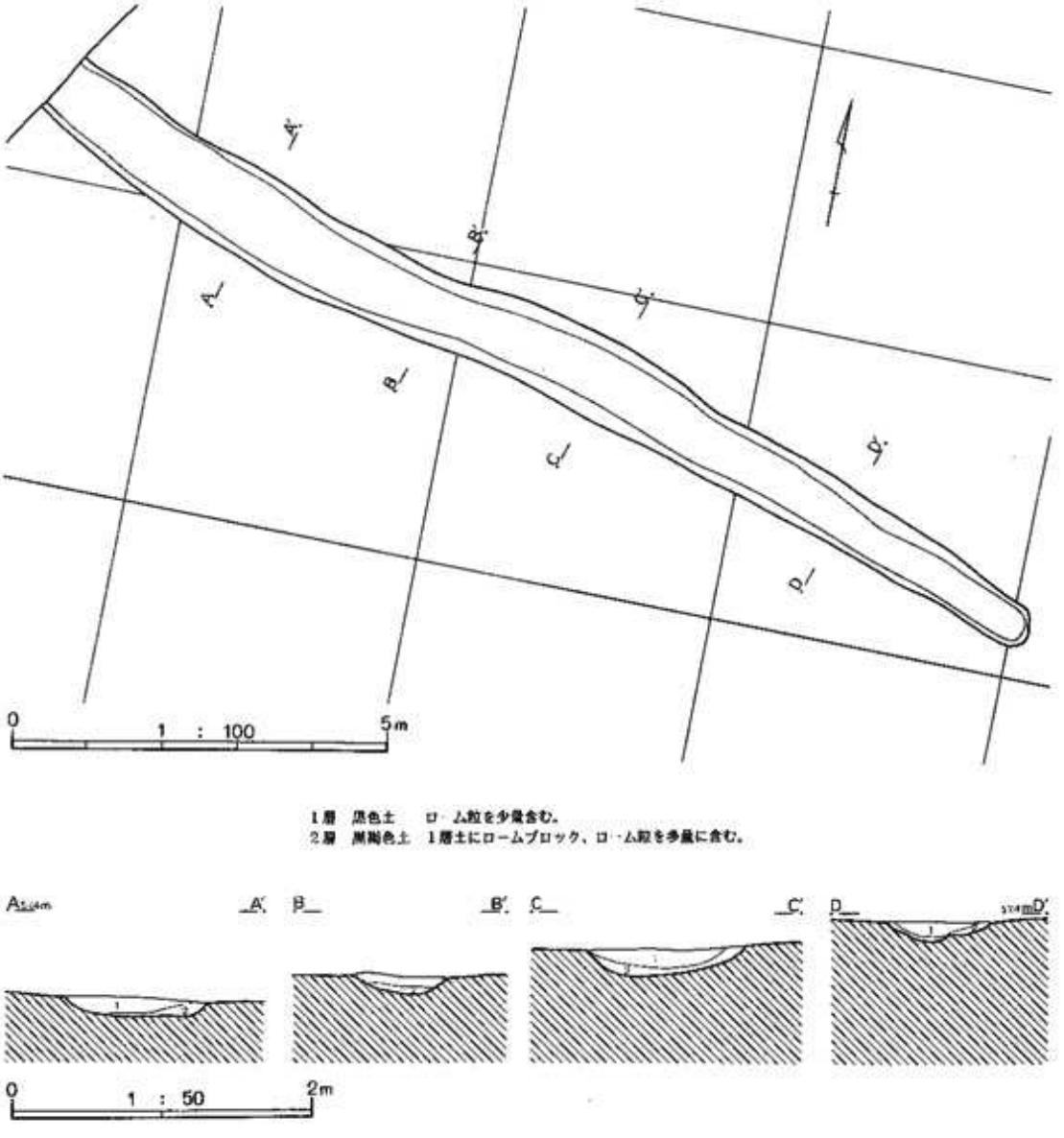
本溝跡の南東端に隣接して第1号土坑が確認されている。

1～4は縄文土器である。2は文様が不明瞭なので明言できないが、その他のものは条痕文系の土器である。1は口縁部片である。先述のグリッド出土縄文土器の第1群第3類と同期のものと思われる。

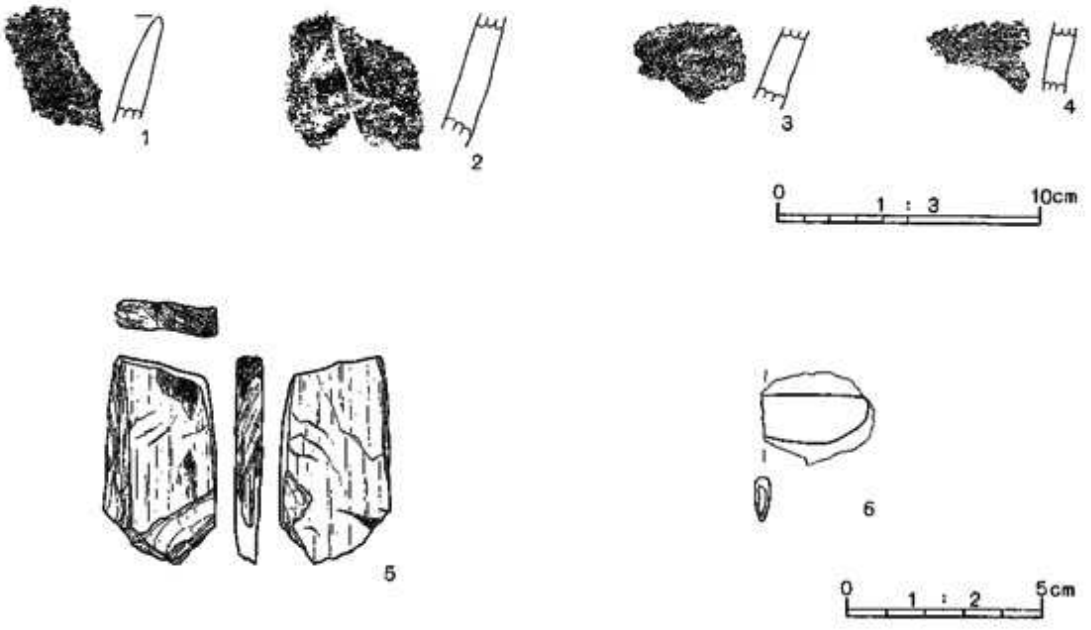
5は不整形ではあるが石製模造品であろう。蠟石に近い軟質の石材を用い、研磨ではなく、刀子状の工具による削りによって整形している。同様の石材を用い、同様の手法を用いて製作される石製模造品類は、本郷前東遺跡、湯殿神社裏遺跡等、深谷市、熊谷市周辺の古墳時代後期、鬼高期後半段階から奈良時代初頭にかけての遺跡で特徴的に確認されている。今回報告した7遺跡からは古墳時代の遺物は他にほとんど検出されていないので断定することはできないが、技術的特徴や、北西に隣接して天神山古墳群が所在すること等から、本例は本来的には古墳時代のものであった可能

性も考えられる。

6は欠損した鉄製品であるが、刀子の切先部であろうと思われる。刀子は蟹沢遺跡、芳沼入遺跡、新田坊遺跡等の8世紀から10世紀にかけての住居跡からも検出されている。本例は欠損品であるため形態的特徴を比較することはできないが、5の石製模造品と同期か、同じ長沼谷沿いに所在する新田坊遺跡の住居跡から検出された刀子と同期の所産であろうと推測される。




第170図 第1号溝跡




第171図　第１号溝跡出土遺物

**第１号土坑**

H10グリッドにおいて第１号溝跡に隣接して確認されている。形態はほぼ円形となり、直径約1.3mを測る。残存壁高は約12cm、確認面の標高は約57.5mである。

遺物は出土していない。

**第２号土坑**

D11グリッドにおいて確認されている。規模は1.0×0.8m、形態はほぼ楕円形となる。残存壁高は約22cm、確認面の標高は56.9mである。

遺物は出土していない。

**第３号土坑**

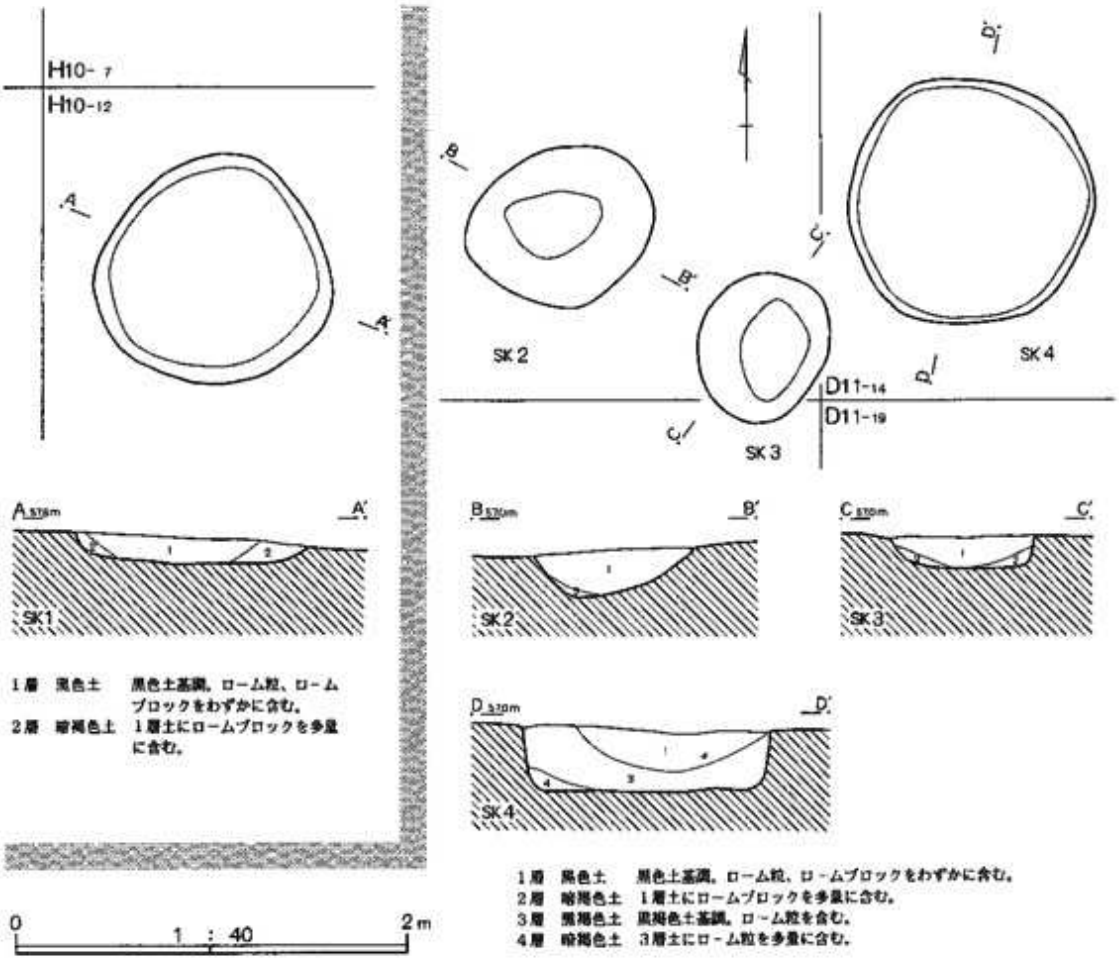
D11グリッドにおいて確認されている。規模は0.8×0.7m、形態はほぼ楕円形となる。残存壁高は約16cm、確認面の標高は約56.9mである。

遺物は出土していない。

**第４号土坑**

D11グリッドにおいて確認されている。規模は1.3×1.2m、形態はほぼ円形となる。残存壁高は約34cm、確認面の標高は約57mである。

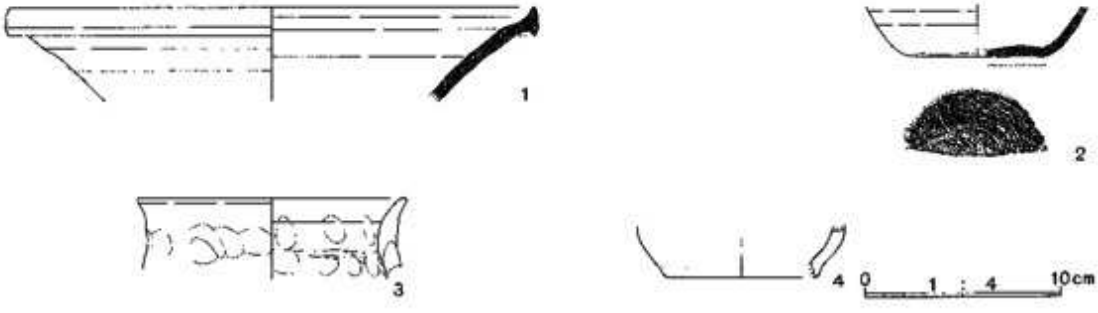
覆土中から人頭大の礫とそれよりやや小さい礫が計２個出土している。土師器片も若干検出されているが図示できるようなものはない。




第172図　土坑

## グリッド出土の遺物

図示できるような奈良・平安時代の遺物は遺構内から確認することができなかったので、グリッドから検出されたものを以下に示す。




第173図　奈良・平安時代の遺物

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | S甕 | (26.9) | 4.7 | — | w | dg | B | 20 | |
| 2 | S坏 | — | 2.6 | 7.0 | 針w | lg | C | 40 | 底部回転糸切り。 |
| 3 | 台付甕 | (13.3) | 4.1 | — | bs | do | C | 40 | |
| 4 | 椀 | — | 2.7 | 7.6 | bw | o | B | 30 | |

第49表　奈良・平安時代の遺物

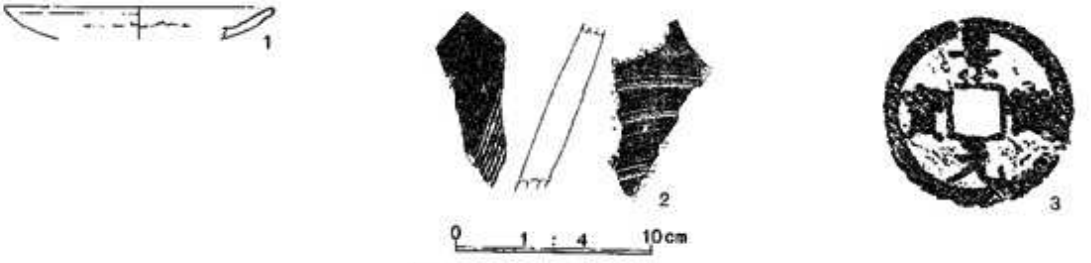
## 4　中・近世の遺物

グリッドから検出された中・近世の図示できる遺物を以下に示す。他にもホウロク片等が出土している。

1は瀬戸・美濃系の長石釉による緑釉皿の口縁部片である。

2は内外面鉄釉の擂鉢の胴部片である。

3は北宋銭の景徳元宝（初鋳1004年）である。




第174図　中・近世の遺物

# XI 結　　語

蟹沢遺跡を始めとする７遺跡からは旧石器時代から近世に至るまでの遺構、遺物が検出されているが、良好な資料が検出されているのは縄文時代、弥生時代、奈良・平安時代である。本文では各遺跡毎にその概要を記してきたが、本章では全７遺跡を通して各時代毎に概要と若干の所見を述べてみたい。

## 縄 文 時 代

〈1　概要〉

縄文時代の遺物としては中期、後期の土器も散見されるものの、量的なまとまりをみせるのは早期と前期の土器であり、特に遺構が伴う前期の資料は良好なものである。

早期の遺物は芳沼入遺跡、新田坊遺跡、大野田遺跡で検出されている。谷との比高差が大きい丘陵には該期の遺跡が形成されておらず、比高差が小さい新田坊遺跡、大野田遺跡から比較的まとまって確認されている。沈線文系も若干含まれるが主体となるのは絡条体圧痕文系から条痕文系にかけての資料である。

前期の遺物は芳沼入遺跡、新田坊遺跡、尺尻遺跡、尺尻北遺跡、大野田遺跡から出土しており、大野田遺跡以外は遺物量も多く、遺構も確認されている。

黒浜式、浮島式等も検出されているが、量的に他を圧倒するのは諸磯ｂ式であり、諸磯ｃ式を始めとする前期終末の土器がそれに次いでいる。

諸磯ｂ式は芳沼入遺跡から最も多く検出され、新田坊遺跡、尺尻遺跡にもまとまりを見せる。尺尻遺跡からは住居跡と思われる該期の遺構が確認されている。尺尻北遺跡からは浅鉢を伴う土坑が確認されているが、該期の遺物は極めて少ない。新田坊遺跡、尺尻遺跡から確認された計３基の集石土坑も該期の遺構である可能性が高いものと思われる。

諸磯ｃ式は芳沼入遺跡、新田坊遺跡、尺尻北遺跡から検出されている。中でも尺尻北遺跡、新田坊遺跡は該期の遺構が検出されている点で注目される。県内における諸磯ｃ式の遺構の調査例は極めて少なく、寄居町の上郷西遺跡、ゴシン遺跡から住居跡各２軒、南大塚遺跡から住居跡１軒、塚屋遺跡から土坑１基、川本町山ノ腰遺跡から土坑３基、上尾市在家遺跡から住居跡３軒、土坑２基が確認されている程度のようである。これらはいずれも荒川中流域の台地上から検出されている。尺尻遺跡からは住居跡１軒、新田坊遺跡からは土坑１基が確認されただけであるが、県内の該期の遺跡としては良好なものとして評価できよう。先述の各遺跡とは異なり、荒川本流から離れた丘陵部から検出された遺跡としても特筆される。芳沼入遺跡、新田坊遺跡のグリッド出土縄文土器は該期よりもむしろ他の時期のものの方が多いが、尺尻北遺跡に限っては他の時期の土器は非常に少なく、遺跡内から出土した多数の石器の帰属時期についても諸磯ｃ式期のものと判断してよさそうである。石器組成の中では打製石斧およびその欠損品が極めて高い比率をしめ、そのほとんどはホルンフェルスを用いて製作されているのが特徴的である。

結　　語

諸磯ｃ式に後続するものと思われる前期終末の土器は点数は多くないものの、器形復元が可能なものも含まれる。注目に値する資料であると思われるので、若干の所見を後述する。

中期の土器は蟹沢遺跡、芳沼入遺跡、新田坊遺跡、尺尻遺跡、尺尻北遺跡で出土しているが、芳沼入遺跡の阿玉台式がややまとまりを見せるものの、他は中期初頭、勝坂式、加曽利Ｅ式等が若干検出されている程度である。

〈2　芳沼入遺跡出土の前期終末の土器について〉

ここで前期終末の中で諸磯ｃ式の後に位置付けが可能と思われる土器について若干の所見を記しておく。ある程度器形復元が可能な土器は第65図の第３号土坑出土の土器と第73図157、158のグリッド出土の土器であるが、まず個別に所見を述べたい。まとまりを欠く所見となるが寛容願いたい。

ａ　第３号土坑出土土器について（第65図）

本例は東北北部の円筒式を思わせる器形を呈し、口縁部に押圧された縄文原体の側面圧痕が特徴的である。既に本文でも述べたように、口縁部の側面圧痕と胴部の回転縄文の原体は同一のものと思われる。原体は結節を有する２段ＬＲ（Ｏ段多条）の縄で、先端から結節部までの長さは約2.7cmを測る。

このような側面圧痕を有する土器は県内では非常に少なく、筆者が知る限りでは富士見市針ケ谷北通遺跡（土井　1975）、浦和市鶴巻遺跡（青木　1978、1981）、浦和市梅所遺跡（小倉　1984）、川口市猿貝北遺跡（細田　1986）の４遺跡を数えるのみである。各遺跡とも出土数は少なく、口縁部から底部付近までの器形が復元できる側面圧痕を有する土器としては芳沼入遺跡例がおそらく県内における初例になるものと思われる。

県外を一瞥しても類似する側面圧痕を有する土器の分布は南東北から東関東に偏在しており、時期的にも地域的にも比較的限定された土器のようである。器形が復元できる土器は非常に少ないが、手法的にも器形的にも本例に最も類似するのは栃木県鹿島脇遺跡第12号土坑出土の深鉢（塚本　1988）である。

鹿島脇遺跡第12号土坑例は、底部から口縁部に向けて徐々に開き胴部上半でやや膨らみ、口縁部が外側に屈曲する円筒形の器形を呈し、屈曲部で区画された口縁部文様帯内に縄文原体の側面圧痕が横位に押圧され、それ以下の胴部全面に横位の回転縄文が施されるという点で芳沼入遺跡例と非常に良く類似するものである。異なるのは、芳沼入遺跡例に用いられた原体が結節部を有する２段ＬＲの原体で、側面圧痕、回転縄文ともに同一の原体が用いられているのに対し、鹿島脇遺跡例は、側面圧痕については太細の条を撚りあわせた１段Ｒの原体、回転縄文については結節部のない２段ＬＲの原体を用いている点、側面圧痕が前者が２列であるのに対し、後者が３列である点、前者の口唇部は指頭の押圧により小波状を呈するのに対し、後者は小波状とならない点、口縁部文様帯の区画が前者は複合口縁によるものであるのに対し、後者が低い隆帯によるものである点、等が挙げられる。

両者の編年的位置付けが問題になるところではあるが、鹿島脇例はそのより所を側面圧痕に用い

られた縄文原体の段数に求め、1段の縄文原体を用いて側面圧痕を施していることをもって大木6式に比定している。これは、芳賀英一氏が、大木5式と東関東の土器の関係について論じた中で示した「大木5・6式の間には一段の撚りの原体圧痕と二段の撚りの原体圧痕という差が存在するようである。又、大木5式期には0段多条の縄をしばしば用いる特色がある。」（芳賀　1985）との分析に基づいた見解であるが、芳沼入遺跡例も芳賀氏の分析に準拠し、側面圧痕の段数をもって編年的位置付けを採るならば大木5式に比定されることになる。

芳賀氏は東関東の興津Ⅱ式の側面圧痕についても「2段の撚りの原体圧痕で、環状突起や鋸歯状装飾体がつく場合があり、これ以降の時期では一段の撚りの原体圧痕や口縁部の複合化、結節回転の多用が目立ってくる。」とし、2段の縄文原体の側面圧痕が東関東においても古い様相を示すものであることを示し、「私はこの縄文施文土器の源流は、東北地方南部大木5a式の中にあり、かつ東関東地方では興津Ⅱ式に伴出するものであろう」（芳賀　前掲）との見解を表明している。

2段の縄文原体の側面圧痕を1段のそれより古く位置付ける考えは小林謙一氏によっても示されている。小林氏は東関東を中心とした全期末葉の土器群の動態を捉えた中で、2段の縄文原体の圧痕をⅠ、1段の縄文原体の圧痕をⅡとし、Ⅰ、Ⅱのそれぞれについて横位一列の押圧をA、横位複数列の押圧をB、幾何的モチーフの押圧をCと規定した上で、ⅠA類を大木5a、興津Ⅱ式並行（Ⅰa期）、ⅠB類を大木5b式並行（Ⅰb期）、ⅡA類、ⅡB類を大木6式の古段階並行（Ⅱ期）、ⅡC類を大木6式の新段階並行（Ⅲ期）とする編年観を提示している（小林　1991）。小林氏の編年観に照射しても、ⅠB類に比定し得る芳沼入遺跡例は大木5式並行に位置付けられそうである。

以上のように塚本、芳賀、小林3氏とも、側面圧痕が2段の縄であるか1段の縄であるかを最大のメルクマールとして大木5式並行であるか、大木6式並行であるかを認識しているようである。大方の傾向はおそらくそうなのであろうが、芳沼入遺跡例の他の要素をみた場合、2段の側面圧痕という要素のみをもって大木5式並行とするのは早計に過ぎよう。芳賀氏は、興津Ⅱ式以降の時期について「1段の撚りの原体圧痕や口縁部の複合化、結節回転の多用が目立ってくる。」、小林氏は、「八辺式や下小野式に多いヶ形（折り返し状の複合口縁または頸部有段で植木鉢状を呈するもの）が新しいことは想像に容易であり」、と述べ、芳沼入遺跡例にみられる複合口縁や結節縄文は大木6式以降の要素であることを示唆している。芳沼入遺跡例は大木5式的要素をもちながらも多分に大木6式的なことになる。

結節縄文は通常中期初頭に盛行するとされ、縦位の結節縄文は五領ヶ台式に、横位の結節縄文は下小野式に多用され、下小野式は五領ヶ台式に伴う粗製土器であると考えられている。その意味で結節縄文は極めて中期初頭的ではあるが、小野真一氏や今村啓爾により、茨城県常陸伏見遺跡や神奈川県室の木遺跡には前期終末（十三菩提式並行期）にも下小野式的な横位の結節縄文が存在することが指摘されている（小野　1979、今村　1985）。東北南部でも横位の結節縄文は大木6式後半に多用されるようであるから、これらの横位の結節縄文は前期終末の大木6式並行期から中期初頭に繋がる文様要素と考えられ、縄文原体側面圧痕を有する土器の文様要素としては決して古く遡り得るものではないと思われる。

このように考えると、芳沼入遺跡例は古い要素を残しながらも、新しい要素を既に取入れ始めて

いる点を評価して、大木６式並行期に位置付けるのが妥当と思われる。

大木６式に比定された鹿島脇遺跡第12号土坑出土土器と芳沼入遺跡例を比較した場合先述のような共通点と相違点が認められたが、単体の土器同士の比較から土器群の比較に目を転じると、鹿島脇遺跡第８群土器の中には、２段の縄文原体の側面圧痕や横位の結節縄文、口縁部が複合口縁となる土器を見出すことができる。先程両遺跡例の相違点として列挙した多くは氷解することになる。ただ、口唇部の小波状の指頭押圧は鹿島脇遺跡第８群には見出すことができず、芳沼入遺跡例の特徴として残される。小波状の指頭押圧は小林氏によると「興津式にみられるものであり、古い要素と考えられる」（小林　前掲）とのことであるから、側面圧痕が２段の縄である点と共に、芳沼入遺跡例に残された古い要素とみることができよう。

浦和市梅所遺跡例は芳沼入遺跡例と口縁部の形状がやや異なるが、２段の縄の圧痕、結節を有する斜縄文の全面施文から考えると芳沼入遺跡とほぼ同時期の位置付けが考えられる。口縁部の形状と圧痕の列数からすると梅所遺跡の方が若干古い様相を示していると言えるかもしれない。

遺跡分布上、縄文原体の側面圧痕を有する土器は、終始南東北から東関東に分布の主体をもちながら、古期から新期になるに従いその分布域を西方に拡大する傾向をみせる（小林　前掲）。芳沼人遺跡例にみられた古い要素のみをもって大木５式並行期に位置付けると、芳沼入遺跡は同期（小林氏の言う第Ⅰ期）の側面圧痕土器の分布域から離れた孤高の遺跡となってしまい、いかにも不自然である。中心地域から徐々に分布域を拡大するという時間的流れも芳沼入遺跡例を大木６式並行に位置付けることの妥当性を傍証しているといえようか。

もし、芳沼入遺跡例の位置付けに妥当性があるならば、それはとりもなおさず、原体の段数を最大のメルクマールとしてきた側面圧痕を有する土器の編年観に警鐘を鳴らすこととなる。もっとも、出土例も多くなく、しかも破片がほとんどである現状からすると資料上の制約が大きいと言わざるを得ないが、今後注意を要するであろう。

ちなみに、互いに器形、法量、手法が類似する芳沼入遺跡例、鹿島脇遺跡例は、ともに比較的近似した規模、形態の土坑から出土している点も興味深い。鹿島脇例は墓壙的な性格が想定されているが、その当否はともかく、両者の土坑、土器は性格的にも類縁性があることを予想させるものである。ただ、鹿島脇遺跡で土器と共に土坑内から出土した底部穿孔の石皿にまで祭祀的意義付けをしている点については疑問を禁じ得ない。擦り面が貫通した石皿は特殊な土坑に限らずしばしば検出されている。時期的には鹿島脇例よりやや遡るが、一例として諸磯ｂ式期と思われる埼玉県竹之花遺跡第20号住居跡出土例等が挙げられる（利根川、金子、川口　1991）。そうした例は極度の使用の結果擦り面が貫通したものもあるいは含まれるのかもしれないが、必要によって意図的に擦り面の一部を穿孔したものも少なくないと思われる。本稿では深く言及しないが、植物質食料の粉砕とその効率的集積を図るために穿孔された石皿もあったものと思われる。鹿島脇遺跡の他の土坑（同じ大木６式期の第９号土坑）から堅果類が検出されていることは示唆的である。

**ｂ　第73図158の土器について**

器形の特徴および文様の特徴については本文中でふれたが、ここでは施文順位を中心に述べてみたい。判読し得る範囲での施文順位は以下の通りである。

①把手部の円内も含めて器面全面に単節ＲＬの縄文を地文として横位に施文する。風化のため縄文が看取されない部分もあるが、各部位にわたって縄文が観察される。把手部円内上部および把手部側面においても不明瞭ではあるが地文が観察される。後に浮線文を施す部位には全て縄文が施文されたようである。②把手縁辺および三角形や円形を描出する部分に太目の浮線を貼付する。三角形を描出する貼付は把手縁辺の貼付のあとである。③全面に浮線文を施す。全ての浮線は長短の粘土紐を指頭により押さえて貼付したものである。具体的な順序は不詳であるが、把手部円内においては円形を描出する浮線が最も早く施文され、ついで縦位のソーメン状の浮線、横位のソーメン状の浮線の順である。口縁部文様帯の横位に平行する浮線、波状となる浮線の順序は判然としない。波状の浮線は、粘土紐を繰り返し折り返すことによって施文され、１～９単位の波状を構成する。口唇部文様帯の波状浮線は口縁部文様帯の波状浮線とは異なり、折り返しによるものではなく、短い粘土紐１本１本を「ハ」の字に貼付することによって波状を構成している。④貼付した浮線に半截竹管によるＣ字状の刻みを施し、結節状浮線文とする。刻みは全ての浮線の貼付後に器面全面に連続して施したようである。横位のものは左から右へ、斜位のものは上部は下から上へ、下部は上から下へと施されている。波状浮線および把手部円内の縦位、横位の浮線は刻みが施されず、結節状浮線文とはならない。

以上が主な文様の施文順位であるが、②で太目の浮線によって区画された内部の透し彫りが施された段階は明らかではない。ただ、把手中心の円形斜め上位の結節浮線間の小さな三角形の印刻については、浮線が施された後、あるいは刻みが施された後に印刻されたものと思われる。同じ種類の文様は連続して施される傾向が他の文様にみられることから、区画内の透し彫りは③か④のあとに連続して施されたものである可能性が考えられる。

このような施文上の特徴と本文中に記した器形上の特徴から見ると、本例は、基本的には十三菩提式の範疇で認識し得るものと思われるが、器形が復元できる資料としては石川県真脇遺跡で設定された「真脇式」の深鉢Ａ１類に類似している。

真脇式は、①外反ぎみの口縁部が上半で内湾し、胴部は中央で一度くびれて下半で膨らむ器形、②大きな波状口縁をもつものがあり、波頂部を筒状にすることもある。③器全面に斜縄文を転がし、その上に細い粘土紐を貼り付ける。横の直線間には波状をおき、把手波頂部には円や格子目文を配す。粘土紐は指頭で押さえただけのものが多く、結節状浮線となるものは少ない。といった特徴が挙げられ、十三菩提式との相違点としては「十三菩提式では浮線は結節状にしたものが多く……真脇式では結節状浮線が少ないこと、真脇式の胴部中央でくびれる器形が特徴的であること」を指摘している（小島　1986）。

芳沼入遺跡例は、器形的には口縁部以上の特徴は真脇遺跡とほぼ共通し、遺跡内から検出されなかった胴部以下についても、真脇式に類似した胴下半に膨らみをもつ形態であったことが予想される。波頂部も芳沼入遺跡例は明確ではないが、真脇式Ａ１類深鉢には波頂部が掘り抜かれて透し彫り状となっているものが含まれている。こうした波頂部の掘り抜きは、秋田県下堤Ｄ遺跡、神奈川県室の木遺跡例等にもみられ、かなり広範囲の地域で、波頂部が筒状になる土器に対して行われていたようである。本例は波頂部が筒状になると言うよりも把手全体が内面から閉塞されるものであ

るが、それらと同様波頂部が掘り抜かれていた可能性が高いものと思われる。

文様的にも芳沼入遺跡に見られる文様要素のほとんどは真脇式A１類に看取される。異なるのは、真脇式には器面に対する印刻や透し彫りが少ない点、透し彫りをする際の太目の粘土紐による区画がない点、筒状の把手部内面が口縁内面において板状の粘土で閉塞されず箱状とならない点程度であろうか。

このように大きく共通する両者ではあるが、芳沼入遺跡例は先述の真脇式と十三菩提式の違いとして指摘された十三菩提式的な要素（結節状浮線文の多用）をも合せもっていると言える。把手部が箱状になるという真脇式には見られない特徴も、十三菩提式とされる室の木遺跡例には見出すことができる。

c　小結

上記２点に加えて第73図157の土器も関連させながら芳沼入遺跡前期終末の土器について簡単にまとめておきたい。

a、b２点の土器はほぼ同時期のものとして理解されるが、第73図157の土器は、金魚鉢形になると思われる器形の口縁部に三角印刻と縄文原体の側面圧痕を有しており前二者の中間的色合いをもつものと言える。これらの土器は本来的には在地の土器とは思われないものであり、系統が論じられてしかるべきものであろうが、文様要素一つ一つをとりあげてみても各地域の錯綜した様相が浮き彫り化されてくるようであり、早急な結論は出し得ないものと思われる。周辺地域での類例を積み重ねてさらに検討する必要があろう。

# 弥生時代

〈1　概要〉

弥生時代の遺構と遺物は７遺跡の内、蟹沢遺跡と芳沼入遺跡のみで確認されている。芳沼入遺跡から確認されたのは土坑２基とその内部から出土した若干の土器だけであるが、蟹沢遺跡からは11軒の住居跡と１基の土坑の内外から多数の土器が出土している。出土土器は後期吉ケ谷式期に属するものと思われる。

住居跡は尾根線を取り巻くように分布しているが、遺存状態は必ずしも良好とは言えず、斜面地に形成されたため一部流失している住居も少なくない。柱穴や炉址等の施設が明瞭に識別できる住居も少ないが、第13号住居跡内の土坑からは手捏ね土器や土製勾玉が出土している。屋内祭祀的な意味合いをもつ土坑であろうと思われる。

最も遺物が多く出土した第16号住居跡は、吉ケ谷式土器と共に非吉ケ谷式的な土器が検出されており興味深い。第21図10の土器は東海系の土器の影響を受けたものと思われるが、手法の特徴や胎土から、搬入品ではなく在地の土器であろうと思われる。器面に見られる文様は全て同一の５本歯の櫛歯状工具による施文のようである。口縁部内外面の文様も同一工具の押し引きによる刺突であろうと思われる。胴部の文様は上位から下位に連続的に施文されており、波状文もあとからの充塡によるものではない。波状文は縄文前期のコンパス文と同様の手法で描出されている。施文方向はいずれも反時計回りである。胴部下半の磨きが最終的な調整となっている。15の土器は台付甕にな

るものと思われるが、頸部の作り出しは「頸部折り込み技法」（柿沼　1982）によるものと思われ、より古墳時代的な様相をもつものと言える。第20図２、３、第21図８も非吉ケ谷式的な土器と言えそうである。第20図２は台付甕のミニチュアであるが、通常の台付甕にみられるハケ目等の調整も忠実に表現されている。もう１個体のミニチュア土器である１は吉ケ谷式の甕を模倣したものと思われるが、吉ケ谷式を特徴付ける縄文がやはり忠実に表現されている。共に模倣元の土器のエッセンスを凝縮したミニチュア土器である。ミニチュア土器のあり方からも第16号住居跡における吉ケ谷式と非吉ケ谷式的な土器の共伴関係は確実なものと思われるが、非吉ケ谷式的な土器は先述の台付甕で見たように、より新しい段階の要素をもつものと認識できる。なお、台付甕の破片はＦ６グリッド（本来的には第16号住居跡の一部と思われる）や第12号住居跡からも検出されている。吉ケ谷式土器単体で見ても、Ｆ８グリッドから検出された（破片の一部は第16号住居跡と接合）内面を削る土器（第36図５）や、芳沼入遺跡第１号、２号土坑から検出された頸部の屈曲が明瞭に作り出された甕は新しい段階の要素を取入れた吉ケ谷式土器として評価できよう。

蟹沢遺跡の各住居出土の土器を従来の編年観に照射すると時期的な細分が不可能なわけではないが、背反する要素も多く、細分の根拠は薄弱なものとなってしまう。ここでは各種新出の要素を評価して、おおまかには蟹沢遺跡全体を吉ケ谷Ⅲ式の範疇で捉らえておきたい。土器の器種組成等を比較すると美里町羽黒山遺跡（長瀧　1991）に非常に近いものと思われる。羽黒山遺跡も蟹沢遺跡同様非吉ケ谷式的な土器を共伴しているが、蟹沢遺跡のそれが東海系および南関東系的であるのに対し、羽黒山遺跡のそれは蟹沢遺跡にはない北関東系的なものが含まれている点で異なるのは地域的な特色であろうか。台付甕の頸部の接合状況をもって評価するならば、蟹沢遺跡、羽黒山遺跡は共に古墳時代的な接合手法をとっており、両遺跡は時期的に非常に近い段階に営まれた遺跡であろうと思われる。両遺跡は、その手法が弥生時代的である根平遺跡（水村　1980）より新期に位置付けることも可能であろう。芳沼入遺跡も蟹沢遺跡とほぼ同時期の位置付けが与えられそうである。これらの遺跡それぞれにみられる複雑な様相は、従来の吉ケ谷式の伝統がもはや崩壊し始め、古墳時代を迎えつつある大きな社会的変容を反映した結果とも考えられる。

ところで、蟹沢遺跡、芳沼入遺跡の吉ケ谷式の甕や壺にみられる縄文を観察すると、原体にある程度の多様性があることに気付く（観察表参照）。吉ケ谷式土器は単節斜縄文が多いとされていたが、複節の可能性があるものや付加条の原体（類似した施文効果を出す太細の条の撚りあわせの原体である可能性も考えられる）も散見される。また、単節斜縄文でもＯ段が多条であるものが非常に多いようである。付加条の吉ケ谷式は吉ケ谷遺跡、明戸東遺跡において指摘されたことはあるが（石岡　1982　磯崎　1989）、写真で見る限りにおいて羽黒山遺跡等にも見出すことができる。原体がＬＲであるかＲＬであるかについてはこれまで統計的な分析をした例はあるが、原体そのものの種類についても今後検討する必要があろう。条の方向の統計的な分析をする場合は厳密な個体識別を前提にしなければあまり意味をなさないことにも注意する必要がある。

いずれにしろ、第Ⅱ章で既に述べたようにここ数年で良好な吉ケ谷期の遺跡の調査例が増加している。それらの資料には従来の吉ケ谷式の編年観に見直しを迫るものが多分に含まれているようでもある。報告がある程度出そろった段階で再検討しなければならないであろう。

# 奈良・平安時代

〈1　概要〉

奈良・平安時代の遺物は7遺跡全てから検出されているが、住居跡が伴うのは蟹沢遺跡(12軒)、芳沼入遺跡（6軒)、新田坊遺跡（11軒)、尺尻遺跡（4軒)、尺尻北遺跡（1軒）の5遺跡である。

各遺跡の住居跡は、奈良平安期としては検出例の少ない丘陵地の住居跡として注目されるが、立地と編年、窯の関係を表にまとめると以下のようになる。

＊　網かけ下の数字は住居番号

| 流域河川 | | 大別 | 第Ⅰ期 | | | | | | | 第Ⅱ期 | | | | | | 須恵器主要産地 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 細別 | 第1段階 | 第2段階 | 第3段階 | | | | | 第1段階 | 第2段階、第3段階 | | | | | |
| | | 実年代 | 8世紀 | | | 9世紀 | | | | 10世紀 | | | | 11世紀 | | |
| | | | 2/4C | 3/4C | 4/4C | 1/4C | 2/4C | 3/4C | 4/4C | 1/4C | 2/4C | 3/4C | 4/4C | 1/4C | 2/4C | |
| 粕川流域 | 芳沼谷沿い | 蟹沢遺跡 | 1、2、10 | | | | | | | | | | | | | 南比企産 |
| | | | | 4 | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | 8、18 | | | | | | | | | | | |
| | | 芳沼入遺跡 | | 4 | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | 1、3、6 | | | | | | | | | | | |
| 滑川流域 | 長沼谷沿い | 新田坊遺跡 | | | | | | | 2古 | | | | | | | 非南比企産 |
| | | | | | | | | | | 5、7 | | | | | | (第2段階) |
| | | | | | | | | | | (第3段階) | 1、2新、4、9 | | | | | |
| | | 尺尻遺跡 | | | | | | | 1、3 | | | | | | | |
| | | 尺尻北遺跡 | | | | | | | | | 1 | | | | | |

出土遺物から年代的位置付けが可能なものをもとに検討すると、各住居跡は編年的に二期に大別される。第Ⅰ期の住居跡は8世紀第2四半期から9世紀第1四半期にかけてのものであり、第Ⅱ期の住居跡は9世紀第4四半期から11世紀第2四半期にかけてのものと思われる。各期はそれぞれ3段階程度に細分されそうであるが、両期の間には半世紀ほどの断絶が認められる。この断絶を介して、遺跡の立地は粕川水系芳沼谷沿いから滑川水系長沼谷沿いへ、須恵器の供給窯は南比企から非南比企へと大きな変化を遂げている。芳沼谷、長沼谷は共に両水系を結ぶ比較的大きな谷であり、それぞれの集落が形成された当時の交通路だった可能性も考えられる。交通路の変遷を考える上でも時期による谷の移動は興味深いものがある。

最も良好な第Ⅱ期の集落である新田坊遺跡の第1号、2号、4号、9号住居跡は工房的な性格を思わせるものであり、住居内から炉址状の浅い掘り込みや大量の焼土、鉄製品、羽釜が特徴的に検出されている。第6号、13号土坑も焼土の状態や出土遺物から同様の性格を有するものと思われる。鉄滓を確認することはできなかったが、鉄製品が多いことや遺跡内から羽口片が採集されていることから、これらは小鍛冶に関連する遺構である可能性が考えられる。第10、11、12号土坑は規模、形態、覆土の特徴等において、隣接する滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群から多数検出されてい

る炭焼窯の一部に類似しており（滑川町教委木村利彦氏ご教示）、炭焼窯として利用された可能性が考えられる。第2号住居跡からは、炉址状の掘り込みの内部から炭が確認されており、小鍛冶遺構と炭焼窯との関連も想起される。こうした工房的遺構は、時期的にはいずれも第Ⅱ期第3段階に属するものであり、10世紀後半から11世紀前半にかけてのある時期に営まれたものであろうと推測される。

第Ⅰ期、Ⅱ期共、丘陵上に集落が営まれているが、必ずしも平坦部を選んでいるわけではなく、多くは斜面部に住居が構築されている。今後の調査では斜面部にもより注意を払う必要があろう。

〈2　溜池について〉

遺跡群周辺に分布する多数の溜池の構築年代は不詳であるが、羽尾窯跡群の調査所見（高橋1980）を援用するとこれらの一部は第Ⅰ期の集落が営まれた頃には構築されていた可能性が考えられる。比企郡周辺の溜池は文献によると江戸時代初期には既に飽和状態に達していたものと思われ、その構築年代は相当遡るものと考えられる。一帯は胴張り石室の展開から見ても古墳時代から律令期にかけて有力氏族が活躍していたものと思われるが、古墳や寺院の造営力に鑑みても技術的には溜池の構築自体は可能と思われ、彼等の生産基盤を考えた場合も丘陵地という地形状の制約から溜池灌漑による谷田経営に積極的に乗り出した可能性は十分考えられる。児玉郡の様相を見ると弥生時代後期は比企郡同様丘陵上に集落が営まれ、古墳時代に入って沖積地の大規模開拓に移行するという（恋河内　1992）。当時の社会的動態からすると比企丘陵周辺も移行の歩調を一にしていたものと思われる。広大な沖積地のない比企丘陵周辺は必然的に開拓地を小河川流域や谷筋に求めざるを得ない状況下にあり、そうした移行期に溜池が構築され始めた可能性は否定しきれないものと考えられる。周辺に残る渡来系や畿内系の足跡もその可能性を暗示するものと思われる。

## 引用文献


青木義脩　1978『鶴巻遺跡発掘調査報告書』浦和市教育委員会

青木義脩　1981「縄文時代前期終末から中期初頭の動向について（予察）」『埼玉考古20』

石岡憲雄　1982「「吉ケ谷式」と「岩鼻式」土器について」『研究紀要』4　埼玉県立歴史資料館

磯崎　一　1989『新田裏・明戸東・原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団

今村啓爾　1985「五領ケ台式土器の編年」『東京大学文学部考古学研究室紀要』4

小倉　均　1984『梅所遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会

小野真一　1979『常陸伏見』伏見遺跡調査会

柿沼幹夫　1982「吉ケ谷式土器について」『土曜考古』5

恋河内昭彦　1992「児玉地方における弥生時代の概観」『児玉郡市における埋蔵文化財の成果と概要』

小島俊彰　1986『真脇遺跡』能登町教育委員会

小林謙一　1991「東関東地方の縄文時代前期末葉段階の土器様相」『東邦考古』15

高橋一夫　1980『羽尾窯跡発掘調査報告書』滑川村教育委員会

上井　孝　1975『針ヶ谷北通遺跡発掘調査報告書』
利根川彰彦也　1991『竹之花・下大塚・円阿弥遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
長瀧歳康　1991『白石古墳群・羽黒山古墳群』美里町教育委員会
芳賀英一　1985「大木５式土器と東部関東との関係」『古代』80
細田　勝　1986『猿貝北・新町口』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
水村孝行　1980『根平』埼玉県教育委員会

Ⅱ　遺跡の立地と環境　引用文献

新井　端　1982『塩前遺跡』江南町教育委員会
新井　端　1983『姥ケ沢遺跡Ⅰ』江南町教育委員会
新井　端　1988『本田東台　上前原』江南町教育委員会
新井　端　1989『塩西遺跡Ⅱ』江南町教育委員会
新井　端・森田安彦　1991「江南町千代遺跡群（西原、姥ケ沢・富士山、姥ケ沢埴輪窯跡群）の調査『第24回遺跡発掘調査報告会発表要旨』
市川　修他　1983『塚屋・北塚屋』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
今井　宏　1984『屋田・寺ノ台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団』
植木　弘　1980『金平遺跡』嵐山町教育委員会
植木　弘　1988『行司免遺跡』嵐山町遺跡調査会
柿沼幹夫他　1982「川本町万願寺出土の遺跡」『埼玉考古』25
金井塚良一　1965「埼玉県東松山市吉ケ谷遺跡の調査」『台地研究』16
金井塚良一　1973『大谷遺跡』滑川村教育委員会
金井塚良一　1976『花見堂』嵐山町教育委員会
金井塚良一他　1987『船川遺跡』船川遺跡調査会
川口　潤　1989『西原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
木村俊彦　1986「滑川村新井・追越遺跡の調査」『第19回遺跡発掘調査報告会発表要旨』
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1990「白草遺跡」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団年報９』
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1991「四反歩南遺跡」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団年報10』
高橋一夫　1980『羽尾窯跡発掘調査報告書』滑川村教育委員会
谷井　彪他　1980『舟山遺跡』埼玉県教育委員会
利根川彰彦　1991『竹之花・下大塚・円阿弥遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
村松　篤　1991『焼谷・権現堂・権現堂北・山ノ腰遺跡』川本町教育委員会